

奇譚クラブ

新しい風俗文獻誌

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

奇譚クラブ

KITAN CLUB

12



定価 百四拾円

IBM 2805

写真恍惚女体ハイライト
画集吊責遊び方教室

12月号

1960





限定版特別号 第一弾！

「緊縛フォトアラベスク」

略号（あらべすく） 特価五百円（送共）

（収載内容）二十六項目 写真七十七集

- | | |
|--------------|---------------|
| 1 鏡……………愛川悦子 | 14 奔放な肢体大塚啓子 |
| 2 銘花二輪…花坂道子 | 15 鏡台と腰巻花坂道子 |
| 3 鉄 鎖…大塚啓子 | 16 腰巻と鏡台花坂道子 |
| 4 諦 観…大塚啓子 | 17 奇妙な休憩絹川文代 |
| 5 庭園にて…絹川文代 | 18 田代悠子表情集（二） |
| 6 謎の微笑…田中芳代 | 19 脱がされた高手小手 |
| 8 田代悠子表情集（一） | …愛川悦子 |
| 7 誇る脚線美田代悠子 | 20 亀甲縛り…愛川悦子 |
| 9 この足どうかしら？ | 21 吊責折檻村井知可子 |
| …田代悠子 | 22 立木縛り村井知可子 |
| 10 裏と表と…愛川悦子 | 23 豊 醇…愛川悦子 |
| 11 落陽の丘…愛川悦子 | 24 乱れ髪三景大塚啓子 |
| 12 ポリウムの花園 | 25 椅子と絨緞愛川悦子 |
| …大塚啓子 | 26 姐上の美鯉絹川文代 |
| 13 緊縛感の綾大塚啓子 | |
- （限定版特別号は一切書店売りを致しませんから直接発行宛お申込み願います。）
- 限定版特別第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。

限定版特別号の第二弾！

「緊縛写真と緊縛画集」

特価 五百円
略号「緊縛」

四馬孝緊縛画集（二十五枚）

- | | |
|------------|-----------|
| 女体耐久テスト | 女 体 の 掟 |
| 素晴しき会食 | 三醜女の逆恨み |
| オシメカバーと赤ん坊 | 遠慮はいらねえぜ |
| 白いいけにえ | 女 体 の 荷 物 |
| アクロバットの訓練 | トランク詰の裸女 |
| 女学生の嫉妬 | 吊し責めの美女 |
| 女体は美しさ玩具 | 浴場の悦虐 |
| 人間燭台の実験 | 鞭の御馳走 |
| 物置小屋の怪 | 淫虐な美容師 |
| 生理めの私刑 | 狂気の復讐 |
| 奴隷という責め | ヤキを入れてやる |
| 水責めにあう美女 | 電気責テスト |
| 回転する女体 | |
- 素晴らしき写真集（八十四葉）
- | | |
|-------------|------------|
| 序曲「手吊」のポーズ | 女の欲び八態 |
| 第二楽章逆手吊と足吊 | さあどうでもして |
| 緊縛感のクローズアップ | 陳列された女体 |
| 拘束女体の経過 | 忘れぬ豊満美 |
| 股間縛り競艶 | 黒 蛇 地 獄 |
| 麗しき系列 | 女のふんどし |
| 狂った果実 | 女のサポーター |
| 晒し者なんだワ | 吊り人形の哀歓 |
| 腰巻の乱舞曲 | 断然これは凄い |
| | 囚人第十四号罷り通る |

限定特別号の第三弾！

「緊縛写真グラフ集」

略号（グラフ） 特価 五百円

◎総グラビヤの豪華な内容と絢爛たるモデル陣

- | | |
|----------------|---------------|
| ながしめ……………絹川文代 | 恍惚 境…絹川文代 |
| 荒縄全裸緊縛（野外） | いためられた乳房 |
| …大塚啓子 | …桜井葉子 |
| 円い乳房……………愛川悦子 | 耐えられる…桜井葉子 |
| 浴室におびえて…愛川 | 月経帯の強制……………大塚 |
| 縄の陶醉……………絹川文代 | 手吊りと逆手吊り五態 |
| 全裸悦虐態…大塚啓子 | …大塚啓子 |
| 白痴美の誘惑……………大塚 | 捕われの麗人……………絹川 |
| はねかえす縄……………大塚 | 湯責二態……………大塚啓子 |
| ううう許して……………大塚 | 何をしようって言うの |
| 雪白の肌は縄にまみれ | …桜井葉子 |
| て六態……………大塚啓子 | 新人媚態集…桜井葉子 |
| 優姿ハダカ縛……………絹川 | いじめぬく…絹川文代 |
| 忘却の彼方……………絹川文代 | メンスバンドの猿轡… |
| 股間縛り背正面二態… | …絹川文代 |
| …絹川文代 | 観念横臥……………絹川文代 |
| 裸身さらし……………愛川悦子 | 変型手足しぼり…愛川 |
| 豊満くらべ……………桜井葉子 | 後手首腰縄…大塚啓子 |
| 亀申しぼり……………愛川悦子 | 隅から隅まで……………愛川 |
| 怨めしき縄目……………大塚 | 鏡面万華模様（裏と表） |
- 四十項目 百十五ポーズ

色刷折込口絵 「悦楽の浴槽」	四馬孝・画
表紙裏 第二表紙 「ムチあと」	四馬孝・画
目次裏 「風流いろは草紙」	佐保忍・作 瀧れい子・画

吊責遊び方教室 第一口絵

エビ責吊り、逆エビ吊り、両手伸吊り、胴体吊り、片足吊り、梯子吊り、逆手足吊り、逆さ吊り。

苦悶する柔肌……………四馬孝・画
 マゾヒスティック・フォト……………本誌特写
 人間犬の訓練、人間犬の調教
 サド・マゾ・絵物語
 狐奇館の歓迎パーティ。
 特別訓練室の招待客
 拷問開始の宣告。
 謎の女……………EXTATIQUEヨリ



恍惚女体ハイライト 構成：富士見司郎

悶えて、何を？……………新人 加茂良子
 哀……………新人 加茂良子
 そこに、何かがあるからか……………新人 加茂良子
 灰色の静寂の中に……………新人 加茂良子
 フォ前と後……………新人 加茂良子
 フ何んと言えは……………新人 加茂良子
 紫と疲勞……………新人 加茂良子
 白い熱い息吹……………新人 加茂良子
 にぶい光りの中に……………新人 加茂良子
 白と黒と、そして炎……………新人 加茂良子
 静かに動くもの……………新人 加茂良子
 黒髪の使用法……………新人 加茂良子
 裏と表の流れ……………新人 加茂良子
 木洩れ陽……………新人 加茂良子
 冷たい休息……………新人 加茂良子

幻想物語雪姫物語 林正 62

『鑑賞用女性』……………辻村隆 71

山本富士子の「白子屋駒子」……………東山映史 76

被虐の白い花……………赤川道郎 78

告白小説 一盗二婢三妾……………西田仁 88

地上最高の美味なるもの……………とやまかずひこ 96

連載小説『宇宙のどこかで』……………佐治麻造 98

美術文学に現れた女相撰……………四馬孝・画 114

燃ゆる星……………藤山秀緒 122

異端者の道 続夜は知っている……………千草忠夫 134

アブ雑誌雑誌感……………馬化狂通信……………倉仁成人 144

こんな浣腸器はいかが……………中井照夫 148

松井頼子悦虐小説シリーズ……………松井頼子 150

片かた恋おもい……………滝れい子画

（読者投稿）『あけぼの会事件』に思う……………古田純夫 162

男貴小説 朱金昭……………菅良太 168

連載第三次完小説 影の国……………雪俊遥 174

（告白）女装の楽しみ……………比良野裕 185

「菊」に寄せる我が幻想……………北川春夫 188

麻生保氏の生活と意見……………麻生保 192

時代サド小説 醜奇地獄小屋……………矢桐重八 194

新稿 ある夢想家の手帖から……………沼正三 208

アクロバット残酷記……………水田真紀子 218

岩風呂地獄……………塔婆十郎 226

―地底の女奴隷市―……………（四馬孝画）

編集ノートとあとがき……………編集子 243

読者通信……………244

風流いろは草紙

佐保忍作
淹れい子え



や

やさしさに
今日も嫌とは
言えぬ
なり

ま

まずまずは
こんな所と
一服し

け

見物がいると
いないで大違

こ

この頃は専ら
これでと
扱帯だし

ふ

増えてきて
四直き場に困る
コレクション

て

丁字等に

ひろげて
噛ます
猿
縛

え

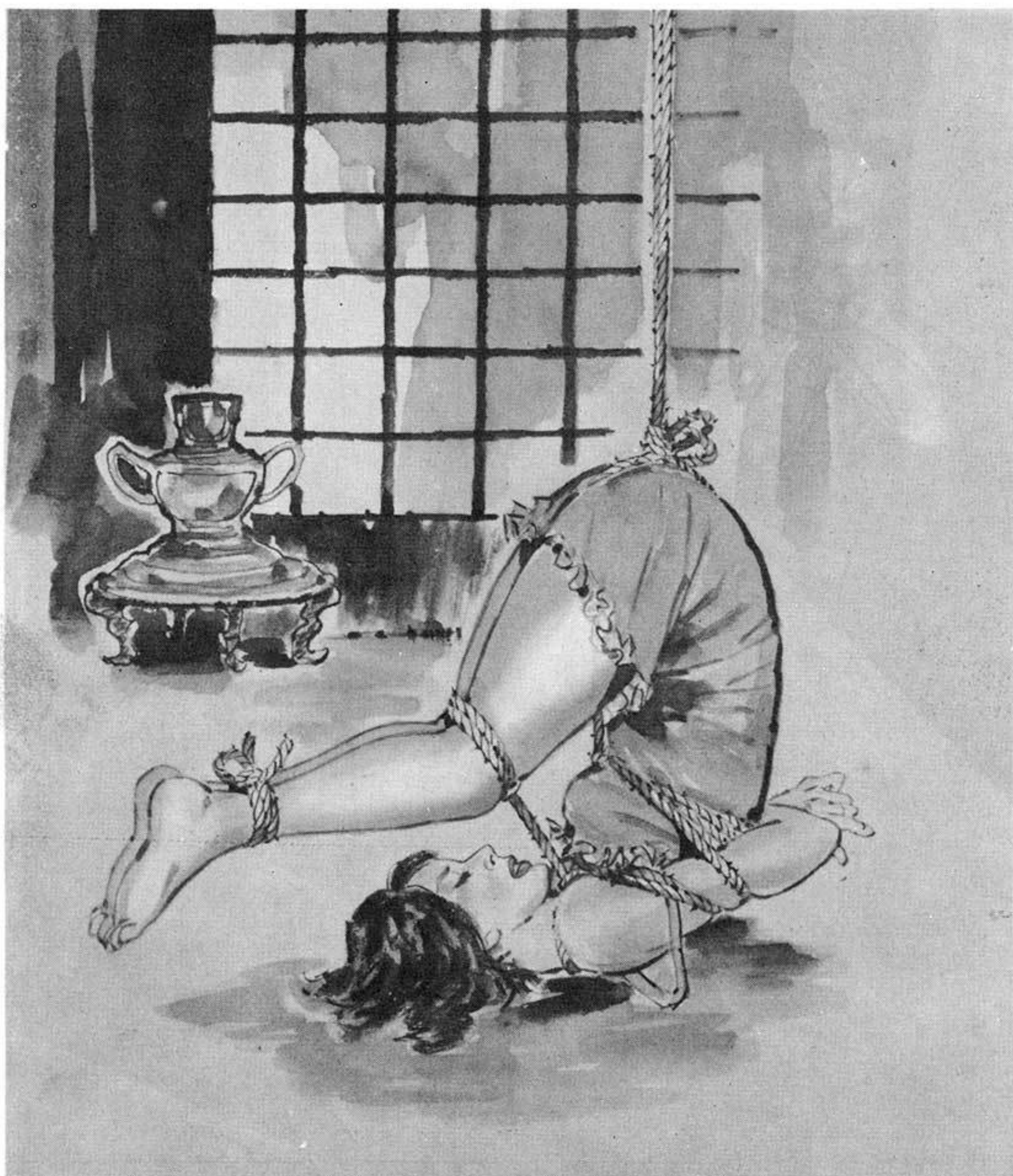
映画にも場面と
に説なり





エビ責吊り

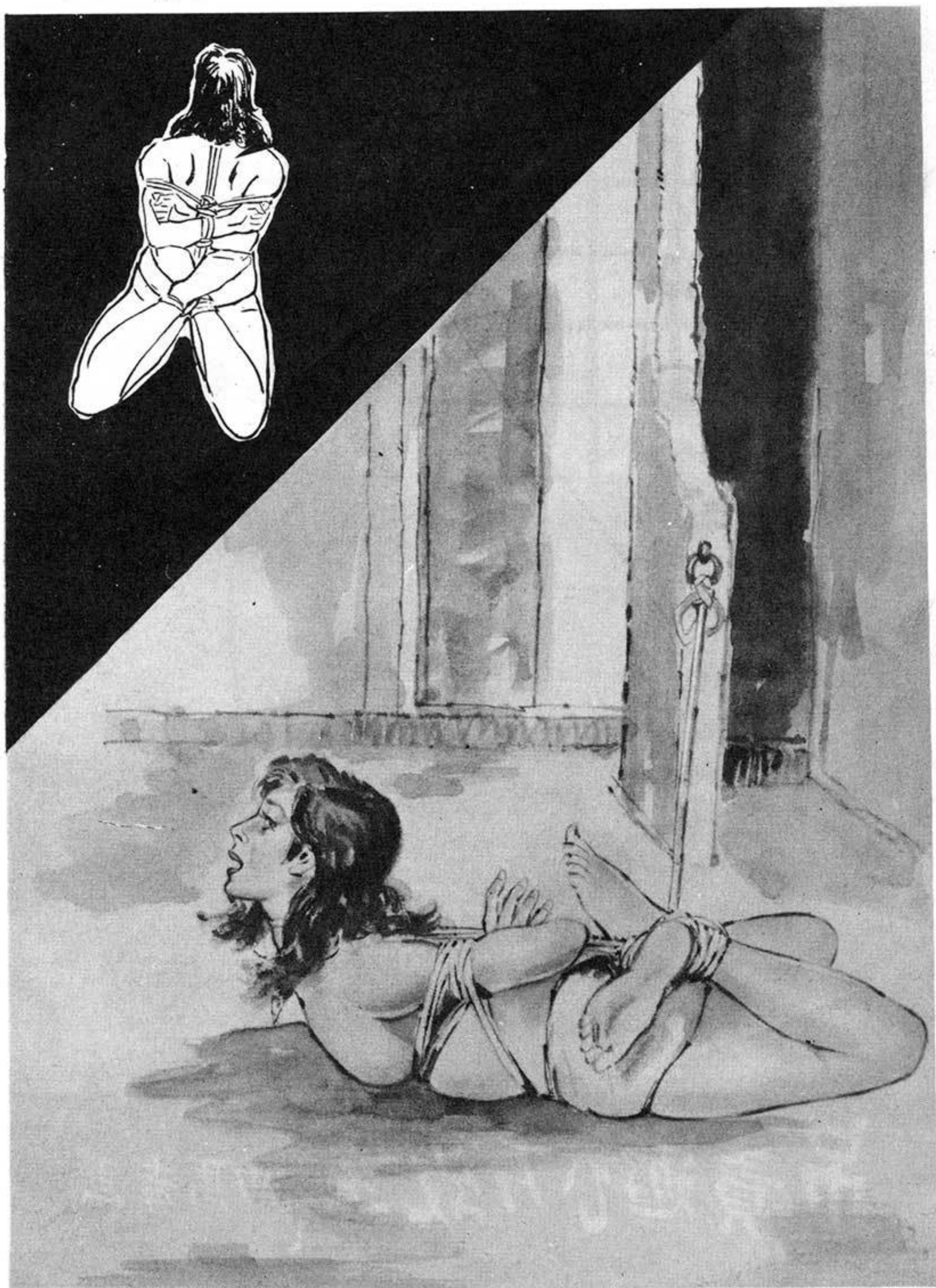
吊りといっても、全身の安定を保つために腰を引き上げておくに過ぎない。のびやかな脚線美をはじめとして屈曲した姿体の美しさが余すところなく鑑賞できる優美なポーズで長時間でなければ大して苦痛はない。



吊責遊び方教室 四馬孝画

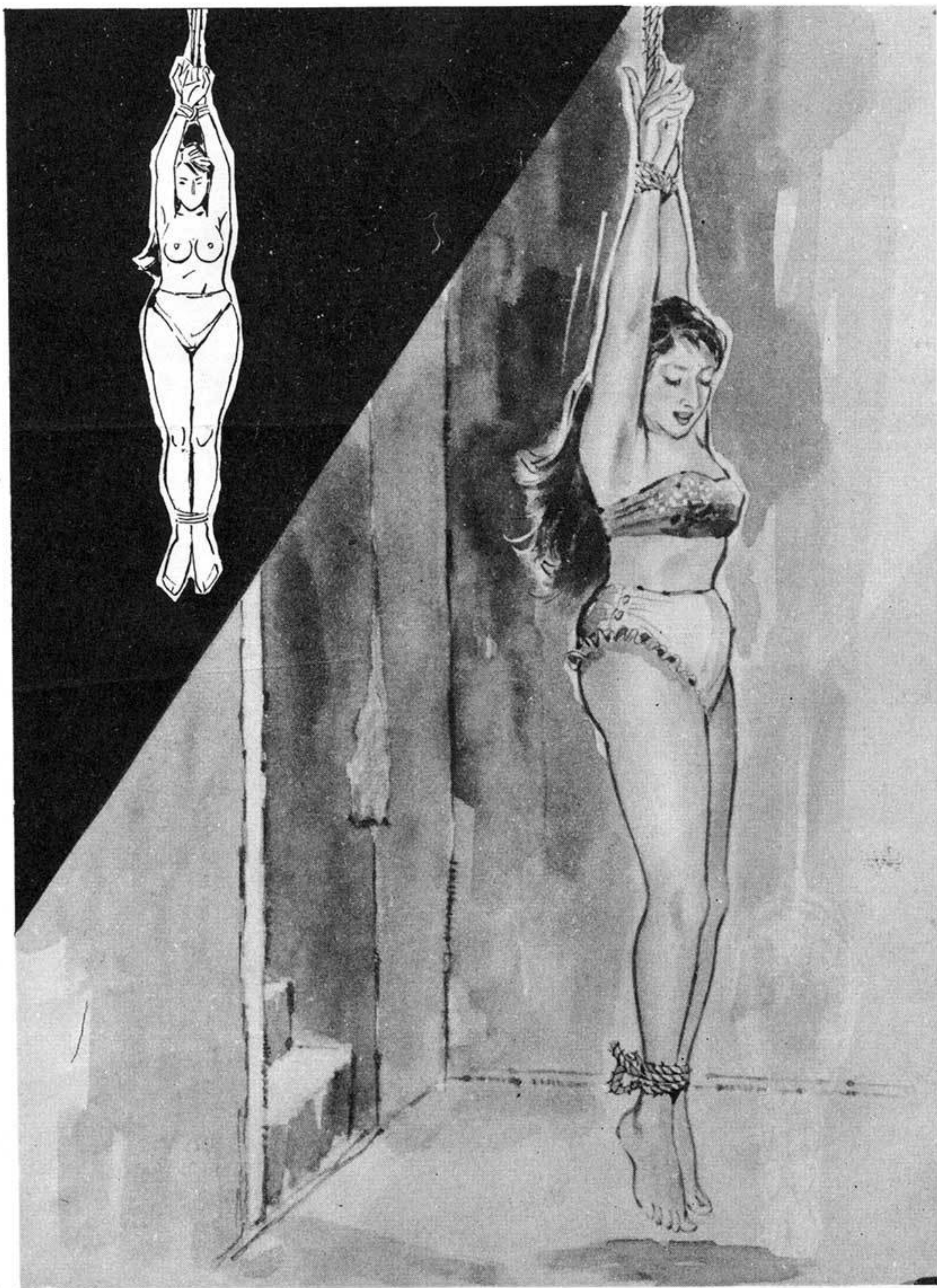
逆エビ吊り

手と足の力のこもった表情の美しさが中心となつて逆エビにそり返った均整のとれた姿体が見事である。伏線として張られた首への一本の綱がこの瞬間の優美さを保っているのは一層画面をひきしめている。



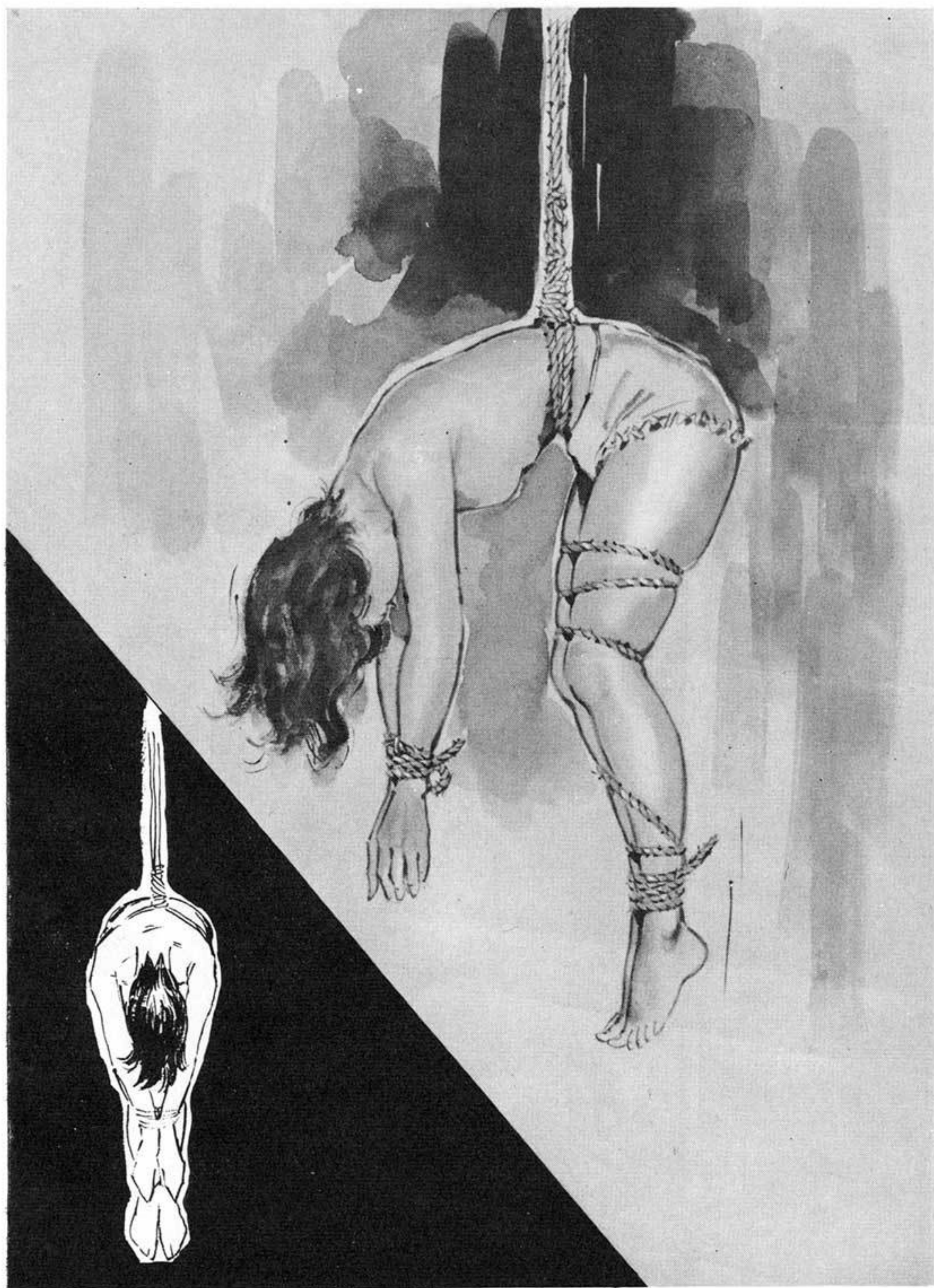
両手伸吊り

完全に吊りっては両手首がもたない。両足先がやっと床につく位がポーズとして最も美しいのではないか。伸びきった姿態と全体重を受けて爪先立った両足先にポイントを置いて鑑賞したい構想である。



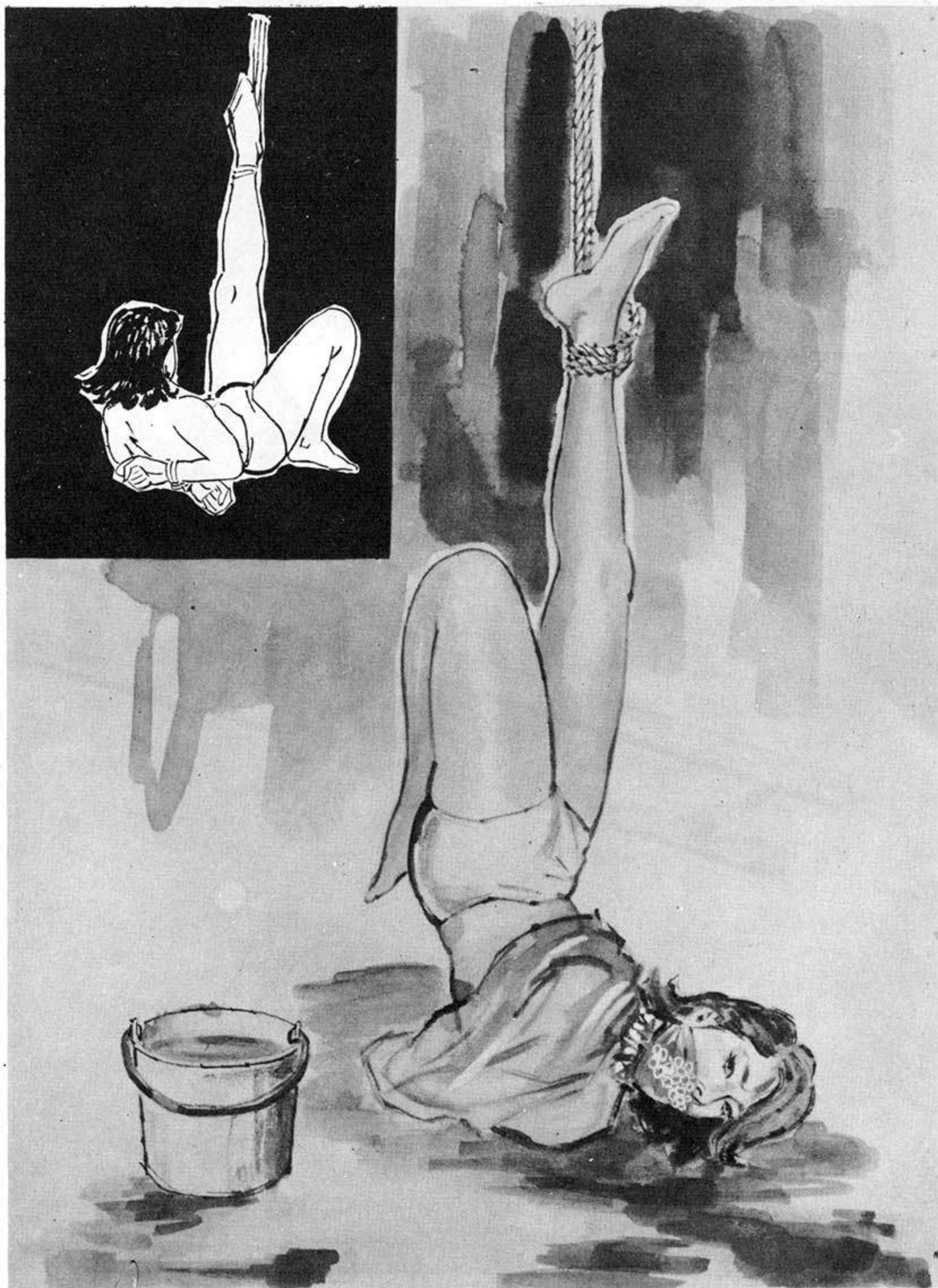
胴体吊り

逆さ吊りや逆手足吊りと共に幻想的な画面だけでの遊びといってよい。実際には出来ないことでも、こうして絵の上で美しい吊り下がった姿体を見るのは結構楽しいものである。夢幻的な美しさを感じる。



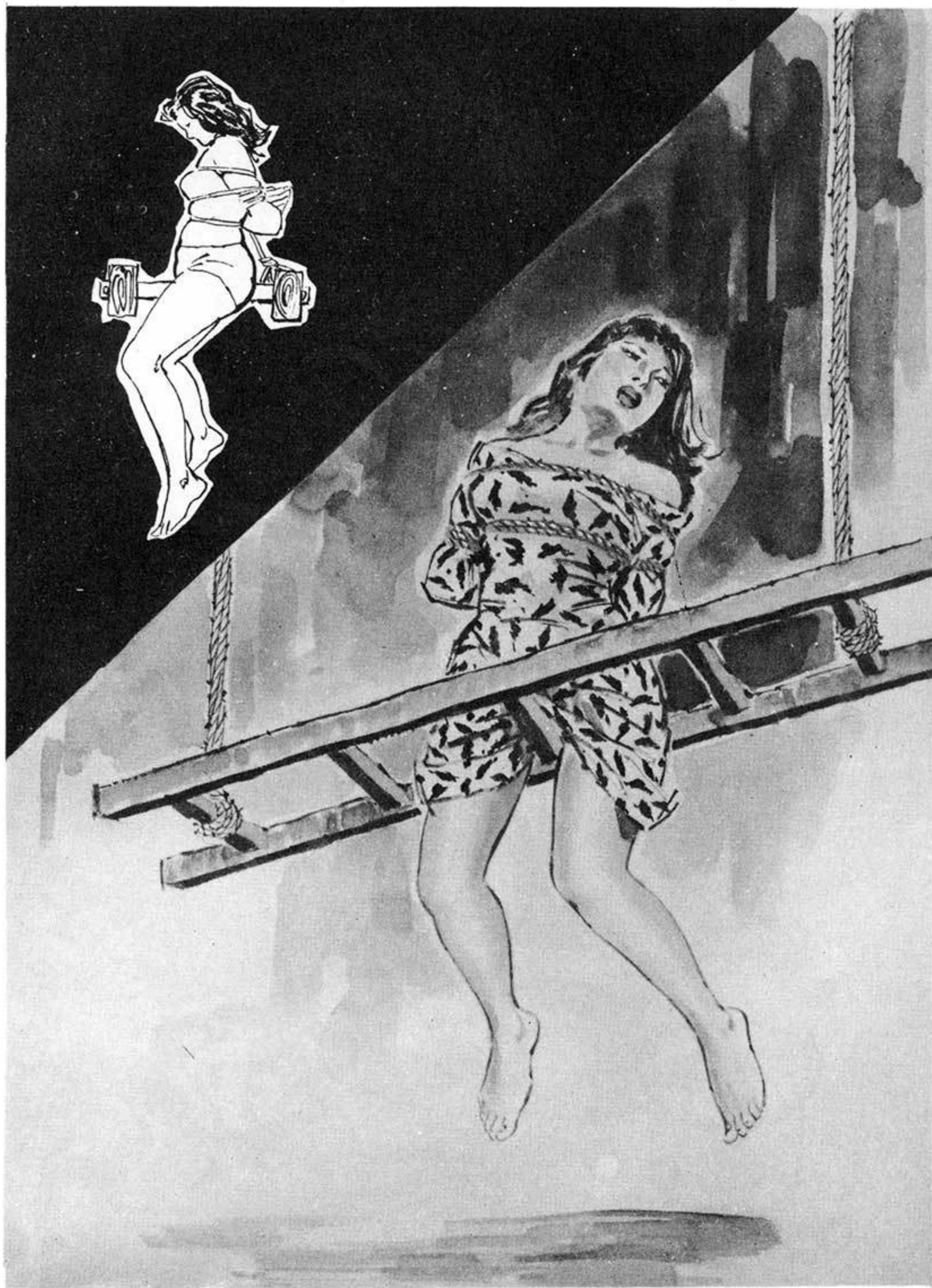
片足吊り

片足が吊られ片足が自由だというところで一層ポーズに変化の余地がある。その変化の中で一番美しいと思われる極点を掴むことができるので絵としても余韻と含みのあるものになって空想を働かすことができる。



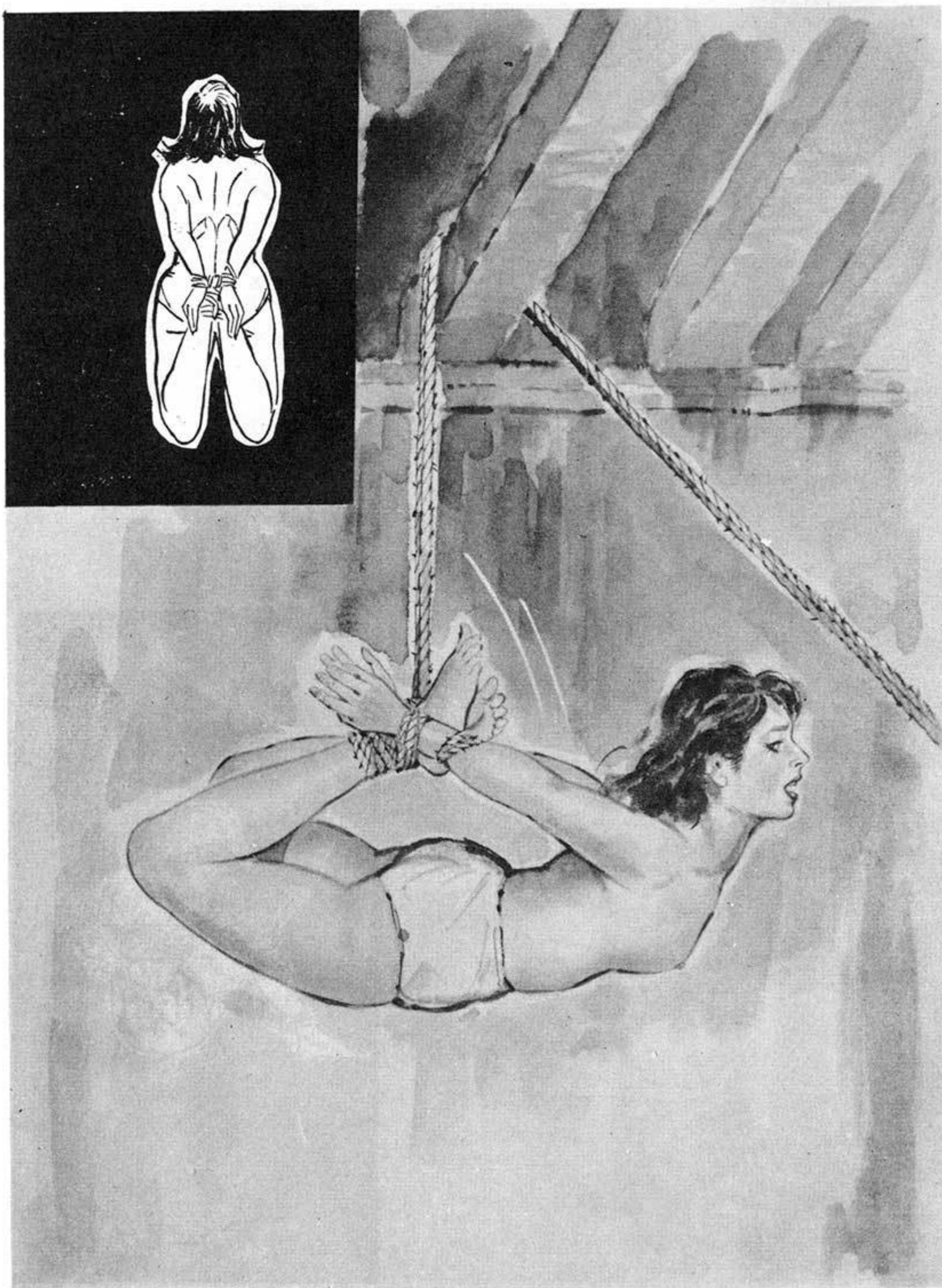
梯子吊り

両手が自由にならないので梯子に跨った両足をぶらぶらさせて身体の平均をとらなければならないというところが面白い。ワンピースの令嬢が白い太股もあらわに揺れる梯子の上で落ちまいとするポーズは美しい。



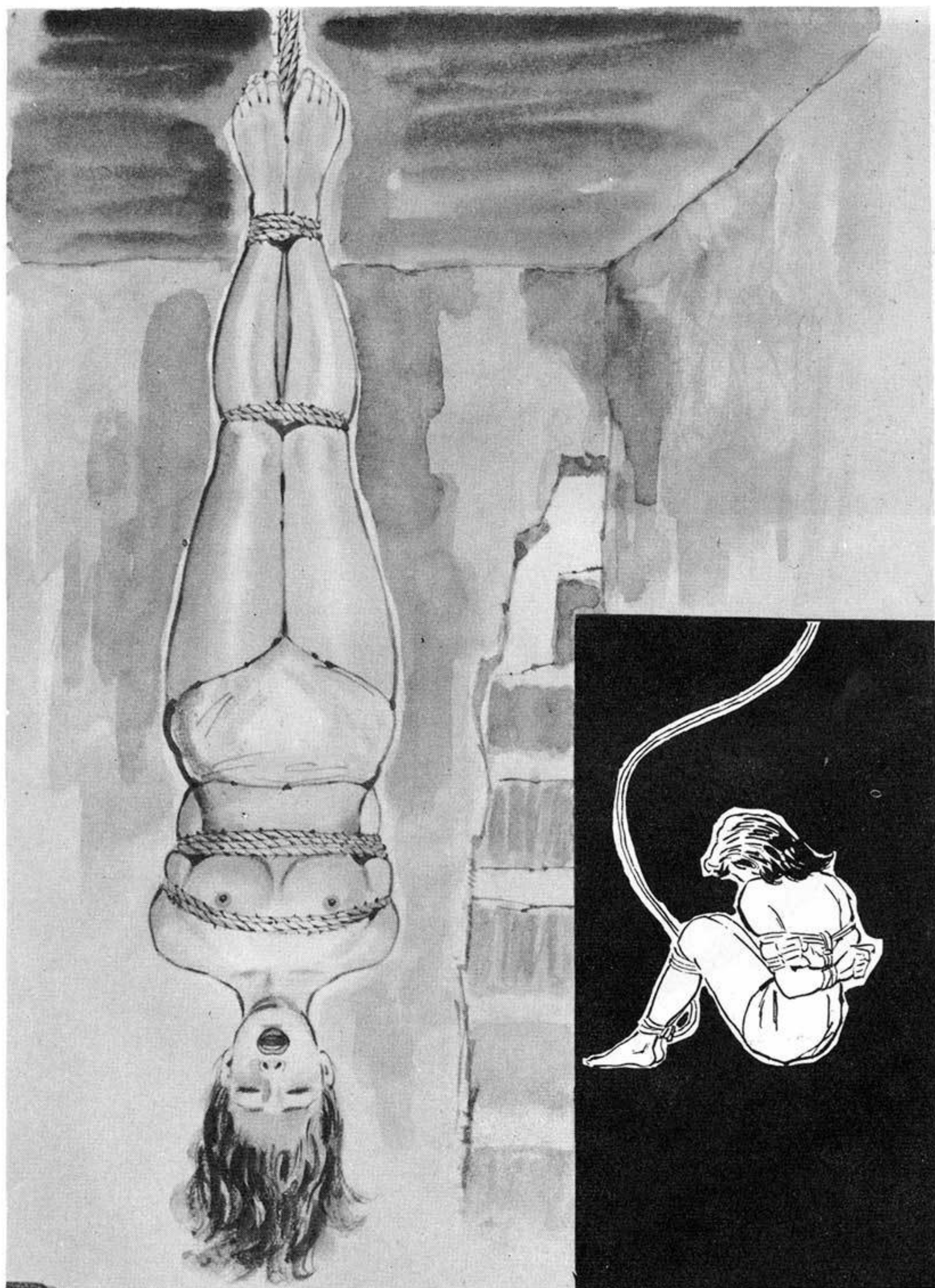
逆手足吊り

かくもありなんという幻想的な構図である。吊り縄を中心としてクルクルと回るにつれて、あらゆる角度から吊られた姿態を鑑賞することができて面白い。絵としてなら、こういうアイデアも許されていいだろう。



逆さ吊り

絵画の独壇場といった構図である。写真では必ずしも美しいとばかり限らないポーズも、絵としては私達の甘い夢だけを描き出してロマンもセンチも満足させてくれる。そして生きていることの楽しさを知してくれる。



恍惚 女体 ハイライト



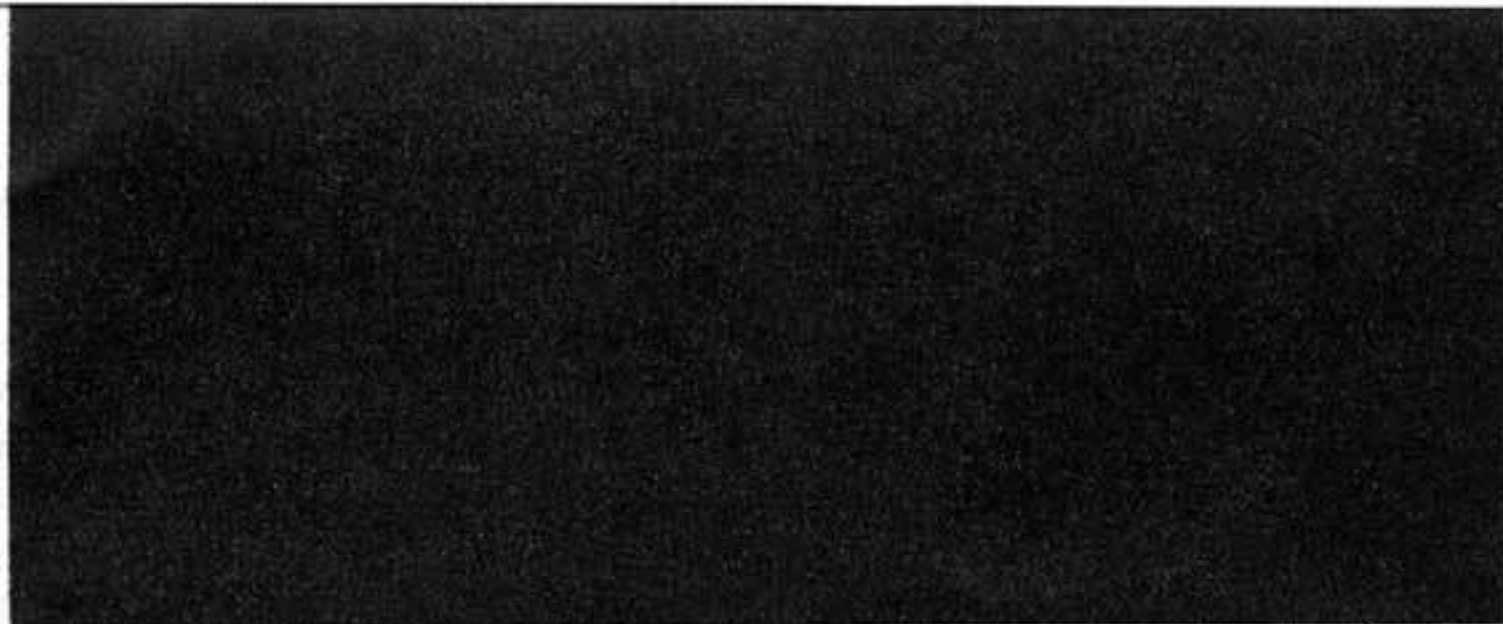
構成 富士見 司郎

悶
え
て
、
何
を
？



新
人
加
茂
良
子





哀 感



モデル 加茂良子



そこに、何かがあるからか



モデル 加茂良子

灰色の静寂の中に





前と後

新人 山路ミヨ子



何んと言えば

新人 熱海容子





新

人

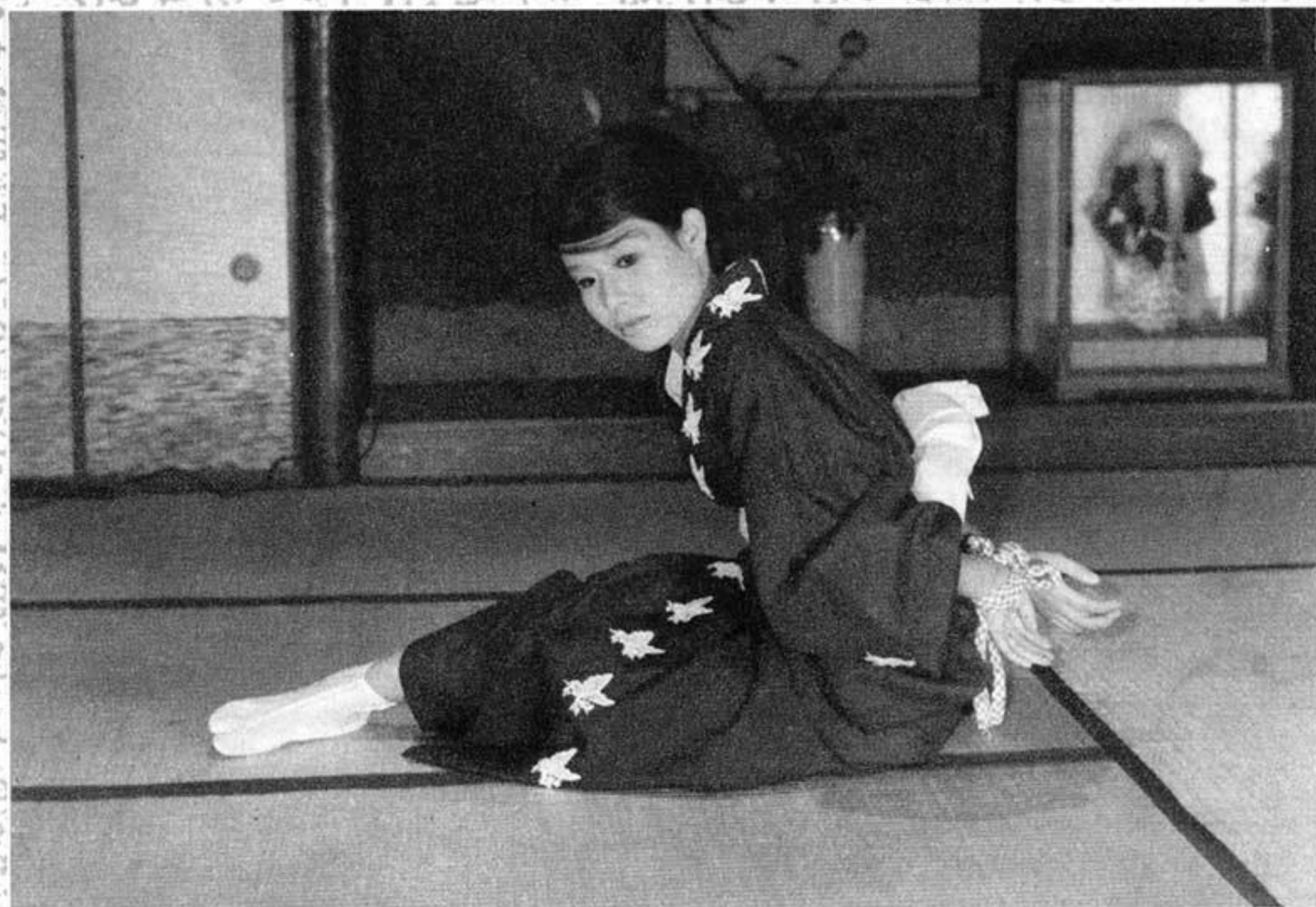
熱

海

容

子

紫
と
疲
労



新
人
浜
千
代
子

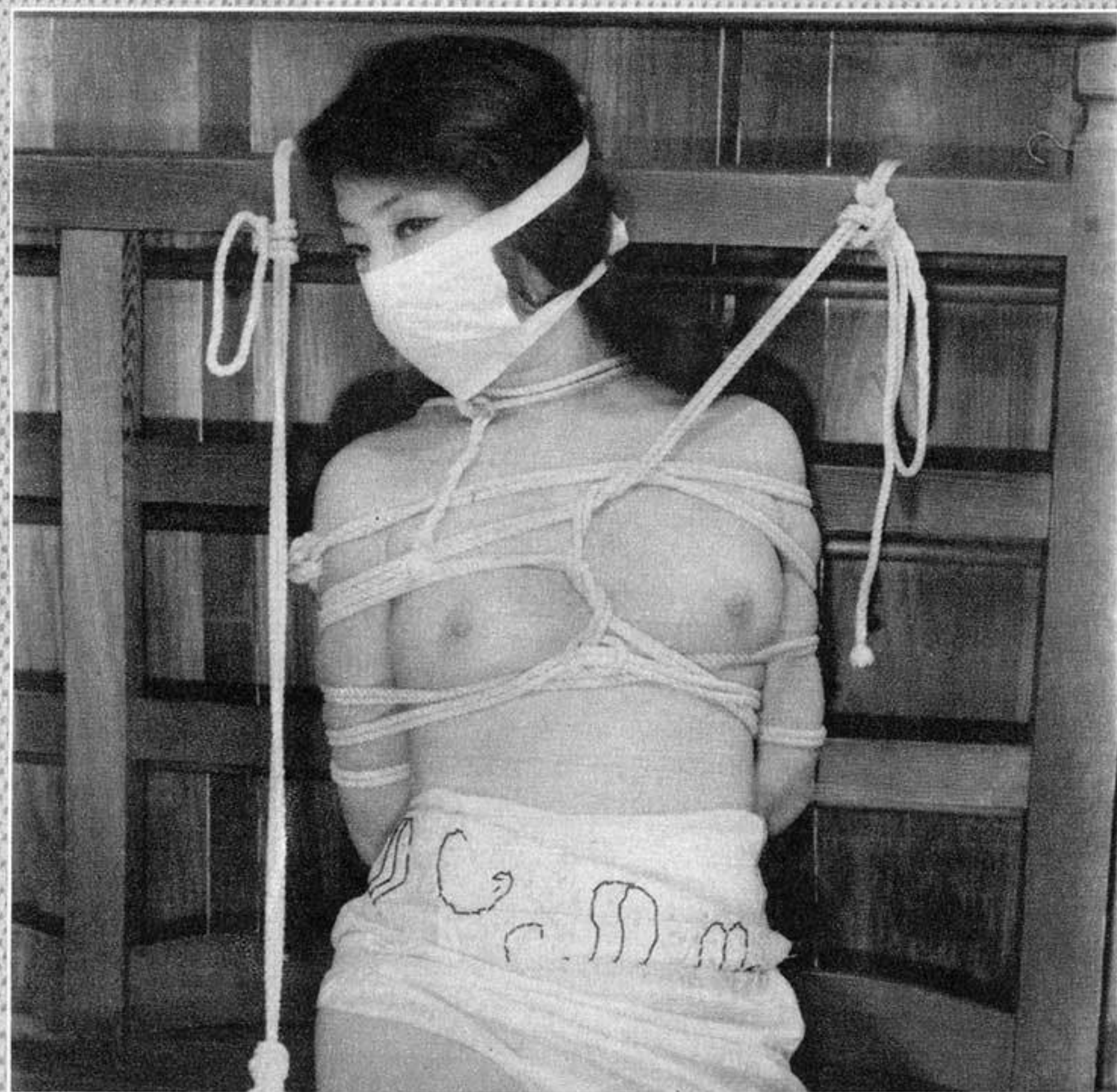


新人 花本京子

白
い
熱
い
息
吹

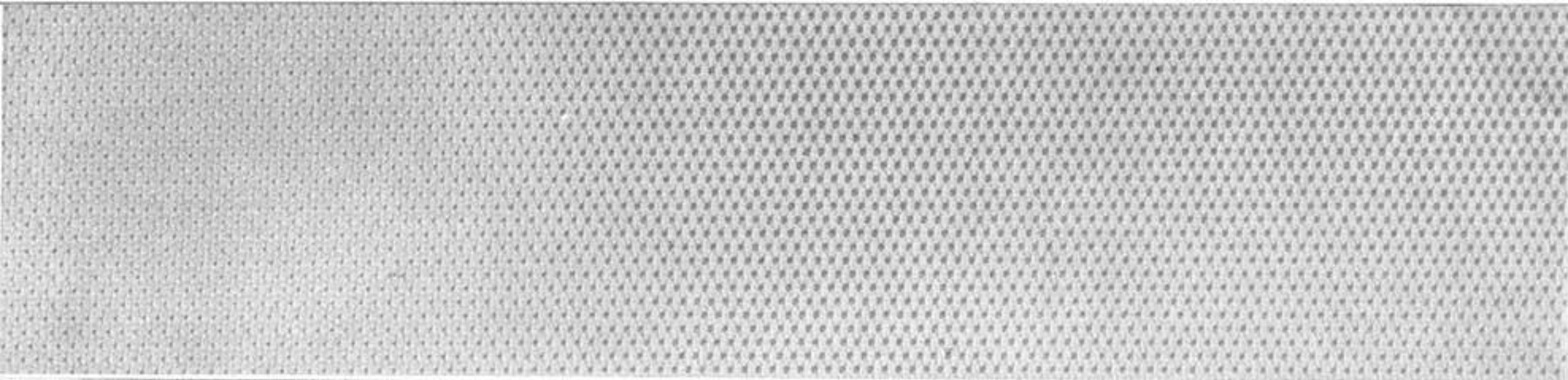


に
ぎ
い
光
り
の
中
に

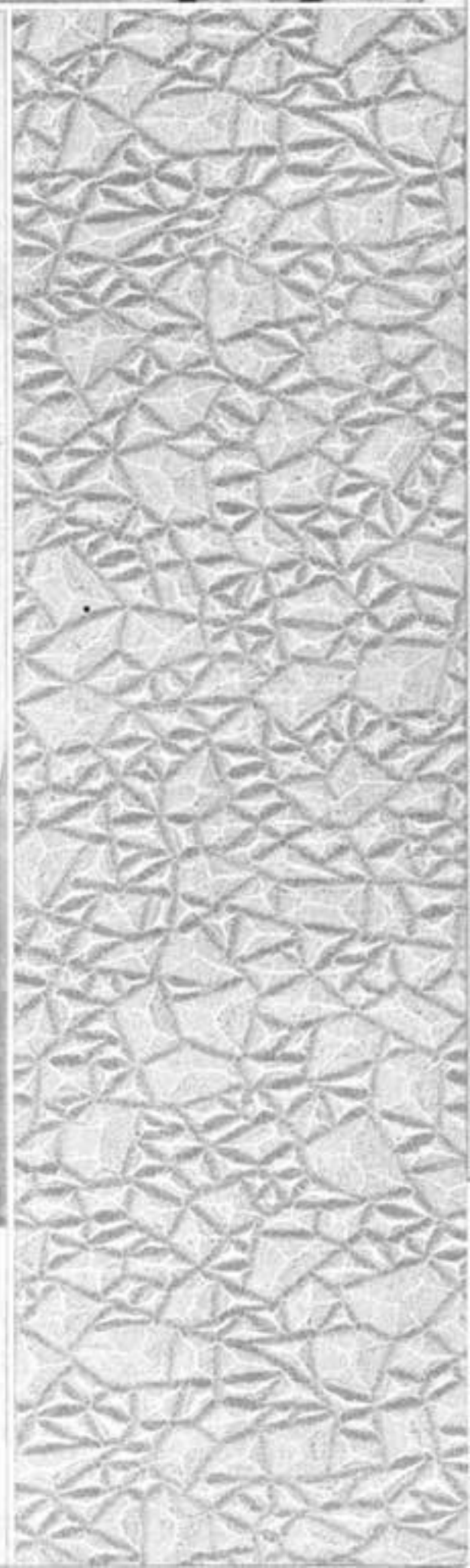


モ
デ
ル

絹
川
文
代

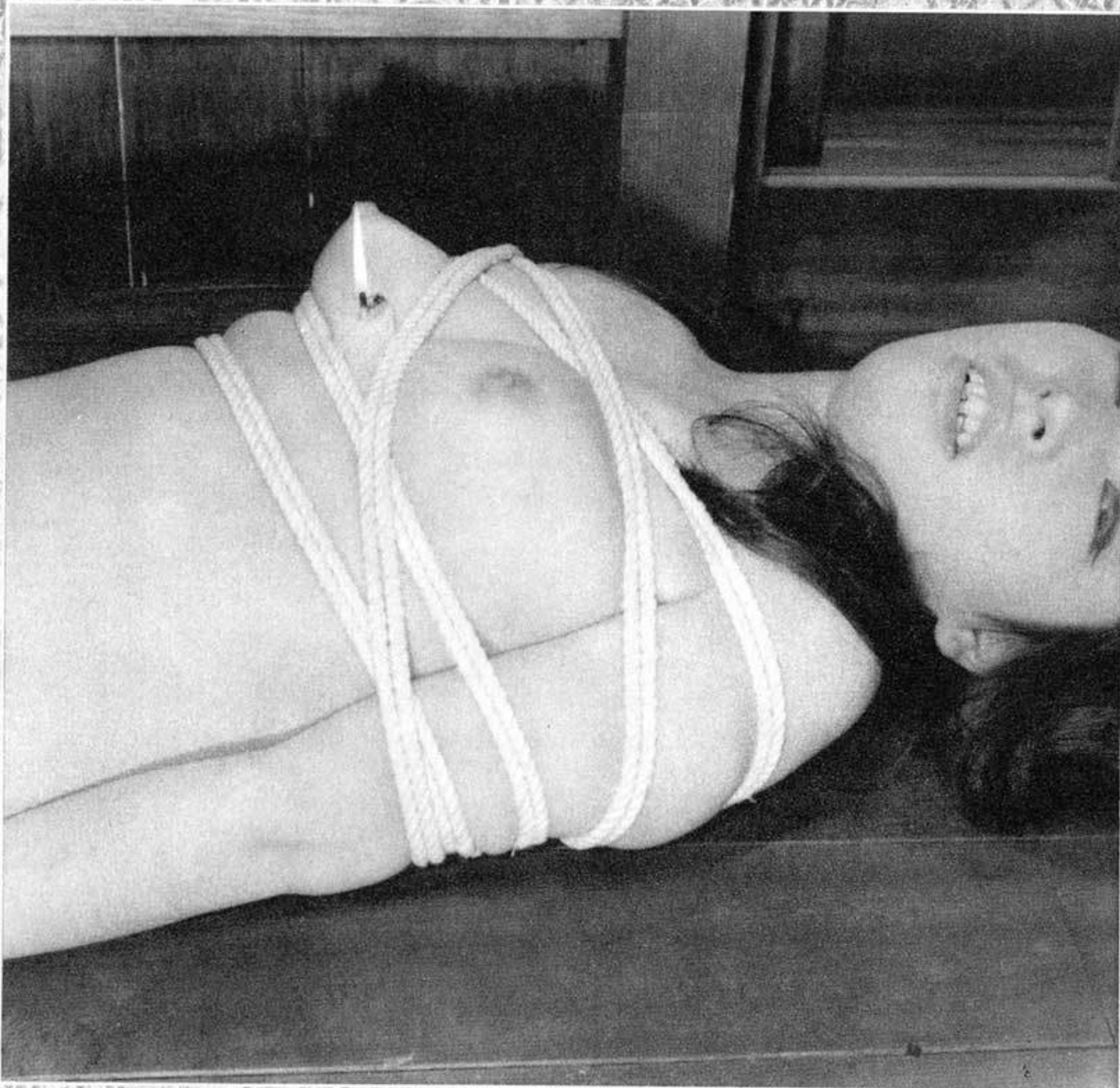


白と黒と、そして炎





モデル 絹川文代





新人 四方清美

静かに動くもの



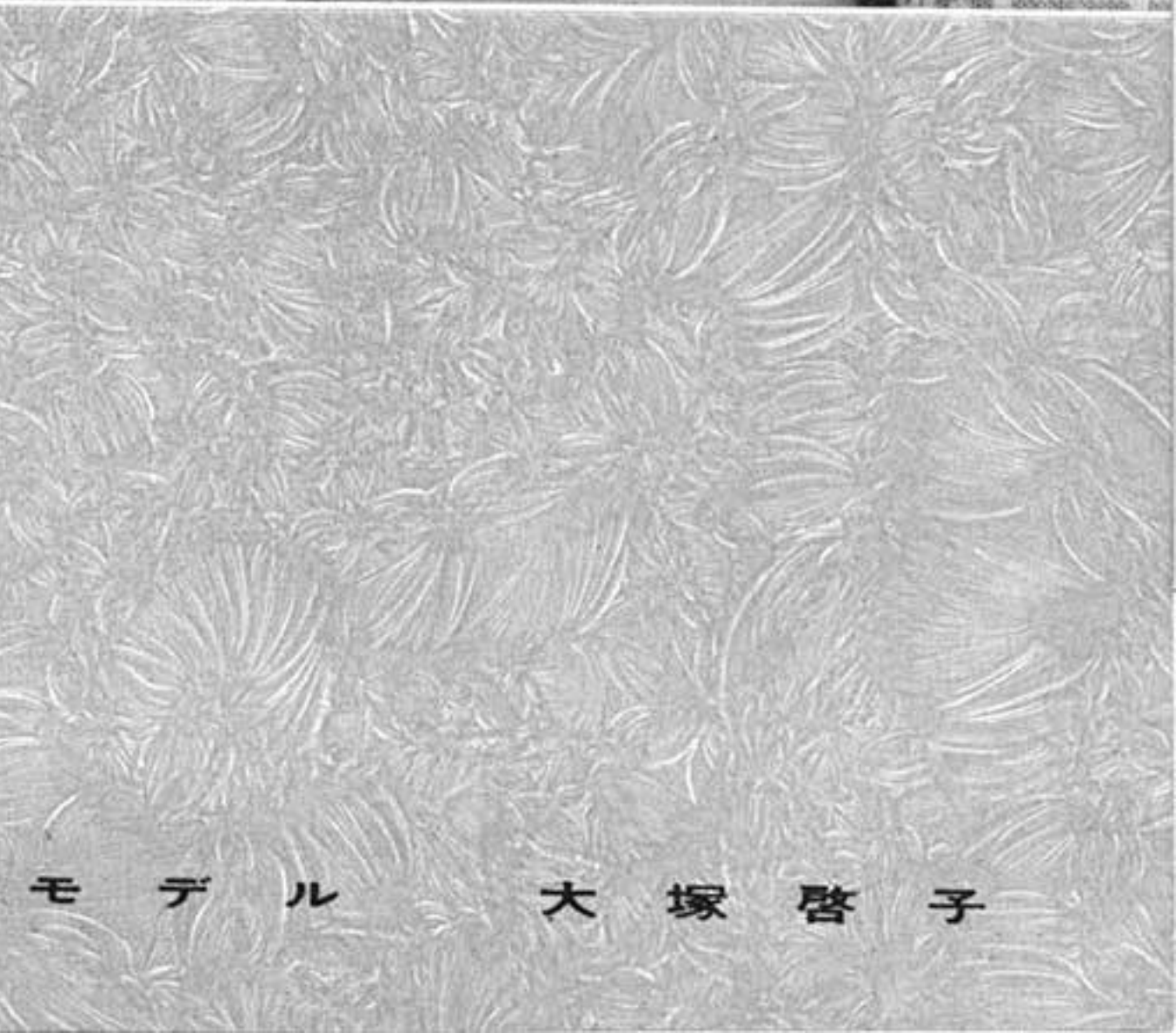
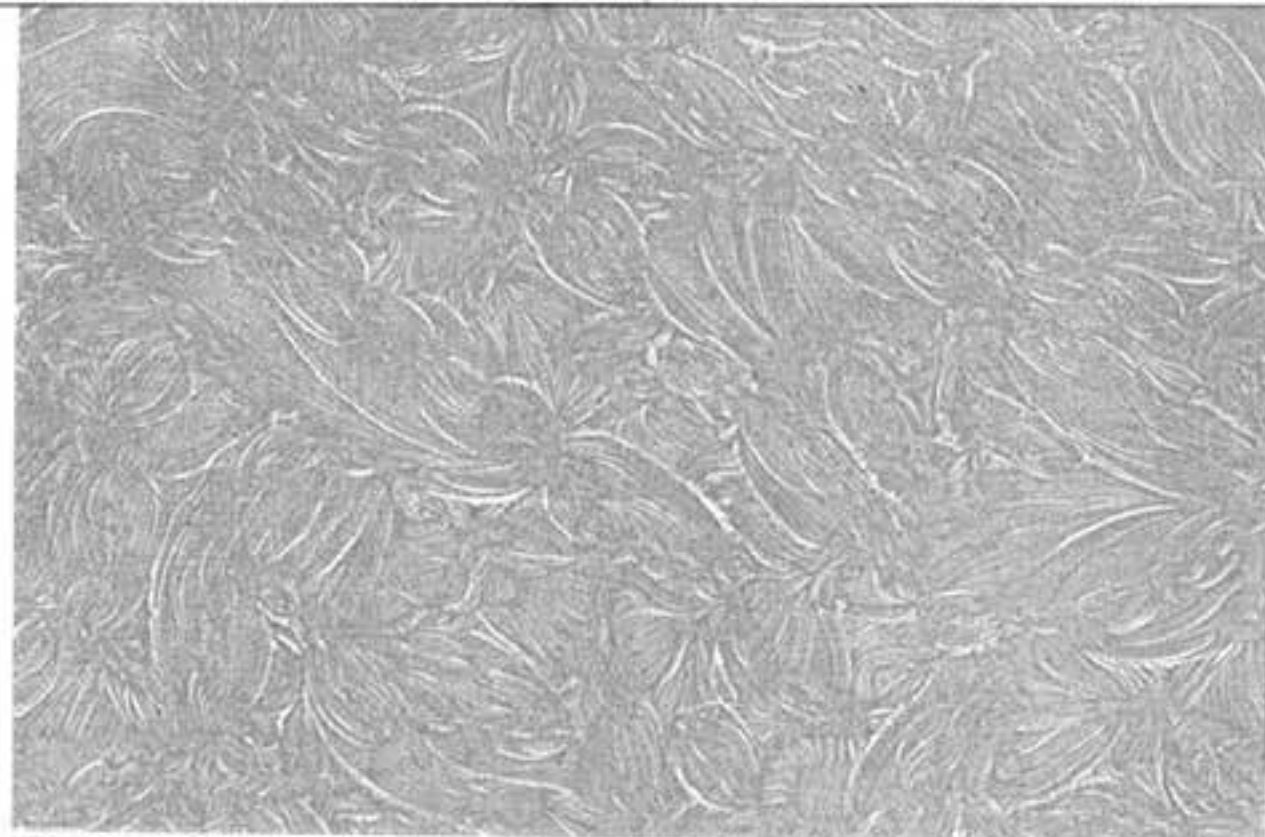
モ デ ル 四 方 清 美



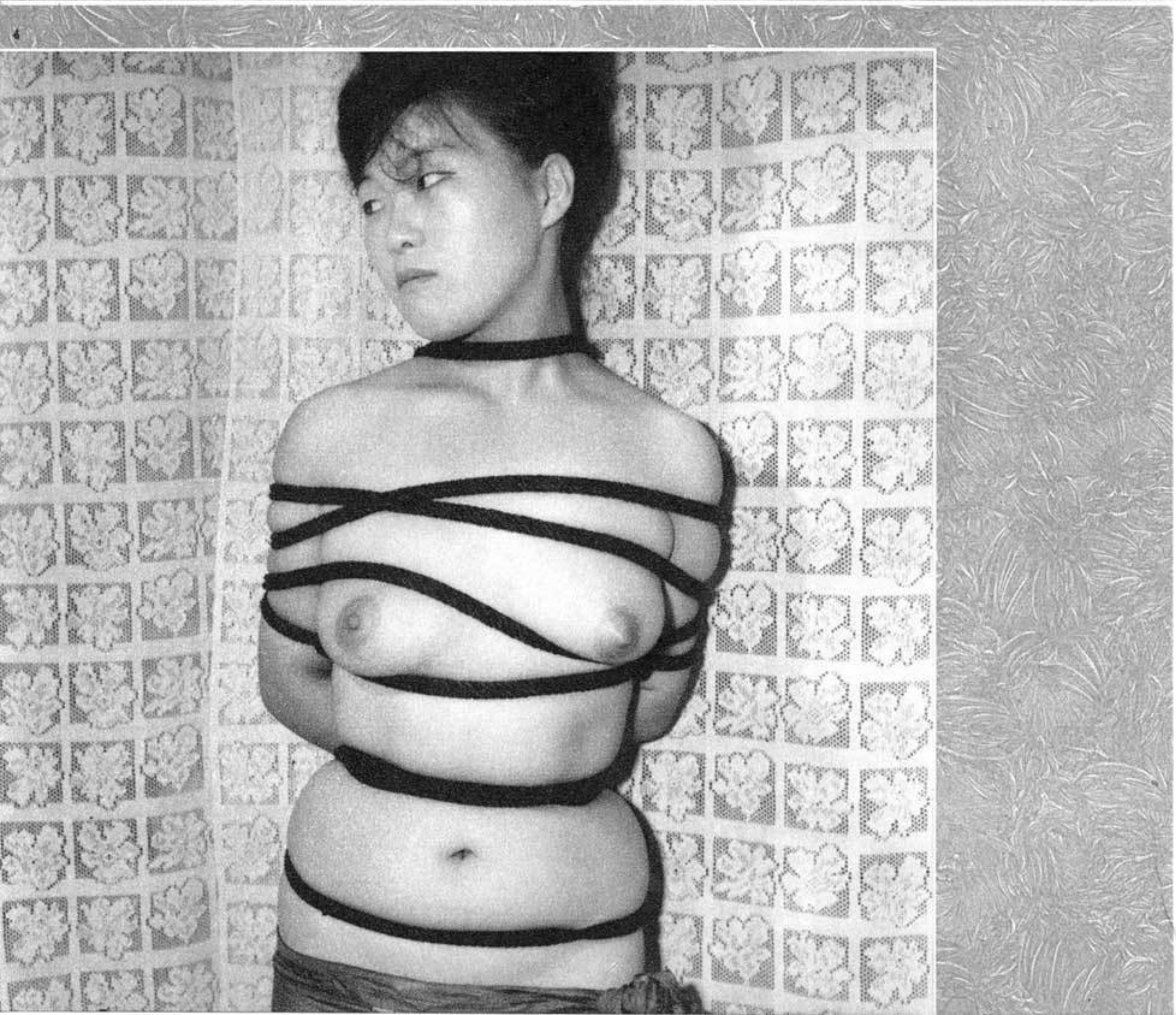
黒髪 の 用 法 が

モ デ ル 大 塚 啓 子



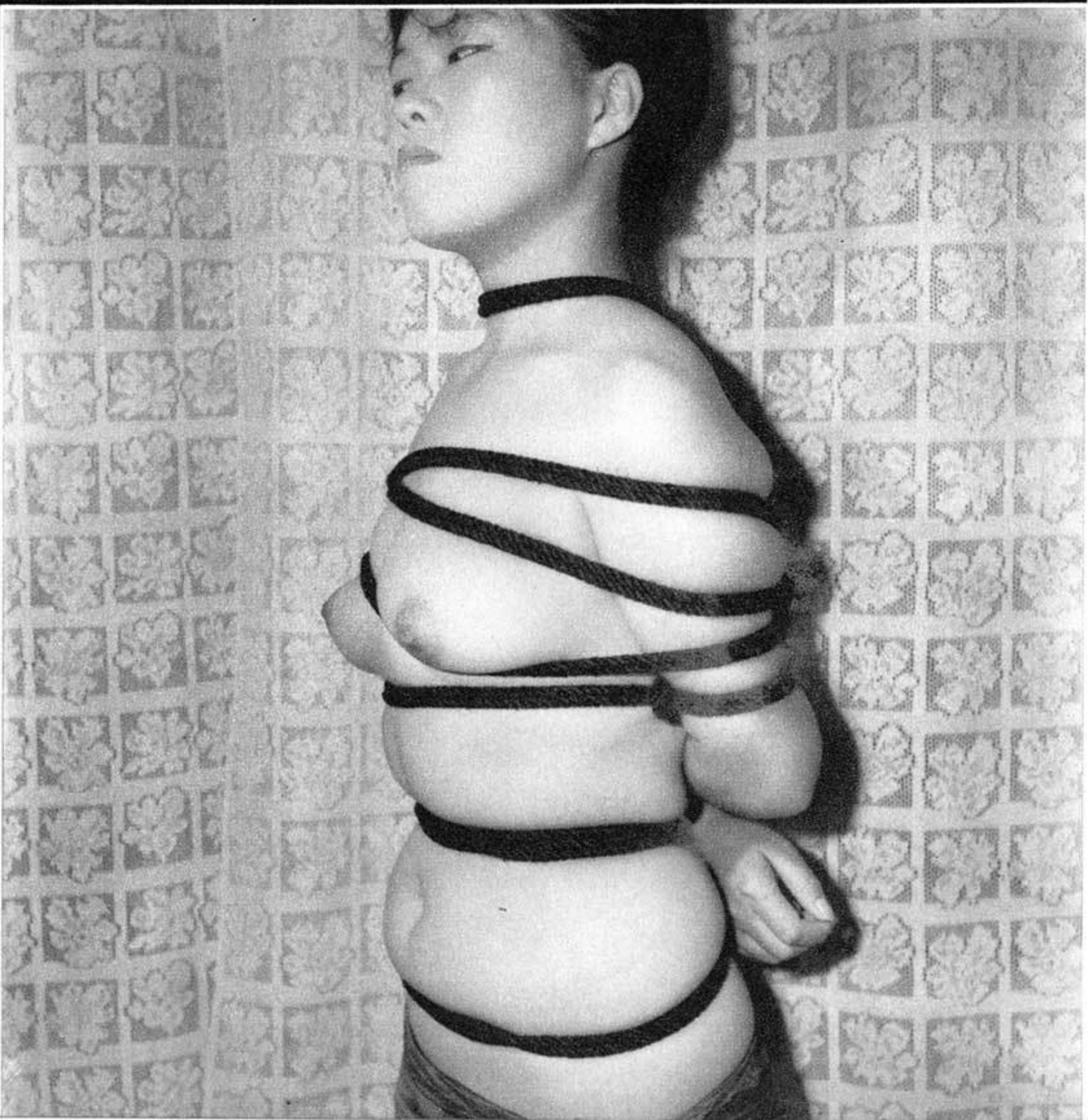


モデル 大塚 啓子





モデル 大塚啓子



裏と表の流れ

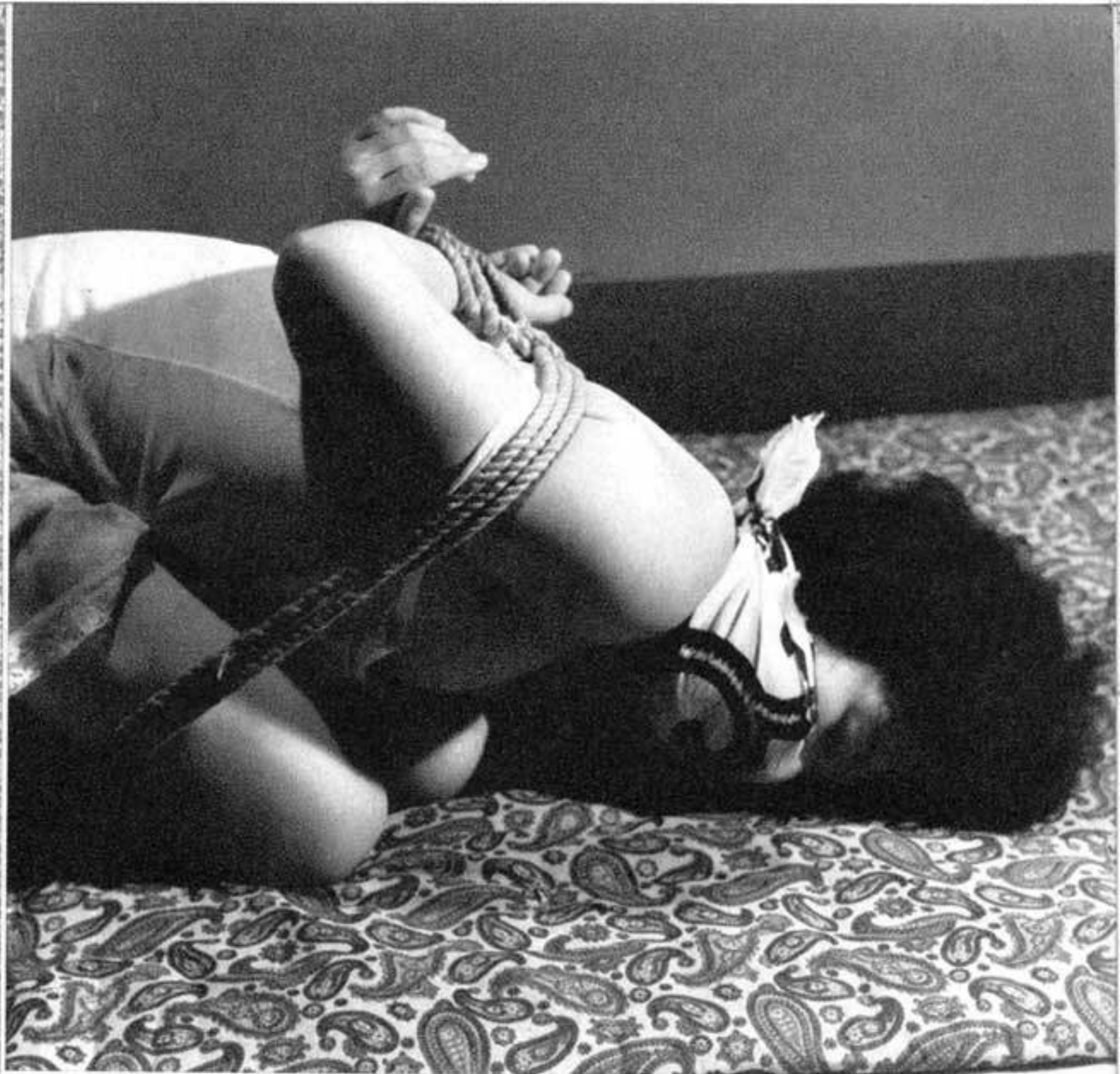


新 人 大 井 小 夜 子



モデル

大井小夜子



木 洩 れ 陽

モ デ ル 櫻 井 葉 子



冷たい休息

モデル 絹川文代





新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新 装 十 二 月 号

1960年 12月 号

(第14巻 第16号 通刊第148号)



幻想物語

雪^{ゆき}姫^{ひめ}物^{もの}語^{がたり}

林

正

一

徳川六代將軍綱吉の頃のことである。

その頃、武州の小城主、上村家と秋山家とは互いに勢力が伯仲し、なにかにつけて相争い、常に犬猿の仲であった。秋山家の主、秋山左門は、豊臣家の残党が隠したという莫大な秘宝のありかを書いた掛軸を私蔵していたのだが、左門には、この掛軸に書かれている謎のような文面を解読することはできなかった。上村家の主、上村三之丞は江戸表に参勤していつつも、国許にいる妻には、秋山家の掛軸を奪い取るように命じていた。上村家の奥方は才智の誉れ高く、日頃から家臣を使っ

て、ひそかに、その機会を狙わせていた。

ところが、その年の早春のある日、突然、秋山左門は奥州への旅に出ってしまったのである。掛軸を携えていったかどうかはわからない。もし、携えていなかったものとすれば、目指す掛軸は秋山家の屋敷の中の、どこかに隠されているはずだ。上村家の奥方は、この機会を見のがすわけはなかった。奥方は、上村家に仕える青年田上主水に、秋山家の一人娘、雪姫を奪ってくるように命令した。主水の悩みは大きかった。雪姫とは幼馴染の間柄であったし、あの清らかな美しい姫をさらってくるような気持には、到底なれなかったからである。だが、主水としては、主命に背く

ことはできなかった。心を鬼にして、この使命を果そうと考えた。

二

おぼろ月夜であった。桜の花は六分咲きに咲いていた。秋山家の、広い庭に面した奥深い離れ座敷で、雪姫は、ただひとり琴を弾いていた。目も醒めるような美しい振袖姿で琴を前に端坐し、自ら奏でる琴の音に自ら聴き入りながら、雪姫は、この千金の春の宵を琴とともに味わっていた。広い屋敷の中は静かであった。母も腰元たちも、それぞれの部屋で思い思いに書見をしている様子であった。夜も更けようとしているころ秋山家の塀を

乗り越えて侵入する六つの黒い影があった。黒覆面と黒装束に身を固めた屈強なさむらいたちであった。庭内にはいると、五つの影は母屋の方に走り去っていったが、それをゆっくりと見送っていた今一つの影は、静かに離れ座敷の方へ近付いていった。



何ものかの気配を感じた雪姫はふと弾く手をとめて、庭に面した障子を見やった。その障子の向うの廊下には黒い影が立っていた。と、障子がすーっとあけられ、曲者は二歩、三歩と踏み入ってきた。姫は、はっと愕き、あとずさりをしながら、必死になって、

「だが、だれか来てください」

叫んだ姫の目は恐怖におののき、その声は大声にはならなかった。覆面の武士は、雪姫にじっと目を注ぎながら仁王立ちのまま、落ち着き払った声で言った。

「およしなさい。声を立てることは、もはや無駄です。誰も助けに来はしないのです」

低い、食い入るような響きを持つ声ではあったが、その言葉は意外に優しくかった。母や腰元たちは、みんな、すでに別室で縛りあげられ猿轡をはめられてしまっているのである。雪姫は立ち上ることもできないで体をふるわせていた。黒覆面は言葉を続けた。

「……雪姫さま。わたしは、あなたを奪いに来たのです。もう、あなたは逃げられはしません。覚悟してください」

黒覆面は、右手で自分の懐ろから取り出した黒い紐を示した。雪姫は、はっと息をのんだ。ああ、あたくしは、縛られるのだわ……、

雪姫は急いでその乱れを直して、そこに坐り直すと、両手を前に揃えてつかえ、頭をさげて哀願した。

「どうぞ、お許しくださいませ、どうぞ、お許し——」

だが、黒覆面の武士は首を横に振り、命令

するように強く言い放った。

「いいえ、許すことはできません。さあ、あなたは、これから、わたしたちに捕えられてさらわれていくのです。捕われのお姫さまは、捕われの身らしく、おとなしくするものです」

姫には、その声がどこかで耳にしたことのあるような、聞き覚えのある声のように思われた。遠い昔に聞いた声のようにも思えた。しかし、そのような思案は一瞬にして消えてしまった。武士は、雪姫の前に、手を取らなばかりに近寄って片ひざをつく。雪姫は、両手で、両方の振袖の長い袂を胸の前にかき抱いて、じっとうつむき、目を伏せた。

屋敷内は静かであった。

雪姫のうしろに両ひざをついた武士は、低い鋭い声で、

「雪姫さま、おとなしくしなさい。あなたは神妙にくくられて、さらわれてゆくのです」
言いきかせるように言うと、姫の左手の手首を取って背中へねじまわし、その手首に黒い木綿の布で作られた紐をかけるのだった。

「左手はうしろへまわされました。右手はどうしましょう？ おとなしく御自分でうしろへまわされますか、それとも、わたしにねじ

あげられたいですか、どちらです？」

促がするような武士の言葉であった。雪姫は、今はもうどうすることもできなかった。諦めて、右手を自らうしろにまわして面を伏せ、目をとじた。すでに黒紐でくくられた左手の手首の上に、右手の手首を重ねた姫は、両手首を組み合わせて縛しめを待つのであった。もはや、武士のなすがままになっている以外にどうしようもない身であった。——ああ、あたしは、この人に捕えられて、どこかへ連れ去られていくのです。あたしは、さらわれていくか弱い女の身なのです——。雪姫の胸は、不思議に落ち着きを取り戻していた。捕われてゆくわが身の悲しさ愛おしさがじーんと胸に疼いた。切ない哀れさが姫の全身に溢れた。武士は、ひとことも言わずに、黒いしなやかな紐で、姫の両手をきっちりその後手に括しあげてゆくのであった。

それから、武士は姫の前に回って両ひざをつくと、しげしげと姫の美しい姿を打ち眺めた。両方の長い袂は、その八つ口から真赤な長襦袢の袂を覗かせて艶麗であった。雪姫はただ自らの振袖の振りのあたりに目を落していた。武士は、その姫の後手の姿態を楽しんでいるようでもあった。

「ごらんなさい。美しい捕われ姿のお姫さまができあがりました。でも、前から眺めると、なにか物足りないようですね。そうだ、そのふくよかな胸のあたりが淋しいのです。胸の縛しめがないからです」

半ば独り言のように、そう言った武士は徐ろに立ち上ると、部屋の隅の衣紋掛に近付いた。衣紋掛には長い緋の扱帯がかけられてあった。幅の広い、絹の扱帯であった。武士は扱帯を手にとると再び正座している雪姫の背後に回った。そしてその緋扱帯で、姫の柔かい乳房の上から二重にひしひしと締めあげると「後手首をもっと高くねじあげなさい」

と命じた。姫は、上体を前のめりにしながらも、自分の両手首をいっそう背高に滑り上げた。扱帯の余りは、この両手をきりきりと縛りあげる。武士は、姫の胸の前に乱れて垂れた緋鹿の子の絞りの帯揚げを、もとのように胸高の帯の間にはさんで整えた。それから、懷ろから豆絞りの手拭いを出すと、相変らず鋭い低い声で、

「さあ、目隠しをします。目をつむって下さい」

嚴重な目隠しをされた姫の耳許で武士は、さらに説得するような口調で、次のように

言った。

「では、お立ち下さい。外ではかごが待っています。声を立てないように、御自分の袂の端を口にくわえてもらいましょう。いいですね。かごから出されるまで、口から離してはいけませんよ」

姫は、すべて、武士の言うままに従うだけであつた。それがこの姫君に負わされた悲しい宿命であつたのだ。

「——こうして、振袖姿のお姫さまが捕われの身となり、後手に括られてさらわれていく姿というものは、この世のものとも思えないほどの美しさです」

武士は、また独り言のようにそう言った。

三

上村家の屋敷にさらわれてきた雪姫は、奥まった一室につれこまれ、ここで初めて縛しめを解かれた。その部屋には鏡台が置かれてあるほか、納戸のように殺風景な感じのうす暗さが漂っていた。雪姫は鏡の前に端座すると、ほつれた髪や乱れた袂を直した。やがて、ふすまがすーっと開くと、若いひとりの腰元が滑りこむようにはいつてきて、姫の斜めうしろに坐った。



「雪姫さま、あたくしは、あなたさまの身のまわりのお世話をするようにと奥方さまにおせつかりました。露路と申します」

姫は黙って目を伏せた。露路は鈴を振るような澄んだ声で言葉を続けた。

「姫さまは、このお屋敷の奥の離れのまにとじこめられることになっております。そうし

て、あたくしは姫さまを毎日夕方には、奥方さまのいらっしゃる広間へお伴れ申さねばなりません。奥方さまは、あすから毎日、雪姫さまをお取り調べになるのでございます」

雪姫は目を閉じたまま、ただ素直に黙ってうなずくのであつた。

やがて、姫は露路に伴われて、長い長い廊

下を何度も曲って歩かされた。奥の離れ座敷というのは、倉のそばにある十畳の綺麗な部屋であった。露路はその夜、雪姫とともに、枕を並べて眠った。

四

次の日から、姫と露路はその離れ座敷で過ごすことになった。露路は姫の食膳を運ぶなど、何くれと雪姫の身の回りの世話をしたが、口数は至って少なく、姫と腰元との間にはほとんど言葉は交されなかった。夕闇が迫るころ、姫はお湯にはいった。そしてまたもとの美しい振袖姿に返った。そんなとき露路は黙って姫の着付けを手伝った。姫が鏡の前に坐って自分の姿を眺めていると、廊下にかすかな足音がした。まもなく、一人の年かきな腰元女がはいってきて、部屋の入口にぬかずいた。

「露路さま、奥方さまが呼びでございますゆえ、すぐに……」

露路は静かに立ち上った。雪姫ははっとして思わず胸元に手をやり、出てゆく露路の後姿を見た。二人の腰元が立ち去ってから露路が帰ってくるまでのあいだ、雪姫は胸のどよめきを抑えることができなかった。いよい

よ、奥方さまの厳しいお取り調べが始まるうとしてゐるのだ。

やがて露路は座敷へはいってきた。

「雪姫さま、奥方さまのお部屋へお連れ致します。ご用意を——」

露路は袂から桃色の腰紐を取り出して、雪姫の傍らに近付いた。雪姫は胸のあたりを両手で抑えてうなずいた。

「さ、お手をお出しくださいますし」

促がす腰元の言葉に、姫は観念して素直に両手を前で組んで腰元の方へ出した。

両手を前手縛りに縛られた雪姫は長い廊下を歩かされていった。露路はその後に紐の端を持って付き添うようにして、黙々と歩くのであった。

春の宵は迫っていた。薄暮の空には、もの悲しい春の落日の光が散っていた。奥方は静かな庭に面した広間で、床の間を背に端然と坐していた。年増女の熟し切った豊かな肉体に不思議な気品と威厳が溶け合って、奥方としての一つの貫録を見せていた。左右には、二人ずつの腰元たちが身動きもせず控えていた。

程なく床に向って右手のふすまが開くと、腰元露路のしとやかな姿が現われた。

「奥方さま、雪姫さまをお連れ申しました」
手をついて、ていねいに伝える露路の方に目をやった奥方は、

「そう。では、わらわの前へ」

両手首を前で括り合わされ、うなだれて歩いてきた雪姫は、奥方の前へ引き出され、引き据えられた。

「……小憎らしいばかりの美しさ。雪姫、どうじゃ？ 囚われの身の気分はいかがなものであろうの？」

それが奥方の初めの言葉であつた。奥方は、姫の気品と哀愁に溢れた囚われ姿をまじまじと見つめていた。それから露路の方へ申し渡した。

「これ、露路、そなたは、捕われの姫の縛しめのかけ方を存ぜぬのか。そのような甘い縛り方ではわらわの氣に入らぬ。もう一度、姫の部屋へ連れ戻り、縛しめをかけ直して引立ててまいりや」

それは厳しい言い付けであつた。露路はただ頭を下げて恐れ入っていた。

「雪姫さま、お立ちを」

露路に促されて、雪姫は、再び長い縁続きの廊下をもと来た所へ引き返してゆくのであつた。

五

離れ座敷には、二人の美女がいた。一人は鏡台に向っておとなしく正座し、他の一人は柔くて長い腰紐を手にその後立っていた。それは神妙に括られようとする姫と、この姫をいっそう厳しく美しい縛られ姿にしようと

している露路の姿であった。つい今しがた、露路から、

「姫さま、これを膝の上で小さくたたんで、それをご自分のお袖の中におしまいになってくださいまし」

手渡された豆絞りの手拭いを、雪姫は言われたとおりにしまいこんだところであった。



この静謐な座敷の中には、なんとという奇妙な雰囲気の流れているのであろうか。目も覚めるような華やかな振袖を着、胸高にしめた帯とふくよかな帯揚げを結んだ姿の雪姫は、両手を後に回され、両手首を背高に括しあげられ、高胸にきりきりとかけられる胸の縛しめに身悶えするのであった。矢がすりの振袖に紺の帯をしめたうら若い娘の身の露路も必死の面持ちで、奥方の言い付けに背くまいと、幾本かの腰紐をさばいて、雪姫の後から、その両の手首や乳房の上にひしひしと縛しめをかけてゆくのであった。後手高手小手に縛りあげられた雪姫はただ面を伏せてそこに坐っていた。典雅な香の匂いがかすかに漂って、一種妖しげな緊張感がみなぎっていた。息づまるような緊迫の時であった。

腰元露路に絹紐の縄尻をとられた雪姫は静かに立ち上った。とぼとぼと歩を運ぶ廊下はいっそう長く感じられた。もう今はどうすることもできない哀れな捕われの身であった。長い振袖の袂が小刻みに揺れていた。足袋の白さが目に滲みだした。

こうして厳しく括られた雪姫は、その、世にも美しい振袖の後手姿を再び奥方たちの目の前に曝さねばならなかった。奥方のいる広

い座敷に引き据えられた雪姫の楚々たる姿を見たとき、奥方も、腰元たちも、その、この世のものとも思えぬ美しさに、はっと息をのむ思いであった。なんとも言い表わせぬ感謝に充ちた空気が一座を支配した。強い感動に打たれて、暫くは肅然として声もなかった。だが、雪姫に対する取り調べと、裁きと、仕置きについての次の計画は、奥方の胸の中に予定せられていたのである。

下を向いて神妙に坐っている雪姫の後には桃色の腰紐の縄尻を持った露路が控えていた。奥方は姫をじっと見控えつつ口を開いた。

「――姫は、秘密の掛軸のありかを存じてあろうな」

「……存じませぬ」

「――では、姫の父上は掛軸を持って旅に参られたか。それとも持たずにゆかれたか」

「……存じませぬ」

「――そなたの父上はどこへ旅しておられるのか。正直に申せ」

「……存じませぬ」

「――なんのための旅じゃ？ 知らぬことはあるまいぞ」

「……存じませぬ」

「――なにを訊ねても知らぬ、存ぜぬとは。」

そのようなことで、わらわが承知すると思いやるのか」

「……………」

奥方は露路をきくと見て、何ごとかを目で命じた。露路は立ち上ると、四筋の縄尻をぐいと上へ引きあげた。雪姫の後手の手首は上へつりあげられ、胸は痛々しくしめつけられて思わず前かがみになった。眉をつりあげてその光景を眺めていた奥方は、

「ええ、じれったい。いっそのこと、雪姫に猿轡をかませてしまいなさい」

非情に命令した。露路が、

「姫さま、さきほどの手拭いは、どこにお持ちですの？」

雪姫は消え入るような細い声で、あえぎあえぎ、

「……あたくしの左の袂に……」

「では、奥さまのお申し付けにより、猿轡をはめますから、そのお覚悟を」

露路は雪姫の袂の中から手拭を取り出してしごく、雪姫の背後に回り、うつむいている姫の口の上から厳しい猿轡をはめてしまった。その姿をきくと見据えていた奥方は満足げに言い放った。

「雪姫、わらわは今からここでゆるりと食事

をします。そのあいだ、姫は自分でその縄目を解くのだ。わらわの食事が済むまでに、その縛しめから抜けられなかったときには、その罰として、次のお仕置きを言い渡します。そのおつもりで、一生懸命に、その縛しめを解くのです。さあ皆の者、今宵はこの広間で六人揃って夕食をしながら、姫の縄抜けのお手並を拝見いたしましょう。姫が身悶えする姿はさぞかし見物であろうぞ。ああ、いい気味じゃ。まことに楽しい春の宵と申すもの。さあさあ、食膳の用意じゃ。食膳を運んでたもれ」

奥方の声は無情に響いた。腰元たちは両手をついて一礼すると、かしこまってそれぞれ立ち上った。春の日はとっぷり暮れて、広い庭のそこここに置かれた桜色のぼんぼりの灯が艶めかしく揺らめいていた。

六

絹の腰紐でくくられているとはいえ、厳しい後手の縛しめや猿轡が、か弱い雪姫に解けようはずはなかった。今はただ、奥方や腰元たちの目の前に曝されながら奥方の部屋の中ん中にきちんと坐って次のお仕置を待つ雪姫であった。

小半ときも経ったであろうか、食事は終わった。奥方は、酒にほろりと酔った目を細めて雪姫を見おろしていた。

「秋山家の姫も縄抜けの法はたしなまぬと見えます。ごらん、相変わらず、あんなに綺麗に縛られたままですわ。——では、露路に申しつける。姫の縛しめを解くのじゃ。そして、その振袖をぬがせて、長襦袢姿にし、木綿の白細引で、今一度高手小手にくくしあげるのじゃ。姫は、ただ今から、座敷牢に閉じ込めます。今宵の雪姫は、何事も白状せぬゆえ、そのお仕置きとして、後手に縛りあげられたままで牢屋に入れられるのです」

奥方の声は昂ぶっていた。今一人の腰元の手伝いを得て、露路は、奥方の仰せ付けに従い雪姫の縛り紐を解きにかかった。姫は、まつ毛の長いつぶらかな目を閉じて、じっと、されるままになっていた。びんのほつれ毛が一筋、左の頬に垂れていた。

赤い絹の長襦袢の袖は長く、胸高に締めた緋の扱帯の幅は広がった。雪姫の柔かい両手は容赦なく背中になじめわされた。両手の二の腕に三重に巻きつけられた細引は背中に回され、その中心部に両手首がくくられた。さらに別の細引が用意され、乳房の上の高胸を



四筋の白木綿の細引がしめつけていった。三人の腰元たちはかたずをのむ思いでそれを眺めていた。

やがて雪姫は露路の、

「姫さま、どうぞお立ちを」

という声に、しのびやかに立ちあがった。

二人の腰元に縄尻を取られ、肩を押され、促

がされるままに歩を運ぶ雪姫であった。諦め切った表情で、広間の左手のふすまを出て、牢屋へと続く長い廊下を引つ立てられていくその姿は哀切限りないものであった。

ややあって、奥方は、若侍田上主水を呼びつけて言った。

「主水どの。そなたは今宵から雪姫のお目付

け番になるのです。あすからの姫の取り調べはそなたにしてもらいます。今夜は、雪姫に入牢を申しつけましたゆえ、そなたは姫の監視を怠ってはなりませんぞえ。とくと申しつけましたよ」

その威圧的な口調に、主水はしかたなく頭を下げた。

七

夜も更け始めた上村家の屋敷内は寂として音もなかった。

主水が牢屋の前の板廊下に佇んで格子の間から牢内を見ると、ほの暗い行燈のあかりの光に照らされて、畳の上に、下を向いて坐っている姫の姿が見えた。猿轡をはめられた雪姫は、後手のまま床柱につながれているのであった。胸の縛しめのきびしさのためか、姫のふくよかな胸のふくらみが震えているようであった。姫は観念の目とじ、こうべを垂れて、すべてを運命の流れに委ね切ってしまうているかのように思われた。

主水はあたりを見回してから、そっと入口に近付き、錠前を外すと、音もなく牢内にはいっていった。

「姫、姫さま。田上です。田上主水です」

主水は姫のさるぐつわを外し、縛しめを解きにかかった。そのとき、廊下の曲り角に、奥方と一人の腰元が、かすかな絹ずれの音をさせながら現われたことに、主水は気付かなかった。

主水は雪姫を自由の身にして、できれば逃がしてしまいたいと考えていた。しかし、奥方たちの足音に気付いた雪姫は、主水の身を救うためには、自分が一刻も早く、もとの通りの縄目姿にならねばと思った。

雪姫は必死な面持ちで主水に訴えた。

「だれか来たようです。主水さま、早くあたにくしに縄をかけてくださいまし。あたくしはあなたさまに捕えられた囚われの女でございします。どうぞ、もとどおり、あたくしを雁字搦目にきびしく縛りあげてくださいまし……早く。……後手に。……高手小手に。……早くなさって。……柱にくくられるのです。……早く。主水さま」

主水は、今は一刻もためらっているわけにはいかなかった。昨夜、雪姫を縛りあげたその同じ手で、主水は今夜もまた雪姫に縄を打たねばならぬさだめであったのだ。

姫は、この逞しい青年武士の手にかかって括られていくことに、なぜか不思議な喜びを

感じた。ついぞ経験したことのない、自分でも理解することのできない妖しい快感が胸の中でうずくのを覚えた。

腰元の捧げていた燭台の灯が廊下伝いに通り過ぎた風に吹き消されたため、再び灯をともすのに手まどっていた奥方が、雪姫のとじこめられている牢屋の前に現われたのは、幸いにも、主水が雪姫を高手小手に縛りあげて柱にすぎ終ってからまもなくであった。

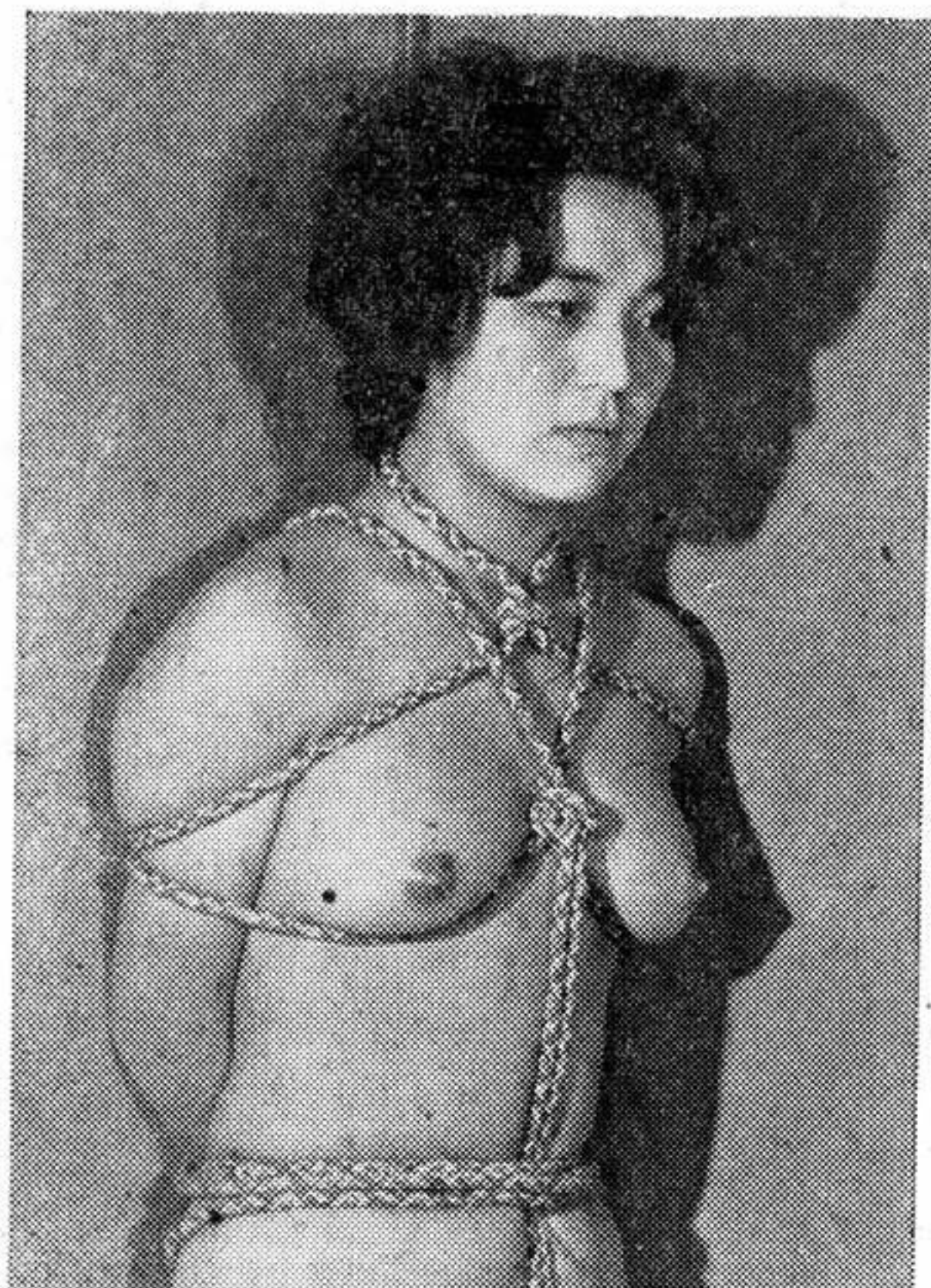
あの凛々しくもまた美しい若侍田上主水に監視される、珠玉のようにうるわしくもまた清らかな雪姫の捕われの縄目姿は、まさに一幅の絵でなくてなんであろう。奥方は、その光景を想像すると眠りもやらず、いても立ってもいられない気持で、牢屋の方へと足を運んだのだった。

(第一部終)

(追記)

美貌の乙女春丘リルさんへの限りない憧れをこめて執筆したこの拙い一篇を、敬愛する牧高志・楓月太郎・白金紅次・笛地佐渡の四氏に捧げる。

美貌の姫君が緊縛されるといふ、哀れにも美しい幻想に共鳴下さる方は、誌上を以て呼び掛け頂きたくお待ちする。



私はどうして鑑賞用女性を見つけたか

『鑑賞用女性』

辻村 隆

○ この頃は、大分世の中が変ってきた様な気がする。ヌーベルバーグだの、ビート族だのと「悪」を礼讃するようで、我々中年に足を突込んだものは、三日見ぬ間の桜で、おいそれとついてゆけない。「縛り映画」だ。「残酷もの」だ。とこのところジャーナリ

ズムはアブ物全盛といってもよい。緊縛女性の写真を載せないことには時代遅れといった有様では、喜ぶべきか、悲しむべきか、一寸判断がつかねる。

然し、私の経験からいって、小説に書かれているように、そうそう緊縛の鑑賞用女性が町の中に、ざらにころがっているものではない。バーやアルサロで、さんざん飲まされた挙句、酔にまかせて小当りに当たってみても、アノ方ならOKしそうな女性には、よくぶつかるが、いざ、ソノ方の話をもってゆくと、「あらッ、こちらさんはおHね」と大げさに眉をしかめるか、さもなくば、「見損わないでよ」

と見事に肘鉄一発を喰らわされるのがオチである。まあまあ、よくても「考えとくわ」と全然思考力を何処かへ置き忘れて、素晴らしいグラマーの肉体だけで生きているような女性性が、そのたまうのである。

然らば、今流行のステッキガールならと、一時間三百円のステッキ料なるものを張り込んで、雰囲気よろしきムード喫茶で、じんわりと切り出すと、コールガール化した彼女達は、先ずその冒頭にマネーの問題を提出し、然る後、徐ろに肉体の切売と緊縛の苦痛との比較を、美しくセットされた頭の中でめぐるましく回転させ、その結果、概ね最小の労力で最大の報酬を得るという近代経済原則を地でゆくことになる。

即ち、身体的にはラクで、その上、自分自身のセックスをも満足させる方を選ぶことになる。その行為が、男性操縦の唯一の手段と心得る女性の何と多き事よ。且又、究極はそれを求める男性の如何に多き事か――。

だから、緊縛は芸術である。縄を一種のアクセサリーとした鑑賞用女性に過ぎないものではないかと、順々とさとしても、一向に彼女達は、逡巡し、はかばかしくは返事もせず、果ては彼女との交際も往々にして一巻の

終りとなる事があるから、誠に以て難かしきは、緊縛の鑑賞用女性を求める段階である。

況してやB・G属や、一般女性の中から、それを探し求める事は、愈々以て、至難中の至難の業であるに違いない。

されど、世の緊縛族よ嘆くこと勿れ

――。棚からボタ餅の中山女史に厚生大臣の椅子の廻ってくる御時世である。

何時、いかなる時、こういうタナボタ式のチャンスに巡り会わぬとも限らない。

女房を後生大事に、精々御気嫌をとり結んで、緊縛のトレーニングに余念のなかった小輩にも、斯くいうタナボタ式チャンスが、ふとした事から巡って来たのである。

小輩、某日、つれづれなる儘に戎橋筋を散策中の折しも、ばったり出会ったのが、中学同窓のR君である。見れば愛らしき女性と同伴である。R君、彼女を見返りて、「これは、



同窓の辻村と云う奴で、知る者ぞしる雑文書きの何でも屋である」と紹介し、「おい悠紀子、――誘惑されたらあかんぞ」と余計なる事までつけ加えた。

恰度、前回の同窓会以来、久し振りであるし、R君の酒仙は有名な方だから、一杯いこうじゃないかと云う事で、妹の悠紀子さんも共々に、酒屋ののれんを潜った。

酔う程に気前よくなるR君の例である。必死に止める悠紀子さんの、いじらしい心根もものかわ、もう一軒、もう一軒と、最後に潜ったバー「ナポリ」では、既に相当の酔顔モ



ロー振り。更に幸か不幸か——。「ナポリ」のナンバー3、みどりと云う、ハッカ入タバコの如き名の女性は、R君の小指である。悠紀子さんの手前、生酔本性違わずで、流石に氣を兼ねて、ひそひそ話のやりとりの挙句、「おい辻村君、すまんけど、妹の奴、何処かへ連れてってくれへんか——」と云う事になった。お天の恵み、と小輩は、ゾクゾクする嬉しさを押し殺して、さも困った奴と云わん許りに、苦渋のツラをするのに、さればと、R君は、ポケットより、シワ苦茶の千円札を二枚、小輩の手に握らせ、「すまん、こ

れでタノム」と手を合さん許り。茲に於て、小輩は、義を見てせざるは勇なきなりと、心にもない悲壮な面持で、ぐうたら兄貴を案ずる悠紀子さんをなだめすかした。

チンチンチンのお月様、何卒、この小輩に、欲びを垂れ給え——。小輩は「月影のナポリ」のヤワラカーキ、メロデーに送られてバー「ナポリ」を出た。

有馬稲子と芦川いづみをたして、ザ・ピーナツで割ったような、この悠紀子さんを、心行く迄縛れたらなあ——、と小輩は、誠に不逞な考えで、涼風の立った御堂筋を当てもな

く散策していた。

「映画でも見ません？」立止って、悠紀子さんは、時計を見るとこういった。時間は八時ちょっと過ぎ、既に遅いが、そんな事はどんなでもええ——。

ナンバの千日前グランドで、エドガー・アラン・ポーの「アッシャー家の惨劇」と

「五人の札つき娘」をやっている——。

「惨劇」は終わっていて、小輩と彼女は、空いた二階の後部に並んで席をとる。

——素っ裸にされて肉体を強奪された、ユーズの女五人——おお、どぎついコマーション。シルバーナ・マンガノの坊主頭——。サデイズムの極致だ。ジャンヌモローの散ぎりの頭に、痛々しい強烈なエロチシズムが流れる。

「非道いね——」小輩はそっと悠紀子さんの手を握る——、冷たい掌——。

映画館を出てブラブラと歩く。

「私、帰り難いわ——」

「どうして？」

「だって、きつと兄さん今夜帰らないでしょ。私独りで帰るとお義姉さんヒステリーにきまっているもの。だから明日、会社へ電話して、一緒に帰れば、私がついていたと思って何とかとりつくるるんだけど——。麻雀とか、友達のこととか……」

「今夜泊っていい？」

「……………」

「構わない？」

彼女はそっと、可愛いうなじをコックリさせた。

正に、小輩の胸は張り裂けそうである。この感激——。願ってもないチャンス。

十九歳の悠紀子さんの何と大胆なる事よ。酒場で、チビリ、又チビリとなめたワインが乙女を大胆にさせたのか——。

話はラブ・ロマンスではない、一足飛びに行こう。その夜、勿論——この言葉は断言する——何もなかった。据膳喰わぬは男の恥ですって？ トンでもない。小輩は据膳よりも、もっともつと美味しい、緊縛料理を御馳走して貰う予約をとったのである。げに情なや、その夜の突発的な偶然にぶつかって、小輩は、カメラもアクセサリーも何一つ準備していなかった。

何か身を投げ出してでもいたかのように見えた悠紀子さんが、無疵で朝を迎えたので、小輩を絶大に信頼したらしい。

小輩は恥づかし乍ら、齒の浮く様な美辞を夜っぴて並べた。

「何て、貴女は素晴らしんだろう。実に得難い鑑賞用女性だ——。有馬稲子だって、穴があつたら入りたいに違いない」

「たった一度でいい、貴女のこの、若さに溢れた肉体を鑑賞出来たら、おそらく僕は全財産を投げ出しても惜しくはないだろう」

「僕は、貴女のこの汚れない、乙女の肌に、犇々と縛しめの美しさを表現して見たい。悲壮美の芸術。僕は今迄、どれ程それに憧れたであらう。貴女ならそれにピッタリかも知れない。いや、貴女をおいて、緊縛美を表現出来る女性は、恐らく誰もいないだろう」

何、いつてやがる——、トンデもない大阪野郎だ——と怒る勿れ。この夜の小輩は、実に真剣、且つ涙ぐましく努力を払って、彼女を口説いていたのだから——。忘れては困る。小輩も男中の男——。情事の愉しさを知らぬでもない。それをすべて犠牲にしての口説きなのであるから、何が何でも、彼女にOKをとらねばならない。誰しもが口にする。

「考えとくわ」では困るし、「おHね」では更々何おかいわんやである。

幸いにも、げに幸いにも彼女は遂に首をた

てに振った。しかも……

「これから、今、お括りになるの——」

と、嫋々たる眼差しで、婉に小輩をチラッと流し目ににらんで笑って見せた。

「いや、日を改めて……」

「私、デパートの化粧品売場のレヂをしているの——。月曜日なら都合がいいけど……」

「じゃあ、次の月曜日ね——」

チンチンチンのお月様、この娘がいい夢を見て、静かに眠りのつきますように——。

小輩は、彼女の肩に優しく手をのせて、そっとその部屋を出た。いきりに逸り立つ心





を、コラッ、この次この次と、叱りつけて、冷めたく狭い一室で、夜具を頭まで蔽った。

○

彼女が、有馬稲子そっくりだと云ったって、誰も本当にはないだろう。だから、先ず

以て写真を見て戴きたい。小輩愛用の緊縛用の縄は、既に数々のモデル諸嬢に於ておなじみの、だんだらの柔かいものであるから、写真が如実に証明するように、嘘を云って見たって始まらない。

つまり、約束の日、約束の時間、約束の場所、悠紀子さんは五分の遅刻もなく、ちゃんと現われたのである。現われる瞬間まで、危惧と不安と焦燥とに、身の置き処もなき程に悩まされ、さいなまれていた小輩は、彼女の顔を見るに及んで、忽ちにして、明朗、潤捷、ワクワク、ゾクゾクとのぼせ上って、彼女のスラックスの軽装に、魂を天外にとぼし、タクシーを駆って、淀川河畔の銀橋ほとりのGホテルに夢中で辿りついた。

冷房のよくきいた白浜の間で、私達は相对した。奇妙な沈黙——。台風前のあの不気味さである。

「じゃあ、始めましょうか——」

小輩は、やがてのこと、恐る恐る切り出した。

「ええ——」軽く受け流すと、彼女は、まるで心得た如く、衣桁の傍らで、サラサラと臆面もなく洋服を脱ぎはじめた。

水色の、おろし立ての透き通るようなパン

ティ一枚きりになって、心持、頬を染めると「これも脱ぎますの——」

と囁きかけた。勿論脱いで欲しいは山々であるが、そこはぐっと虚勢を張って——、「ええ、まあ、どちらでも——」と云わざるを得ない。

陶磁の肌は乙女の香ぐわしも甘い薫りをのせて、つやつやと張切り、ぽってりとふくらみを帯びた乳房は、これはもう眼の毒の外の何ものでもない。

「思い切って、とりますわ——」

悠紀子さんは、さも思い切ったように、水色のパンティを自発的にとった。

私は努めて眼を外らし、慌ただしくローライコードに三脚をはめ、二五〇W電球を三ヶ両側からつけて、早速立って貰った。

何でもないヌードを五六枚。これはお互いの心を落ちつけるためだ。

おもむろに小輩は愛用の縄をとり出した。

彼女は覚悟したように、躊躇くまると、静かに眼を閉じた。その両手をとって後に廻す。両手を後で組んだ儘、彼女はじっとしている。輪になった縄が彼女の首にはまる。それを胸に廻して、後手を縛り、背中へ吊り上げて、再び胸に廻し、ぐるりと振って腹から腰へ

眼を閉じた儘、彼女はされるが儘になっている。三枚——四枚——。ついで彼女のネックチーフで猿轡をはめる——。

立った姿で、縄をつぎ足すと、股縛り。

次いで、両股を括った二本の縄尻を用いて両脚をそれぞれ縛る——。この写真は都合で、ここに発表出来ないのは、本当に残念である。「あのう、少し手首が痛いのですけど……」

彼女はまるで、あやまるように小輩に訴えた。そう云えば、最初縛ったきりで、随分の時間の間、一度も縄をといっていない——。

「御免々々」小輩は慌てて一度縄をといてやる。彼女は神妙に、遠慮し勝ちに、縄跡のついた手首をそっとこすっていた。

冷房装置のよくきいた部屋だと云うのに、小輩は汗だくになって、漸やくブローニー一本を撮り終えた。

「少し、休ませて戴いて構いません——」

「どうぞどうぞ」

私はホテル備付の寝衣を彼女にそっと放り投げた。半身を蔽って、無言で彼女はじっとカメラを凝視している。

襖一枚奥は、アベックホテルらしい、鏡の寝室の間である。

映評

山本富士子の『白子屋駒子』

東山映史

最近の傑作は、大映の『白子屋駒子』であらう。原作が舟橋聖一だけに、艶麗なタッチの作品で、その中にエログロの要素も十分にある。山本富士子のお駒が不義密通夫殺しの大罪で、小林勝彦の忠八と一緒にハダカ馬に荒縄でしばられて町中を引き回される。

美しさゆえに悲運になく駒子の一生を描く、このあまりにも残酷なラスト・シーンは、山本富士子の美しさによって更に一段と印象的である。

いまは未来での恋に生きようとする駒子と忠八は、背中合せにハダカ馬に乗せられ処刑場の小塚ヶ原に向う。やけつくような太陽の中を山本富士子は痛々しく柔肌を荒縄でギッチリしばりあげられている。首には、水晶のジュズをかけて痛々しい。ファースト・シーンに主人と不義密通した女中が、やはり引き回しにあう。これは青色の囚衣の男女で、これが伏線となっている。

かつての溝口健二監督の『近松物語』の引き回しシーンを思い出す。香川京子のお

さん、長谷川一夫の茂兵衛、これも前に引き回しシーンがあった。この男女のハリツケ・シーンが、幻想で見せられたが、ショックキングだった。

山本富士子は直木三十五原作の『踊る行状記』でしごきでしばりあげられた姿が美しかった。また、『銭形平次捕物控』の女目明しお品で吊り下げられた。短い時間だったが……。

最近、第二東映の作品に見るべきものがある。『次郎長血笑記』で、近衛十四郎の長兵衛と雪代敬子の女房お金が阪東好太郎の下田の久六にはかられて河原へ縛られて引き出される。四重五重にがっちり縛られてる。そして、次郎長をどこへ逃がしたとゴウモンにあう。

河原の上に坐らされ、なぐられ最後はモモに刀をつき立てられる。近衛の苦もんの表情もうまいものだ。雪代もつき飛ばされ顔をふみつけられたり、さんざんな目にあう。彼女も女賊や女スリで縛られ、引き立てられた。唇をキュッと噛み痛々しそう

四時過ぎには帰らねばならないと云う彼女に、小輩は追われる思いで、襖を開け、鏡の間にカメラを据えた。

再び、緊縛は始まった。

彼女の両手を後に縛り、背中から太腿にかけて、ぐっと押えておいて縄をかける。豊かな乳房が圧迫されてハミ出しそうである。そして首飾りをかけて顔を心持ち振じまげる。次いで両足も揃えて縛り、猿轡をして、観念しきった表情をパチリパチリ。

何て云う、いじらしさ、あどけなさであろう。この熟し切らぬ青い果実は、小輩を信頼し切って、なすが儘になっているではないか——。後に廻って縛られてうっすらと白く、色の変って来た両手を軽くさすってやると、そっと左手の中指に、ルビーの指輪を差し込んだ。小輩の心よりのプレゼントなのだ。

縄を解くと、放心した様に、彼女は暫らくその儘の姿勢でじっとしていた。ゆるゆると両手を伸ばし、そこに紅く輝やく指輪を発見するとパッと頬を染め、眼を輝やかせた。

「素晴らしわ、私に下さるの？」
「勿論だとも。それにこれはお小遣」

そう云って、小輩は三枚の千円札を小さくたたんでそっと握らせたが、これは突っ返さ

だった。これが東映最後の作品となったのは惜しい。

秋の大作、吉川英治の『宮本武蔵』が錦之助の武蔵で三作として映画化される。錦之助の武蔵が沢庵和尚のために大木に吊り下げられる。東宝のときは三船敏郎でショッキングなシーンだった。錦ちゃんには一寸つらいだろう。

久方ぶりに長谷川裕見子が武蔵の姉お吟で出て武蔵の人質として縛られる。彼女の死にまつた。

「もう、今日はこれ位にして止そうね」
いつもなら、堪能するまで、次々と写す小輩にとって、これは珍らしい事である。それでも二時間足らずは経過していたらうか。それよりも小輩は、この愛らしき妖精と、ゆっくり夕飯をたべ、心ブラをして見たかった。或いは、妙な予感が小輩を急ぎ立てたのかも知れない——。

連れ立って私達はGホテルを出た。それから半時間後——、このGホテルが全焼するとは、神ならぬ身の露知るところではなかった。

翌朝の新聞で小輩はGホテルが火事で全焼した記事を読んで、慄然とした。もう一時間

縛りシーンも美しい。

これに対して大映の『大菩薩峠』では、雷蔵の机竜之助に、すったもんだの山本富士子がお浜をおりお松をやる。お松はカルタ会でハダカにされる。それでお浜は中村玉緒がやる。近頃演技力のついてきた玉緒のお浜は楽しみだが、水車小屋の縛りとなれば、やはり富士子の方がいたただけるだろうと残念だ。

もあのホテルにいたらどうなったことか——
悠紀子さんとはその後と云っても、あれからたった半月余りだが、逢っていない。これからどう発展して行くか——。彼女は恐らく、小輩が茲に彼女の写真を発表した事を知らないであろう。それは小輩も考えたが——が、余りにも汚れを知らぬ、この素晴らしい鑑賞用女性に値すべき彼女の緊縛を、独り蔵っておくのは勿体ない気がしたので、敢えて、本誌に発表した。

「月影のナポリ」の唄をきく度に、小輩の胸は痛み、彼女を憶い出す。

チンチチンチンのお月様、何卒、彼女に幸わせを垂れ給え——。

(おわり)

被虐の白い花

赤川道郎

四馬孝・画

被虐の果

翌日の昼すぎになって、ようやく深い眠りから目覚めた榎子は、いつから側にいたのか、

「目が覚めたか、昨夜は御苦労だったな」

と、待っていたような倉三の顔が覗き込んだので、ぎょっとした。身にまとっているのは、ふんわりと掛けられた垢じみた毛布だけで、後は昨夜のままなのに気がついて、今更ながら、あわてて身をちぢめると顔を倉三の方へ向けた。

「寝ている中に変なこと、しなかったでしょうね」

「いい加減に信用しろよ、第一、お前はくらげのようになってたじやねえか、誰が手だしなんかするもんか」

榎子はダニのような倉三の視線を横を向いてそらすと、

「だったら、出て行って。一人にして下さい」

「いいとも、お前があんまり目を覚さねえんで、心配になって見に來ただけなんだ。まだ昼すぎだ。食事をじきに運ばせるから、それでも喰ってゆっくり休んでてくれ。時間になったら知らせるよ。それから俺達は此の向いに居るから、用が出来たら呼ぶんだな。じゃ今夜もしっかり頼むぜ」

倉三はあっさり言ったが、榎子はまだ石のように黙りこくっている。

「ほら、これがあったら落ち着くだろう」

と部屋の鍵らしいものを榎子の上に投げ出すと、自信たっぷりな後姿を見せて出て行った。ぺっと唾でも吐きかけてやりたい其の姿

がドアの向うに見えなくなると、痛む身体に毛布を巻きつけてベッドから下り、一番に錠をおろした榎子は、それで、ようやくほっとした表情でベッドへ戻った。

昨日剝がれた自分の衣裳が小さなサイドテーブルの上に、きちんと置かれてあるのを見つけると、飛びつくようにしてそれを着けると、やっと人心地がついたようにベッドのへりに腰をおろした。昨夜の責苦とそれを又、数時間後に再び味わなければならぬ恐怖が、落ちついてみれば一度に押し寄せてきて、榎子は呆然となった。

自分が今何を考えてよいのか、その判断もつかない無茶苦茶に困乱した感情の裡で、榎子はただ刻んでゆく時間の経過だけを、はっきりと意識していた。

倉三から受けなければならぬ責苦も、又恋しい史郎の元へ帰れるのも、一つにかかって時間の経過が解決してくれるのだ。一時も早く進んでくれと願ってみたり、このままじっと凍りついてくれなにかと思ったり、徒らに千々に乱れる心に懊悩を繰り返していた。そこへ、倉三の手先である繁次が顔を出した。物を言うのも嫌な相手ではあったが、今の彼女にとっては身近かな人間であった。

「お客は、昨日と同じ人なの？」

「いいや、そりやあ又違いますよ」

「そう、でも、私は、きのうと同じようにやらされるのね？」

「大体同じと思いますがね、なにせ一切は兄貴がやるんですから、少しは変わるかも知れませんよ」

「そうなの……」

榎子は新たな不安に襲われた。しかし、感慨にふける暇もなく、迎えにきた繁次に追われて昨日の部屋へ入れられた。先に待ち構え

ていた倉三に木馬に跨がされるまでは、昨夜と全く同じだった。ただ榎子が昨夜のように気を失わずに数回余けいに繁次の鞭を受けてからおろされたのと、各々の役柄が一寸変えられていて、今夜の榎子は何か秘密結社のような一つの団体を裏切り、逃げようとして、その団員に捕えられた女のように仕立てられていた。

しかし、そんな事は、榎子にとって、どうでもよくて、次に約束されている筈の蠟地獄と、それが終って倉三の手から解放される時を思つて、健気に気をとり直した時、この陰惨な悦虐劇の進行は、榎子にとって戦慄すべき意外な方向に進んでいった。

改めて後手にねじ上げられ十字に組まされた両手に、がっちりと手錠を嵌められ、首には頑丈な幅の広い犬の首輪を取りつけられた榎子は、「立てっ」と犬のように命令された。首輪についた革の紐を握った倉三に向いあうと、倉三は全く不気味な光沢をもったその紐を榎子の脇にくぐらせて、首輪の後についている別の鎖に通すと、ぐいと、それが榎子の身体に十分喰い込む手応えがあるまで引きしぼった。

「さあ歩け、同志の前で裁判にかけてやるんだ」

榎子の今まで気がつかなかった鏡のない部分にある小さな出口から、大勢の客の前に追い出したのである。

余った革紐で倉三に、ぴしぴしと背中を打たれながら、やっと小さな出口をくぐり抜けたものの、その自分めがけて一斉に集ってきた客達を目の前にして、うずくまったまま立ち上らない榎子を、後から出てきた倉三は、

「何をしてやる。さて立て」

強引に首輪を掴んで引き出し、ぐいぐいと客の方へ押し出した。

そして、すでに前からその台のまわりを取り囲んでいる客達に対して得意気に喋り出した。

「同志諸君、御承知のように、此の女が憎むべき裏切者であります。かずかずのスパイ行為をはたらき、それが私達にようやく探知されそうになるのを知ると、いち早く逃亡を計ったのであります。幸い、これなる一同志の働きによりまして……」

うしろに神妙に控えている繁次の方をふりかえりながら、

「……ごらんのように逮捕することが出来たのでありますが、そうでなければ危く我が団体は一挙に潰滅するところでありました。まことに八つ裂きにしても、尚あきたりない女であります。此のような裏切者を私の部下から出しました事を、同志諸君に対して深くお詫び致しますと共に、只今御覧頂きましたように、私としましては、思う限りの刑罰を加ってやったのでありますが、とても、それだけでは同志諸君に申訳が立ったとは、いささかも思っておりません」

そこで、倉三は思い入れよろしく一渡り客を眺め廻してから、

「此の上は、同志諸君の思いのままに、此の女を血祭にあげ、我々の団結を一層強固にしたいと思うのであります」



自分達の意のままに責め辱かしめることが出来るのを知った客達の間には異様なざわめきが湧き上った。柎子を見つめる視線が一層鋭く光り、ぱちぱちとさかんな拍子が起った。倉三は満足気にまんべんなく会釈をくりかえしながら、

「それにつきましては規律を第一に重んじる我が団のたてまえとして、一応裁判を開き、この裏切者をどう処分するかを決定して頂きたいと存じます」

それでは、と倉三の合図によって出てきた数人のボーイが繁次を手伝って客達のテーブルをコの字型に並べ変えた。柎子はその中央の台に立たされ、倉三に縄尻をとられた。

「あらゆる責具は、このように取り揃えてあります。どのような刑罰でも結構ですから、この女に加えてやりたいと思いつかれた方はどしどし発言して下さい」

流石に息をのんで聞いていた客達から、ただちに発言はなくて暫し不気味な沈黙がその場に流れた。柎子は今発せられるであろう発言を恐れて胸を早鐘のように打たせていた。そして、その息づまるような沈黙が一秒でも長くありますようにと祈った。

もしも、あの多数の客の思いつくままの責苦をあまさず受けなければならぬとしたら……と考えると、いても立ってもいられない、いらだたしい気持だった。

咄嗟に客の間から具体的な案が急に出ないと見た倉三は、間をもたすために柎子を客達のテーブルの上に追い上げた。

「そら、お前の処分をきめて頂くまで、そこで踊りでも踊ってお慰めしろ」

猿まわしのように首輪につながった革紐をひっぱって、柎子にさ



さまざまなポーズを強いた。それを見た男達は、ようやくざわめき出して誰からともなくいろいろな注文が口々にとび出してきた。

「おい、そいつの足を俺にひねらせろ」

「こちらへも連れてこい、酒を飲ましてやるんだ」

榎子は客達の間を右往左往させられた。そしてその度に、テーブルのグラスや酒ビンを派手にころがして倉三に打たれ、革紐を思いきり絞られてうめいた。一たびそうになると、客達は大胆になって争って自分のテーブルへ榎子を連れて来さそうとした。そして、いつの間にか榎子は倉三の手を離れて鎖をつけたまま飼主の手をはなれた犬のように、コの字型の客のテーブルの上を、あちらこちらと引っばりまわされた。

ある客からウイスキーを瓶のまま無理に飲まされた時だった、激しくむせてその客の顔から胸へかけて一面のウイスキーのしぶきを散ってしまった。一瞬呆然としてうずくまってしまった榎子の様子を眺めた倉三は、待ってましたとばかり駆けよった。

「さあ、早く拭いてさしあげろ」

繁次には、せわしくその客の世話を命じ、自分は榎子の髪をわしづかみにして顔を引き起し、その客の前に正座させた。

「なんて太いことをしやがる。裏切者のお前が、こうやって同志の前で罪のつぐないをさせて頂くだけでも有難いのに、わざわざ下さった酒を吐きかけるとは何事だ。この方が許してやるとおっしゃってても、この俺が承知出来ん、あとで思いきり仕置をしてやるから覚悟しろ、さあ、先ず失礼した同志にお詫びしろ」

そう言われても萎縮しきってしまった榎子は咄嗟には、それらしい言葉も出ず、髪をつかまれた不自由な身体で、ただ、おろおろす

るばかりであった。

「なにをぐずぐずしてやがる。こうやってお詫びするんだッ」

テーブルへこつんこつんと三度額を打ちつけられた上、つかんだ髪をねじ上げられて、再びウイスキーの罎の口を押し込まれた。

「さあ、改めてお酒を頂戴するんだ。全部飲むんだぞ」

ぐいと仰向かせた榎子の口へ、まだたっぷり残っている罎のウイスキーを一気に流し込もうとしたが、飲める筈もなく大半は口からあふれさせてしまった。

「ようし、どこまでも、さからうつもりだな」

唸るように言った倉三は、「繁次、漏斗を持ってこい」と命じるなり、自分は榎子の脇へとびあがり、仰向けに突倒した榎子の身体を、まるで飴でも細工するように無惨に折り曲げ、両足を頭の上に着けさせ、同じように押しつけた膝の間にその顔を挟ませると、その恰好のまま、膝と足をテーブルと一緒に縛りつけた。

一体どうするつもりなのかと、一同がかたずをのんで見入る中に仁王立ちとなった倉三は繁次の持ってきた漏斗を、丁度卵を立てたような榎子の口へ押し込むと、「さあ、腹の裂けるまで、たっぷりと飲ませてやるからな」と言うなり、一本のビールをとって無難作に注ぎ込んだ。ビールが終ると、罎の残ったウイスキーが漏斗へ流された。

灼けつくような胸から腹へかけての熱さを意識しながらも、榎子は自分の膝の間から客の腕時計を盗み見していた。錯乱した榎子の頭にも、それが約束の十一時には、あと四十分前に迫っているのを知った。

無惨にもウイスキーは一滴余さず注ぎ込まれて、身体中がかっ

かっとなえてきた。頭を下にしているので、余計に苦しく、客の顔がぐるぐるとまわり出した。

客の顔と腕時計とが交互に現われて消え、そして、——あと二十分——小さな腕時計の指針が、目の前に救いの手を差し伸べてくれている。歓喜が全身を走ったかと思うと、氣丈夫な榎子も、いつしか顔を紅潮させたまま、四肢の感覚を失っていった。

繁次とボーイがテーブルごと、榎子を運び去ってしまおうと、今の今まで夢心地でその場の雰囲気酔っていた客達は、はっと正気にかえって、煙草に火をつけると、進行係であり今夜の立役者である倉三の発言を待った。

「さて、この会合も、いよいよ大詰に近づいたわけですが、あの女には、先刻の判決でも言いましたように、最後の刑罰を加えて終りにしたいと思います」

倉三の言葉で新たな興味をそらされた客達は、それを待つ間の丁度幕間のような時間を楽しみながら、改めて酒を酌みかわすのであった。

それから、どの位の時間が経ったであろうか、再び榎子はテーブルに載せられたまま客たちの前へ運び出された。縄は解かれていたが意識があるのか、ないのか、目をかすかに見ひらいたままじっとしている榎子を見て、倉三は急にこの女を自分のものにしておきたい氣持が強く湧き上った。客達の注視の裡に立ち上った倉三は、流石にこれから自分のやろうとしている事に、ためらいに似たものを覚えて、まといつくような客の視線をわずらわしく思った。

——けっ、これはなア、お前さん達には、大サーピスのおまけなんだぞ——

心の中で客の男達を軽蔑しながら、およそこの男には有りようもない良心との戦いがあったのだが、すぐ、そのあとから——何にを兄貴らしくもない——と、自分のためらいをあざ笑っているような繁次の視線を感じると、榎子の傍に、まるで魔除けのように置かれてあった道具を一思いにとりあげた。

そして、ただただ史郎との楽しい生活を続けたいばかりに、敢えてこの責苦に身をゆだねた榎子の一切の希望を、みじん打砕く暴挙にとりかかった。

この時、かすかに取り戻していた意識の裡で、まず甦ってきた先程の屈辱に目も開けられぬ思いをしていた榎子は、テーブルの上で今自分が何をされようとしているかを知ると、頭を上げて一杯に見開いた目を足元の倉三に向けて絶叫した。

「止めて止めてっ、それだけは止して下さい。あッ、お父さん、止めて——」

お父さんと言われて、さすがの倉三も一瞬たじろぎ、客達までが、ぎょっとしたようであったが、事面倒と素早く側に立ち寄った繁次が、客に出させたハンカチをぎゅうぎゅうその口に押し込んで、その上から革紐をぐるぐる巻に口もつぶれそうにかましてしまった。今はもうマナ板の魚のようにビクビクと身体をびくつかせながら、テーブルの上に押えつけられた榎子の白い肌の上へ銀色に鋭く光った針が突き立てられていった。

苦痛にうめく榎子の眼からは、大粒の涙がつつうと頬をつたった。繁次の左手には滴るばかりに墨汁を含ませた綿が握られていた。

いつ何処で覚えたのか巧みに道具を使って、白い統のような肌に妖しい図柄が描かれていった。

丁度その頃、一方の史郎は、榎子との約束通り、十一時過ぎた頃から、四条河原町角の高島屋の前に立っていた。

昨夜に劣らぬ大変な人出で、人の波は一向に減る様子もなかった。見渡すかぎり、人又人の渦だった。そして、その大半は仲睦まじいアベックが占めていた。そのどれもが、さも楽しそうに寄り添って人波にもまれ、押し合いながら人の渦の中へ溶け込んでいった。

そんな人波の中から、ぽっかりと浮かび上って、史郎の方へ向ってくる筈の榎子の姿は一向に現われなかった。しかし、まさか、そのことが榎子との別離につながっていくようななどは、史郎にとっては知る由もなく、彼は只「あざみ」が年末で忙しすぎて榎子の手が抜けないものとはばかり思い込んでいた。

こうして、いらいらしながら待っている筈の自分をしきりと気にせかれながら、みすみす忙しいのに帰してくれと言ひ出しかねている榎子の姿を目に浮かべていた。

しかし、その史郎も真向いの三越の電気時計が十二時三十分を示そうとする頃になると、身にしみ込んでくる寒さと共に、すっかり待ちくたびれてしまった。

——榎子も榎子だ、いくら義理のある店だといっても、いい加減に切り上げてくれればいいではないか。よし、絶対に来てくれるなどは言っていないが迎えに行こう。榎子を相手にさっさと一杯飲んで引き上げてやればよい——。

そう考え直した史郎は、タクシーを拾って「あざみ」へと急がせた。

焼けつくような咽喉のかわきに史郎が目をさましたのは、翌日の昼前になってからだ。オーバーも脱がずに蛙のように畳に俯伏した身体は、そのままそこに凍りついたようになっている、烈しい宿醉に頭をあげるのも大儀だった。

「水、水、榎子、水をくれ」

言ってしまったから、あつとばかりに昨夜以来の悪夢のような事態を思い起した。

畳から引きはがすようにして上げた顔で、あたりを見廻して自分の家であることを確めた彼は、まだ昨夜の事が信じられぬまま再び「榎子、榎子」と悲痛な大声をあげたが、それはただ、がらんとした家中に徒らに響きわたるのみで、夢ではなかったのだと、彼は思い知らされた。

—— いったい、どうなったのだ——。

よろよると起きあがって、たたらを踏むようにして台所へ出た彼は、水道の蛇口にかぶりついた。身体中につきとおるような水の冷さに朦朧としていた意識が次第に鮮明になるにつれて、がっくりと頭を抱えて、その場にかがみ込んだ史郎は、まざまざと昨夜の出来事を思い出していた。



久しぶりに会った「あざみ」のマダムはかなり酔っていて、とろんとした目になっていた。それでもマダムの方から史郎を見とめて「まあ、頼野さん、よう来てくれはりましたなあ、ほんまにお久しぶりで。お一人ですかいな、なんで榎子は人も御一緒に来てくれはらしまへんの」

史郎は、のこのこと迎えに来た自分が、からかわれているのだと思っ、むっとしたまま、その言葉を黙殺すると榎子の姿を求めた

のだが、人手が足りない為にマダムがわざわざ榎子に手伝ってくれと頼みに来た筈なのに、女給は以前にも増していて、肝心の榎子の姿は見当らなかった。

もしや入れ違いにでも、とあわてて「マダム、榎子は？」と聞いた史郎の真剣な表情にマダムはぼかんとした顔を返した。

「どうぞ、しやはったんですか、私が榎子はんを知りますかいな」
「どうやら、それが冗談でも、からかわれているのでもない」と知った時、史郎は足元の大地がゆらめくのを覚えた。

驚く客を尻目にマダムを奥へ連れ込んだ彼は、一昨夜榎子から聞いた話をそのまま伝えた。「まあ」とマダムはあきれて言った。

「人手が足りないどころか、この通り余る程いてくれますし、第一私が世話をして、ちゃんとした奥さんにおさまってくれてはる榎子はんは手伝うて貰うなんて、誰が言いますかいな」

暗に榎子の浮気の口実にでも使われたのではないかと腹さえ立たうであった。

耳の端にわあーんとばかりに虫の大群が押し寄せてきたような混乱におちいった史郎は、それに謝する事も、それでもマダムが気づかって何かと問いかけてくれるのにも、返事が出来なかった。

——いったい榎子はどこへ行ったのか——

正体の掴めぬ不安にタクシーを拾うのも、もどかしく、もしや入れ違いに帰ってはいないかと戻ってはみたが、それは益々不安を募らせに過ぎなかった。いたたまれなくなって、再びさまよい出た街で、どこでどれだけ飲んだことやら……。

——とに角、会社へ欠勤届を出して、手をつくして探すのだ。事

によれば警察へ搜索願を出してでも——

とりとめもなく乱れる頭で、ようやく、それだけの事をまとめ、電話を借りにと玄関へ出た彼は、そこに挿込まれてある一通の封筒に気がついた。もどかしく手にとった封筒は、差出人の署名こそなかったが、頼野史郎様と、漢字を習い覚えただけの小学生のように、ぎこちないが、一劃一劃正確なペン書は一目で榎子のものと知れた。

『あなた、お許し下さい。昨夜からの私の不始末にどのような御心配を掛け、あなたがどのようなイライラとした時間をお過ごしになりましたことやら、それを思いますと、私の胸は張りさけそうです。それなのに、まだそのうえ、このような手紙を差し上げねばなりませんとは……』

昨夜たぶん、いいえ確かに、あざみへ行かれましたでしょう。そして私の嘘が、お許し下さい。あなたがあざみへおいでになっている頃、私は地獄の責苦を受けておりました。でも、それは決して誰からどうされたか、いったものではありません。私がこのこと、その場へ出向いていったのです。賢明なあなたは、もう私が誰の元へ出向いかお察しの事と思いますが、あなた、どうぞ、これだけは信じて下さいませ、私は、あなたを裏切って出ていったものではありません。あの私にまつわる絆が、一旦ああして、あなたに力づけて頂きましたものの、まだまだ此の先、私をおびやかすようなのを、きっぱりと断ちきり、いつまでも、あなたのおそばに置いて頂こうと、自分で言うのも、おこがましくはありますが、健気な決心で出向いたのです。そして私は、二度とあなたにお目にかかれない身体にされてしまいました。

あなたとの幸せだった毎日、なかでも四日前の、あの楽しかった一夜を思いますと、胸が一杯です。私はあのような夜をいつまでも続けられますようにとして、かえって、あなたに二度とお逢いできない女になってしまいました。いっそ、死のうとも思いましたが、そうすれば、あなたにも、お見せしたくない恥さらしな身体を、大勢の人目に曝した上、その私があなたの妻であることが知れぬ筈がないと思いますと、それもようしない自分が残念です。

あなた、柁子は此の手紙を書きますのに、生れて初めて心の痛みを味わいました。でも、差し上げませんことには、此の上際限のない心配をおかけして、あなたをお苦しめする事になりますので、どうやらここまで書き続けてまいりましたが、もうペンが進みません。かんじんな事が少しも書けませんでしたが、柁子はあなたとお別れするのです。お許し下さい。勘忍して下さい。あなたのお心の中をお察しますと、胸もつぶれる思いです。

私達は、今から旅に出ます。あなた、どうぞ幸せにお暮し下さいませ、私のことを忘れて下さいませ。

柁子

史郎様

血を吐く思いの柁子の文面は、かえって史郎を絶望の果から、ふるいたたせたようであった。あなた、あなた、と呼びかける拙い文面からにじみ出るような自分に対する柁子の愛がある限り、たとえ何年かかろうとも、彼女を探し出そうと史郎は決心したのだった。

白いロープ

二人の永い回想は、終点へあと二分に迫って地下道へ走り込んだ

電車の轟音と、「間もなく四条大宮、京都終点でございます」と告げる車掌のマイクに破られた。

柁子が二度と踏むまいと思っていた京都の街は、はや、とっぷりと暮れていて、ネオンがきらめき、クリスマスを祝う人出にこたがえしていた。

「疲れていなかったら、少し歩いて買物をしようか」

「……………」柁子は黙って史郎の脇に手を差し伸べた。

しっかりと腕を組んだ二人は、人の波に押し流されながら、再びめぐってきた幸せを胸いっぱい満喫した。やがて寄り添って四条河原町あたりまできた二人は、ケーキや思い出多いウイスキーや、一年ぶりで二人きりの夜を迎えるさまざまな買物をした。

史郎はタクシーを停めた。「北白川まで」一本の帯のようになつたタクシーのヘッドライトの光茫は河原通りを貫いていた。河原町三条から東に折れて三条大橋をすぎると、大津電車と併行して一路、車は東へと走り、柁子のなつかしい家は近づいてきた。二人はじっと身体を寄せあいながら黙って車外を眺めていたが、

「ああ、ちょっと停めてくれ」

突然そういつて車を停めた史郎は、柁子をそのままに残して、一軒の荒物屋へ立ち寄った。買物をすませて車へ戻った史郎は、けげんな顔の柁子に、

「かんじんな買物を忘れていたよ」

「なんでしたの？」

「君にあげるクリスマスの贈物さ」

「まあ！」

そっと引き寄せた柁子の手にポケットに入れて隠すようにしてい

復刊第19号	復刊第18号	復刊第17号	復刊第16号	復刊第15号	復刊第14号	復刊第13号	復刊第12号	復刊第11号	復刊第10号	復刊第9号	復刊第8号	復刊第7号	復刊第6号	復刊第5号	復刊第4号	復刊第3号	復刊第2号	復刊第1号
(昭和32年10月号)	(昭和32年9月号)	(昭和32年8月号)	(昭和32年7月号)	(昭和32年6月号)	(昭和32年4月号)	(昭和32年3月号)	(昭和32年2月号)	(昭和32年1月号)	(昭和31年12月号)	(昭和31年10月号)	(昭和31年9月号)	(昭和31年8月号)	(昭和31年7月号)	(昭和31年6月号)	(昭和31年5月号)	(昭和31年4月号)	(昭和30年11月号)	(昭和30年10月号)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売切V	定価二百円	△売切V	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売切V	△売切V	定価二百円	△売切V	△売切V	△売切V	△売切V

復刊第41号	復刊第40号	復刊第39号	復刊第38号	復刊第37号	復刊第36号	復刊第35号	復刊第34号	復刊第33号	復刊第32号	復刊第31号	復刊第30号	復刊第29号	復刊第28号	復刊第27号	復刊第26号	復刊第25号	復刊第24号	復刊第23号	復刊第22号	復刊第21号	復刊第20号
(昭和34年4月号)	(昭和34年3月号)	(昭和34年2月号)	(悦虚小説と緊縛写真)	(昭和34年1月号)	(昭和33年12月号)	(増刊号青い廃院)	(昭和33年11月号)	(昭和33年10月号)	(昭和33年9月号)	(昭和33年8月号)	(サド特集号)	(昭和33年7月号)	(昭和33年6月号)	(昭和33年5月号)	(昭和33年4月号)	(昭和33年3月号)	(昭和33年2月号)	(臨時増刊号)	(昭和33年1月号)	(昭和32年12月号)	(昭和32年11月号)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価三百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売却V	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	△売却V	定価二百円	定価二百円	定価二百円

[illegible]

「あら？」

柩子の白い顔がみるみる赤くなつて史郎の胸に押しつけられた。

顔と同じように桜色に染ったかわいい耳もとで囁やいた。

「氣にいった？」

胸がぐいぐい押されて返事があつた。史郎は何かを言いかけて止

めた。——去年の今夜も同じ贈物を買って待っていたんだよ——と。

若い運転手が仲のよい二人に、あてられたように催促した。

〔後記〕

その頃、倉三は繁次を加えた旅回りのストリップ劇団を率いて中国路を津山へ乗り込んでいた。彼は、もう二度と京都にだけは訪れようとは思わないだろう。それは、せめても梶子に対する彼の良心であつた。

(おわり)

告白小説

一 盜 二 婢 三 妾

西 田 仁

一 盜 二 婢 三 妾

(一)

国子が米山氏の許に後妻にはいつてからも、二人の関係は暫くつづいた。

米山氏自身はしがない初老の保険の外交員だが、父親の遺したかなり宏大な土地家屋を故郷に持っている上に、住んでいる家は自分のもので小金も結構貯めている様子だった。大衆酒場に勤めながら、いつの間にか三十近くなってしまった国子には、だから勿体ないような良縁だと云えた。

「難を云えば、あの子だけれど、あれもその

うち精薄施設かなにかに入れさせてしまうつもりだから」

と国子は云い、此の際、私とは別れてしまいたい口振りだったが、若い私は怖いものなしの無鉄砲さで国子に迫り、米山氏の目を盗んでは秘密の逢瀬を重ねていた。

あの子というのは、米山氏とその先妻とのあいだにできた敏夫のことで、この春ですでに十六歳になっており、五尺六寸もある体格は立派な大人並みだが、なんの因果かこれが白痴だ。先天的なものか、或は幼い頃に脳膜炎でも患ったのか、それは国子も訊かない

し、米山氏のほうでも、この子のことには触れたがらないので分らないが、一日じゅうテレビをかけっぱなしにして、その前で膝をかかえ、驚くほど多量のビスケットを消費しながら、おとなしく日を送っている。キョちゃんという女中がひとり付いていたが、これは国子が来てから暇を取った。はたちぐらいのその女中は、いよいよ米山家を去るに当り、国子に向ってこう云ったという。

——兎に角、厄介な坊やですよ。ご不浄へはひとりで行くんですけれど、お風呂にはいるたって洗うことができないんですもの。

まあ、それじゃ洗ってやるの？

——そうなの。床屋へもいかれないから、三カ月に一度ぐらい髪を入れてやるんだけれど、厭がってとても暴れるんですよ。

——あらいやだ。

これは一日も早く、どこかの病院へ入れてしまおうか、あるいは専門の女中を雇わなければ堪らないと国子は思った。すると、その気持を見抜いたようにキヨ子は、にやりとして、

——構わないから、最初に思い切って厳しくしつけるのよ。どうせ口で云ったって通じないんだから、腕ずくで押えつけちゃうほかないわ。

——だって、あんな大きな子を——。

と国子が云うと、

——ダイジョービ。

キヨ子は肩をすくめてクスリと笑い、

——大きななりしててくせに、からいくじがないの。すったおして馬乗りしちゃうのよ。

——まさか。女がそんなこと——。

あまりのことに国子は顔を赧らめたが、キヨ子は頓着なく、

——へっちゃらよ。誰も見てないときならご本人はどうされたって、バカでろくろく口もきけないんだし、旦那はちっとも構いつけ

ないんですもの。

こんな事を平気で喋るキヨ子の、無邪気とも云うべきまるい顔を、その時国子はまじまじと見直したそうだが。

しかし、この憐れな継子の存在が、かえって私たちの秘密の交渉を頻繁にさせたのは皮肉だった。

私と国子——。二人はみずからの欲望を燃え立たせるための手段のように、この白痴の少年を虐げることやがて覚えた。手を下すのは勿論国子であった。キヨ子の言葉は嘘ではなかった。女にとってこれは確かに異常な快感を伴う征服的な行為であるらしかった。

そして——。

嗜虐の悦楽と姦通のスリルのなかで、どす黒い陶酔にのたうつ私たちの間柄は、もはや正常の愛欲にあきたらなくなった男女の生理に足をとられ、底なしの泥沼に落ち込んでいったのである。

(二)

最初——それは夏のはじめのある日のことだった。昼すこし過ぎた頃、私は米山家に国子を訪ねた。

その日は、米山氏が故郷の町に持っている

家作の集金に出かける日で、帰宅がかならず夜になることを知っていたのだ。外交員という職業柄、彼はあちこち廻り歩くので、普段の日だといつ突然帰宅するかも知れないという不安があった。外で会うにしても、そんな事情から何処で彼の目に触れるかわからず、この点ではまったく始末のわるいご亭主であった。が、私とても人妻となった女の尻を追いつめたい男だ。そんなことにいちいち氣を使っていたのでは体がもたない。私が心配に耐えられないような様子を示すのは、それが相手の国子の心に影を落すのを楽しむためにほかならない。国子は不安によって良心に目覚め、せつかく手に入れた幸福を失うことを恐れ、やがて私に向っておずおずと別れてくれと云い出すのだ。その嘆願をせせら笑いに一蹴するとき、これまでに経験したことのない妖しい嗜虐的な昂ぶりが私の心身を燃え上らせる。過去何十回となく知ってきた国子の肉体だが、これが米山氏との結婚を境にして、生れ変わったような新鮮さで私を咬るのである。

私は泥棒猫のように足を忍ばせて庭先へ廻り、ちょうど縁側に出ていた国子の前に黙ったままで親指を立てた。新居を訪れたのは、

これが二度目だった。

「出かけたわ」

国子は簡単にそう答えた。——いつもの通

り——とその声音は語っていた。

「あ、待ってよ」

こうなれば一刻も早く、靴脱ぐ間さえもどかしく駆け上った私に国子は身を立て直して制した。その視線は私の後方の、あらぬ彼方に流れている。

「どうしたんだ？」

何気なくその先を追って振り返った私は、思わず、

「あッ」

と声を立てた。

隣室との境の唐紙が、いつの間にか五寸程押し開かれ、その敷居際にのっそりと立ちはだかった敏夫が、放心したような目に暗い輝やきを浮べてこちらを見下しているのだった。五尺六寸の長身が、鴨居に届きそうにひどく大きく見えた。

「ちくしょう、バカめ！」

長く堰かれていた私の血



が、この無礼極まりない闖入者に向って爆発した。いきなり拳を固めて立ち上ろうとするのを見て、

「乱暴しないで！」

と国子が云った。そして、

「いい子だから、あっちへ行ってらっしゃいね」

と優しく敏夫の肩を抱いて隣の部屋へ連れてゆき、テレビのスイッチをいれたらしく、

およそこの場に不似合な明るいテーマソングが流れ出した。そして米山家はまた長閑な午後の一刻を取り戻した。

私はあらためて国子と向きあった。そして今の騒ぎで萎えかけていた気持ちに、ふたたび活力が漲ったとき、またまた敏夫の足音がした。私は完全にあたまへ来た。

「ぶんなぐってやる」

国子はいきり立つ私を制しながら、もういちど、同じようにして隣の部屋へ連れていった。

答

暫くして戻って来た国子は、咽喉をぜいぜい鳴らしながら私の前に座ったのだが――。

同じことはまた繰り返された。途端にこんどは国子が私を押しつけて立ち上った。きりりと糸切歯が鳴った。たとえ口ではなんといおうと、一再ならず邪魔されて、先刻から立ち騒いでいた血潮がいったん逆流して、かあとなつたらしく、

「なんべん云ったらわかる

の！」

打って変った激しい語気で敏夫を面罵すると、跳び上るような勢で五尺六寸の大男に襲いかかり、両手に髪の毛を掴んで手許へ引き寄せた。

「優しくすればつけ上って、この、うすばか！」

お里の知れる口汚なさで罵しりながら、力任せに引き倒そうとする。髪が根こそぎ引き抜かれるような痛さだろうが、しかし敏夫は悲鳴ひとつ挙げず、蒼白い両手を空に泳がせながら、あちこちとだらしなく引き廻されるばかり。それは、突如自分に降りかかって来た暴力に対処する方法さえ知らない白痴の悲しさだった。若い継母

の為すがままに手玉にとられている。国子にしても、こういう場合、男ならば、一撃のもとに張り倒すか投げ飛ばすかするのだが、その術を知らない女のやり方は執拗だった。六畳間いっぱい引き摺りまわして、とうとう畳の上に四つん這いにさせてしまうと、少し



は気が晴れたらしく、

「ああ、ほんとに嫌んなっちゃうね、あっちへいっといで」

といいざま、足を挙げて敏夫の腰を、ぽんと蹴飛ばした。敏夫は他愛なく前へのめり、そのままでしくしく泣き出した。

「うるせえなア、黙らせろ」

私は自分でも驚くほど冷然な声を出した。

「あっちへお行き！」

国子が顎をしゃくった。敏夫は顔を挙げて二人の方を見た。その顔は涙と汗でぐっしよりと濡れていたが、あの放心したような瞳は、さっきと同じように虚ろに見開かれたまま、なんの感情もあらわしていない。

「しっしっ」

と私は云い、ゲラゲラと笑った。

「まるで犬を追うみたいね」
国子も亦淫らな笑い声を立てた。私はさすがに敏夫の面前で、かりにもその母親とい

われる女と戯れることはできなかった。

「あっちへ連れてけよ」
「また戻ってくるものおなじことよ。なんにも分らないんだから平気だわ」

国子は大胆に云い放った。しかし私は女の手を振りほどいて立ち上ると、倒れている敏夫の襟髪を掴んで引き立てようとした。

「お待ちなさいよ。気短かねえ」

国子が面倒臭そうに身を起こして部屋の隅に在る衣桁から腰ひもを一本取ると、敏夫の傍にかがみ込んだ。

「こうしておけば安心でしょ」

矢庭に敏夫の腕を逆にとって背へ捻じ上げた。足をばたばたさせるのを、

「おとなしくするの、どうせ叶わないんだから」

と叱りつけ、その背中に片膝をのせて動けないようにすると、ぎりぎりとうしろ手に縛り上げてしまった。まるで赤子の手を捻じめるようなものだった。なる程これではキョちゃんという女中に、したい放題のことをされていたはずだと私は思った。膝下にうごめく獲物の苦悶を楽しむように、国子は暫くそのまま押さえつけていたが、やがてずるずると隣の部屋へ引き摺っていった。

それから一時間ちかく経ってから、私が、隣室の押入れに発見したものは、うしろ手に縛されたまま泣き寝入りに眠っている敏夫の姿であった。

(三)

それから三月と経たないうちに、めずらし

く、国子のほうから私の勤め先に電話して来た。別れたがっていた国子にして、こんなことは曾てなかったことである。私はさっそく米山家に出向いた。先日の集金が先方の都合でまとまらず、今日再びそれを取り立てに出掛けたのだと、国子は最初から私を茶の間に案内してそう言った。

茶の間は四畳半。壁際にテレビがある。その前には、まるで置物のように、長い脛をかかえてうずくまっている敏夫の姿があった。私はいっても振り向きもしない。

テレビはレビューの舞台中継であった。一列に並んだ踊り子たちの美しい姿態が、ロングの場面いっぱいに浮び、やがてそのなかの花形と思われる量感美人がアップになった。胸から腰、やがてその脚が映った。銀色に輝やくきしゃな靴が、豊満な肉体を支えてぎしぎしときしんでいる。軽ろやかなそのステップを見せるのが狙いのだろうが、見ように依って、それは極めてサジステイックな感覚に溢れていた。国子は敏夫に向って、

「あんた、わかるの？」

と声をかけた。敏夫は休みなしにビスケットを頬張り、あきることなく画面に見入っている。それをじっと見据えている国子の片頬

にふっと冷い微笑が浮んだ。もともとこの年になるまで大衆酒場で客の相手をしていた女だから、国子は決して美人ではない。むしろ色の白いだけが取柄のような顔立ちだったが、しかし口許から顎へかけては、幼い頃の面影をそのままに残したようなあどけなさがあったのだ。その唯一の魅力である口許に、冷たい笑みが漂ったとき、国子の顔全体が、はっとする程美しく見えた。

私の手を、そっと外す。国子は静かに敏夫の傍に立った。両膝の上に顎を乗せ、脛をかかえた恰好の敏夫を、暫くそうして見おろしていたが、

「返事をしないなら、こうしてやる」

というが早いか大きく足を挙げると敏夫の首筋のあたりを跨ぎ、腿のあいだにそのあたまを挟みつけるようにして臀をおろした。テレビの画像に向ってさし伸べていた顎の上に、不意になんの予告もなく加えられたこの重圧のため、敏夫の顎は自分の両膝の合間にがっくりと深く落ち込んだ。国子の裾がまくれて、むき出しになった太腿の白さが、黒っぽい着物との鮮やかなコントラストで私の目を射た。邪魔になる袖を、男のように肩へたくし上げた国子は、両手で敏夫のあたまをさ

らに押えつけながら、突然、大声で笑い出した。

「おっほっほほ」

テレビの音楽を圧する甲高い笑い声。私は全身を狂おしく駆けめぐる疼きを、一瞬忘れ去って国子を見た。過去一年半にわたり、私の愛人だったこの女。若い私に女体の神秘を教え、また姦通の戦慄と快楽とを同時に覚らせた国子の肉体は、いま敏夫の首に跨って、その骨がひん曲るほどの重圧を加えている。

私の首を巻き、優しく背を抱いてくれた両の腕は、緊迫した張りを見せて敏夫のあたまをがっしりと押えつけている。人間の体の骨はこんなに軟く、まるでアクロバットのように曲るものかと思ったとき、流石の敏夫も痛さに耐えかねたのか、脛を抱いていた手をはらりと解いて畳についた。国子の足が、すかさずその手の甲を踏みつけた。そして、テレビの音楽に合わせて激しく体を上下させながら、「重いでしょう。もうガマンできないでしょう」

散々に苛められて、敏夫はもうグロッキーになっていた。国子は巧妙に敏夫の手足の自由を奪い、屈辱的な姿勢を強い、好い気になって責め抜いた揚句、漸くにして腰を上げ、

手の甲を踏み敷いていた足を左右に開いた。

「ちよっと緩めてやるわ、あんまり可哀想だから」

指先が痺れているのか、敏夫の手は畳に貼りついたままだったが、それでも徐々に首を挙げ、胡坐の膝を組み直そうとしたとき、再び継母の手がシャツの襟にかかった。

テレビは尚も挑発的な女体のうねりを映していた。しかしそれは、最初から煽情的な意図を以て演出されているのではないのだ。まだほとんど少女ともいえる、若い裸女の群だったが、私には彼女たちがブラウン管のむこうからこちらの様子を見透していて、国子の圧倒的な勝利を祝福するために手を振り足を踏み鳴らし、歓呼の声を挙げているように思われた。この少女たちが、若し国子やキヨ子の立場に置かれたら、やはり同じように敏夫のことを虐げるだろうと私は思った。しかし彼女たちならば、同じ行為をするにしても決して国子のような暗さを伴わず、単なるプレイとして、もっと朗らかにしかも手酷く、敏夫を苛めるのではないだろうか。

敏夫は俯向けにされ、長々と畳の上に伸びていた。上になった国子の着物の裾は、もう完全にはだけられ、きゅっと締められた一本

の帯がわずかにそれを国子の上体にまとわせているだけであった。敏夫はぐったりとして、身動きをする元氣さえないように見えた。ちよっと押えられただけでも、亀の子のように手足をばたつかせるよりほか能のない敏夫の体力だ。それがさっきから、首の骨の折れるほど痛めつけられている。背中の上にまともにのしかかった国子の重味を撥ね返すことなどとてもできはしないのだ。それを充分に知っている国子は、余裕たっぷりに笑いながら、

「キヨちゃんには、いつもこうされていたんでしょ」

と云った。

これは、私の想像もしていないイメージだった。成熟の途上に在るその女中のまだ青い身体が、風呂場の板敷の上に敏夫を押えつけ、ちよっどこの国子のように、いや若いだけに、誰も見ていない処ではもっと厳しい折檻をしたかも知れない。それを思うと、不意に悪寒のようなものが背筋を走った。

テレビのレビューは、もうフィナーレだった。舞台の中央にしつらえられた噴水の滴が、踊り狂う裸肌をしとどに濡らした。

このことがあってから、敏夫少年は二人の

あいだになくてはならない小道具になった。白痴とはいえ、彼はまさしく人間の男であり、おそらくその機能も備えていると思われるのに、言語障害で口もきけない。だから彼の前で、私と国子とがどんな痴話狂いを演じたとしても、それが米山氏に知られることは絶対にならないという安堵感が二人の行為に拍車をかけた。国子はつぎつぎに新しい手を考え出した。そして米山氏のいないときには、あのキヨちゃんという女中の真似をしているらしく、敏夫の頭髮はいつも綺麗に刈り込まれていた。しかし女中とい、のみ屋の女あがりとい、つねに人の機嫌をとって暮してきたこの二人が、敏夫を対象にして発散させた嗜虐の行動が果してどのようなものであったか、それは私には分らない。悲しいかなそれだけの想像力がない。私は自分の直接の見聞だけを、芸もなく書き綴っていくだけでである。



(四)

国子の考案した方法のなかで、もっとも刺戟的だったのは、敏夫に座敷の柱を抱かせ、その手首を紐で繋げてしまうことであつた。もとより敏夫にはその結び目を解きほぐすだけの知恵はない。柱を中心にしてぐるぐる廻

り、ときどき結ばれた紐に懸命に歯を当ててみたりする有様は、動物園の猿そっくりの恰好だった。そんな少年の姿を眺めるときの国子は異様に目を輝かせ、息を弾ませるのだった。何も知らない米山氏は、旧家である家郷の反対を押し切って国子の籍を入れた。それからというものは、私に対しても国子は打

て変って積極的になり、敏夫に対する折檻もひどくなつた。

「米山が別れるといつても、あたしただでは引き退らないわ」

妻の座にでんと坐ってしまったふてぶてしきで国子はうそぶき、米山氏の留守を狙っては私との逢瀬をかさねるのであった。

しかし、これも長くはつづかなかつた。秋風の立ち初め頃、米山家に意外な事件が起り、それが原因となって敏夫は国子の念願どおり、父親の郷里に近いある施設に収容された。国子から聞いたその夜

の有様を、次にかいつまんで記してみよう。

話はその夜、めずらしく米山氏が泥酔して帰宅するところからはじまる。酒場の女を女房にするくらいだから、米山氏ももとはいいける口だが、手堅い性格のせいかな平生あまり深酒はしなかった。が、そこはやはり酒のみのこと、年に一度や二度の脱線は止むを得ない。酔うとかならずしつこくなる傾向で、その夜も蒲団を敷く国子にからみかかった。

「止してよ」

国子は腹立ちまぎれに良人を突き放した。

「わあ」

強かに酔い痴れていた米山氏は、他愛なくどうと尻餅をついた。

「お蒲団敷くまで、そこでおとなしく待ってらっしゃい」

国子はほどけた兵児帯を拾うと、面白半分に、米山氏の体を柱にぐるぐる巻きにしてし



まったのだ。こう書くといかにも乱暴な細君のようだが、これに類する遊戯は、それまでも夫婦のあいだで屢々行われていたのだらうと私は思う。二人の結婚、国子の入籍のこと、その他、夫婦生活の微妙な処でも、常に国子が優位に立って事を運んでいた形跡がある。国子は安易な生活と、米山氏の財産とが目当てであり、米山氏のほうではそういう国子に参っていたのだ。こういう関係では、より深く相手に惚れたほうが負けである。私との

秘め事が比較的スムーズに行われたのも、こうした国子の隠然たる勢力のお蔭であったのかも知れない。

「なにをするんだ国子、ほどこいてくれ！」

柱を背負わされた米山氏が絶叫した。

これがいけなかった。

いつの間にか目を覚ましていた敏夫が、その声を聞きつけて、いきなり部屋へ踏む込むなり、

「わあッ」

とおめいて国子に躍りかかったのだ。不意を喰ってさすがの国子もこの時ばかりは敏夫にやられた。蒲団のへりに足をとられ、どっとばかりに仰向けさま、倒れた若い継母の胸の上に馬乗りになった敏夫は、黄色い歯をむき出して猿のような叫び声を挙げながら、精いっぱいの膂力を振りしぼって国子の咽喉を締め上げようとする。

驚いたのは縛られていた米山氏だ。あまりのことに酔いも醒め果てて、

「おい、敏夫、止せ！ 国子はやくこの帯を

「解け！」

と怒鳴って身悶えたが、とっさのことではどけはしない。国子は敏夫の死物狂いの攻撃に裾を乱してきゃあきゃあと云う。

「あたし、わざと大声出して暴れてやった。

ごらんの通りの間取りだから少しぐらい騒いだって近所へは聞えないのよ。バカを捻じ伏せるのはわけないけど、こっちは追い出す算段でしょう、足をばたばたさせて大芝居」

ここで国子はちよっと、意味ありげにやりとした。

そして、米山氏がいい加減怒鳴り疲れた頃を見計って、国子は下から腕を伸し逆に敏夫の咽喉を掴んで容赦もせずに締め上げた。もともと腕力では格段の差があるのだからこうされてはたまらない。たちまち敏夫は他愛なくがっくりして体勢が入れかわった。すかさず上になった国子は、米山氏の前も憚らず、敏夫の胸の上に馬乗りになると、両腕の付け根をしっかりと膝の下に引き据えてからこう云った。

「なんてことするの!? この子は」

この一言で敏夫の罪状が決定した。

「それで米山に膝詰談判。もう一日もガマンできない。この子を早く病院へでも入れてく

れなければ、あたし怖くてこの家にいられやしない。米山は、とにかく子供を離して、俺の帯を解けというのよ。だけどそうすればま

たうやむやになっちゃうでしょう。取り敢えず本人を田舎へ預けて、手続が済み次第入院させることになったのよ」

地上最高の美味なるもの

「マニアのノート」

とやま・かづひこ

綱うち

六月三十日木曜日。

この日、会社有志で綱うちに出かける。めずらしく、社長の寄贈で芸者衆も六人ほど同行。

一行二十人は、にぎやかに厩橋の船宿から千葉の海へ船出した。

午前十時というのに、船のなかにはビールと談笑で割れかえるようになった。

芸者衆の二、三は、会社の宴会で顔みしり。それだけに、とくべつ彼女たちは、このかづひこの親しさを感じるのだろうか。雑用の相談などを小声でしてよこすのだっ

た。

「ねーえ、クウさん」

面目ないが、クウさんとは、かづひこの名。なるべく会話をリアルにしりたいのでお耳ざわりの点は許して頂く。

「なに？」

こちらも、ソッと聞いてやる。

同行した小ふみという若い妓が腹痛で、おしもへゆきたいという。

こういうこともあるかと、船に乗り込むとスグ調べておいた。

和船ながら大型船で、機関室のむこう側には、ちゃんとトイレがあるのだ。

囲いもあり、落したものは下の槽のため

(五)

敏夫がいなくなると、私たちのあいだも疎遠になった。国子にしてみれば、私と共通の秘密である対象を失って不満足なのかも知れないが、私のほうにはべつの嫌悪感があつた。といえれば体裁がいいが、私のほうでも敏夫がいなくなったのでつまらなく、また国子の身体もそろそろ鼻について来たという感じであつた。

が、こうしてなんとなく国子と別れてしまつてからも、次の疑問は未だに私の胸の裡に蟠っている。

果してある夜、敏夫は父親が苛められていると感違いして国子に打ってかかったのか、又はいつもの自分の役割を父親が果しているので、ここでは一番間男——すなわち私の役を演じなければならぬと思つたのか、あるいは本当に若い継母にその男性が目醒めたのか——それは国子だけが知っていることだと思ふのだが、ついに国子はそれに触れなかつた。

その後、私は国子に逢っていない。

(完)

られ、差支えないところに船が行ったらソツと底板を開いて捨ててくるという。

だから

「よし、任しとけ！」

とばかり、人には知られるよう、小ふみの手をとって案内してやる。

二分……三分……五分。

時がたち、やがて扉があいて、小ふみねえさんがサッパリした表情で出てくる。

「おにいさん、助かったわ」

さりげなく、言う彼女。

船は大分、沖にでた。

やがて船頭が底板を抜きにくるだろう。

惜しい、何としても惜しい。

今なら、あのなかには、ヤブーのエサがたっぷりあるのに。かづひこは空しく指をくわえるのだった。

ヴェルサイユ宮殿

週刊文春七月廿五日号七十八頁。

連載読物は、芦原英子氏の「貴婦人は浣腸がお好き」というゴジックの題名がまず目を射る。

その一節、むかしパリの貴婦人の集まるヴェルサイユ宮殿にはトイレがなかった。

貴婦人たちは、尿意を催すと、綿を小さい布団の上にのせた小姓が、その綿を差出す。それを釣鐘型のスカートのの中に入れて用いた——。

という当時の風俗。

おまけに、固体のほうは、エチケットの上からもトイレを利用せず、必要に応じて浣腸することで調節したらしい。というエッセイである。

この文章のなかには、夜間、用を足すのには、ベッドの下でツボを用いたとか。マリー・アントワネット皇后も茂みの向うに消えて用を足したとか、それを後年、同地に旅した日本の作家、遠藤周作氏が記念にと、その土を持帰り、希望のかたには、皇后の尿もシミ込んであるであろう土を、一にぎり百円で分けるとか、ユーモラスになつていそうだ。

そのくわしいことは不明だが、この文章だけは、同好の方には一見の価値があると思う。ぜひ読んで下さることを、おすすめしておく。

連載小説

宇宙のどこかで

——「無期懲役囚」の手記より——

佐 治 麻 造

四 馬 孝 画

苦 役 (6)

五級囚になって喜んだのも束の間、一カ月経たない中に一挙に七級囚に降級されてしまいました。理由は水を飲んだからなのです。食物も水も一緒にしたドロドロの囚人食ばかり吸っていますと、水分の摂取量は先ず充分でも、精神的に水だけを飲みたいと云う欲望が強くて堪え難い程です。特に激しい苛酷な苦役から帰監してシャワーを浴びさせて貰う時には、この水を一口飲めたら、と思います。鼻から吸り込めば必ずむせて分ってしまいます。むせた場合は、直ちに電気鞭です。口にはガッチリと嵌口具を嵌められます

ので最初は諦めていましたが、慣れて来ますと、うまくやれば口を掩うた鉄片のゴムと頬との間から少しずつではありますが流し込めることに気が付き、矢も楯も堪らず看守の眼を掠めて早速、実行しました。チヨロチヨロと僅かずつ口中に流れ込む真水のうまさ、気が遠くなる程です。うまく行ったら喜んだのも束の間でした。監獄当局が此の様なことに気が付かぬ筈もなく、まんまと罠に落ちてしまいました。と云いますのは、シャワーの水には薬品が溶かしてあり、胃へ入って胃液と混りますと、早くて三十分、おそく共二時間後には全身に赤い発疹を生じ、痒くて堪らなくなるのです。勿論、体の表面を流れる分には何等、真水と変りない訳です。

さかずに二杯分位飲んだでしょうか。それで充分、薬は威力を発揮しました。夕食の中途位から体中、痒くて痒くて堪らなくなり、思わず身もだえしました。食事後、もはや堪え切れず床を転げ回ってがきます。後手錠がどんなに恨めしかったことか。看守は意味ありげに冷笑を浮べて、のたうち回る私を無慈悲に点呼迄放っておきました。

「お慈悲です。搔かせて下さいまし。お願いです。此の手錠を外して……ほんの少しの間でいいんです。……う、かゆい……」

点呼の時には少し治まっていた。

例の屈辱に満ちた言葉を大声でいった後、体中かゆく堪らない旨、哀訴致しました。

点呼後、曳き出され懲戒係へ引立てられ、居残っていた婦人職員の前でひれ伏します。未だ痒いので、ひっきりなしに体中を動かします。看守の低声の報告に頷いた婦人職員は、

「六十四号。じっと出来ないの？ お前、シャワーの水を飲んだね。重大な反則よ。只今から直ちに七級に降級だわ。なお、先刻、正坐の時間中も正坐せずにもがき回っていたわね。今夜、鉄砲手錠よ。馬鹿ね」

降級は即刻、行われます。婦人看守の手で、ああ、又あの腋鎖が締め付けられました。更に胸鎖が捲き付きます。両手を水平に伸ばして七級囚の戒具を施されていますと、悲しさ恐ろしさに嵌口具の中で男泣きに嗚咽しました。婦人看守は哀れむ様な目つきで見えますが、鎖を締付ける手は弛められません。鉄砲手錠にされ嵌口具を外されて水をコップ一杯飲ませられ、再びガッキと嵌口具を嵌められて監房へプチ込まれました。飲ませられコップの水はシャワー

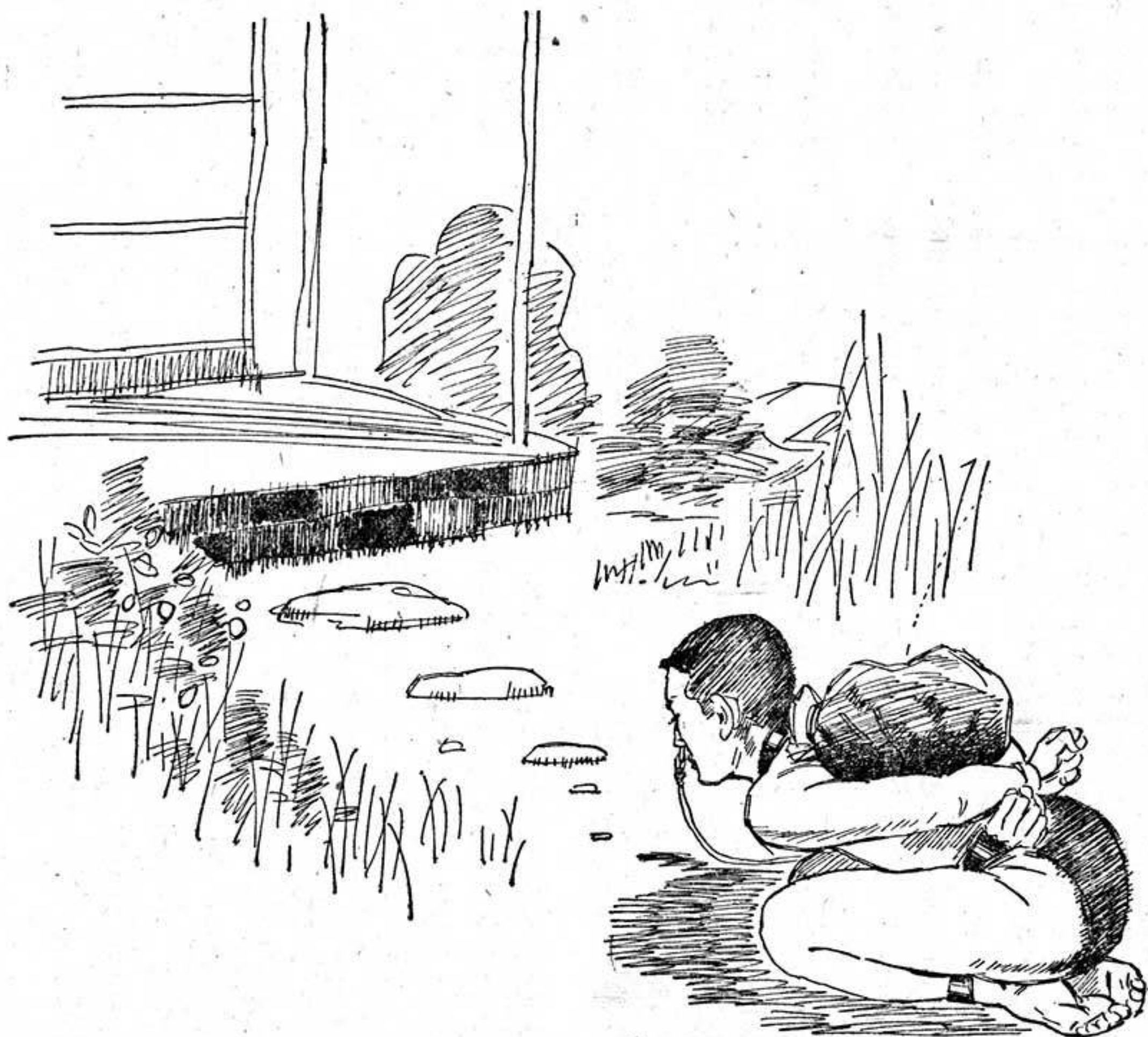
の水と同じです。今度はコップ一杯も飲んだのですから堪りません。二十分経たない中に気も狂わんばかりの痒さ、全身の皮膚が残る限なく猛烈に痒いのです。もがけば鉄砲手錠の激痛です。全くこんな残酷な懲戒は初めてで、それこそ一睡もせず、のたうちもがき、床や壁に体をこすりつけ、体中バラバラになる様な痛みを味わい、発狂するばかりの苦しみを満喫しました。死んだ方が増したと迄思い、シャワーの水なんか啜った出来心が激しく悔まれてなりません。眼もかすみ、のたうつ力も失った頃、朝の点呼です。嵌口具を外され、未だかなりむず痒い全身を我慢してひれ伏し、点呼を受けようとしたが咽喉がひきつった様で声が出ません。「どうした？ 咽喉が乾いて声が出ねえのなら『水』を吞ませてやろうか？ ハハハハ」

かすれた声を振り絞って、やっと点呼の申告を終えます。これから又、苛酷な苦役だと思えますと、本当に死んでしまいたいのでした。しかし流石に苦役は免役になり、一日中、監房内で正坐して過します。これからは房内でも嵌口具を嵌められるのです。やっと辛苦して五級に昇級したのに又、七級から出直しか、と腋鎖、胸鎖の苦痛を今更の様に感じ、泣けてしまいました。

気候はだんだん春めいて来ますが、懲役囚の私には、明けても暮れても辛い苦しい日夜の連続です。静かな夜等、風向きによって独身看守のアパートからラジオ、テレビの音楽等が微かに聞えて来たりしますと、本当に胸をかきむしられる様でした。五級囚の時には、早く房内前手錠になりたいものだと思います、六級囚の時には、せめて腋鎖だけでも取って貰えたら、と考えましたが、七級囚の現在では腋鎖か胸鎖か、せめて一方でも外して貰えたら、どんなに嬉し

いだらうかと思えます。まだ下には八級囚があります。全く同じ懲役囚でも上には上が、下には下があるものだと思いました。

七級に降級されて二カ月も経ったでしょうか。足錠を第四種にされ南島へ曳かれました。七級以下には原則として獄外苦役は課さない様でしたが、此時はどうした加減か七級囚の男ばかり八名、二人の婦人看守に連れられ、股間の連鎖をガチャつかせて南島の海水浴場へ曳かれました。課された苦役は海岸に沿って小さな仮電柱を建てる仕事でした。翌々日から春の海岸カーニバル祭があるのです。二名宛、鼻鎖でつながれた私達は四名宛、分れて砂地に木のシャベルで穴を掘り、四米程の角柱を埋めて立てて行きます。私も筋骨は逞ましい方ですが、他の懲役囚達も何れも筋肉隆々たる若い男ばかりでした。次第に陽は高くなり、海辺には思い思いの水着姿の人々が溢れて来ます。激しい労働と日光の直射に汗がふき出ます。私と同じ鎖につながれている九二号囚の全身に汗が玉となって流れ、首環、胸鎖、腰枷で流れをせき止められた汗は、枷の周りを回ってポタポタと滴り落ちていました。第四種足錠で締上げられた両足は、力を入れて踏張る度に激痛を感じ、思わず手を止めてしまいます。すると監視している婦人看守の手の革鞭が、容赦なく所構わず飛んで来るのです。面白そうに眺めている水着姿の社会の人々の嘲けりと辱しめを受けて、筋骨逞ましい男が四



名、小柄な色白の婦人看守の鞭の下で、おののき乍ら追い使われている姿は全く哀れなものです。手錠足錠のために、どれだけ仕事やり難いか分りません。二十糎以上は離れない両手のため、みすみす二重三重の手間が要るのです。社会の人々の傍らで苦役するのですから、懲役囚として当然のいましめなのですが、本当に情けなくなりしました。衆人監視の中で我と我が両手を後手錠にし、犬の様に這いつくばって囚人食を吸ります。

「さ、早く早く、まだ残りの方が多いわよ」

せき立てられ、必死になって夕方迄苦役を続けた私達は、北島に着いた船から立上る力もなくハイポンの注射を射たれて、足をガクさせ乍ら、やっと監房へ帰りました。

典獄夫人

三カ月程で再び六級囚にして貰いました。

夏も近づいた頃、典獄が更迭して、全囚人は一晩中、南島の官舎の方角にひれ伏して、新しい典獄に刑の執行方を御願ひするようお願いされました。典獄が変わっても、私達に与えられる苦しみと辱かしめは勿論、変わりません。

二カ月で五級になりました。腋鎖を外された時の嬉しさ。懲役囚でない此の喜びは分りません。五級になって十日目辺りの或朝、戒護課長の所へ曳き出されました。生殺与奪の権を握られた囚われの身の悲しさに、震えおののいて机の前にひれ伏します。

「六十四号。本日から典獄官舎の使役を受ける様に。五級としては破格の光栄だぞ。お前の学歴が少しは役に立つたらしいな。落度があれば特にきびしく懲戒する。その代り、御氣に入る様にすれば、

昇級も早いぞ。云々とくが、お前の刑の執行担当者は使役中は典獄の奥様に委任される恰好だからな。そのつもりで神妙に勤めろ。いな」

頭を刈られシャワーを浴び、鼻環と首環以外の全部の戒具を新品に嵌め替え、新しい腋鎖、胸鎖、革鞭、捕縄、第一種手錠、足錠、第四種手錠、足錠、そして鉄鎖等の入った、ずっしりと重い袋を背負わされ獄門を出ます。典獄の奥様ってどんな人だろうか。どんな人に使役されようと仕様のない身乍ら、やさしい人ならいいな、等と考え乍ら、船を下り、ダラダラ坂をクネクネと曲って上り、深い木立に囲まれた大邸宅の如き典獄官舎に着きました。腰を蹴り飛ばされ、膝で歩いて裏口から入ります。広い庭を背にテラスの傍らにひれ伏しました。看守は中に入ったきりで長い間、待たされます。首枷の音響器が鳴る様にされていますので身動きできません。重い袋を背に一時間近く地面に額をすり付けたままでした。衣ずれの音がして誰か頭上のテラスに立ちました。何とも云えない香料の匂いがしました。典獄夫人に相違ありません。看守は庭に出て、背中を押しつつけていた重い戒具袋を傍らに下ろすと、背中に鞭が鳴ります。「正坐。面を奥様に見て頂け」

粹な和服で冷然と見下している奥様の顔を勇氣を揮って仰ぎ見ました。

「アッ」

嵌口具の中で驚愕の叫びが思わず出ました。

涼しげな白っぽい明石縮みを粹に着こなし、素足にスリッパをはいてスツナリと立った典獄夫人は、何と私が最初の結婚の時に捨てた女ではありませんか。驚愕からさめますと、今度は何とも言えな

い恥かしさで穴があれば入り度い程、又叶うことなら走り出したい程です。捨てた女の足下に浅間しい懲役囚姿をさらすみじめさ。顔が真赤になり、深く深くうなだれてしまいました。

「ホホホホ、やっぱり人並に少しは恥かしいらしいわね。お前、私をまだ覚えていたの？ 私ね、お前が懲役に行っちゃったってことは知ってたけど、此処にいるとは気が付かなかったのよ。思いついて調べさせたら分ったのでね。まあ、お前も一応、教育はあるしさ、頭も悪い方じゃない様だし、試しに使役してあげようと思った訳よ。フフ、けど懲役姿、中々よく似合うわ。ちょっと立ってごらん」

鎖を鳴らして立上がり、グルッと回って哀れな恰好を見せました。情けなくて体中が赤くなります。嵌口具を外され、再びひれ伏して挨拶をさせられました。

「……横領、強盗、暴行、及び傷害致死罪、終身懲役囚第六十四号、五級囚。本日より、御当家で使役させて頂きます。典獄様の奥様に刑を執行して頂けるとは、本当に身に余る光栄でございます。ごらんの様に、虫けら同然の身でございます。何卒御存分に使役して頂きとうございます」

「フン。中々神妙ね。いいかい、以前は以前。今のお前は懲役囚、私は典獄様の夫人よ。手加減は一切しないで、びしびし取扱うからね。その代り一生懸命やれば私の気持一つで、どんどん昇級もできるんだよ」

そこへ一名の囚人の鼻繩を曳いて一人の娘が出て来ました。二級囚らしく赤いシャツとパンツ、鼻環と首環だけです。

「あ、お加代さん、これ新しい使役囚よ。六十四号、この方が女中のお加代さんだよ。これから御世話になる人よ」

女中の 加代の足下で屈辱に満ちた言葉を繰返し、頭をボンと蹴られました。

「九十六号。御苦勞だったね。今日から監獄へお帰り。あと三年程なんだから辛抱するのよ。ア、それからね、一級にして上げるからね」

「ありがとうございます。奥様。いろいろと御氣に召さないことばかりで本当に申訳ありません。御恩は決して忘れません」

私の前任囚？ 九十六号は地面にひれ伏して礼をいいました。

「じゃ、手をお出し。最後だから私が嵌めてあげよう」

差出した両手に手錠が嵌められ、監守に引渡された九十六号は、戒具の入った袋を背に監獄へ引かれて帰ります。

「じゃ、看守さん。お苦勞さん」

「奥様。失礼致します。御馳走様でした。先刻も申上げた様に、今度は五級ですから其の点、よく御氣を付けて……」

見送った女中は、

「奥様。五級囚って初めてですけど、大丈夫ですかしら？」

「アラ、何がなの？ 何級だって同じ懲役囚よ。さ、一鞭くれてやりましょう」

夫人の手で六つ、女中の手で七つばかり革鞭が当てられ、一鞭毎に礼を云わされ、最後に顔に唾を吐きかけられました。自由を奪われた悲しさがこみ上げて来て、言葉も詰り勝ちです。何と云う運命のいたずらでしょうか。捨てた女が典獄夫人で、其の下で使役される懲役囚の身になるうとは。捕われてから此の方、革鞭位は幾度となく、それこそ日常茶飯事の様に加えられ、痛い乍らも精神的にはそれ程苦痛を感じなくなっていました。捨てた女に鞭打たれ辱か

しめられる口惜しさ、痛さ、恥かしさ、そしてみじめな情けなさに涙が出て来て、男泣きに嗚咽してしまいました。

「泣いたって仕方ないじゃないの。ア、そうそう、一〇三号を連れて来てよ。会わせといた方がいいわ」

家の中から縁側伝いに一名の女囚が出て来ました。一般囚です。黄色いシャツとパンツの五十歳位の女囚が夫人の側で正座して合掌しました。

「一〇三号。これが今日からお前の相棒の六十四号よ。五級。これ、六十四号。一〇三号にあいさつして」

「一〇三号様。よろしく願います」

再び嵌口具、そして自由度この前手錠にされて早速、苦役です。

夫人は中へ引込んでしまい、お加代の意のままに次々とこき使われました。庭の掃除、芝生の手入れ、花島の世話、薪割りと、未だ二十そこそこの女中に、大の男が震えおのき乍ら顎で追い回されるのです。前の九十六号は、おそらく労役の時には手足は自由だったのでしょうが、私は重い手錠足錠です。中々氣に入る様に働けない悲しさ、経験のない女中の加代は考えれば判ることだと思ふのです。が、じれったそうに舌打ちして罵ります。

「何を又、ノロノロと愚図ついているの？ 奥様に申上げて懲戒して頂こうか」

其度に私は足下にびれ伏し、重い手錠の両手を合わせて体で哀願しては鞭と足蹴を受けるのでした。昼食の時には後手錠にされ、勝手口の前で正坐し、やがて与えられた囚人食をいとも哀れな姿で啜ります。

「これもお食べ」

雑炊の様なものが追加されました。それが犬の餌の残りだと気が付いた時の口惜しさ、悲しさ。夫人や女中の眼から見れば飼犬のシエーンよりもまだ下等の私ですから、当然のことだと悲しく我が心に云い聞かせ、諦めて又、啜るのでした。

夕方近くなり、テラスを丹念に磨き入念に庭に打水して典獄の帰るのを待ちます。やがて典獄が帰って来て風呂へ入った様子です。

「六十四号っ。ぬるいっておっしゃってられるじゃないの。何をサボってるの」

女中の力一杯の鞭を背に受けて思わず悲鳴を洩らし乍ら、あわてて燃しつけます。

勝手口で地面に正坐して、飼犬を含めて家中で最後に与えられる夕食を待っていますと、庭へ回る様に命じられました。テラスでは夫妻差向いでテーブルの料理を前にして、二人共さっぱりした浴衣姿、典獄は夫人のお酌でビールを飲んでいます。まだ四十には大分あるようです。懲役囚の私にとっては神様以上の存在です。鼻を地面にすり付け乍ら這って近く迄進み、ひれ伏しました。

「正坐しろ」

身を起して両手を胸で合掌します。

「一生懸命やるんだぞ。いいな。本当に運のいい奴だ。獄の苦役よりずっと楽なんだから、怠けたりすると承知せんぞ。お加代には絶対服従しろ。分ったか。退れ」

やっと夕食を啜った私は、お加代のいいつけで夕食の料理の余りを裏門の外にあるドラム缶迄捨てに行きます。殆んど手をつけてない美味しそうな料理の数々。残り物で、どうせ捨てるのなら喰べさせて貰えたらと思ひますが仕方ありません。嵌口具の中でよだれを

垂らし乍らドラム罐へ捨てます。この料理の残りは集められて化学処理を経て、囚人食となって私達懲役囚の口へ入る訳です。自ら後手錠にした私は女中に命じられ再び庭へ回り、テラスで語らっている奥様の足下にひれ伏しました。私の管理担当者である夫人に戒具の検査をして貰わねばなりません。口が利けませんので、ただじつと平伏を続ける外ありません。

「オヤ、六十四号かい。お立ち」

冷笑を含んだ眼で頭の前から足の先迄検査されます。

「後向いて」

典獄が、からかいます。

「お前、そんな尤もらしい顔して検査してるけど、こんな戒具は初めてなんだろ。せいぜい第一種の手錠位しか知らないのと違うかい」
「ああら、あんなこと。私だって典獄様の妻ですよーだ。九十六号だってびしびし懲戒したのよ。第四種だって知ってるわ」

「へーえ、それはそれは、感心だ」

「六十四号。じゃ今晚はね、特に早く休ませてあげる。檻へ入るのよ。後手錠のままでね。フッフ」

女中に曳かれて台所の隅を通過して地下へ下ります。一〇三号は台所の床を拭いていました。雑品倉庫の隣のガランとしたコンクリートの地下室の中に二個の鉄の檻が置いてあります。片隅のシャワーを浴びさせて貰い、濡れた体のままで鉄檻の一つへ入れられました。二米に三米位、高さは低く一米とちょっと位です。嵌口具を外され格子扉がガチャンと閉まり施錠されます。今迄毎日、繰返されたこと乍ら、新しい境遇に置かれて聞く鉄格子の音を唇を嚙んで聞きました。薄暗い天井の電燈を仰いで横になり、心を打ちひしがれ

た今日のことを思い返し、自分の運命をつくづくと呪いました。疲れ切った私は隣の檻へ女囚一〇三号が入ったのも気が付かず、翌朝女中の鞭を胸に受ける迄ぐっすり眠ってしまいました。

使役囚 (1)

私に課せられた苦役は家の外の仕事で、女囚一〇三号は家の中の雑役にこき使われます。自分の娘の様な女中に追い回される一〇三号は諦めてはいるものの、時々情けなさそうな表情をします。殊に買物籠を背負されて買物に出る時には必ず手錠を嵌められるのですが、其の時の悲しそうな顔は哀れな程です。

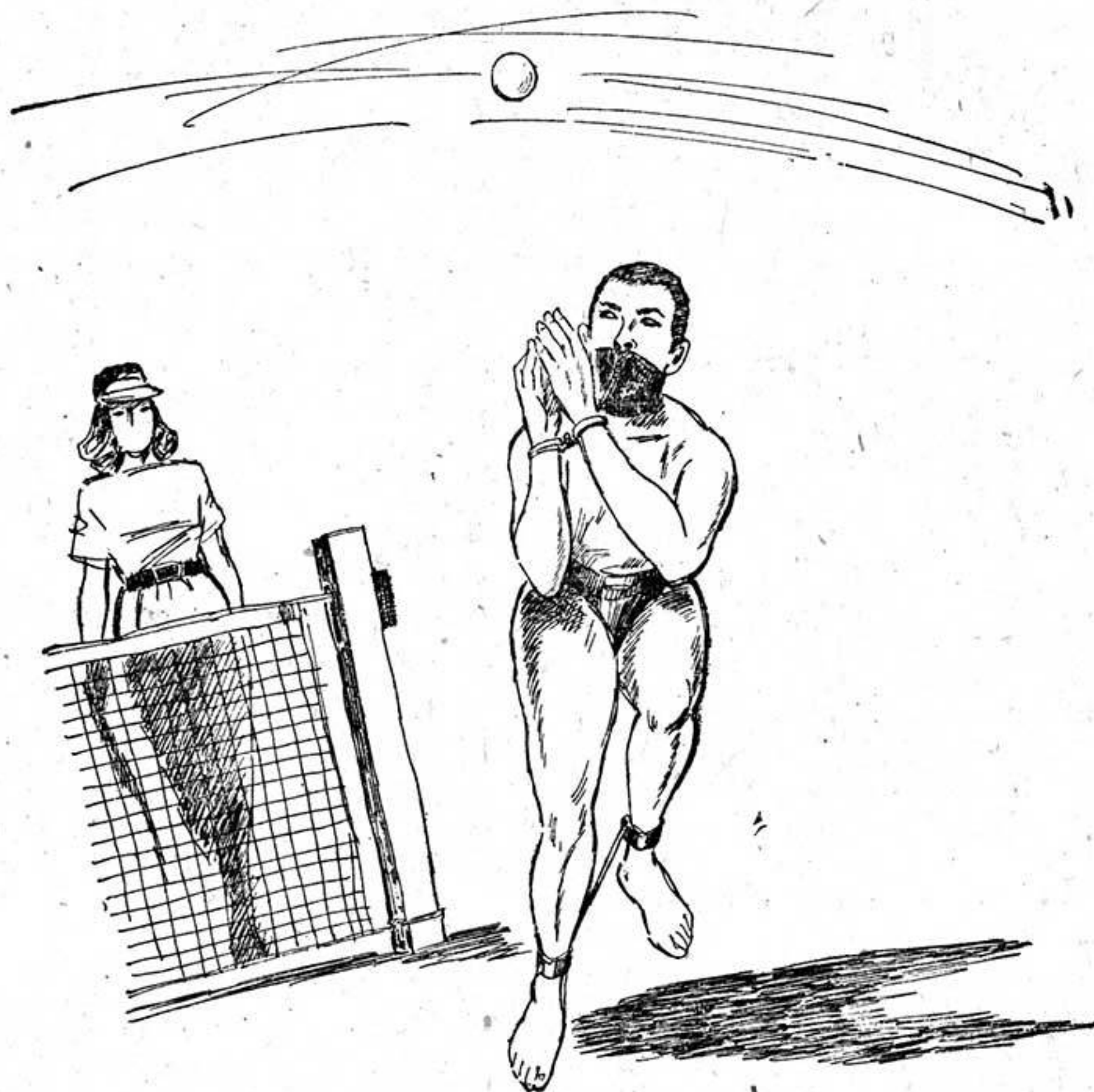
庭にはプールもあり、テニスコートの設備もあり、その手入は勿論、私の担当です。近所の夫人達とプールで戯れる典獄夫人の姿を見ますと、胸がかきむしられる様に切なくなります。又、テニスをする時には大抵、球拾いをやらされます。ミスしたボールを追って、足や腰の鎖をガチャガチャ鳴らして走り回る私に、ショートパンツの婦人達の嘲笑が浴びせられます。又、典獄夫妻がテラスで夕食をする際、風がなければ傍に正座して大きなうちわで風を送らねばなりません。苦役そのものは肉体的には成程、楽ですが、毎日々々、自分の分際と云うものを見せつけられ、思い知らされる精神的な苦しきは、監獄内では味ったことがない程のものでした。しかし、女囚一〇三号とは檻の格子越しに色々話しすることができました。対等と思われる人間と話し合う楽しさは監獄では味わえません。使役囚の特典です。

「私はね。殺人罪なのよ。あなたは？」

二晩目に、一〇三号の方から話掛けました。

「良人の浮気の相手を殺しちゃったの。カッとしたもので、自首したからでしょ、二十二年で済んだわ。私が三十二の時のことよ。あ

ら喚いても、もう駄目なのよ。分ってるでしょ。この鼻環をつけられたらお終いなものよ。自分を苦しめるだけだから、詰らないこと考



と三年足らずだわ。長い長い苦しみよねえ。あんた苦しい？ まだ一年とちょっとで、終身刑だって？ 同情するわ」

「こんな風な戒具、経験があるんですか？」

「あら、私だって初めは六級囚よ。四年目だったかしら、三級になって房内で前手錠にされた時は、ほんとに嬉しかったわ。今じゃ、外へ出る時、嵌められる前手錠が情けなくて仕様ないけど」

「早く三級になりたいなあ。そりゃそうと、何故、奴隷にして貰わなかったんですか？」

「そりゃ、もうなりたかったわ。だって、奴隷になれば刑期が半分になっちゃうもの。今頃はもう自由の身で落着いた暮しをしてる筈よ。しかしねえ。三級になれば誰でも奴隷になれる訳じゃないのよ。売却の予定価格以上で入札して呉れる者がなければねえ」

「そうなんですか」

「競売台に上らされた時は恥かしかったわ。けど結局、監獄へ逆戻り。三年程続けて歎願して競売台に上ったけど駄目だったのよ。その中、二級、一級と昇級して本当に楽になったし、諦めたわ」

「……あの……私、本当に無実の罪なんです。それを終身刑なんて……」

「シッ。聞かれたら大変よ。あんた、そんな事、いく

えるのはおよし」

「……それはもう……けど、捨てた女に使役されるなんて、あんまり情けなくて……」

「アラ、やっぱりそうなの。あんた五級でしょ。変だと思ってたら矢張りねえ。典獄の奥様がそうなの？　そうお。そりゃ少し残酷なめぐり合わせねえ。けど辛抱するのよ。どうすることも出来ないんだから。其の中、転勤になるわ。ともかく私達は人間じゃないんだから。諦めて、少しでも痛めつけられない様にした方が得よ。さ、ねましようよ。明日にこたえるわ」

使役 四 (2)

朝六時頃に女中のお加代に檻から引出され、今日一日の労役を頼み、嵌口具を嵌められ、両手を前でつなぎ合わせ、一日の労役が始まります。一〇三号は女中の身づくろいの手伝い、そして家の中の雑事に、私は庭の内外の清掃、溝掃除等を行います。八時ともなれば夫妻そろって部屋着のまま、庭内の散歩です。姿を見れば地面にひれ伏して通り過ぎるのを待ちます。気が向けば頭を蹴ったり、踏付けたりします。

「今日も、しっかり働くのよ」

睦じそうに腕を組んで散歩する二人を見ますと、我身のみじめさに、ともすれば涙が出てしまうのでした。典獄を送り出した後は夫人は退屈で仕方ありません。近所の部下の官舎へ遊びに行ったり、又、夫人連中を招いたり楽しく過します。

今日も五、六人の婦人達が来て談笑の後、昼食前の一刻をテニスに興じるようになりました。命じられてコート準備をします。

ショートパンツで真白い脚も露わな夫人が出て来ました。

「しっかり球拾いのよ。ぐずぐずすると承知しないから」

手に触れるボールを私の汚らわしい手で触れない様に、両手に軍手をつけます。

「今日はちょっと、おもしろい恰好をさせて上げようね」

小さな錠前で両手の鎖の中央と鼻環とが結ばれてしまいました。やがて始まったテニスのミスの度に右に左に足の鎖を鳴らして走り回り、鼻を地面につける様にしてボールを拾い、不自由極まる両手で、ゆるく投げ返します。鼻部手錠のため、見当違いの方へ転がしたりしますし、又、夫人達が受け損じることがありますが、大抵の人は私に拾わせます。哀れな恰好でボールを拾う私に嘲笑が浴びせられ諦めてはいるものの時々胸が煮えくり返る様でした。テニスに飽きた夫人達はテラスに戻って冷い飲物に咽喉を潤します。風がありませんのでうちわで風を送る私の全身に汗が流れ、乾き切った私の咽喉は一口の水を恋うて、皆の飲んでいる冷い飲物が欲しくて欲しくて堪りません。

「これ、欲しいの？　それっ」

一人の小肥りに肥えた婦人が、いきなり私の顔へ飲み残りのサイダーをぶっかけました。勿論、一滴たり共、口中に入る筈もなく、思わずあえぎ悶える私に、夫人の冷酷な言葉が下ります。

「さっき、もたもたした罰よ。鉄砲手錠にしてやろうね」

私は恨めしさで胸も一杯になり、全身で慈悲を乞いますが、許される筈ありません。

折柄、一〇三号がハススのコップを捧げて持って来て、おそろおそろ一同に配ります。盆を眼より下にして持って来たというので、

三つ四つ、平手打が頬に鳴り、一〇三号は合掌して必死に哀願し、漸く赦して貰った様でした。

「一〇三号、あれを鉄砲にしておやり」

器具と手錠の鍵を持って来た女囚一〇三号によって私は鉄砲手錠にされます。一〇三号を恨む筋合はありませんが、両手の枷を器具でグイグイと締め寄せられますと、同じ懲役囚の身なのにと、思つて恨めしく感じました。

「千枝子さん。これ、鉄砲手錠よ。あなた初めて見るんでしょ。何でもない様だけど苦しいらしいわ。ちょっと御自分でやってもらいなさいな」

千枝子奥様は苦しむ私を好奇の眼で眺め、立って私の後へ回つて見ようとしています。

「アラ、坐つてなさいよ。六十四号、後向いて」

「成程ねえ。うまく考えたものね。アラ、中々指が付かないわ。自分では……」

一〇三号が私に代つてうちわを握ります。

「ごめんね」

私の耳の所で小声で囁いて呉れました。夫人達は、もはや私には興味もなく、賑やかに談笑して、昼食を待っています。楽しそうな会食。激痛をじつと堪え忍んでいる私の前に、やっと囚人食が置かれ、嵌口具だけ外されました。

「お食べ」

女中に頭を小笑かれ、激痛をこらえて口を地上の食器に近づけます。うめき声を洩らし、中々吸れずにもがく哀れな私の姿に再び夫人達の冷笑が浴びせられました。苦しめられ、辱しめられるのが当

り前の懲役囚の身とは云え、余りだと思いました。吸り終えねば赦して貰えないのは分っていますので、死物狂いで、漸くのことで吸り終った私に、今度は男として最大の屈辱を与えられました。

午後は水着に着替えた夫人達のプール遊びです。楽しそうな笑顔を辛い思いで聞き乍ら、夫人達の慰み物にされた時間を取戻すべく、必死になって労役する私でした。

「苦しかったでしょ。だって私だって御いっつけにそむく訳には行かないし……」

夜、檻の中で女囚一〇三号は私に謝りました。

「そんなこと……分つてますよ。ああ、自由になりたい、自由な身に……」

全身を衝き上げる悲しい思いに、檻の中で、のた打ち回って悶える私を、一〇三号囚は檻の鉄格子越しに憐れむ様に眺めていました。

使役囚 (3)

雨が激しく降る日は、私は幾分、楽です。家の中で土足のまま入る所等を磨かされたりする位で、戒具の手入れを済ませれば勝手口に鼻鎖で繋がれて過します。若し夫人の気が向けば退屈しのぎに、からかわれ辱かしめられます。今日も午後から降り出した雨で、勝手口のコンクリートのたたきの上に後手錠の身を正座していますと、庭へ回る様に云われ、テラスの庇の下でひれ伏しました。縁側の寝椅子には夫人が退屈そうに坐っています。

「どうお？ 懲役の味は。少しは有難味が分った？」

嵌口具で押えられていた口の中を舌で舐め乍ら、ひたすら地面に額をすり付けます。



「正坐おし。フッフ、どう？　口惜しいだろうね。私が恨めしいだろ、え？」

「……お、奥様。そんな……私めは罪の償いをさせて頂いている懲役囚でございます。御慈悲で以て使役して下さっている奥様を恨む等、そんな大それた……」

「ホホホホ、まア、そう云わなくちゃ、お前としては他に云い様がない訳ねえ。さぞ自由の身になりたいことだろうと思うわ。一日中さんざんこき使われてさ、夜になれば後手錠で檻に入るんだからねえ。戒具の検査し乍ら、時々哀れになることもあるのよ」

「もったいない御言葉でございます。奥様。嵌めて頂いている戒具は、当然の御取扱なのでございます。それは、もう、辛うございます、苦しいでございます。しかし、刑罰でございます。奥様、何卒、御心のままに苦しめて下さいまし、辱かしてやって下さいまし」

捨てた女の前に、浅間しい哀れな囚われの姿で唯々、機嫌を損わない様、屈辱の言葉を云わねばならぬ口惜しさ。夫人はハスス飲料を啜り煙草をふかし乍ら、冷笑します。

「それからね。云々とくけど、今となつてはね。私はお前に仕返しする等と云う気持は全然ないのさ。だって懲役囚と典獄夫人じゃ、もう張合もないわ。それに人間じゃない虫けらみたいなお前を相手にしても始まらないしさ。しかし時々慰み物にはして上げるわね。ホホホホ」

再び勝手口につなぐれ、夕食を啜ります。女囚一〇三号は後片附の時、手をすべらせてコーヒー茶碗が何か割ってしまった様です。忽ち激しい平手打が頬に飛び、五十面をし

た一〇三号は小娘の様な女中の足下に平伏して赦しを乞いました。

私達は、やがて檻へ追われます。

「手をお出し」

女中の手の第一種手錠を見た一〇三号はビクッと体を震わせましたが、諦めて、おずおずと両手を差出しました。嵌められた手錠は鼻環に結ばれます。

「罰よ。お前も、たまには、そんな恰好するのも身の為だよ。二級だって一級だって、懲役囚には変りないのだからね」

女中が立去った後、一〇三号は自嘲して低く笑いました。

「あーあ、あんな小娘にこんなにされて、御礼迄云わせられるんだからねえ。本当に簡単に嵌めてしまうけど、嵌められるこっちの身にもなって欲しいわ。ねえ、あんた」

翌朝、私が庭の掃除をしていますと、一〇三号がしょんぼりと出て来、つづいて夫人と女中が何か話し乍ら来しました。

「一〇三号。今聞くと昨夜、茶碗をこわしたそうね。だらけてるからよ。活を入れて上げる」

「お、奥様。私が悪うございました。以後、注意致します。どうか御赦しを……」

「うるさいね。いいつけに服従しないの?」

一〇三号は泣き乍らシャツを脱ぎます。

「鼻環手錠にしておやり」

手錠の嵌まった両手を鼻の前で切なげに動かしながら、女囚は夫人に背を向けて正坐し鞭を待ちました。

「ヒーッ、あ、ありがとうございます」

「ギエーッ、アッ、ア、ありがとうございます」

背中に、尻に、太腿に、そして内股へも鞭が飛び、その度に身をよじらせて悲鳴をあげる一〇三号の哀れな姿。全部で十二、三度、鞭打たれたでしょうか。彼女の肌には鞭は近頃あまり当てられなかった様で、古い鞭痕が数条、消えかかっていたその上に、新しいみずばれが赤く走り、久し振りの鞭の味に女囚は脂汗と涎れを垂れて苦痛を忍ぶのでした。

「よし。まあ、こんなものでいいだろうね。あ、その六十四号もおいで。ついでに鞭を当ててあげる。フッフ朝の運動には丁度いいわね」

夫人にとっては適当な運動かも知れませんが、ついでに鞭打たれる身にもなって貰いたいものです。前手錠の両手を高く差上げた姿勢で私も十ばかり鞭を貰いました。囚われの身の悲しさが、ひしひしと感じられます。

「おしまい。さ、二人共、仕事おし」

午後、若い男女の二人連れが来訪し、夫人と三人でテラスで歓談しました。話しの模様では、典獄の妹夫婦で、まだ新婚ホヤホヤらしく思えました。

「お姉様のところ、いい役得ねえ。二匹も奴隷が只で使えて。私のとも欲しいんだけど、中々高くてねえ」

「アラ、あれ達、懲役囚なのよ、使役してるの」

「だから奴隷と同じじゃありませんか。懐が痛む訳じゃなし、本当に遠慮なくこき使えてさ、気を使うことも要らないし、絶対服従でしょう? 便利だわ」

「フッフ、そう云えばね、そりゃ楽で便利よ」

囚われの身の苦しさ、辛さの百分の一も知らないので、いい気な

ものです。

泊る様で、一日の苦役を終えた私は、二組の夫婦が談笑しているテラスで夫人に戒具の検査を受けました。

「六十四号、お前は今晚、懲戒よ」

冷い夫人の声。

「御客様に失礼な振舞をしたわね。五百回程おじぎするのよ。フフ」

勿論、懲戒の理由は口実で、おそらく客の好奇心を満たせるためでしょう。一言の申開きも抗弁も許されない悲しさ。女中に追われて、私は自分の懲戒用具を倉庫からかつぎ出して寢室の窓から十米ばかりの所で組立てます。数個の革枷のついた木製の台に太い木柱が立ち、他に蓄電池やら、メーターのついた電気器具やら滑車やらが付属している道具です。木台上に柱を背にして正坐し、手錠を解かれ、台についた革枷で両足首と両膝の下とを台に固定させられ、自ら後手錠にします。腰枷の後部が鎖で、幾分ゆる目に台に結ばれ、膝の前と、柱の後頭部に当る部分とに大きな押ボタンが固定され、電線で後の器具に接続されました。懲戒の内容はボンヤリとは想像できます。更に両尻の肉に針が、それぞれ突刺されました。電極に違いありません。

やがて夫人と若い夫婦の三人が来ました。

「あら、お姉さん、ずい分、難しそうな器械ね」

「ホホホホ、何も難しいことないわよ。ホラ、前のボタンを頭で押して、次に後のボタンを頭で押すと、この度数計に一回と出る訳よ。つまり監視してなく共、おじぎを繰返させることが出来るってわけ。それから、お尻に針が差してあるでしょ、電線のついた。両方のボ

タンの内、どちらか押してないと、十一の電流が流れて縮み上がるという寸法なの。六十四号も分った？ それからと……。ウンどっちのボタンでも一分以上、押してると、やはり針に電気が来るし、三十秒以内に二度おじぎしても度数計には一回しか出ないのよ。フフ」

「ややこしいわねえ、分った？ あなた」

「つまり、こういうことだろ。早いとこ定められた回数を済ませて一休みって訳にも行かないし、休み休みやることもできない。しかも絶えず努力してどちらかのボタンを押してなきゃ激痛が与えられるという訳さ」

「さすがに頭がいいわね。では……と。六十四号。五〇〇回よ。二階が此の方達の部屋、一階が私達の部屋。五〇〇回に足らなきゃ勿論のこと、超過しても矢張り懲戒の懲戒だよ。フフフ、途中で電撃が来なくなるからね、自分でよく数えること。度数計はお前の真後にあるけど見えないだろ。じゃ、三十分したら電気が来るからね。初めるのよ、分ったかい」

やがて上下の部屋にピンク色の淡い燈が点り、哀れな我が身に涙していますと、両尻に灼けつく激痛がさし込み、ピクッと全身がけいれんしました。あわてて上体を倒し、前のボタンを額で押しますと激痛が消えます。

そうだ、このままじっとしてる訳には行かないんだ、と体を起しかけますと、ボタンから額が離れ、再び激痛が走ります。歯を喰いしばって後頭部のボタンを押します。これでやっと一回です。これからのやるべき動作を考えていますと、一分は、あっという間に過ぎて、鋭く断続する直流電流の痛さに嵌口具の中で思わず呻いて、

必死の動作で前のボタンを押すのでした。

実に残酷に出来た器具で、電撃におびえ、おのき乍ら、死物狂いで平伏動作を反復します。無効な分もある様ですし、途中で回数が分らなくなってしまいました。全身が情なさとしきりに震えます。しかし、訴えるすべも相手もなく、如何に口惜しがっても所詮ごまめの歯ぎしりです。二組の夫婦は、暗い庭で唯一人、ひたすら平伏を繰返している私のこと等、とくに忘れていきましょう。虫けらの如き懲役囚の苦しみ等、何とも思っていないでしょう。私は男泣きに泣き乍ら、後手錠の身の悲しさに、頭で二つのボタンを代る代る押し続ける他ありませんでした。二百回も平伏したでしょう。背、腹、腰、そして太腿の筋肉が疲れ切って硬張って来ます。勿論、やめれば堪え難い電痛です。少し慣れて来てボタンをじっと押して一分間、ピリッと来る電撃の瞬間、ボタンを離し、素早く別のボタンを押す法を覚えしました。しかし、疲れた筋肉は、もはや敏捷な動作に応じて呉れません。体中、脂汗でベトトリです。今日一日の労役の疲れも出て、ともすればウツラウツラとしては電痛に飛び上って眼を覚まし、綿の様にたたくたになった上体を曲げ伸ばしせねばならない苦しさ。夜が明け初める頃、突然、電撃が来なくなり、ホッと致しました。あと何回だろうか、一目度数計を見たいものだと首をネジ向けますが見える筈もなく、当てずっぽうに、あと七十回と勝手に定め、約一時間程、歯を食いしばって最後の努力をした後、何もかも諦らめて突伏したまま眠りこけてしまいました。鞭の一撃を夢うつつに感じ、ハッとしました。続いて又、一撃、更に今度は激しい電撃の痛み、見開いた眼に見慣れた女中の白い素足が映り、あわてて正坐し、改めてひれ伏します。

「いつ迄ねてるの？ しかも十五回も足りないというのに。なんという図太い懲役囚なこと」

ああ、矢張り足りませんでした。課せられる懲戒のおそろしさに眼前が暗くなる思いです。

二階の夫婦が寝衣姿であられました。

「フーン、四八五回か」

「やはり足りないのね。今朝方、眠りこけていた様子よ。どうして、あと少しなのに辛抱できないのかしらねえ」

「本当に図太いったら、ありゃしない」

「けどね、昨夜も窓から暫く眺めてたけど、ちょっと哀れなものだったわ。フフフ、お前一体どんな気持だったの？ と言っても口が利けないのね。あなた、少しそこら散歩しましょうよ」

私は疲れ果てた体でヨロヨロと重い器具や台を片付け、ついで容赦なく鞭で追われて朝の労役です。典獄の出勤後、夫人の前に引き据えられ、恐ろしさにガクガク震え乍らひれ伏す私に、嘲笑を含んだ冷い声がかかります。

「十五も不足なんて、私の命令を一体どう思ってるの？ 覚悟はいのね」

「お姉さん、どんな風にするの？」

「貴女、鞭や何かよりスマートな方が趣味にあうでしょう。ともかも見ててごらん。とても面白い責めなの。楽でさ、それでやられる方は死ぬ程苦しいっていう訳なのよ、フフ」

三人の目の前で、女中の手で両手の枷を首環の後で固定され、T字型の器具の横棒の両端の革枷に両肘をしっかりと結ばれ、縦の棒は背筋に沿って下端を腰枷に固定されます。これで両手首を首の後

で交叉し、両肘をグッと張った姿勢のまま、上体を曲げることもできない訳です。足首の鎖はそのままで、七、八十纏の鉄棒の両端の革枷で、両膝を鉄棒の長さに開いたまま固定され、鼻環に結ばれた捕縄が、頭との太い木の枝にゆるく結び付けられ、嵌口具の代りに舌を押える鉄棒のくつわを噛まされました。女中は、更に電線と革バンドが付いたフレキシブルなプラスチックの器具を、私の上膊の内側から腋の下、更に脇腹にかけて左右に各一カ宛、ピッタリと弛まぬ様、取付けます。私には既に課せられる苦しみが判りました。擦り責めなのです。両腋の擦り器から伸びた電線はテラスのテーブルの上のボタンと電源に接続されます。

「ね、あの器械の中に柔い羽みたいなのがあったさ、ボタン押すと、モゾモゾと動き回って訳よ。押してごらんさないな」

好奇心に駆られた若夫人は無造作にボタンを押します。と、其の途端、両腋下から両脇腹にかけて猛烈に湧き上る異様な感覚。

「ウウッ、ア、ファッ、ファッ、ハハハ……フッフッフ……フッフ、ウウ……ファッ……」

堪え様として堪え切れない、ぐすぐったさに身をよじらせ、もたえ残酷に拘束された足で地団駄を踏みくつわの奥から異様な声を出して、のたうち回ります。夢中でもがき回るものの鼻繩の許す範囲しか動けませんし、地上に倒れることも出来ません。ほんの二、三分間でしようが、私にとっては永い永い苦しみの連続でした。脂汗が体中に滲み、涎れがタラタラ流れ、ボタンを離して貰った時には眼前が昏み初めて居りました。突然、擦ったさが消え、太い吐息をつきます。

「ね、ちょっと愉快でしょ。あ、お加代さん、おしめしといった方が

よくない？」

ゴム引のおしめカーバ様のものが穿かされます。禪の様な構造で足を通す必要がありません。

「少しずつ押しては止め、押しては止め、すると面白いのよ。ホラ」今度は典獄夫人の手でボタンが操作され、云い現わし様もない苦しさ、次から次へと、加速度的に激しく与えられ、私はもう恥も外聞もなく、泣き笑い、むせび、喚き、身もだえては呻き、のたうち回って苦しみ抜くのでした。全く残酷な懲戒で、此の時ばかりは夫人が恨めしくて恨めしくて堪りませんでした。皆に面白半分は無造作にボタンを押され、嘲笑と、身も吹飛ば様な苦しみを受けること約三十分間、その中、半分は擦り器が作動していました。気が付いて見ますと粗相して居り、受けた苦しみが分ります。

「まあ、あの脂汗。眼玉も白くなった様よ。なる程ねえ、便利な道具があるものね」

グッタリと疲れ果てた身に、更にまだ懲戒を加えられました。鼻繩と膝の枷だけ解かれ、中腰の姿勢をとらされて正坐し、縮めた足鎖の中央と腰枷の後部との間に棒状の器具が取付けられ両腋の擦り器に接続されます。尻を少し浮かした姿勢のままで、じっとして居ないといけないのです。少しでも腰を上下左右に動かしますと継電器が作動して擦り器が回る訳です。皆はみじめな私を放置してトラップ遊びを始めました。私は、一旦擦り器が作動始めますと、中々断点で体を静止できないので救いを求めて喚き悶えるのですが、見向きもしてくれず、苦しみに苦しみ抜いて、やっと失神できるかと思う途端、お加代にハイポンを射たれて又もや新規蒔直して苦しみを味うのでした。本当にもう、懲戒の恐ろしさ、苦しさ、懲役囚の

「悲しさ、というものをつくづく味わされ、やっと赦されて夫人の前にひれ伏した時には、どうすれば御心が済むだろうかと、ワナワナと体が震えました。まだ攪り器は取付けられたままでボタンは夫人の手のそばにあります。」

「……ア、ウ、ウ……おいしいえう、おいしい……」

「ホホホ、何だって、ハッキリ云ってよ。ボタン押そうかねえ」

「ア、アッ、おおおい……えおあい……あう」

舌を押えるくつわのため母音しか発音できない私は、さんざんからかわれ、脅されました。

「ホホホホ、よしよし。苦しかっただろ？　ちっとは分ったかい、自分の分際というものがさ。此のスイッチを、そうね。三十分も入れとけば悶え死にして死んでしまうこと請合いよ。フッフ、分った？」

「……ア、アイ……」

其日は、それからずっと翌朝迄、檻の中で休ませて貰いました。

使役 四 (4)

翌日は午前十時頃海水浴場へ連れてゆかれました。御弁当やら、色々な道具等を入れた袋を背負わされ門の所で一同を待ちます。此の様な場合は大抵、女囚一〇三号が連れられるのですが、今日は洗濯物でも溜っているのか、私にお鉢が回りました。

そこへ三人が出て来ました。日曜日らしく典獄も一緒に、夫人のくびれた腰に腕を回して居ます。鼻繩がつけられ夫人が持ちます。呼べばハイヤーもあり、又バスもありますが、海水浴場迄約三軒の道を散歩がてら歩いてゆくのです。行き交う人々にジロジロ見られ

て私は恥かしくて堪りませんが、此の辺りは奴隷も多いことですし、案外一般の人は何とも思っていないかも知れません。

海水浴場の中心部からかなり北の方へ離れた所で、一同は敷物を掀げ、ビーチパラソルを差し掛け、私は近くの松の木に犬の様に繋がれて正坐しました。砂に戯れ、波に遊び、楽しそうな皆を手錠足錠の身で眺めて居ますと、泌々自由が恋しくなりました。昼食後、全部そろって海に入っている間、私は空腹と喉の渇きに悩み乍ら、敷物の上の飲み残しや食べ残りの物を恨めしく見て、一人つくねんと砂の上に坐って居ますと、ずっと右手の賑かな中心付近で騒ぎが起りました。水着姿の二人の女が転げる様にこちらの方へ走って来ます。少しおくれ、矢張り水着姿の二人の婦人を先頭に浴客の男女が多勢あとを追っています。

逃げる二人の婦人の姿は次第に大きくなり、一人がよろめいて倒れました。起上がろうとする婦人の周りには追い付いた人々の垣が出来ます。走り続けるもう一人の女のピンク色のビキニ型の水着がずり落ちそうになり、

「泥棒、女泥棒！　誰か……捕まえて……」

後を十米程の距離で追うこれも若い婦人は平凡な青い水着で肩からショルダーバッグを吊り、風に黒髪をなびかせて叫んで居ます。

此の辺りは人影も少く、逃げる女賊の行手を遮る人はありません。併し、運の尽きか、私の眼前十数米の所で砂に足をとられた女泥棒は、つんのめって前に倒れました。素早く追いついた婦人は女賊の利腕を握って引起すや否や、其の手にキラリと光るもの、アッと云う間に女泥棒の両手に手錠がはめられ、一息いれた婦人刑事は更にバッグから出した捕縄で腰繩を打ちます。
(次号へ続く)

女相撲と女闘美

美術文学に現われた女闘美

雪 崎 京 人

前回には演劇、芸能に現れた女相撲、殊に男女の相撲に就いて書いて見たが、今回は美術、文学に取上げられた女相撲に就いて述べて見度い。

題材が警視庁の検閲などのやかましかった戦前など公の展覧会などで発表しにくかったという関係があったのだと思うが、案外に女相撲を題材にした美術品は少ない様に思う。文展とか帝展という大展覧会には恐らく日本画、西洋画を通じて見られなかったのではないか。筆者の記憶にあるのは石井鶴三画伯の作の「女相撲」と題する淡彩のデッサンで

ある。これは三越の展覧会場で遙か以前に見て、興味深く感じ今も目に残っている。小屋がけの相撲場の中で二人の女力士が四ツに組んで、互に上手、下手に^{まわし}褌を取り、腰を引いた所で、見物人が立って見ているのが横に画かれている。

石井画伯は人も知る相撲通、横綱審議会にも名を列ね大相撲の相撲画、彫刻に数々の名作を発表して居る人である。ただ惜しむらくはこの女相撲、白い丸首シャツの様なものとパンツをはいてその上に褌を締めた姿だ。細面の美人がこちらを向き、相手の女力士は背

を見せている。その美人力士の顔が印象に残っている。展覧会などには裸体画は沢山に見受けられるがいずれも椅子に腰かけ、寝台に寝そべり或は手持ち無沙汰に立っている女達ばかりで、こんなことを言っては画家先生に叱られるかもしれないが、まことに退屈である。裸体に褌を締め肉弾相打つ時、その真剣な表情、瞬間に変化する体の線と形、さては輝く皮膚の色彩、更に女性間でしか見られぬ激しい闘争美、あやしくも美しいのが女相撲ではないかと思う。

直接、女相撲を画いたものではないが、昭



和も早い頃の帝展に田辺至という画伯の作の裸女立像があって、これに対して朝日新聞紙上で児島喜久雄という人の批評が出ているが「この裸女立像は、双方取疲れましたれば、

これにて引分けということになった女相撲の様に汗と砂によごれている」と、これはこの作品に対する皮肉な批評なのだろうが、浅黒い肌をした大柄、豊満な裸女が少し足を開いて立ち左手を下げ右手を顔に一寸

当て、髪が乱れて額にかかり、大きく呼吸をして喘いでいる様に見える、肌も光った様子が汗に濡れている様に見える。適切な批評と考える。但しこの裸女、勿論渾は締めていない。

さて彫刻となると一層、少ない様だ。ただ一つ、これは筆者の想像なのだが、明治末年頃の文展出品図録を見ると、彫刻の部に前述の石井鶴三氏の作で、「荒川嶽」という作品の写真が掲載されている。全裸の女が台に凭りかかった様なポーズの作だが説明がないので題名の意味が分らない。想像だが荒川嶽という四股名の女力士ではないかと思うだけである。これは前記の女相撲の作品があったり（年代的には違いが）相撲好きの画伯を考えての想像である。

文学も甚だその例が少なく、僅かに今東光氏の「女相撲」があるだけではなからうか。

昭和初め不同調という文学雑誌に掲載されたもので、当時の批評も、異色ある題材の作品としては好評だった様だ。八重桜という二十歳ばかりの女力士が主人公で、少女の時から女相撲の群に投じ、激しい稽古に鍛えられ、頭突きを受ける為に乳房もつぶされた様になり、男を知ると弱くなるというので厳重な監視を受けて育った。一行中の大関を張る一人の娘力士を画いた小説だ。今東光氏はその頃、一時有名で、それから暫くの間、文壇から隠れ、数年前、再びカムバック、盛名をはせて居るのは諸君御承知の通りであるから、やがて今東光全集でも出来れば必ずや集録される作品と思う。

大衆文学では村松梢風氏の作品に「仇討女相撲」という名作がある。この作品など女相撲を主題にした作品としてその濃艶さを書き出した点でも随一のもので、流石は女を書いては当代一の作家、村松氏の作品だけのことはあると思う。昭和十二年頃の講談倶楽部に毎号連載されたものである。

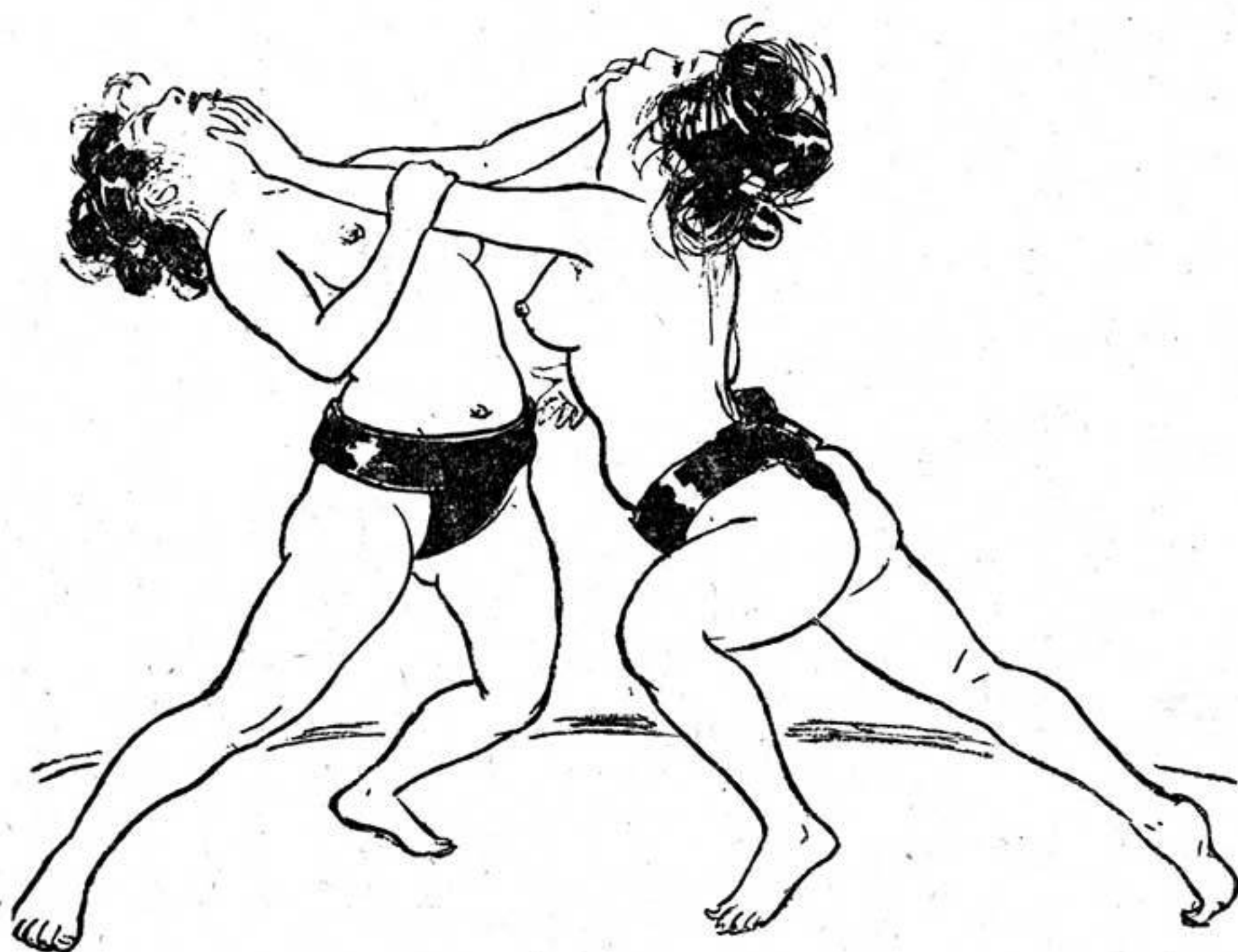
大体の梗概を述べると、時代は徳川の末葉、東北の某藩に武芸指南を以て仕える武士

があり、これが親一人子一人、その一人の子
というのが世にも美しい娘。この娘梅乃は花
も羞らう美女であるが、大柄で肉付きもよく
今でいうグラマー美人、且つ天性膂力あるに
加えて、父より武芸百般、中でも関口流の体
術（今の柔道の如きもの）を習得し家中の若
侍と仕合をしてもめったに後をとらないとい
う程の娘、許婚者の若侍は江戸詰であった。

ある時、御前試合の遺恨から父は悪剣士に暗
打ちに合い、娘梅乃は許婚者に合うべく且つ
仇を追って单身、旅に出る。山深い峠路で仇
一味に会うが多勢なので逆に追われ、危い所
を異様な一行に救われる。これが女相撲の力
士達で大兵肥満の男か女か分らない様な一団
であった。

敵の悪剣士等は梅乃を返り討ちにし様とし
て後を追ってくるので梅乃は座長格の大関鬼
ヶ嶽の好意で巡行の先々まで行を共にするこ
とになる。日数を重ねて各地を廻り廻って宇
都宮で興行の折、一行中で最も美人の人氣力
士、花筏お蝶というのが急病でどうしても土
俵へ上れなくなった。見物は花筏の土俵姿を
見んものと詰めかけているが花筏の姿が現れ
ないので弥次を飛ばし怒鳴り立て騒然となっ
ている。砂かぶりでは見物同士が「私は昨

日、花筏が水をつける時、私の
方を流し目で見てニッコリ笑っ
たあの顔が目について昨夜一
晩、眠れなかったよ」などと話
し合っている。座長格の鬼ヶ嶽
も困って居ると、一行中の大姐
御力士の乱髪が、こうなったら
仕方がないからあの梅乃さんに
今日だけ一寸、花筏の代りに出
て貰ったらどうだろうねえ。梅
乃さんならあの通りの美人だ
し、体もいいからきつと見物に
受けると思うよ」というと、鬼
ヶ嶽は「なんであの梅乃さんが
裸相撲を取るものかね。気の毒
だよ」と押問答の末、乱髪が兎
も角、私が話して見様と梅乃を
呼んで花筏が病気で困っている
ことを話すと、危うい所を助け
て頂き今まで御世話になった大
恩ある皆さんが困って居る時、
私でお役に立つのなら喜んで何
でもさせて頂きますとの返事。早速、支度
に
か
か
り
風
呂
へ
入
っ
て
体
を
清
め
、
乱
髪
が
禪
を
締
め
て
や
り
、
髪
は
急
の
こ
と
と
て
櫓
落
し
が
間
に
合



わず引つつめ髪に束ね用意出来、土俵では行
司が花筏急病にて出場出来かねますれば江戸
下り梅の森お梅、花筏の代りとして出場致す



ことに相成りました。花筏同様御ひいきに願
上げますと呼び上げている。東、梅の森には
西、緋緘と呼出しの声と共に土俵に登った両
力士、梅乃は大恩ある人の為とは言い乍ら、
親にも見せたことのない乙女の素肌を何百と
いう観衆の目にさらし殊に許婚者にでもこの
浅ましい姿を見られたらどうしようと思ひかし
さに頭がぼうっとなつてしまつてゐる。土俵
に上つてからの作法も毎日見ている上に、一

通り教わつて出たのだが何をしたか夢中の有
様、見物は喜んだの喜ばないの、さつきまで
花筏を夢にまで見て居た連中も、こりやあま
るで裸弁天を拝む様だ。花筏など問題じゃな
いや。私ア断然、梅の森だ。と沸き返つた。
それもその筈、梅乃は蛾眉鳳眼、形のよい少
し受口の唇は真赤に濡れて優しさの中にも凛
とした顔立ちで、体の美しさが又、何とも言
えない。抜ける様な白いもち肌が湯上りに桜
色になり、皮下

に脂がのつて生
毛までが輝いて
いる。桜貝の様
な乳首をつけた
大きな双の胸乳
が生き物の様に
胸の上でゆれて
いる。可愛らし
い臍の下に真黒
な縞子の褌をき
りりと締めてい
るので豊かな臀
部は黒い立褌で
二つに割られ、
逞しい太腿がピ

ンと張つて、触ればはじき返されそうな裸
身だ。

ストリップもヌードもない昔のこと、この
神様の造つた最高の傑作を目のあたり見た見
物は熱狂したに違いない。しかもこの姿で大
乱闘をして見せてくれるのだから見物の沸き
立ったのも無理もない。相手の緋緘も前頭筆
頭のなかなかの美人、立上るや二三合突き合
つた後、緋緘右を差し胸を合せて寄つて出る
と梅の森ズルズルと後退、東土俵につまっ
た。出場の前に梅の森、何しろ初めて土俵へ
上るので、緋緘は手順を打合せ、揉みに揉ん
で大相撲を取つて見物を喜ばせた後、梅の森
が勝つ手筈になつてゐたのだが、生れて始め
て真っ裸に褌を締めて何百という見物の前に
さらされたのでぼうとなつて無我夢中、しか
し力がある上に武術で鍛えた体、緋緘が押し
て来るのを東土俵に踏み止まると大地から根
が生えた様、緋緘も思わず力が入りグッと寄
る所を体を弓にして鮮かなうっちゃり、緋緘
は東土俵に仰向けに投出され、勢余つて梅の
森もその上に折重さなつて倒れた。梅の森、
勝名乗もそこそこに体の砂を払い落すのも忘
れて、満場の割れかえる様な喚声と蒲団など
の飛ぶのを後に支度部屋へ駆け込んだ。この

大成功以来、梅乃もともと柔術の心得もあり、相撲の技もめきめきと上達、数カ月後、江戸に入り両国の盛り場で興行された頃は江戸中の人気を一身に集める様になった。

その或日のこと、既に小結の地位に上った梅の森は、その類稀な美貌と豊艶極まりない裸身を加うるに相撲巧者の手取者として人気絶頂、溜りに姿を現わしただけで満場、梅の森！ 梅の森！ という叫びで耳も聳せんばかり。流石に女力士、溜りに入る時は派手な雲竜模様の真赤なもみ裏の丹前を、プロレスでいえばガウンの様に素肌にとっている。その日の相手は西の関脇、磐石お石、その名の如くアンコ型で相撲はうまくないが怪力無双、その激しいぶちかましをまともに受けたら大関でも土俵を割るという代物、行司、東梅の森、西、磐石、と呼び上げる。真赤な裏の丹前をばつと後になぐり棄てて土俵へ上る梅の森、玉の肌が目にしみるばかり、土俵上の梅の森、力水をつけ乍ら何気なく見物席を見るとずっと後方に、ちらりと見たのは、夢にも忘れぬ許婚の武士の姿の様に見えた。胸は早鐘を撞いた様に、目の先がクラクラとなり思わずよるめき四本柱につかまり、気を静め、再びその辺を見れば錯覚だったのか、

その様な姿も見えなかった。土俵を見守っている見物はもとより、溜りに居る朋輩の女力士も、梅の森の不審の様子にはらはらして居る。仕切って居る内に精神は統一され、何も彼も忘れて立上った。果して磐石、激しく当たって出るのを、梅の森ガツチリと受止め大相撲となった。土俵せましと荒れ狂う二人の女、見物は我を忘れて熱狂している。相撲が長引くと三十歳をとうに越して子供が二人もある磐石、分が悪く息切れがして来る。右四ツ上手下手を引き合って梅の森、相手の肩に頤を埋め、相手の疲れるのを待って得意の上手投に出様とする瞬間、磐石の肩越しに見物席の方を見るときもなく目をやったその視線に、又しても恋しい人に似た武士の姿をチラリと捕えた。全身にみなぎっていた力がスーッと引く様に感じた途端、磐石はよいしょとばかり巨きな腹をつきつけてあっけなくも梅の森を寄切ってしまった。見物は治まらず八百長だと騒ぎ立てる始末。支度部屋へ引上げて来れば朋輩が寄って来て「お梅ちゃん。今の相撲どうしたのよ」と聞かれる。風呂へ入るのも忘れた様に明荷の前に放心した様に座っている。

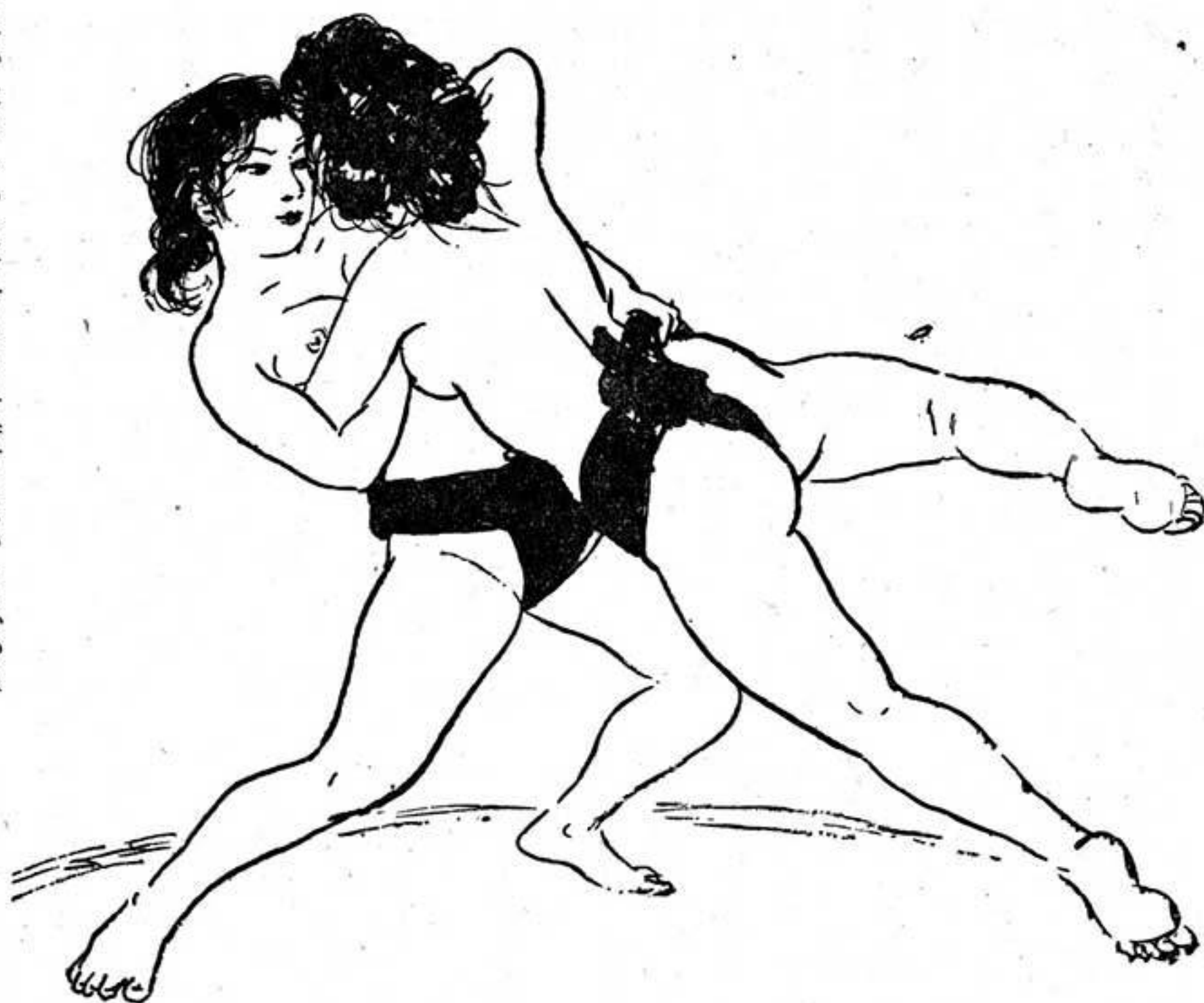
物語りは恋人が梅乃を探しに江戸を離れ、

江戸へ入った梅乃は恋人に巡り会えないで居る。その内に將軍家上覧女相撲が催されることになる。

家斉將軍、側近から本日は御奥庭にて相撲の催しがある旨聞かされる。いつものこととてさして興味もなく席に着いて見ると、相撲は相撲でも男ではない、豊かな胸の隆起を持った素裸に褌だけ締め込んだ女達が二十数人居並び、平伏して居る。

「これがこの頃、江戸市中にて大評判の女相撲に御座ります」と側近の説明に、やがて始まった土俵上の熱戦に、色好みの將軍家、手に汗を握り膝を乗り出しての観戦、たちまち御目にとまったのが梅の森お梅、この日の対戦の相手は大関の筑後川おみの、身長、体重共に優れ、且つ勝負度胸があり梅の森にとっては大敵の大敵、体格から言っても梅の森は五尺三寸、十五、六貫といった均整のとれたやや大柄の普通の女の体だ。頼むはただ幼少から父の許で鍛えられ、武芸によって造られた鋼鉄の様な弾力ある筋肉と勝機をつかむ勘のよさだ。両女土俵に上ってちりを切って脚を高々と挙げて四股を踏む。將軍家始め居並ぶ人々誰の目にも戦わずして勝敗は分っている。ただ望むらくはこの裸弁天の様な美女

梅の森、熊鷹と打ちあひつ



にいたましい負け方をさせ度くないと思わぬ者はなかった。立上るや梅の森すばしこく立廻り、先手先手を取って敵に組ませず筑後川

のままにて近う参れ」と乱れた禪を気にし乍ら、全身の汗ぬぐいもやらず、御前に進み出て盃を頂きグッと飲み干すのだった。目の醒

を大いに悩ましたが遂に組み止められてしまった。こうなつては梅の森利あらず、あつと思う間にごぼう抜き高々とつり上げられてしまった。梅の森、筑後川の大きな腹の上で両脚をバタバタさせて何とかして降り様とするのを筑後川そのまま正面土俵へ持つて行き、俵の外に投げようとした瞬間、梅の森の指先が俵にかかったかと思うと立直り、全く油断していた筑後川、梅の森の強靱な二枚腰の見事なうっちゃりに土俵の外に飛び出してしまった。將軍家御感ななめならず「梅の森、近う。盃を取らずぞ」ということになり、裸ではあまりに失礼というのを「苦しいない。そ

める様な美女が裸で激闘数分の後、呼吸も荒くその度にコリコリした乳房が胸の上で大きく踊って、汗まみれの裸身からは成熟した女のむせる様な体臭を發散させ乍ら、手間取った相撲にさしにも堅く締め込んだ禪も乱れ、股間に喰い入る立禪を氣にして直したりする仕草も女相撲ならではの情景だが、將軍家から盃を頂いた時の梅の森が恐らくそうだったと想像する。

物語はこの後、恋人同志巡り会い、更に父の仇の悪剣士を發見、梅の森の梅乃はかねて用意の白鉢巻、白装束、恋人の助太刀で不具戴天の仇一味を見事討ち果し目出度く仇討を成しとげる。梅の森の仇討と聞き仲間の女相撲一同、禪一本の裸に向う鉢巻、手に手に丸太棒などを持って応援に駆けつける。弥次馬がこれを見て喜ぶ所もある。梅乃は恋人と目出度く結婚、多勢の子供を生み長寿を保った。以上「仇討女相撲」の略筋と女相撲の場面だけダイジェスト的に筆者の印象を加えて述べて見た。挿画は中一弥氏で女相撲の場面もいくつかり仲々見事だった。

尾崎士郎氏の隨筆の中に大正時代、第一次大戦後、成金某氏が東京で体格のいい芸者を集めて相撲を取らせた話が出て居る。島田鬚

のまま素裸に真赤な褌を締めさせて料亭の広間で取組ませた。初めは羞かしさにふるえて居り、尻ごみして居た女達も一度土俵に上って取組むと闘志を燃やし、中にはつかみ合い、ひっかかり合いの大乱闘を演じ、白い肌の色と真赤な褌の色が輝く電燈に照り映えてその美しさ言語に絶したという。さもあるうと思うのは本職の女相撲と違い、相撲の手も何も知らず、ただ相手を倒そうとして必死に取組み合う裸身の美女達が、女同志の闘争心に加うるに勝者には莫大な懸賞があり欲も手伝っている。羞恥心も忘れて必死の形相物凄く乱闘した真赤な褌一本を締めただけの芸者達、成金氏ならずとも、天下第一のシヨウであつたに違いない。

作者を失念したが戦後、某娯楽雑誌に掲載されたのに「風流女相撲」というのがあつた。これは江戸時代の捕物帳になつて居て、女相撲の一座のスターの女力士がひいきの客に招待された道、駕籠の中で殺害されている。それを某岡っ引が謎を解いて犯人を捕える。犯人は一座のライバルの女力士で嫉妬からの犯行とわかる。これには相撲そのものの描写はなく、ただ岡っ引が女相撲の仕度部屋へ取調べに行く場面で、多勢の若い女の素晴

別冊奇譚クラブ

創刊号「告白・手記・体験」特集

目下発売中！
御申込次第急送

定価三百円

(直送半額奉仕)

第二集「松井籟子作品集」特集

「狐灯」画集 滝れい子画

口絵「淫火」画集 北原純子画

四馬孝緊縛画集

グラビヤ 須川令子被縛独演集

(「淫火」にちなんだ緊縛ポーズ)

松井籟子女史の長篇傑作小説「淫火」四百数十枚を北原純子さんの挿絵によって一挙に掲載しました。中篇小説「狐火」と共に妖しい倒錯の魅力は必ずや皆さまを甘美な悦虐の花園へ誘い込んでしまうことでしょう。美しい口絵並に挿絵と一緒にどうぞお楽しみ下さい。

グラビヤ希望写真集 五十一葉
勝気なおんな、私製拘束具、汗溜め、前手縛りを望む、縮上げ、葉子いじめ、
本文「告白手記体験」集二十八項目
あらゆる倒錯傾向を包含した得難き告白体験の集大成、切々たる真実味溢れる血の叫びは貴重な文献として価値あり。

らしい裸とそのむんむんする女の臭いに流石の名岡っ引もたじたとする描写が面白かった。

これは文学とはいえないが昭和の初め頃、新聞に連載された実話物語の中に、幕末徳川政権崩壊の時、旗本の娘で武芸に秀でた某女が男装して上野の彰義隊に加わり、群がる官

軍と奮戦したが遂に戦局利あらず上野の山を脱出、関東各地を転戦し乍ら退却、勝に乗じた官軍の急追を避ける為、同志と離れ女相撲の一行に投じ、その美貌と武芸で鍛えた体が物を言い、女力士としても一行の中でなくてはならぬ一人となり、厳しい官軍の探索の目をのがれている内に明治の代となり、その後

色々と数奇な運命をたどった当時現存した一人の女性の物語があった。幕末の動乱を背景に男装の美少女が敵に追われてその目をくまます為に女相撲に加わって禪一本を武装として丸裸で相撲を取っているなどというのは何とロマンチックで且つ異様な美しさではなからうか。

以上いくつかの小説、随筆、さては物語など紹介したが、筆者思うに以上の様な女相撲を主題若しくは取入れた小説などを映画化して見せては貰えないものだろうか。新東宝などでも海女ものばかり追わずに今度は女相撲ものとはいかないものだろうか。海女よりも肉体の露出面は多いことだし、海女の乱闘よりも女相撲の方が一段とセクジュアルな女の闘争美ではなからうか。柔道二段という万里昌代やグラマーの三原葉子、三ッ屋歌子などの外いつも乱闘する海女達になる逞しくも美しい女優達が禪一本の真っ裸で相撲を取って見せては呉れないものかしら。

ストリップ劇場などで情痴物ばかりでなく前述の様な女相撲を主題とした演し物を見せたくないものかと思う。例えば浅草のロック座などには小松竜子という時代物、日本物を得意とするストリップ女優が居る。前述の

仇討女相撲の梅乃など容貌体格共うってつけではないか。世の中には女相撲マニアは案外沢山居る様だし、一般世間の人々もこれ等の美人達が裸で相撲を取って見せてくれたら喜ばない筈がない。数年前浅草のストリップ劇場でストリップショウの合間に女相撲が行われた。筆者は早速大いに期待を持って見に行ったが、ストリップの方はバタフライ一つの裸体で乱舞するのに、裸であるべき女相撲が白のランニングシャツ、パンツの上から禪を

奇譚クラブ臨時増刊号

SADO (サド) 特集号

各集定価 三五〇円 (送共)

- 第一集 緊縛艶姿特集 (売切)
- 第二集 被縛女体特集 (S特二)
- 第三集 狂い咲く稀花 (S特三)
- 第四集 湧き上るムード (S特四)

堂々各集とも百数十葉の麗美な緊縛フォトを満載、マニアをあっと驚かす奇抜なアイデアの素晴らしい責絵のかずかずを収載、新作の責小説及び興味深いS的読物が全頁を埋めつくして独自のサド風を展開しています。

締めて取組むので、顔立は美人も居たのだが何等美しさもなく失望したことだった。当時週刊アサヒが写真入りで取上げたのを記憶する読者も少なくないことと思う。それに較べるとこれも数年前、大阪千日前の小屋がけストリップ劇場で、女の一人相撲を見たが、全裸に黒の禪を締めて登場、一人で相手がある如く取組んで揉み合う所やとどのつまり投げられる有様などをやって見せた。これは残念乍ら頗る不美人でしかも中年の女だった。

既刊号紹介——残部僅少——

『悦虐小説と緊縛写真』特集号

各集定価 三〇〇円 (送共)

- 第一集 緊縛女体特集 (悦特一)
- 第二集 悶悦姿態特集 (悦特二)
- 第三集 嵐を慕う蝶 (悦特三)
- 第四集 拘束美態特集 (悦特四)
- 第五集 緊縛風景 120 態 (悦特五)

往年評判を得た悦虐小説の問題作が隅から隅までぎっちりと詰まり、加えるに特写緊縛女体の写真が各集いずれも絢を競い、四馬孝の緊縛画がずらり並ぶ豪華版揃い。(特に新装特大号の発刊を記念して定価の半額サービスをいたします。乞御申込!)

燃 ゆ る 星

—人体実験に殉ずる女将校の最期—

藤 山 秀 緒

光栄ある死

灰色の国、ソ連——。重苦しい鉄のカーテンの中にも、可憐な花が咲いていた。

男のような軍服に身を固め、男のような訓練に堪えながら、祖国のために献身する女子軍人たち。中にも空を飛ぶ女子空軍将校の姿は、ソ連女性の憧れの的なのだ……。

久美子は、亡命して来た父と共に、ソ連に帰化し、空軍に加わっていた。女性と云っても、柄の大きいソ連人よりも、久美子の小柄な体の方が、空軍では何かと都合なのであった。久美子は中尉に任官し、超音速記録にも、何度か名前をつらねていた。

カスピ海にほど近いF飛行場に、久美子は訓練をつづけている。ソ連で生まれた彼女は父の国を知らない。でも、知らなければ知らないほど、久美子は日本を恋しく思うのだ。

偵察機に志願して、日本の上空も飛んだ。……でも、一万メートル、二万メートルという想像もつかない高度では、懐しい故国の山々も、彼女の思いを叶えるには、あまりに離れすぎているのだった。

久美子の母もソ連へ亡命して、日本に居た時の演劇の仕事を、そのままつづけて地方にいたし、父はソ連共産党から、手厚く看護されながら、久美子の幼い頃、亡くなっていたので、久美子は一人住いの気安さから、非番

の時でも、ジェット機に乗って飛んだ。

久美子は、今日も、体中にゴム管や革ベルトを締めつけて、飛行服姿に身を固め、マツハにいどみつづけるのである。

武骨な飛行服も、彼女が着けると妖しい魅力をはとばしらせた。濃緑色の飛行服に身を固めた彼女は、真紅の編上長靴をはく。くつきりとした紅の色が、飛行場のグリーン芝に映えて、居合わせた人々は思わず息をのんでしまう。

マツハは命がけの仕事。いつ殉職してもよいだけの覚悟が要る。久美子は、勲章の略綬を胸に飾ることを忘れない。

飛行機雲を尾のように引きながら、久美子

は一万メートルを飛んでいる。

「牧中尉……牧中尉……急ぎ帰隊せよ」

久美子を呼ぶ司令塔の声。

「……こちらは牧。すぐ戻ります」

久美子は、突然の呼出しに審りながら、飛行場へと機首を回らすのである。

いつもの凛々しい飛行服に、ソ連人から見れば小柄な体格の久美子は特別眺めのヘルメットをかぶって、ジェット機の中に可愛らしい唇をきりつとむすび、飛行場に降り立った。「司令官がおよびです。その服装のままです。ろしいそうです」

兵士に促されて、久美子は、ヘルメットを外しただけの飛行服姿で、司令官室へ入って行く。

「クミコ、マキ中尉だね」

「はい」

「君に今度新しい使命を与える。是非承知して貰いたい」

「は……。どのような事でも！」

「よろしい。宇宙飛行隊に入って貰いたい」

「宇宙飛行隊——と申しますと？」

「そうだ。まだ宇宙は我々人類の侵入を許して居らぬ。人工衛星も、まだ回収する処まで進歩していない。しかし、何とかして打ち上

げた衛星を軌道に乗せて任務を遂行させ、そしてもとの地上へ回収したいのだ。……それ

には、何人かの人の、貴重な生命が必要なのだ。これまでに、犬、猿、猫などの動物を

打上げて、医学的にも貴重なデータを得ている。しかし、動物では、人間の本当の生命を解剖することは出来ない。天空はるかに上げられた鉄塊の中で、人間が、どのように生き、どのようにして命を失って行くか。……あまりに、あまりに残酷な実験かもしれぬ。

しかし、いまソ連は、国運をかけてこの問題にとりくんでいる。ソ連圏何億という人民の倖せのためには一人の貴重な生命を失うことも、またやむを得ないのだ。

女性は、環境に順応する力も強い。孤独な鉄塊の中でも、男子より永く生きられる。しかも、君は、他の女子飛行隊員より身体も小柄で、狭い鉄球の中での生活には最も適していると判断される。……どうか、此の光栄ある実験に一身を捧げてくれたまえ。君の死は、全ソ連人民を奮起させ、宇宙への扉は、必ずや開かれるに違いない。君は国葬に準じた処遇をうけ、遺族には終身年金が贈られる。……若い生命を、人工衛星の中に燃やしつつして貰いたいのだ」

久美子は、唇をかねて聞いていた。

……死ぬのだ！ しかも、死体は永久に宇宙の中に飛び散ってしまうのだ。

……生きたい！

……いいえ。一生に一度は死ぬのだ。宇宙の中に消える若い命は、永遠の生命となつて生まれ代って来るのではないか。

「御奉公いたします。喜んで！」

我にかえった時は、すでに潔い返事が口をついてい。

司令官の握手に送られて、久美子に複雑な気持ちで自室へ帰った。

飛行服を脱ぎ、ワイシャツとストラックスに寛いだ久美子は、「光栄ある死」の実感をかみしめるように鏡の前に立ちつくしていた。

マルガリータが入って来た。

「お姉さま……」

きびしい軍律の中にも恋はあつた。

今年、はじめて少尉になったマルガリータが、久美子の心に食入ってしまったのだ。

軍務以外、男性から閉ざされている女飛行将校の心のいこいは、姉妹であり、クラスメートのようなささやきしかないのだ……

「マルガリータ……。私は死ぬ。栄光に包まれて……」

「まあ、そんな……」
「いいえ聞いて！ 私は宇宙の星の中へ消えて行くの。何億という人民の幸福の為に喜んで実験台になるつもりなの」

呆然とするマルガリータに、久美子は自分の決心を語るのである。……いつしか、ワイシャツ姿の久美子の手が、男のような軍服に身を固めた若いマルガリータのウエストにのび、二人は声をしのいでソファに崩れて行った。久美子のスラックスと、マルガリータの乗馬ズボンが激しく互をまさぐった。ジェット機の音が、腸を抉るように壁をふるわせ、そして遠のいて行つた。

英雄への道

実験は一カ月後に迫っていた。久美子は、その日から、特殊な訓練をうけなければならなかった。一見、アブノーマルとも見えるこれらの訓練が、久美子の生命を鉄球の中で、すこしでも長もちさせ、実験のデータを少しでも長く地上へ送るようにさせるのである。

久美子は、普通の飛行服を着け、編上げ長靴をはいた。編上靴でないと行動が不自由だし、彼女のフェイシズムが満足しないのである。

第一日目は、耐寒訓練であつた。上空の寒さは、保温された鉄球の中でも、肉体をさいなむのだ。

彼女は、ガラスばりの低温実験室に入った。飛行服の上から、縦、横に締めつけられたベルトは、或るものはチャックの間から肌に直接装備され、その一端はガラス室の外の計器につながれている。

ごわごわした飛行服姿に身を固めた彼女は

更に革の飛行帽や、チリよけ眼鏡をかけて肌を護り、物々しいでたちで椅子に坐った。ガス死刑を見るような緊張が、係官たちの間に漲つた。

担当官のスイッチが入る。

温度計は、見る見るうちに下って行く。彼女の肉体の変化をつたえる計器は、激しく活動する。防塵グラスの中に、静かなほほえみをたたえている久美子の、あの冷静な態度に比べて、この計器の針の動きの烈しさはどうだろう！

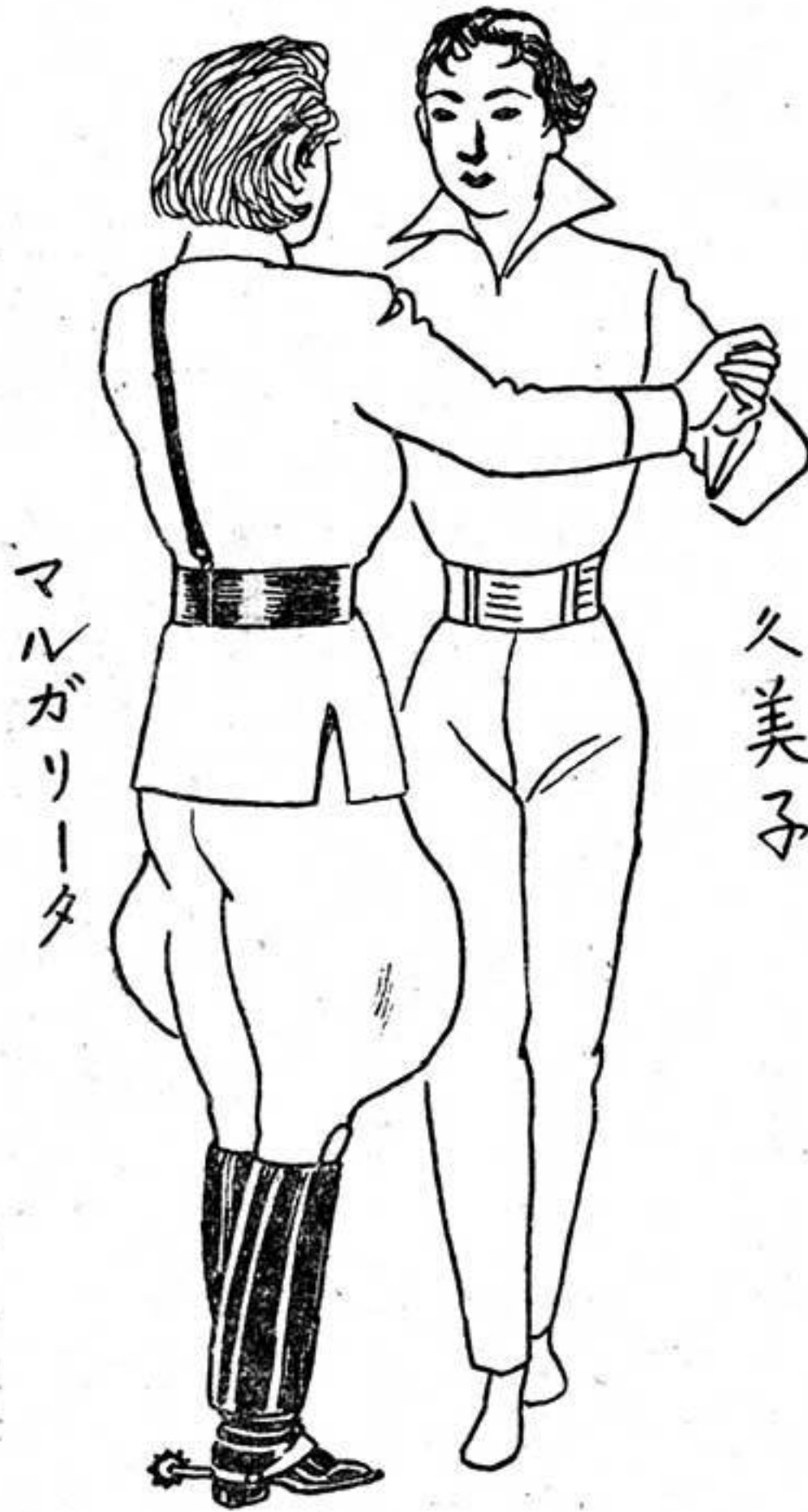
……久美子の微笑が消えた。唇がひきつり、かみしめたあとは血の気がひいている。胸に組んだ両腕の肘がふるえている。

「大丈夫か？」

担当官がイヤホンできいた。

彼女は、我に帰ったように、微笑をつくつてうなづく。……でも、その頬はすぐこわばってしまうのだ。

眠りが襲う。彼女に、自分で、右手のボタンを押す。電流が肌をつらぬくのだ。



「あうっ！」

思わず洩す呻き。

……眠りを遠ざけて、再び寒さにいどむのである。

久美子の顔は土色にかわって行く、それでも頑張っている。

ここえる指が、電流のボタンをひっきりなしに押しているのだ。

「ああっ！」

「……うっ！」

「むむうッ……」

口を開き、体をのびあがらせて久美子は悶えている。

ああ、ボタンを押す力さえ、もう尽き果てたのか……。

サイド・テーブルへ、のめるように崩れて行く久美子。

実験は大成功だった。防寒服の兵士が、久美子を担ぎ出して来た。

よくあれだけ休えぬいた、あの低温で人間が生きられるとは思わなかった、と担当官は賞讃を惜しまない。久美子は、ぐったりと担架に横たわっている。早くも彼女は英雄としての第一歩をふみ出したのだ。

一日おいて、久美子は、耐熱実験に呼び出

されていた。

彼女は、ブラジャーとコルセットなどのほかは素肌で、ゴム製の服を着せられるのだ。

この服は、オーバーオール仕立てで、流れる汗の量や成分を研究するための実験服である。ゴム服、ゴム長靴。ゴム服には、すっぽりかぶるフードがついていた。

ゴムの香りの悩ましさに、久美子は、うつとりとしながら、実験服をつけた。密閉された完全武装のゴムスタイルでは、早くも汗が肌を伝う。額からも、頬からも、汗がにじんて来た。

「ああ、もう汗をかいていますね。苦しいでしょうが、しばらくの辛抱です」

担当官は、久美子を耐熱実験室へ導く。

ここもガラス張りだが、見物人は前回より多くなって、室の外は黒山のような人である。

……若い女性の苦しむ処を見たい……潜在的なサディズムであろう。

フードに頬を包んでいても、オーバーオールのウエストをしぼったベルトのあたりから女性特有のなまめかしいさがゆれている。むし風呂を思わせる苦行がはじまった。

椅子に腰かけて、彼女は腕を組んでいる。眼に汗が入らぬように、水中グラスをかけ、

口もともゴム布で覆っている。

寒さを休える時と異り、呼吸が激しく、その度に、ゴム服が大きく波打って悩ましさをひとしおである。

久美子は、うつむいてじっと休えている。時々休えかねたように。顔をあげて激しく喘ぐ。

温度は次第にあがって行く。

「ハ、ハッ、ハッ、ハッ……」

犬のように口をあき、久美子は何度も何度も喘ぐ。

もう、ゴム服の中は焦熱地獄なのだ。しばらくのような汗、むせるような汗の香り……。

オーバーオールのズボンをつたって、汗は久美子の長グツへ流れ込む。ゴム長の中で、汗は久美子の足くびまでも沈めつくしてしまった。

「あ、ああっ、な、なんの！ なんの！」
激しい気魄をみなぎらせて、彼女は休えつづける。

気が遠くなりかける。

でも、電気ショックは肌の汗腺を収縮させ実験の邪魔になるので許されない。

許されているのは興奮剤の服用だけである。休えかねて久美子は水薬を嚥む。ああそ

の水薬さえ、意地わるくも五十度の熱さ。のどのかわきも手伝って、水薬の廻りは意外に早いのである。

……忽ち久美子は意識を取り戻した。ガラス越しに固唾をのんでいる観衆を見、そしてゴム服姿の自分を見た。ゴム長の悩ましき、さいなむ熱、好奇の目を寄せあっている観衆……。久美子の倒錯的な魂が、薬の力をかりて再び頭を拾っていた。

久美子は、はっきりと苦悶の表情になった。ゴム服の胸をかきむしり、のびあがつて腰をしごき、床に膝まづいてウエストを揉んだ。いいしれぬ興奮が、ガラス越しの観衆に伝わって行った。

……彼女は、苦しみ乍らも中止を求めようとはしなかった。イヤホンは何度も、彼女に呼びかけたが、彼女はその度に、

「ま、待って！ た、たとえば、苦しくても……失、失神……するまでは！ く、苦しくて

も……休えて、見せますッ！」

決死の形相をうかべて絶叫するのである。

計器は、あきらかに生命の危険をしらせていた。命令で実験は打切られた。

実験の終わったことを告げられるや、彼女はその場に失神した。実験室には割れるような拍手と賞讃が渦巻いた。

三日間の休養が与えられ、久美子は新しい訓練に取組むのである。

第三の訓練は、引力やショックに対する戦

いであつた。

久美子は、レールの上に小さな電動車があるのを発見した。

彼女は、この車の中にある座席に、ベルトで固く結びつけられるのであった。外傷を防ぐために、厚地の飛行服、ヘルメット、長靴と、完全武装に身を固め、じっと発進の時を待っているのである。

電動車は、無線操縦で、矢のように走り出した。

広い飛行場の片すみに敷かれたこの線路は一直線に地平線の彼方までつづき、久美子に乗せたシートの後方には、彼女の健康状態をはかるための計器と、無線装置があつた。

スピードは、ぐんぐんとのびて行った。

でも、マッハに挑む女飛行士の久美子にはスピードは怖ろしくないのである。

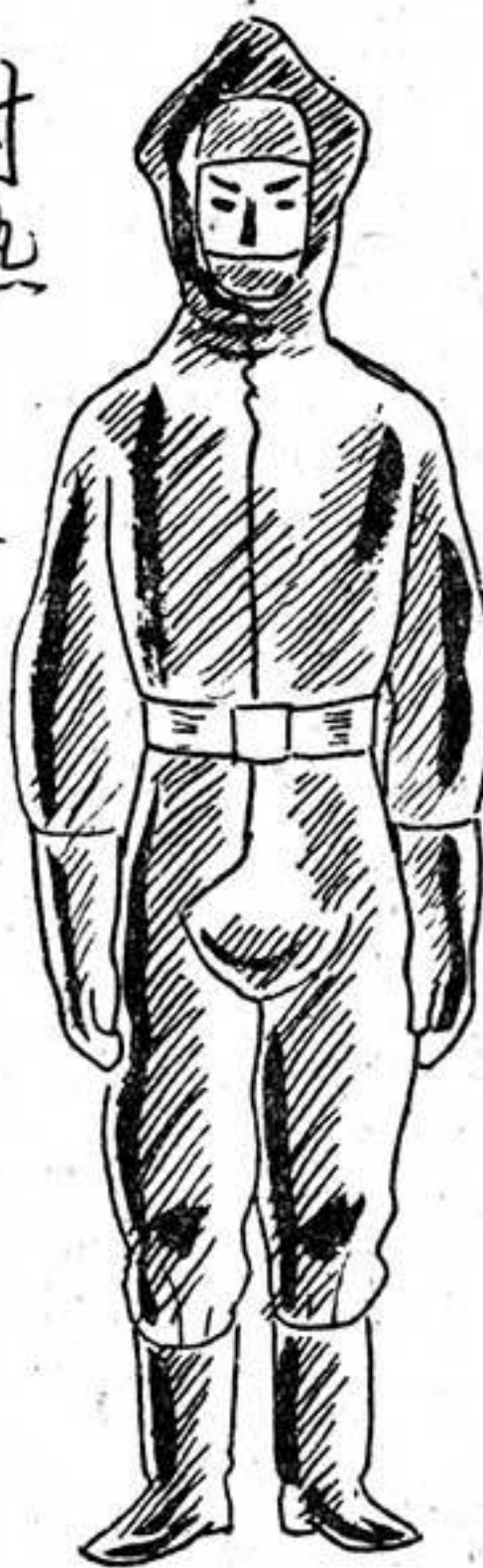
やがて、車は猛スピードで実験用ステーションの前へさしかかった。

その時！
ガクン！

激しいブレーキの音。

耐熱
訓練
ゴム衣

潜水服



「ウーッ！」

久美子の絶叫。

地上で許される最高のスピードから、突如として時速ゼロに置きかえられるのだ。

ベルトを締め、用心に用心をかさねている彼女であったが、物理の法則は無情だった。急停車と同時に、のめりかけた彼女の体は、激しくベルトで引戻され、臓腑は煮えたぎって、云いしれぬ苦しみが襲うのである。

「ウ、ウーッ……」

ステーションの係官は、彼女の口もとへ小さな袋をさしつけた。

手当てではない。どのようなものを吐き出すか、と調べているのである。

「ウッ、ウーッ、ウッ、ウッ……」

げ、げえっ、げ、げえっ！ と久美子は、得体のしれない液体を吐いた。

注射が打たれ、逆向きの椅子にくくられて久美子は、元来た道を、再び超スピードで帰て行く。

ゴッッ！

とブレーキが音を立て、久美子の体は再び激しい苦しみに突入する。

「ク、ク、ウーッ、ウーッ、ウウーッ！」

吐瀉物には血液が混っている。臓腑が燃え

ているのだろうか。

虚空をつかみ、苦痛をかみしめるように、

久美子は眼を据えて喘ぎつづけるのである。

……ベルトを外された彼女は、歯をくいしばって車を下り、そこに崩れてしまった。

担架が運ばれ、病室に横たえられた久美子の体からは、脂汗が拭いても拭いても流れ落ちていた。

空　　気　　と　　水

気圧、酸素等のない宇宙へ泳ぎ出るためには、水圧の変化を利用した訓練も必要だった。

久美子は、カスピ海に浮んだ練習船の中でゴム潜水服を着せられている。潜水夫が普通着る、あのだぶだぶではなく、ゴム製の作業服と同じ感じのもので、背中に酸素タンクを負い、ゴムで包んだフードの前に水中眼鏡を取りつけた軽いものである。

久美子はボートに乗せられ、そこから、水中へ潜るように命ぜられるのだ。

マツハに挑む久美子も、水泳は好きではなかった。でも、訓練であり、実験であれば止むを得ない。

又々重い計器と、夥しいヒモに悩まされながら、彼女はボートから縦にかけられた梯子

をつたって水中へ足をふみ入れるのであった。

水温は意外につめたく、防寒服の上から着けた潜水服さえ、刺すように感じられた。

体が重いので、彼女はぐんぐん沈んだ。水が耳もとでがばがばとわめき立て、手足は軽くなっていた。

水圧が、体をしめつけ、縛り責めを思わせるのである。久美子は、見習士官時代、先輩のサジステインで意地悪な女士官に責められた時のことを思い出していた。

……その女士官は、好んで乗馬ズボンに長グツをはき、見習の士官たちを叱りとばして歩くのだった。

「あとで私の室へ！」

云われた若い見習士官は、慄えあがりながら、おずおずと扉をたたかなければならなかった。

女士官、イリーナは、こうして、呼び込んだ女性に、倒錯的な行為をしかけた。きまって彼女は、

「ソ連女性として、軍人として、立派な死に方をするように、いつも心がけるのよ。……あなたのもごころを訊きましょう。さあ、いよいよ死なねばならなかった時、あなたは

どうして死ぬつもり？」

ときく。

若い女士官たちは、この謎はとけない。

……イリーナは、死んで行く女の苦悶の姿に興奮するのだ。

答えにつまっていると、イリーナは、

「覚悟がないって云うのかい。そんなことで、ソ連軍人と云えるの？

私が洗脳してあげる。こっちへおいでッ！」

いきなりベルトで縛りあげて、で打つ。

乗馬をたしなむというイリーナのムチは、はげしく唸って女囚の軍服を打ちのめすのである。

オーツ、ビシリ、アーツ！

オーツ、ビシリ、アーツ！

エーッ！ ビシリ！ ウーッ！

息もたえだえになるまで責められ、ベルトをほどかれると、はじめて、毒薬を嚥んだ時とか、拳銃を使うときとか、自決の作法を教わるのである。倒れ方、苦しむ時の作法まで教えこむというイリーナの情熱的な行動は、

耐寒訓練の 苦しみ



誰しも彼女を倒錯女と判断させるに充分であった。

久美子も喚ばれ、責められたが、その時、頭をかすめたのは、父母の国にあるという、あのハラキリのことであった。

責められ、のたうち廻つて、ぐったりした久美子に、イリーナは、打ってかわったやさ

しきで自決の方法を教えはじめた。

やがてイリーナの「実演」も終わったところで、久美子は、ハラキリの話を持出した。

イリーナは、眼を輝かせて久美子の話をきいていたが、もっと詳しく知りたいと云い出した。久美子は、調べて置くことを約束して部屋を出、そのまま図書館へ行った。

思えば彼女は、この時から、切腹に憑かれてしまったのだ。

出来るだけの処へ手紙を出して武士道に関する本を取りよせた。

研究するうちに、女性も、ハラキリを立派に仕遂げて死んでいることを発見した久美子は、激しく興奮し、その姿を絵に描いて楽しむようになった。

イリーナも、切腹に強くひかれ、二人は、僅かの逢瀬も惜しんでプレイするようになった。和服がないので純白のワイシャツを着、巴御前のような鎧も、男袴もないので、乗馬ズボンと長グツで代用した。

こうして、イリーナと久美子は結ばれ、そして、イリーナが、事故で墜死するまで、二人は深く深く契った仲であった。

しかしイリーナと久美子の仲は、他の士官たちに洩れ、憎まれ者のイリーナと恋仲となつた久美子の評判は散々であつた。それが、今度の生きて帰れぬ実験台に、久美子が押し上げられた原因の一つなのである。

でも、深く結ばれたイリーナとの過去の思い出は、久美子に、死の苦しみへの陶醉を教え、栄光に包まれた死を安らかに全うする自信と勇気を与えてくれたのであつた。

……こうして久美子は、しめつけるように迫る水圧の中で、イリーナを思い、あの身を灼くような緊縛や切腹のプレイを懐しく思ひかえすのである。

突然、呼び綱が引かれ、久美子の体は浮上しはじめた。意外に早い浮上である。

浮上した彼女は、全身にしびれを感じ、ボートの上でのたうち回つた。

「ウーッ、ウー、ウー、ウーッ！」

潜水病の症状だった。水深が浅かったせいか死ぬほどの重症ではなかったが、苦しいのである。ゴム潜水服を脱ぐいとまもなく舟べりをかきむしり、頬をひきつらせて耐えかねた絶叫に、

「むうーっ、むううっ、ウ、ウーッ！」
と七転八倒する凄惨さ。脂汗をうかべなが

ら、灼くようにさいなむ五臓の苦痛を、必死に耐えしのぶ健気さ。

苦しみ悶える彼女の写真は、夕刊のトップを飾り、彼女の死への苦行には、賞讃の嵐が渦巻くのであつた。

……そして、いよいよ最後の試練が待っていた。

それは、「酸素」への挑戦である。

酸素がなければ人間は生きて行くことが出来ない。では、何パーセントまでの酸素で、人間は最少限度の生活が出来るのであろう。

この実験には、アメリカの、ガス死刑室を模した室が使用された。

流石の久美子も、或いは自分は実験途上で精根つきるのではないかと思ひはじめている。

このガス室のような実験室で、自分は生命を失うかもしれない。そんな気持ちで、彼女は念入りに化粧し、真新しい作業服に、みがき上げた編上長靴を穿き、死を決して席についた。左のサイドテーブルには、液化して、注射できるようになった酸素のアンブルが積みまれ、注射器が添えてある。泳えに泳えて、いよいよという時は、これを注入して酸素を補う仕組みである。

果して、今日も見物人は超満員である。飛行帽に似た計器用のヘルメットをつけ、体中に計器のゴム管を巻きつけた姿で、久美子は微笑をうかべながら合図を待った。

中の空気が、抜かれ、入替りに、酸素の少い空気が送り込まれる。

高山へ行った時のように呼吸が困難になりはじめる。久美子は、じっと眼をとじている。室外の目盛りが、久美子の心臓の鼓動や、呼吸の異常を記録しはじめた。

彼女は、深呼吸をはじめめる。鉢の中の鯉のように、激しく喘ぐ。

長い時間のように思えた。彼女のはえぎわに脂汗がうかんだ。

ツメが、椅子のひじかけに喰込む。必死に泳えているのであろうか。

ハッ、ハッ、ハッ

と喘ぐ音が、イヤホーンを通じて流れて来る。……でも、まだ注射器は手にとらない。

作業服の胸、腹、両モモのつけねまでが、妖しく波打ち、薄れ行く意識をとり戻そうと肘かけてかきむしる爪に血がにじむ。

ああ、まだ、頑張っている。

苦しうに、苦しうに歯をくいしばっている。

イヤホーンが彼女を呼ぶ。

「マキ中尉！ 牧中尉！ 注射を打ちなさい！」

久美子は、ふるえる手に注射器を取上げた。眼もくらむのか、思う処へ針が行かないのだ。

「牧中尉！ はやく！ 牧中尉！」

彼女のイヤホーンからは、ぜい、ぜい、ぜいと喘ぐ音、注射器の金属音が、僅かにきこえるだけである。

彼女は、あせり気味に、左の腕へ針をつき立てた。

「ウツ……」

かるい呻きが、イヤホーンを伝った。

注射器の液は彼女の肉体に吸込まれて行く。

……土色をしていたその頬に、赤味がさして来た。

立合う人々の中に、思わず、ほっとため息が洩れた。

久美子は、ぐったりと椅子にもたれてしまった。

……そして、再び襲いかかる苦しみにも、休え休えた末、注射を打って耐えぬいた。

十本の注射が、彼女の作業服を朱に染める

頃、この実験も大成功をおさめて終了した。

酸素吸入をうけ、心がゆるむと共に、久美子は、作業服に紅いブーツをはいた姿のままのめるように深い眠りに落ちて行った。

燃ゆるかぎり

久美子に「光榮ある死」を約束する宇宙ロケットの打上げは、カスピ海の近くの基地で行われた。打上げる時の閃光が目立つので、打上げは白昼行われるのである。

ああ。いよいよ久美子の出発である。

目的が秘密なので、母へも遺書以外は許されず、生前に遇うことも出来ないのである。

軍人を志願した彼女のこと、その寂しさも表にあらわしてはならないのだ。

送別の宴が張られ、司令官も出席した。

彼女の胸にはソ連最高の勲章が輝き、小柄な体を軍服に包んだ足どりは平常とかわらぬ冷静さであった。

ほほえみつつ送別の辞をうけ、拍手と共に立上った彼女は、

「思いのこすことはありません。ソ連と、世界人類の発展をいのって死んで行きます。衛星の中では、生きられるだけ生きます。意識を失うまで、報告はつづけます。私は日本人

の父母から生まれました。日本には、大和魂というものがあります。ソ連に帰化したいま、ソ連のため、私の命をささげるのも、私の体の大和魂がさせるのです。私は、人類の未来の幸のために、喜んで犠牲となる覚悟です」そして、彼女は別間に入り、凛々しい宇宙服に着かえるのだった。

彼女の貴重な実験に基いて作られた宇宙服をつけ、久美子は、発射塔にのぼって行く。手を振り、大きく息を吸い込んだ。

ああ、これが地球の上で吸う最後の空気。この味、この香り、万感をこめて彼女は深呼吸している。

みんな手を振った。久美子は合図と共に、人工衛星の鉄球の中へ消えて行った。

……久美子は、整備員と握手して、自分で鉄球の中へすべり込んだ。

せまいせまいスペースだった。

打上げられてから、引力圏外へ出るまで、もし逆様になったままであつたら、などと考えた。左に酸素のアンブルがあり、右に酸素タンクがあつた。このタンクの酸素を使いきってから、いよいよという時、注射をするのである。

厚いフタが閉ざされ、一瞬のうちに外界の

騒音は去った。灯はついてい

たし、シートも思いの外楽である。ベルトをしめていると、イヤホンが鳴った。

「マキ中尉、牧中尉……こちら準備完了」

「こちらマキ中尉、発射OKです」

重苦しい地ひびき。

そして、突然引戻されるようなショック。

ああ、遂に発射されたのだ。

彼女の肉体の変化は、刻々に基地へ送られている。

もうすぐ信号以外の通信は出来なくなるだろう。イヤホンは基地のどよめきを伝えているが……。

「こちらは牧中尉……。上乘です」

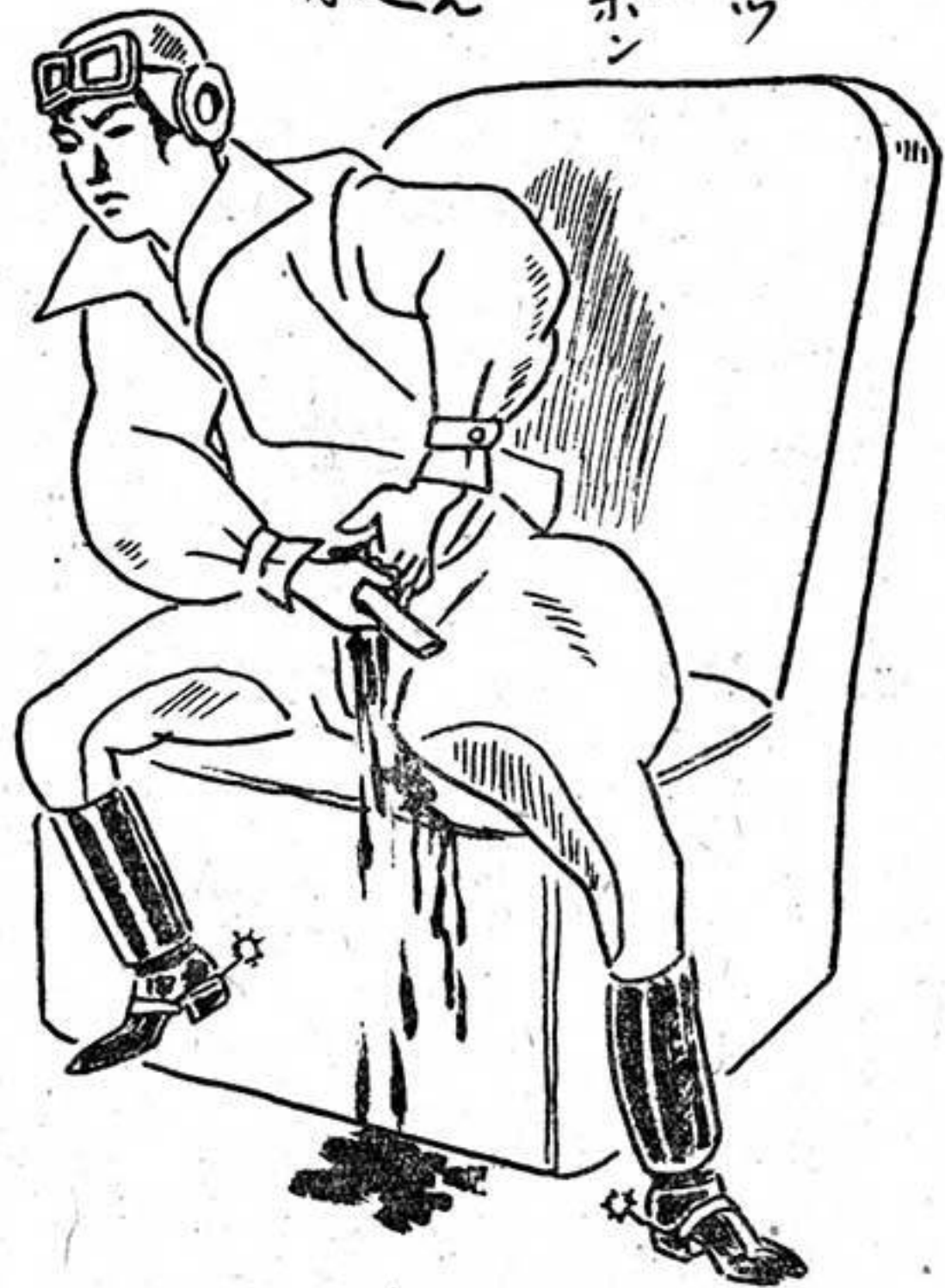
わざとピクニックにでも行くような朗らかさでイヤホンへ叫ぶ。

息苦しくなるとボンベの栓をゆるめ、寒くなると宇宙服の中へ電熱を通して暖をとる。

……何日もつか。

三日目。もうとうに空気層を過ぎて、星の仲間入り、軌道に乗ったらしい。

ワイシャツ
来馬ズボン
はきかえ
切服



さびしさが身にしみた。もう帰れない地球。しかも、密閉された人工衛星では、地球をのぞくことさえ出来ないのだ。出発の時持ってきた一輪の花も、もう色あせてしまった。

彼女は、黙ってイリーナとマルガリータの写真に接吻した。二人とも、軍服に身を固め長靴の足をお小姓のように前後にかがめた姿が美しかった。

五日目の夜半から、呼吸が苦しくなりはじめていた。ボンベの酸素も残り少い。彼女はいいよ覚悟の行動に移った。

母から贈られた懐剣を手もとにひきよせ、

右手に無電のキイを握った。

久美子は通信をはじめた。

呼吸の模様、肉体の苦痛の度合いなど、計器に現れない肉体の感触を、ことこまかに報告している。

基地からも、力のつづくかぎり通信するように要望されている。

注射を打つと、その時の精神状態については、計器では現せない微妙な点まで報告するのである。

ああ、注射も残らず打った。苦しい廿四時間であった。

「ああ、く、苦しい。苦しい……」

しびれる手にキイを打ちつづける久美子。

基地では、予想以上の成果に喜び、激励の電報が打たれて来る。しかし、この電報は、彼女の安らかな死を妨げるのである。

「あ、あと半日……。半日生きて！」

鯉のようにあえぎながら、歯をくいしばって報告をつづける。

「あ、ああ、シ、死にたい。く、苦しい。

……苦しい……」

脂汗とたたかいながら彼女は自分の限界を見出そうと必死である。

薄れ行く意識……。精神の限界は此の場合肉体の限界でもあるのだ。

気をたしかに！

彼女は自分に云いきかせる。

……ああ、でももう酸素は殆どない。ポンベの酸素は最期のために僅かでも残しておきたい。

最期のために？

そうだ。彼女は、最後の酸素を吸いながら切腹して大空の華と散る覚悟なのである。

薄れ行く意識の中で、彼女はキイを打つ。

告別のキイである。

彼女は、この後、計器に異常な反応が現れるかもしれないが、これこそ牧久美子の自決の苦悶とお察し下さい。自決の方法は切腹。腸を剖き、多量の出血に致命傷をもとめる大和撫子の断末魔を記録にのこして下さい。

と打った。

祖国はソ連でも、日本人の血をうけた久美子は、その二つ乍らに忠実でありたかったのであろう。ソ連につくし乍ら日本の作法に殉じようとする女士官の健気な心意気……。

呼吸もせまった。

これまでと久美子は、酸素ポンベを全開した。淀んだ空気は一瞬にして甘美なメロディを奏でる。

ほっと息をついた久美子は、部厚い宇宙服をぬぎすてた。縦横にゴム管を巻いては居たが、下には純白のワイシャツと乗馬ズボンに身を固めた思い出の死装束があった。

シートの下から乗馬靴を出して穿き、寒さを休えながら再び元の席に坐る。

イリーナ、マルガリータの写真が、彼女の最期を見つめているのだ。

久美子は、巴御前の切腹を心に描く。

軍装で白無垢の肌衣を押しひろげて……。

久美子は、ワイシャツの前をひらく。

懐剣はハンカチを巻きしめて右手に握られている。

酸素を使いきらぬうちに、はやく！

突立てかねて何度も呼吸をはかった。

「ううっ！」

乗馬ズボンの膝がふるえた。腰かけた不由な姿勢ではあったが、彼女は正しく左脇腹を突いていた。

基地から無電が入ったが、もう彼女は打ち返すことは出来そうもなかった。

「ううっ！ ……あああッ……」

純白のワイシャツに血がしぶいた。基地の計器の針は一せいにゆれていることであろう。

基地の無電は、一斉に牧中尉ががんばれと打ちはじめた。

無電に励まされつつ、久美子は刃を右へと引回すのである。

「ウ、ウウッ……ム、ムムムッ！」

無電は、しっかりと、と打っている。

久美子は、じりじりと刃を右へ切りすすみ乍ら、

「く、くくくくくッ！ ウウッ！」

歯をくいしばって腰をうかした。

血が、堰を切つて流れ落ちた。

臍下一寸を切つて刃は右脇に達し、深い傷口から臓腑が覗いている。

久美子は、左手に刃を抑え、右手にキイを取った。血みどろの右手が、キイをたたく。

乱れがちではあったが、彼女の右手は、

「ソ連万歳」

を打っていた。

基地からは折返して、彼女が遣したデータの数々が、人類の発展に偉大な貢献をなすことを信ずる旨の首相のメッセージを打って来た。

懸賞募集

原稿

〔告白と手記と体験〕

★賞金★

優作 一篇に付 一万円

秀作 一篇に付 五千

佳作 一篇に付 二千円

選外 本誌三月分贈呈

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数には制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」とエンピツで書いて下さい。
- 一、締切は別に定めません。入選作は最近号より順次誌上に発表いたします。
- 一、賞金は掲載一ヵ月後にお送りします。

彼女は満足気にうなづき、やがてもとの苦悶の表情にかえるや、渾身の力をこめて刃を上向きに切り上げた。

「ウーッ！」

「ウ、ウーッ！」

彼女は、全身を硬直させてのけぞった。

肝臓へ切込み、血は音を立てて傷口を吹きあげた。内臓が溢れ、彼女はただ、

「ウーッ……」

と云ったきり声も立てられぬ苦しみ。

血が床を這い、乗馬ズボンも、乗馬靴もワ

イシヤツも、朱に染まった。

「牧中尉、牧中尉……」

キイが呼んでいる。

「ウ、ウウム、ウウムツ……」

久美子は、右手をのぼしてキイをとった。

……もう駄目だった。キイは空しく断続音を送るだけであった。

そして、忍び寄る酸素の欠乏……。

「ウーッ！」

何度も呻いて久美子は虚空をつかんだ。

吸う空気には、すでに酸素がない。深傷の苦しみは奔馬のように迫って来ている。

彼女の肩は、激しく喘ぎ、乗馬ズボンの両ヒザは揉み合うようにうねうねと悶えていて

いる。

力つきて、彼女は床にくずれる。

血の海の床に、久美子は蛇のようにのたう

つのである。

キイは通信をやめた。基地の無電だけが、「牧中尉、牧中尉」と打っている。まだ生きていることが計器を通じて確認されているからだ。

ううっ、ううっ、ううっッ！

血の中で久美子が力つきたように呻く。

シートにすがるようにしてのびあがろうとする久美子。そして、その動きが、彼女の、牧久美子中尉の最後の力を奪ったのだ。彼女はシートをかきむしり、

「むうううっ……」

と呻き、そして床に崩れて行った。

基地は、牧中尉の死を知った。

通信は打切られ、彼女以外のことを知るための装置だけが残された。

床に崩れ落ちた彼女の遺体が、今後どのようになるのかは誰も知らない。

でも基地は彼女の死を乗り越え、新しい事実をもとめて主なき衛星からのデータを読みつづけている。

科学の非情さ。マツハの魅力に憧れた牧久美子は、非情な鉄球の中で、科学に殉じて行った。そして、いまでも、彼女の凛々しい死顔を包んで、人工衛星は地球を回りつづけているのである。

(終)

異端者の道

— 続・夜は知っている —

夏が来た。資材置場に赤さびた鉄くずが、

まぶしい陽ざしを受け止めて灼熱した。倉庫の周囲を取りまく雑草の背がグングン伸びて、ムッと鼻をつく草いきれが、側を見る人

人の足をすくませた。組合本部のトタン屋根がギラギラ輝いて、黒いコールドタルがじわりと融ける。



千 草 忠 夫

組合は今ストに入っていた。

躍進を続ける化学工業界にあって、ひとり姑息な弥縫策に今まで息をつないで来たK化学工業は、この春新しい経営陣を迎えて、遂に合理化へ踏み切ったのだ。今までの無為無策の期間が長かっただけに、それによって生ずる反動も大きかった。そして、その第一波が女子工員と職員の大量減首となって組合側をおそって来たのだ。

組合側はこれまでの会社側の経営不合理のしわ寄せを従業員にかぶせるものとして、断固解雇の要求をはねつけると共に、盆をひかえてのボーナス支給、二千円のベースアップを要求して巻き返しに出た。それに対する会社側は、今日まで経営の合理化をある程度おさえてまで、工員の減首を極力さけて来たのは、組合の意見を尊重したからである。しかし、事ここに至っては、日進月歩の化学工業界におくれを取るばかりで、結局は従業員にとって不利をまねく事になる。会社百年の繁栄を計る為には、今大英断をもって新しい会社経営に踏み出すより他にない、と主張した。

こうして両者は真向から対立したまま、すでに二週間目をむかえている。大きくひるが

える赤旗にも、ジグザグデモのあがる喚声にも、心なしかあせりと疲労の色がうかがえた。組合本部は、プラカードとアジビラの山の中に、次第に苦悩の色を濃くして行った。早くも第二組合結成の声が、ひそかに聞かれるのである。

「今度の会社側の巧妙な点は、減首の対象を女子にだけ限った事なのよ。女の子は結婚すれば止めるという一札を入社する時に会社側に出している。それで、今度みたいに、退職金を普通の五割増しにして話を持ちかければ、ちよつとした女子は皆よろめくとして女子は皆よろめくという事を見越してやった事なんだわ。その証拠に、こちらがいくら会社側の個別説得に耳をかすなといっても、金ほしさに退職しようという者がぼつぼつ出て来ているじゃないの。第二組合が退職金の率を良くして、会社側と妥結しようという意図のもとに暗に工作しだしたのもその為だと思うわ。このままじゃ、このストはこちらの負けね。何とか方法を構じなくちゃ。新しい指導方針を立てるか、第二組合の要求に近いものに要求を変えるか。どちらかにしないと、両者のはさみ打ちにあって、のたれ死にって事になってしまうわよ」

女子部長の道下キミは斗争委員長にまくしたてる。委員長としてそれを知らぬわけではないが、作戦の転換をいかにこちら側に有利に、しかも相手に弱味を見せないで行うかが問題になるのだ。連日の対策協議会にもかかわらず、これといった確実な戦術が浮んで来ないのだった。

「矢張り、会社側への歩み寄りを見せて、第二組合の結成を極力防止する方が第一なのじゃないか、分裂した組合はみじめだからな。二千円のベースアップの要求は撤回して、ボーナスと退職金の増額とにしぼるか」

委員長は同意を求める様に一座を見廻す。「分裂を極力さける事は、根本問題だから賛成ですけれど、退職金の増額だけど、会社側の首切り対象になっている者を、全面的に呑むのは不賛成です、なぜなら――」

キミは周囲を見廻して、意外に白々しい男性委員達の態度に戸惑った。

「なぜなら、これは今度の場合だけに限られていないからです。会社側は第一に私達の弱点を突いて来た。そしてそれに成功すれば、――たとえ退職金を少し多く認めたにしても、――必ず第二次の整理に着手するに決まっています。今度のは工場のオートメーション化

で、対象となったのは女子工員が主ですけれど、次の整理は必ず男子の工員更に男子の職員にかかって来ます。事務系統の合理的運営は、一般の大勢ですからね。新しい事務機械、電子計算機が、新しい職員と一緒に乗り込んで来るに決まっていますわ。だから、今度の場合はもっと強く出て、弱味を相手に見せない様にしなきゃ駄目なのよ」

キミを含めた五人あまりの女子委員が、何故か浮き上った様になってしまった。一座は白けかえった。正論はとかく無視され勝ちなものだ。幹部には、目前の事態の收拾が何よりも先決問題だったのだ。キミにしても自分の理論を具体化する方法を持ちあわせていなかった。偉そうな顔をしていながら、妥結を内心は急いでいる男の幹部連中に反抗して見たかったのだ。キミは一同の沈黙にあって唇をかんだ。

それにしても第二組合の噂は本当なのだろうか。これは誰の胸にもある事だった。若し本当とすれば、今ここに何食わぬ顔で出席している委員達の中に裏切り者がいる筈だ。男か、女か。そんな疑惑をお互に胸に抱いていては何も出来る筈がない。その事を、どうして誰も言い出さないのだろう。

キミは男達の方をねめまわして、心の中で「卑怯者」と叫んでいた。

会議はその夜も何の成果も得られぬまま、夜更けて解散になった。

二

駅前の商店街を左へ折れると、今までの明るさになれた眼は急にめくらになる。月もなぐどんよりとよんだ空気が、汗をにじみ出させる。キミは、所々にポツンと街灯が赤ちやけた光を投げかけているだけの、ひっそりとした住宅街を足ばやに抜けて行った。

もう十時を廻ったろう。いつもならこんなにおそくなった時は駅からタクシーをつかまえるのだったが、今日は、乗物にはたえられない気持だった。会議の時の腹立たしさが、整理もつかないままに頭にウズを巻いていく。出来る事なら、どこかそこら辺にうずくまっていってぐっと考え込んで見たい気持だ。キミは、酒で悩みを忘れるという事にはなれていなかった。女はみなそうかも知れないが――

(小夜子――)

こんな時に小夜子の白い肌に思う存分鞭を当てたら、いらだちなどどこかへ吹き飛んでしまふんだが――

愛する者を失った悲しみが、淋しさが、こんな時にフツと頭をもたげて来る。

あれから小夜子の顔は見えていない。又、見られるものでもなかった。キミは、俊介に約束した様に、悲しみに良く耐えた。胸をむしばんで来る孤独を、組合の仕事に熱中する事によって忘れようとした。その熱中も今となつてはヒステリーと他人に見られる結果をまねいたに過ぎないが。

小夜子が、あの直後退社したいという事は噂で知った。

「研究室で同じだった俊介さんと婚約したんですって。小夜ちゃんも、スミに置けないわね」と、やきもち半分で陰口をきき会う女子職員に、カッと気持ちが高ぶるのをどうにか押えた事もあった。

(小夜ちゃん)

キミは我を忘れて名を呼んだ。にくしみはなく、なつかしさが胸一ぱいにひろがっていた。

人通りの絶えたアスファルト道を、キミは頭を垂れ、ハイヒールのかかとを思い切り踏み鳴らして歩いた。

カツカツカツ

鋭く響いては次の瞬間に闇に消えるその音

に耳をすます。

(ああ、この音の様に清らかで激しくて、それでいて心に響く様な生き方をしたい)

何かドロドロした不潔な今の気持ち、組合の連中に吐きかけられるきたならしい毒気。そんなものから抜け出したかった。

ふと、キミは足を止めて顔をあげた。

ヘッドライトが道一ぱいに拡って、こちらへ突進して来る。一瞬、二つの大きな眼玉が自分におそいかかって来るかと錯覚した。

アッ

キミはタイトスカートの足をよろめかせて傍へ寄った。強い光に眼先が真暗になって、顔をおおったまま、そこにうずくまった。

(ひどいわ——)

そのまま通り過ぎる筈の車が、するすると徐行して来た。あつという間もなかった。扉が開くと二人の男が飛び出して来て、うずくまっているキミにおそいかかって来たのだ。叫び声をあげるヒマもなく、口に加えたハシケチの鼻をつきさす薬品臭に、キミは男達の腕に沈んでいった。

地平線が遠く遠くかすんで、空も陸も淡い水色の中にとけ込んでいる。足元には名も知

れぬ草が、細かいピンクの花を一面につけてどこから来るのか、やわらかい陽光に喜びの声をあげているかの様。

キミは、まるでそよ風の様に体をなぶる薄ものをふわっと身にまとい、その草原から、次第に次第に身も軽やかに浮んで行く。下界がかすんで、抜ける様な水色の空の中に体もろともとけ込んで行くようだ。

フト気がつくと、自分の右腕に同じ薄ものを身にまとった小夜子が、軽々と抱きしめられている。二人はニッとほほえみを交した。いとしさがつのって、更に固く抱きしめようとすると、カチッと手に固くふれるものがあった。

アッ。

眼をしばたく間に、小夜子の着物はどこかに消え、素肌に金色の鎖を巻きつけた。いたましくねじれた肉体が現れる。

(小夜ちゃん)

鎖は小夜子の首からつま先まで、寸分の隙間もなく白肌をしめ上げて、グッタリとなつた小夜子の眼が、白く光ってキミを見る。

あ、ゆるして——

思わず手をゆるめる。スーッと小夜子の体は下界に落ちてゆく。点の様に小さくなつ

て、やがてフツともやの中に消える。

あたしも行くッ。

下に降りようとして、いくらもがいても、上に上っていくばかり。

そうだ、この着物が邪魔しているんだわ。体を離れた薄ものは二度三度ひるがえったかと思ふ間に、吹い込まれる様に天空の一点に消えていった。

さあ、これで小夜ちゃんの後を追えるんだわ——

今は身にまつわりつくものもない四肢をのびのびと張って、キミは小夜子の落ちていったあたりにダイビングした。

風が急に吹きつって来た。黒い雲が古綿の様に乱れ飛んで、ダイブしていくキミの身を宙にもてあそぶ。キミの体は横転し逆転し果てはキリモミになって、もう落ちていくのか、昇っていくのか我が身にもわからなくなってしまう。

冷たくねばりこく黒雲は、いつしかキミの自由を奪っていった。疾風がキミの長い髪を吹き散らして、眼が引きつった。

次第にもうろうとなっていく意識の下で、キミは悪魔の嘲笑を聞いた。



三

「どうやらお眼覚めのようですぜ」

どこか遠くの方で声がする。覚めたくないという気持ちと、むかむかする胸のうずきが苦しい戦いを続けた後、キミは呻きをもらしながら、ようやく頭をあげた。視界がかすん

で、ゆれ動く世界が嘔吐をさそった。

「おい、ねえちゃん、しっかりしなよ」

容赦のない半手打ちが、キミの両頬に飛んだ。

アッと、頬をおさえようとした手が動かなかった。キミは冷水をあびた思いで夢の世界から現実に取りもどされた。そして、自分の

今の姿を知って、二度目の恐怖の聲が喉をついて出た。

胸が苦しいのは、二重に椅子に縛りつけられていた為だ。腕が動かなかったのは、これまた椅子の背に廻して後手に縛りつけられていたからだ。

「あなた達は何です。ほどこいて下さいッ」

キミは瞥を決して、眼の前にただずむ三人の男をにらみつけ、身を振りほどこうともがいた。

「まあ、ねえちゃん。静かにしねえ。ちょっと痛めつけ過ぎたかも知れねえが、おとなしく話に乗ってくれば、すぐにでも解いてやるぜ、え？」

三人の中の頭らしいのが、前に立

って云う。

「いったい、このあたしに、どうしろとおっしゃるんです」

キミは無駄な足掻きを止めて問うた。怒りはおさまったわけではなかったが、話合っすむ事なら、早くやって、自由になりたかったのだ。

その男は椅子をキミの前に進めると、あらたまった口調で切り出した。

「はっきりと言おう。組合の活動を止めてもらいたいんだ」

アッとキミは息をのんだ。そうだったのか。これは会社側の陰謀だったのか。それとも第二組合の策動かいずれにしてもこんな暴力団を雇える程の組織力を持った者にはちがいない。

「お前達が、ちょこまかと動き廻った所で大してコタえるわけでもないが、何せ、もう三週間だ。そろそろ切りあげても良い潮時じゃないか。委員長はじめ男の委員の方は大分妥協案にかたむいているというのに、お前ら女子委員が、あくまでもウンと言わない。これじゃあ、何時までたつたっておさまりがつく筈がない。」

会社側でも幾分折れていることだし第二組合の案に近づいて、手を打たれないか。お前さえウンと云えば、後の女ならどうにでもなる。お前が女子委員の指導者らしいからな」

聞きながらもキミは怒りで体がふるえた。蒼白に変わった頬がヒクヒクゆがんで、全身の斗志が眼に集中して光って来た。

「勝手な事おっしゃるわね。このあたしをこ

んなに誘拐しておきながら、話もないもんだわ。そんな話なら、あたしを自由にした上で、対等の立場で交渉して下さい」

「はは、これは失礼、つい今までのクセが出てね。——いや、ナニ、ジタバタされるとやっかいだからね」

「こんな事されて、誰が要求など聞き入れるものですか」

「それぞれ、そう居丈高になるから、そんな痛いめにあうんだよ。話はもうわかったらう。交換条件はお前を秘書課へ抜てきする事だ。どうだ悪くはあるまいが」

「いやです。お断りします」

「ハッハ、勇ましいね。おい、ねえちゃん、勇ましいのは大いに結構だがね。もう少し落着いてあたりを見てみたがいぜ。ここは俺達の巢なんだぜ。ピンピンした若い者がウヨウヨしている。この俺が指一本右へ動かすか左に倒すかで、おめえの体はどうにでもなるってえ事を忘れちゃいけねえぜ」

「ホレホレ、聞いて見ねえ、聞えるだろ」

ようやく事態の重大さを身にしみて感じて来たキミは恐怖に引きつった顔をもたげた。その耳に遠くから絹を裂く様な女の悲鳴が長く尾を引いて響いた。また、そして更にもう

一度……。

「こ、このあたしを、どうしようというのです」

「百聞は一見にしかず。行ってみるか」

いましめを解かれたキミは、男達に両腕をつかまれて歩いた。足がへたりそうになるのをやっと支えた。地下室なのか、壁に湿気がにじみ出して、不気味な模様を浮き出している。

「さあ、ここだぜ」

突き飛ばされる様に中に押し込まれたキミは、アッと驚きの声をあげて壁にへたへたともたれ込んだ。

白い肉体が二つ、電灯の赤ちゃけた光の中に、テラテラと脂汗に光って、ブラ下っていた。床から三十センチばかり宙に浮いたつま先から汗がしたたり落ちて、体がゆらりゆらりと揺れ動くにつれて、床の上に汗の縞模様を描いている。

両手を肩先まで捻じ上げられて、吊り下げられているのだ。

「おい、見ろよ。知っているだろう」

髪をさんばらに乱してうなだれている一方の肉塊を指さすと、その髪をつかんで、グイと仰向けた。

アッ。

まぶたを閉じ、食いしばった口元から血をひとすじたらしたその顔は、女子工員中から選ばれて、組合の委員をつとめている相沢という女の子だった。まだ二十位だろう。

「フフ、むこうの奴も、おまえの顔見知りの

女斗士様だぜ。ちよつと二、三発お見舞いすると、すぐこれじゃあ、斗士が聞いてあきれるがね」

頭の男は、セセラ笑ってキミの胸ぐらをつかんで引きずり起した。

「おめえもこんな眼に会いたいか、え？ 何とか返事をしたら

どうなんだ」

キミは小突きまわされながらも、ぶざまな裸体をぶらさげられている二人の同僚から眼が離せなかった。

言いようのない挫折感と、突きあげて来る熱い衝動に、眼の前が真暗になって、キミは氣を失ってしまった。

「フン、行っちゃまやがった。おい、今のうちに裸にして、ブラ下げてし

まえ。ちったあ薬になるだろう」

キミは手首と胸元にキシキシと食い込んで来る苦痛に正氣を取り戻した。

スリッパ一枚に剝がれてツリ下げられた眼の下に男達の好色と残忍をあらわした眼があった。

「むむ……」

「苦しければウンと言え。そら、お前の相棒たちは、もうウンと云ったから、大事にされて家へ帰ったぜ」

見ると、さき程の二人の女のつるされた姿はなかった。これは男達の畏かも知れなかったが、彼女にはそんな事を考えて見る余裕はなかった。

肩から先はもう感覚を失った。豊かにふくらんだ乳房の上下に廻された縄が、十五貫の体重にきしんで、グリグリと白い肌に食い込んだ。胸が締めあげられる為、血が頭にのぼり、眼が充血して来た。

「むむっ——ああっ」

弱味を見せてはならないと氣を引きしめる後から、呻きが喉を押しやぶつてもれる。

「どうだ。肩の骨の外れない中に、ウンと言った方が身の為だぜ」

男は云って、キミの体をグイと押す。宙に





浮いた体は、何の抵抗も示さず、独楽の様にまわった。縄がよじれて、キミを締めつける力が一層強められる。

「ヒューッ」

髪をさんばらにしてのけぞるキミのひたいから、あぶら汗が、パラパラとあたりに散った。

「強情な女だな」

その声には、むしろ楽しむようなひびきさえある。ニヤリと笑うと、煙草の火をキミのヒクヒクふるえているつま先に近づけた。

「ああっ、あッッ」

エビの様に縮めた足の反動が、体全体を大きくゆさぶり、つり縄がビュンビュンうなつて震動を伝えた。

うすじのナイロソ・スリップが汗とあぶらにピタリと体にはりついて、成熟した女のふるいつきたい程の曲線が苦痛によ

じれるのをあらわに見せている。干からびた唇が痴呆のように開いた。

苦痛に混濁した頭の中で、何かが大きな音をたてて崩壊した。

キミを、これまで支えた来た女としての、インテリとしての、正義を闘う組合委員としての、その他彼女の生活を支えていたすべての誇りが一度にくずれ落ちたのだ。それは微妙な心理的転向だった。

あたしは裏切り者になって復讐してやる。

誰に？ そして又何に？ と聞いたら彼女

はおそらく答に窮したろう。

キミは小夜子を失った後の空虚を、おのれみずからを汚辱の立場に落す事によって、満たすという裏返された満足に達したのだ。

締めあげられて飛び出しそうになった眼をカッと見開いて、キミは口ばしっていた。

「ぶって、ぶってッ——早くッ。どうにでもしてッ」

男達はこの変化に一瞬、けげんそうな顔を見合せたが、中の一人が口をゆがめると鞭を持つ手にペツとつばをはきかけた。

ヒ——イ……ウワ——

白い肉体が、うなりを立てて降ちかかる鞭に汗をほとばしらせて疼れんする。

「どうだ、満足したか」

男達が振子の様に大きくゆれるベトベトの体をつかんで静止させる。

「いい加減にウンと云え」

キミは髪の毛がへばりつき汗のたれているあごを引いた。

それは、異端者の歩む暗い悲しい道への出発を肯定する事に外ならなかった。

四

一同の祝福の言葉を後にしてビュイックは

披露宴場を後にした。

運転する新郎の俊介とそれに寄りそう花嫁の小夜子。後のシートには花束がうず高くつまれて、しおれかかっている。今の二人には花よりも、お互の手と手が要るだけだ。

市街地を抜けると、一直線に伸びる一級国道が二人の前途を暗示するかの様に拡る。爽やかな秋風が窓から忍び込んで、ほてっている二人の頬を冷やしてくれる。

やがて海岸ぞいの道に出た。俊介は車を砂浜へ乗り入れてとめた。波がキラキラと光を放ち、潮の香が車内にあふれる。

俊介が小夜子の肩を抱くと、唇が自然に合った。

「さあ、手を出して。プレゼントをあげよう」

「あら、今ごろになつて？」

小夜子ははしゃいで言った。

それは金色の腕輪だった。一対になつていて、右手の手首につける。

「あたし、腕輪って、片手にだけつけるものと思つてたわ。両方つけると何か変じゃない？」

小夜は腕輪のはまった自分の両腕をしげしげ眺めて、フトつぶやく様に云った。

「これは、こうするのさ」

左右の輪を合せて、ちょっとひねるとカチッと言がした。二つの輪は離れなくなった。「あらッ」

小夜子はそれが何の為のものであるかを了解して、見る見る頬を染めて、うつむいてしまった。

「手枷だよ。ねえ小夜子、君は僕の妻だろ？」

俊介は恥かしさにすくんでいる小夜子の肩をそっと抱いて、ささやきかける。小夜子はコックリをする。妻という言葉が更に羞恥をかきたてる。

「そうなら君は僕の可愛い奴隷だろ？ え」

この飛躍した論理は二人だけのものだ。

「でもでも、これじゃあんまりです。人が

……人が……」

小夜子は俊介の膝に突伏して哀願を繰返した。

「結婚指輪には、妻を夫の意志で縛るという意味があるんだよ。結婚の時、女がよろこんで指輪を男からはめてもらうのは、夫になる男に、身も心もまかせるといふ事を認めるからじゃないのかな。僕はあんなにちっぽけな指輪の代りに、これにしたんだ。これなら僕達の結婚生活を象徴するのに、ふさわしいからね。これを外す方法は君には云わないでお

こう。しかし君一人では絶体に外せない様に出来ている。いつか外す方法が自然に君にわかったにしても、僕が外もしないのに、それが外れていたとなれば——これは君の不貞を意味する事になるんだ」

優しいが厳しい俊介の言葉に、小夜子は反撥の言葉を失った、手枷がいやなのではない、それから温泉宿についたら、他人の目にこれがどううつるかという事がこわいのだ。(でも——でも仕方ないのだわ。あたしは俊介さんの妻——いいえ可愛い奴隷なんですもの)

小夜子は又何時しか甘い想いに溺れ込んでいった。

二人の唇が再び重ねられた時は、俊介を抱く事を止められた両手が、もどかしげに手枷をカチャカチャと鳴らした。

俊介は車をスタートさせた。

食事を片付け終ると女中は「お蒲団はお隣りに敷いておきました」と俊介に小声に告げて退出していった。

宿の玄関に降り立った時、合わさった両手にコートをかけて、どうにかごまかしたのだったが、心配するまでもなく部屋に通される

と俊介も女中の眼をはばかりか、自由にしてくれた。

もう九時はまわったろう、こうして二人だけで向い合っていると、さすがに小夜子は羞恥に体が熱くなって来るのだった。

そんな小夜子を俊介はこよなく美しく愛らしいと思った。入浴して間もない髪はつややかに黒く、さしうつむいた襟あしの白さと対照的に高々とアップに結びあげてある。盛りあがった胸、兵児帯でキュツとくびれた胴から、グツと横に張った腰。これらが、皆自分のものなのだ。俊介はこみあげて来る熱い衝動と戦った。

フト、キミの事が思い出された。

ストは失敗に終り、キミは退社した。そこまでは俊介も小夜子に話した。しかし、小夜子に話してない事があった。キミが或るやぐざの情婦になったという噂だった。俊介はこれが単なる噂である事を願った。自分が小夜子を奪ったのが原因して、キミがそこまで落ちたとは考えたくなかったのだ。小夜子には勿論知ってほしくない噂だった。

あの高貴な姫を思わせたキミが、やくざの情婦になったとは――

俊介は、いつしか、その考えに興奮してい

る自分を見出した。

激情が彼をおそった。

「おい、着物を脱げ。グズグズしないで脱ぐんだ」

小夜子はハッと後ずさった。俊介の狂暴な眼を見て抗弁の言葉も口の中に消え、よろよろと立ち上った。

帯が輪をかき、浴衣が、スリッパが足元に散った。

「それもだ」

これまでのブレイでもパンティとブラジャーだけは着ていた。はじらいに真赤になってうつむいた小夜子は、ふるえる手でブラジャーのホックを外した。

形よくふくらんだ乳房が、頂点に薄紅の薔薇を散らした白桃の様に、生まれてはじめて男性の眼にさらされた。

「坐って、両手を後ろに廻せ」

小夜子は素直に動いた。これから、妻としてのブレイが始まるのだ。白い奴隷として調教されるのだ。羞恥の底から妖しい期待が芽生えを見せていた。

用意のロープは、初夜を記念して新品だった。あぶらににじまない、繊維がチクチクと柔肌にささった。

高々と背中に吊られた両手。上下をロープにくびられて鋭角をなして突き出した乳首。いたいたしい首繩。

蛍光灯のまばゆさの中に、ロープにいましめられた白肌をさらして、やがて、小夜子も我を忘れて行った。

「立て。とっとと歩くんだ」

縄尻を取られて、小夜子はよろめき歩き始めた。

「キミはやくざの情婦になったんだぞ」

「ええッ？」

「異端者が愛を失えばどうなるか、よく考えて見ろ、お前に、この俺という男がいなくなった時の事を考えて見ろ。百人に一人もない、この俺の鞭を縄を受けられる幸福に感謝しろ。さあ言うんだ。俺の足に接吻して言うんだ。いやしい奴隷の小夜子は、御主人様のお言いつけに従い、死んでも違約することはございません、と――」

小夜子のつぶらな瞳から、水晶のような涙が二つ三つ浮かび上って、ツツと頬で糸を引いた。

アブ雑誌雑感

《馬化狂通信》

倉仁成人



一、私の我田引水論

奇ク誌も一般書店の店頭販売となり、今やアブノーマル出版物は花盛りである。雑誌類にしても西に老舗の本誌あり、東には裏窓誌や風俗奇譚誌が出版され、更にそれらの別冊

が続々と発行されている。この事は我々にとって非常に喜ばしい事であるが亦一方恐い事でもある。

私は御存知の通りの乗馬女性の崇拜狂だが最近の本誌は旧号に比べても見劣りしないようになつてきたところか、マゾ的な、特に女

性乗馬に就いての記事やグラビヤが多くなつたのは旧号以上で、見る者の立場は夫々異なるとは云え誠に楽しい。

然しながら、大勢はサド物でしめられて居り、グラビヤは所謂縛り物と称されるもので殆んどが埋まっている。勿論これは何も本誌だけの例ではなく、他の雑誌ではその傾向が尚更極端である。確にこれら雑誌の読者の九割は縛り物を好むサド傾向のものであり、残りの部分が種々雑多のものである事はおよそ察知できる。

週刊誌、テレビ、映画等に於いても何々残酷物語、ビート族、ファンキー族或いは怒れる若者の何とか、と云うどぎついものでおおわれている現在、それは当然の事だろう。だからサド的傾向の読物の流行る所以はそこにあると思われる。

まさに縛り写真がいっぱいなのである。

各誌はこの為自然と新らしい責めのアイデアア開拓に余儀なくされ、競ってそれからそれへと別冊や特集の発行に余念がない。そしてそれが良い方向？に発展すれば兎も角として次第に悪どく、血腥ぐさい残虐な方向に進むとするならば重大な結果になるのではないかと云う気がする。中にはそれらに影響され

て実際に罪を犯す大馬鹿者も出て来ないとは断言できぬであろう。

現在テレビ、週刊誌に対する批判が高まり、NHKテレビでは殺人シーンの締め出しを行っている有様であるから、その他に於いても徐々に規制されていくのではないかと思われる。各種のアプ誌がうっかり、この世の中の風潮にのって更に悪い物を出したならば、亦々我々は数年前の憂目に遭わねばならなくなってしまうだろう。あのように辛い思いは一度で沢山である。

その点マゾ物は、そのような心配はあまり気にする必要はな思われ、亦実際にマゾ物の影響によって事件が起されたと云う事は、自虐による自殺事件（本誌昭和三十年五月号のグラビヤが特にとりあげられた）を除いては私は未だかつて耳にした事がない。ましてやそのマゾの中でも女性の乗馬などは相手が馬であり全く無難である。例え相手が人間の男であっても、今迄弱き者とされていた女性が男性を虐めるなどは、いかにも微笑ましい？とも云えよう。そしてマゾも度を過ぎぬ明るい健全な？方向に、即ち男性の責めの場合でも責め方そのものにばかり工夫を凝らすと云うのではなく衣裳とか、道具に重き

を置くようにすればよいと思われる。亦例えば乗馬女性の写真撮影に関しても、色々に騎り手の女性の衣装、馬具或いは場所を変える事により全体のムードが変化するのを見れば明らかな事なのではあるまいか？勿論これは他の写真や絵についても当てはまる事である。

以上が私の持論であるが、あまりに我田に水を引き過ぎると他の方面から非難の洪水を浴びかねないのもう多くは云いますまい。

二、倒錯雑誌雑感

昨今の本誌が、本文やグラビヤにマゾ的なものを次第に多く採り入れるようになったのは、大きな喜びだが、グラビヤについて云うならば旧号の方がマゾフォトは多かったのではないかと思う。しかしその中の少いマゾ写真はいずれも秀逸であり、特に七月、八月号などはあの男性モデルがどれ程羨ましく感じられたか判らない。亦読者のページでも美しい女性の乗馬姿がとりあげられただけでも、私如き者には大いにぎげんな事である。尚しより写真のモデル諸嬢は皆美しい方ばかりだが、これらの美しいモデルさん達が女王様となったり、また拍車も鋭く光る豪華な乗馬

靴を履いて馬に跨った姿を、そして馬上から男共を責める表情を想像し、且つそれを期待しているのは、私一人だけではないに違いない。

それから私の拙文のカットに使用して戴いた絵は私が全く想像で描いたものであるが、裸に近い恰好なので下品に見えるかも知れない。更に私の文もカットや修正部分もあったが同様に下品で浅薄であらうかと思われる。しかし私が想像で書いた文や絵も女性の心理や生理上、満更嘘でもない事が結婚後になって始めて判り、いささか嬉しい次第である。

他誌に就いては、先ず「風俗奇譚」及びその別冊であるが、既に本誌雑報欄にても紹介済なのであえてくわしく述べないが、マゾ物はかつて本誌に掲載された口絵、写真が多い。画報三は乗馬女性の写真が小さく大分載っているがいずれもザラ紙に印刷したもので不鮮明なのはがっかり、画報四は全くのサド一辺倒、只二頁の人間犬のお仕置があるのみ。風俗奇譚十月号の長靴を履いた女性達は趣向は良いが、やはり印刷はお粗末、もう少し丁寧な扱って貰いたかった、記事としては連載されている「あるマゾヒストの書簡」が特に目をひく。一般的に云ってこの雑誌は奇

ク誌に於いて、かつて掲載紹介済のものが多く我が我々にとってはそれが例え二番煎じ三番煎じであろうと、一篇の記事、一枚の写真でも載っていれば買わずにはいられなくなるのであり、そこが我々の弱みであるし、出版業者のつけ目でもあるわけである。

さて次に「裏窓誌」であるが、これは今まで、どちらかと云うとアプ誌とも云えずまた、一般娯楽誌とも云えぬ中途半端な性格であったが、十月号を機に純然たるアプ誌の仲間入りをしたようである。そしてマゾ的読物や紹介が十月号では特に多くなったのは大きな進歩であるが何となく物足らない。

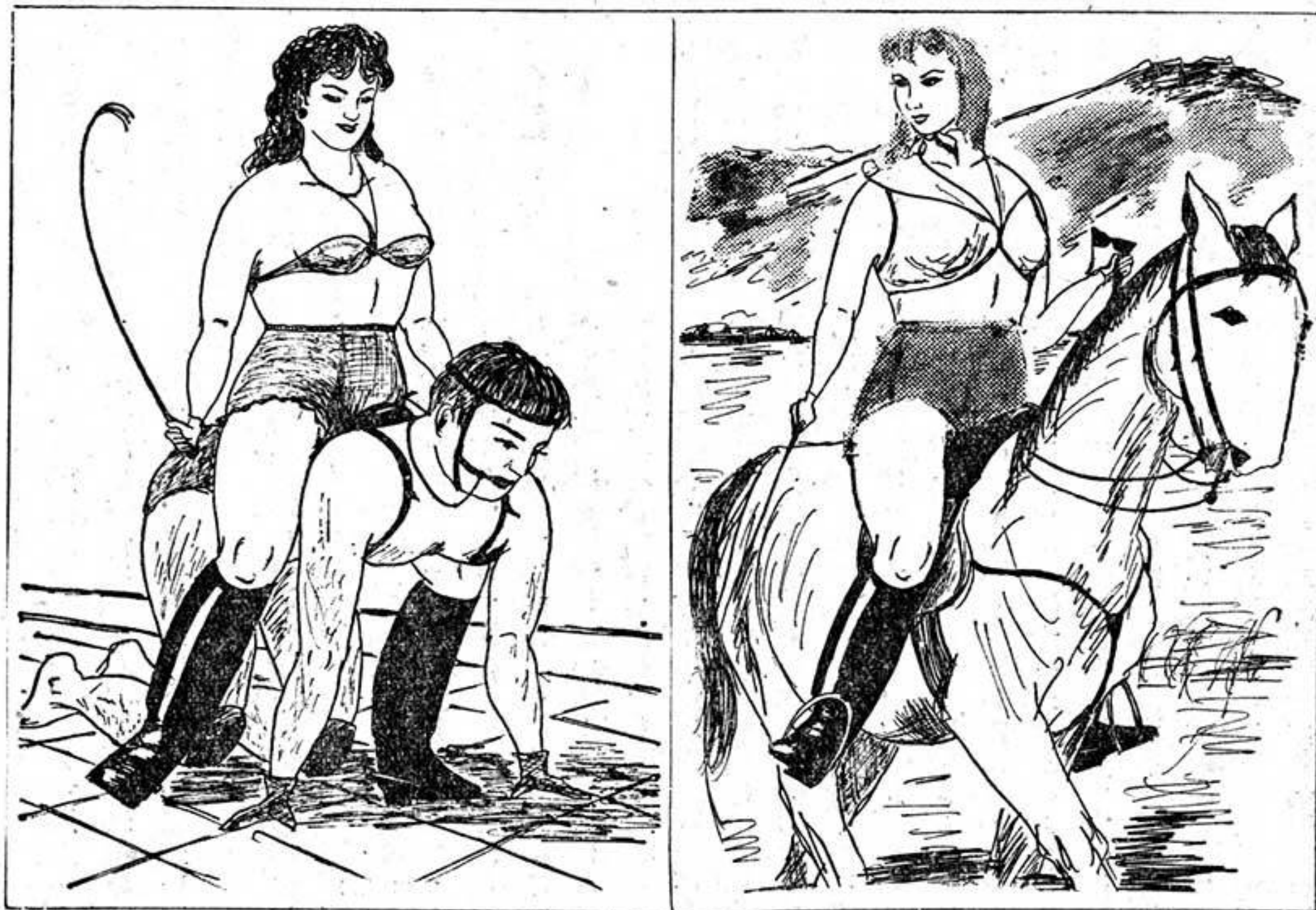
この事は奇ク誌十月号で沼さんも述べられている通り、本誌に於いても重量感にあふれた大作と云うものが出て来ないのは認めざるを得ないが、しかしこれは今まで云わばこの種雑誌が暫しの間の日陰者の如き存在であったからではないか？ これからはきっと素晴らしい作品が出て来るに違いないし、且つ誰しも、そのように期待しているわけである。

三、その他

さて最後はいつもの如く雑誌や映画の案内だが、しばらく私は東京を離れていたので全

く事情に疎くなってしまう。その中で一寸目についてものは「痴人の愛」と「ローマの旗の下に」だけである。前者は他誌などでとりあげられているので略そう。只この映画のポスターとして、どこでも用いられている叶順子がネグリジュール一枚で半裸の船越英二の背に跨っている場面は映画の中にはなかったし亦、馬乗り場面は最後の部分にほんの僅かだったのはいささか残念であった。

後者で超大型バストで知られるグラマー女優アニタ・エクバーグがシリアのゼービア女王に扮して見事な女王振りを見せる。一米七三厘余、六〇キロと云う見事な肢体の彼女が奴隷用の鞭を手に、多くの家臣を従えて奴隷達の使役場へ馬を乗りつけて奴隷となってい





るローマの將軍と相對する場面や、亦戰場に於いては軍装に身をかため、自ら白馬に跨って全軍の先頭にたち叱咤激勵するものである。彼女の身につけている衣裳は古代のものであるが、とも角彼女の乗馬振りは素晴らしい。

所で西洋の時代物が出た所で日本の時代物の事であるが、マゾ的傾向を持つ人々の殆んどは時代物は余り好きではないと見えて話題にはならない。然しながら日本の時代物の中にも、勇婦で知られた源平時代の数々の女將軍やサディステインと云われている淀君、千姫等が多く登場する。確しか柴田鍊三郎の「弧劍は折れず」などの中にも徳川家光の妹、広姫が登場して興をそそる場面がある。

大体に於いて徳川家には

性格異常の者が多く、將軍の、その時その時の気分で、多くの人が殺されたり切腹させられたりしたのであるが、彼女もその点では一族の血は争えぬもので多分に異常な所があったらしい。武芸好みで特に乗馬の得意だった驕慢な彼女は自分のわがままで一寸でも気に入らぬ事があると馬を思い切り責め、街中を奔馬を駆って暴れ廻り沢山の人を傷つけたり殺したりしたのである。この小説の中にもこの姫君は男装して馬に乗り、人通りの激しい往来を駆けとばし、逃げ惑う人々の中で逃げ遅れた一人の老人を、「下郎！ ためけ！」と、のしりながら馬蹄にかけて殺して了ったり、又神社の石段を曲垣平九郎まがい馬で駆け登ったりする描写がある。お付きの家臣は將軍の妹君のことなので万一の事でもあれば切腹ものであるから、只おろおろするだけである。今まで云う雷族みたいなものであろうが、3Sと云われるスピード、スリル、セックスにサディズムを加えて4Sにしたいものである。

ある週刊誌（サンケイだと思った）に物凄いスピードで車をとばす人間はサディステイックな面があると書かれてあったが、それはほんとかどうか判らぬにしても実際に、例え

ばテレビ女優の小林千登勢あたりが車を運転する時はいつも八〇キロ位のスピードを出して、「これが唯一つの私の精神安定法よ」などといけしゃあしゃあと『週刊女性自身』に書いていたり、亦同じく女優の市川和子がスピード違反で警察に追われながらも六つの検問所を六〇キロ以上のスピードでくぐり抜け、やっと捕まったのはいいが「ちよつと忙しかったので……」とうそぶいているのをきくと、道徳的には反撥しながらも、何にか心魅かれるものがあるのも否めない事である。

さて話は変わるが今夏の避暑地に於ける女性の乗馬熱は凄まじい。八月四日附日本観光新聞でも山中湖でショートパンツ一枚で馬に跨っている若いお嬢さんの大きな写真をトップに飾っている。実際私も信州志賀高原へ避暑に行ってみて驚いた。馬に乗っているのは殆んどハイティーンの娘さんばかりである。尤も乗馬女性に關心のある私が見たのだから少々偏よっているかも知れないが。然し美しいお嬢さんの乗馬はよいがストラックスでへっぴり腰で鞍につかまっているのやら馬子に轡をとって貰っている図はちよつといただけない。

C・H・ツェトラッツ著内田幸一訳「女体——上」の中にも「いかに身体を美しくする

こんな浣腸器はいかが

中井照夫

グリセリン浣腸器(五十CC)、イルリガートル(五百CC)、を長年愛用しておりますが、所謂、市販の浣腸器にあき足らなくなった。私は、自分で浣腸器を考案——と申しまして身近にあるものを利用するだけですが——楽しんでおります。その一つ二つをお知らせしたいと思います。

一、ビーチボール

これは既に愛用されている方も多いと思いますが、空気浣腸には欠くべからざるもの、最近のポリエチ製ボールは、口の所がはめ込み栓ですの、そこにガラス管か、イルリガートル用の細目の嘴管を挿入すれば、もう立派な浣腸器です。

二、醤油差し

レストランでも、家庭の食卓にも、ポリエチの醤油差しが多くなってきました。差し口が横向きになっている所が頗る具合がよいのです。つまり差し口にやはり嘴管になるものを付けると、薬液の入る醤油差しに対して嘴管が九十度、つまり直角の方向

となりますので、どんな姿勢をとっても、とても浣腸し易くなるわけです。醤油差しも、レストランで用いる大型のものから、家庭用の小型のものまで、いろいろ取りそろえて楽しんでおります。

三、マヨネーズ

マヨネーズも昔は瓶入りでしたが、昨今はポリエチ容器入りがいろいろ出廻っています。半透明のあのすんなりした形が誠に魅力的、イチジク浣腸を大きくしたような、不思議な味があります。大きいのは二百CC、小さいのでも五十CCは入ります。ただ、口の所に振じ蓋の溝があり、一寸嘴管を接着しにくいのと、嘴管接着が不完全ですと、使用中、外れ易いのが欠点といえるでしょう。

四、哺乳瓶

ポリエチ製の哺乳瓶はそのまま浣腸器に使えます。日盛も入っていますので、頗る重宝です。ただ哺乳キャップが、ゴム製で太く短いため、嘴管をつけるのには一寸工

か」の章で「乗馬は水泳に次いでよい。馬に跨った時馬上で身体の平衡を保つ為身体中の筋肉が運動して健康と美容に大いに役立つ。然し現実には馬に乗っている女性の美しさと云う点から見ると殆んど女性の落第である」となかなか手厳しい。「ほんとに馬に乗っている姿が美しい女性と云うのは小さい頃から馬に親しんだ女性だけである」と云っている。更に「本来は女性の身体は馬に跨って乗る方法には適していない。内臓に多くの刺戟を与え、低い背丈に短い足、亦太腿が円いので男の扁平な太腿に比べて馬の胴に密着しない」と述べられているがこれには色々と異論はある。だいいち背丈の問題にしても現在は一米六〇以上のグラマー嬢は珍らしくはない。それに著者自身でさえ「それにも拘らず身体の発達面から云って成長期にある女性にはとくにすすめたい」と後悔しているくらいである。この事からしても世の女性はこれから体位向上、美容、そして我々の目を楽しませる為にも大いに馬に乗って貰わなくてはならない。只多くの女性が馬に跨った時、楽な故もあるが例外なく鎧を短くしている為、より以上脚が短く見えて損である。よく雑誌のグラビアにも水着やヌードの女性が馬

夫がいります。

五、ヤマト糊

糊もポリエチ容器入りが出廻っています。使用後よく洗えばそのまま小型浣腸器となりますが、マヨネーズ同様、嘴管接結がやや難点です。

六、玩具類

玩具には、水鉄砲をはじめ、ゴム、ポリエチ製品が多いので、浣腸器に利用出来るものが少くありません。しかし、玩具として、既に一定の型が出来てしまっているの浣腸器の連想を生ぜしめるものが少く、あまり魅力でないのが欠点と申せましょうが、私は、変化をもたせる意味でいろいろ愛用しております。

七、水道

水道といえば驚かれるかも知れませんが、レンに跨っている写真を見ることがあるが、レンズを通すと尚更誇張されてかえって醜くくなる。やはりこの写真の米人女性の如く馬に乗る時は馬場馬術の時のように、馬の背に深く跨った方がよいのである。写真は米人女性なので背丈の面からも申し分なく、馬に跨っている恰好が実に素晴らしい。

最後に、自分が想像で描いた絵を説明する

要するに直接、水道にゴム管を接結するのです。水道の蛇口は太いので、先ず水道用ゴム管をつけ、それに細いゴムをつけてもよく、又良質の細いゴム管なら、そのまま蛇口を覆う事も出来ます。水道浣腸は素晴らしいものです。蛇口の栓の手加減一つで、強烈な水圧が楽しめますが、どうしても立ったままの姿勢でなければならず、又注入量が判明しないのが欠点です。

以上、日常、私の愛用する変型浣腸器につきその一端を御披露致しました。蒐集箱一杯の愛玩物をながめながら、さて今夜はどれにしようかなと思案するのです。日常生活の中に浣腸器として利用出来るものは沢山ある筈です。私はこれからも、おかしな趣味だと自分でも思うのですが、変った浣腸器を作ってゆきたいと思っています。

と、一は避暑地で乗馬を楽しむ令嬢の図で、同じショットを履くなら乗馬靴も履いて貰いたいものだと思います。乗馬女性をモデルにして描いたものである。二の人間馬は伊映画『甘い生活』からの思いつきであり、三は人間犬のお仕置きだが大体男の姿は巧く描けない。四は何を鞭打つのか想像するのが私の楽しみである。

(了)

松井 籟子 悦 虐 小説 シ リ ー ズ

片^{かた}恋^{おも}

い

松 井 籟 子

淹 れ い 子 画

座敷へ上ると、苑子は放心したように火鉢の前へペタンと坐った。

体が畳の中へ落ちこんでいってしまいそうなのは、酒の酔のせいばかりとはいえなかった。心までが重く、真暗な穴へ落ちてゆくようで、苑子は両手で顔をおほった。

いっそ涙が出てくれたら、声をあげて泣いてしまいたいように思ったが、出なかった。

「帰えってるの？」

戸口で若い女の声がした。

それを藤瀬益代と承知していたし、今別れた小浜和彦が訪れてくれる筈はないと思うのに胸が嬉しいときめき

のようにドキンと鳴った。

「どうやった？ スペイン舞踊？」

益代は自分の家のように戸口からさっさと上ってきた。

もっとも、座敷へ上る以外、この家は腰をおろす所もない。三畳と六畳と二間つづきで風呂場もあるといえば当節流行の文化住宅のようだが、実はトタン屋根の小屋のような家だった。

上敷のすみから、すすけた畳が顔を出し、天井板も壁も、雨もりのしみが地図をえがいていた。

「酔っているの？」

益代が傍へ坐っても、顔をあげない苑子に彼女は不審そうにきいた。

「どうかしたん？」



苑子はだまつて首を振った。

「床しいてあげましょうか、それともお水のむならくんでくるわ」
年下のくせに母のように気がつく益代だった。

苑子の家の隣に住んでいる娘で、戦災孤児だった。

引きとって育ててくれた伯母にも死に別れ、喫茶店へつとめたり、キャバレーの女給になったりしてひとりぐらしをつづけている益代は、廿三才の美しい娘だが、どういふものか男性の体臭が厭だといつて、一ヵ所に長つづきしなかった。

益代の思いにかかわらず、男たちに好かれるので、その誘惑がわずらわしいといつては職場を変えた。

ひとり者同志の気易さで二軒の家を一軒のように行き来していたが、時子の所へ誰か男の人がたずねてくると、それが何でもない仕事の連絡の話でも、益代は厭がって、追いかえすようなことをしてしまうので、時には迷惑だった。

女が女を独占しようとするのがすでに無理なのに、益代は苑子を恋人のように慕って、苑子の身のまわりの世話をやいてくれた。

苑子の方が年上なので、はじめ苑子は母のない益代が、苑子を母のように思ってくれるのかと不びんに感じていたが、だんだんその嫉妬心の強さに閉口してきた。

だから時々相手にしないで、いいかげんにあしらって帰えすのだが、今日はあまりに淋しかった。

金三千円という、苑子にしては高すぎるA席の切符を二枚買って、わざわざ小浜和彦を誘ったのは、もう三ヵ月前のことだった。その時分から売り出した切符なので、苑子は小浜と二人で、その豪華な催し物を見に行く為に良い席を手に入れ、その席にふさわ

しい服装まで用意したのだった。

小浜とはじめて二人並んでスペイン舞踊を見て、帰えり一杯のんでも、それがそのまま苑子の思いを相手に通じることにはならないとは承知していた。

しかし、苑子の心の奥底にはもっとおとぎ話に似た夢があったのかもしれない。だからこそ、風船の空気がぬけたように心が空っぽで、淋しさだけが体中に重く漂っているのだろう。

苑子は益代にかまわず、畳の上へ伏してしまった。

「気分悪いの？　帯が皺になるやないの。とってあげるわ」

益代がいうのに、苑子は子供のように帯あげの結び目を彼女の方へ向けた。

帯あげをとり、帯止めをはずし、帯をとき、益代が着物をしめている腰紐にまで手をかけるのを、苑子は人形のように、なすままにさせた。

肌襦袢と腰巻だけになった苑子に、益代は壁にかけてあった寝巻の浴衣をきせかけた。

「足袋もとって」

苑子は言った。

益代に甘えているのが苑子のせめてもの気易めになった。

益代は彼女の足袋をぬがした。

「ついでに足をふいて」

体を動かすのが億劫なまま、無遠慮と知りながら苑子は言った。

益代は台所へ立って行くと、バケツに水をみたくして、雑布をしぼってきた。そして、彼女の足の指のまたまでも丹念にふいてくれた。

年下の娘に、苑子は安心して甘えていられた。

ふと、苑子は足の指を何かにはさまれたような気がして身をおこした。

益代が彼女の指を軽く歯で噛んだのだ。

「もっと強く噛んでごらんなさい」

苑子は言った。

「え？」

益代は聞きかえして、急いで唇をはなした。叱られたと思ったらしい。

「もっと強く噛んでと云ったの」

益代はぱっと顔を赤くしたが、苑子の足の指へ唇を近付けた。同性の女の足の指に唇をあてる益代の思いが、苑子は妙に哀れに感じられた。

「きつく、もっときつく噛んで」

足先の疼痛は頭にまでひびいた。

そして、男性に愛されても男を愛することが出来ぬ益代と、小浜を愛しながら、小浜からは何もそれに対する反応を受取れない自分の立場の皮肉さが胸に痛かった。

「ホホホホ」

苑子は突然笑った。

「どないしたん？」

驚く益代に

「ヒステリーっていうのでしょう。こんな時、お茶わんやお皿をかたっぱしから割ったら気持ちいいでしょうね。東京の浅草の松屋に、鬼の人形に玉をぶつけると、鬼がブーッってうなる遊び道具があっ

たけど、今あるかしら？　よく奴隷をめちやめちやに鞭で打つ女王の話なんかあるけれど、その気持わかるような気がするわ。何も奴隷が憎いわけじゃないけど、鞭をふるってみたいくなるのね、女なんて始末に悪いものなのかもしれない」

苑子は言った。

書道の塾で一週間に一ぺん顔を合わす小浜和彦の貴公子らしいしつとりとした風格に惹かれて、二人になる機会がほしくて誘った今日のスペイン舞踊だった。舞踊に興味をもっているかどうかかわらないが、本場の踊り手はるばる日本へ来ての公演なら、映画へ行こうと誘うよりは苑子には何となく云い出し易い気がしたのだ。

ゆとりのある観客席のつくりだったから、並んで腰かけていても、肌がふれ合うこともなかったが、愛する男の隣にいたというだけで三十才を越した苑子の血がさわいだ。それを押さえて何気なく振舞い、発散出来ずに帰えってきたのだ。

女は男と違って、独身を通していても、男なしですごしてゆけるのだが、そうした欲望がないわけではなく、眠っているだけなのだ。それはただ、愛する人によびさまされたいと眠っているだけで、男を愛する心がおこれば、肉体まで愛されたいとめざめてくる。苑子が小浜とフェスティバルホールに並んで坐っていただけで、体を燃したのは、好色とは別の意味のことだった。

そして燃しきれなかった肉体の焰がブスブスと女の体にくすぶると、それはヒステリーという形で、外へ出たがるのも、仕方のないことだろう。

苑子は畳の上に散らかっている腰紐を手にとると、一尺位の長さに折り重ねて、机のふちをピシッと打った。

二度、三度、苑子は激しい勢で机を打ちつけた。打つという動作に心のしこりがほぐれていくようだった。

「何んぞ厭なことがあったん？」

益代がきいた。

「今日のスペイン舞踊は前からたのしみにしていたんやないの。お習字の先生に誘うてもろうたんでしょう？　三千円もする切符くれるなんて、えらい金持なんやなあと思っとったんやけど、何ぞ厭なことあったんと違う？」

苑子は益代に嘘をつく気はなかったが、益代が苑子の為に、何かと気にかけて日用品や化粧品を買ってくることが多いのに、自分が日頃、収入の少なさを口にしながら、片思いの人の為に、わざわざ切符を買って誘ったことは云いにくかったのだ。

年寄のお習字の先生にかこつけて、益代の前をつくらっていた。

「ねえ、お姉さま」

益代は彼女を「お姉さま」とよんでいた。

「もし私でよかつたら、思いきり打ってくれへん？　きつとお姉様の気が晴れると思うわ」

「打ってもいいの？」

「ああ、かまへん」

益代がいうので、苑子は冗談のように、彼女のストラックスの膝を平手で打った。

「そんなんじやあかんわ。私、ストラックスとるよつて、ベルトで打つといゝわ」益代はスルスルとストラックスをぬいでしまった。形の

よい脚が、腿のつけ根からむき出しになった。

苑子は自分の方が恥しいような気がした。

「ねえ、お姉様、ついでに手足も縛ってくれへん」

益代は云った。

「そんなおかしな……」

苑子の常識として、何の罪もない娘の手足を縛るなんては出来そうもなかった。

「いいから縛って、思いきり打って」

そういう益代の言葉に、苑子はふと誘われた。

今までしたこともない異常なことをするということで、胸の中のもやもやしたものが消えてくれるかもしれないと思った。

苑子は立上って、先ず自分の浴衣の前をきちんと伊達締めでしめると、絹の腰紐を益代のブラウスの胸へまわそうとした。

「裸になるわ、ええやろ？」

そういつてボタンをはずし出す益代に、苑子は「うん」とうなずいて、戸口の鍵をかけに立った。

東京で結婚に破れて移って来た大阪に、苑子は家まで尋ねてくるような知人を持たなかったが、若い娘をこれから縛るのだと思うと、やっぱり人に知られたくないという恥かしさが先ず頭をよぎったのだ。

普通の人にとって、縛るという行為はやはり異常なことだった。

苑子は座敷へ戻るとラジオのスイッチをいれた。それも近所へその異常さを気づかれない為だった。

近所といっても、苑子の家と益代の家が隣合わせに壁一重でつながっていて、益代の所は物置を改造した一間で彼女ひとりしか住

んでいなかったから、道路をへだてて、こちらへ羽目を向けている向いの家がある位だった。

苑子は益代の胸へ紐をまわし、後手に縛った。若い乳房は匂うように、苑子は見ないようにしながら、ふとその若い肉体を憎いと思った。小浜和彦の反応のなさも、三十女の衰えゆえかもしれないと思った。

「足も……」

縛られながら益代が指図した。

苑子は別の紐で益代の足首を一つに結び、ぐいと引張った。

益代はドシンと音をたてて仰向けに転った。

お椀のような乳房が赤い紐に飾られたように美しかった。

苑子はわざと邪慳に益代の体に手をかけてうつむきに向きをかえた。

苑子は誰かを打ちのめしてみたいとは思ったが、益代を打つには少しばかり躊躇があった。いくら慕情を迷惑に思っている、打つほどの怒りにはならないし、その益代に甘えても、縛って打つという愛情の表現をとる気にはならなかった。どう考えても自然ではなかった。

そのためらいを見てとったのか、益代は云った。

「お姉様も案外意気地なしやな。ヒステリーやなんてたいそうに云うていて、それやったらヒステリーをおこすより、メソメソ泣く方がましやわ。ほんまは私、知ってるのよ。今日のフェスティバル、お習字の先生と一緒にいったなんて嘘やってこと……。小浜和彦いう大学の先生と行ったんやろ？」

「何をいうの」

苑子はドキツとした。

「お姉様がお習字を習いに行って一緒になる小浜和彦を愛してるくらい、ちゃんと知ってるわ」

益代に云われ、瞬間、苑子は益代を激しく憎んだ。

誰にも知られたくないその名を、益代の口から云われることに我



慢がならなかった。

「うそよ、何をいうの」

苑子は思わずベルトをふりあげて益代の背を打った。

「二度と云ったら承知しないわよ」

「やっぱり本当なのね」

そのいう益代に

「うそよ、うそよ」

と、苑子は叫びながら益代の背とわず、腕といわず、脚といわず、滅茶苦茶にベルトで引っぱたいた。

「もう云わないか」

苑子は云った。

狼は交合している所を他の狼に見られたら、相手が倒れるまで、その見た狼をやっつけてしまうといううなことが、新聞小説の中に出ていたことがある。

苑子は自分の思いを告げてさえない小浜和彦の名を、益代の口から云われただけで、益代を噛み殺したい程憎く思ったのだ。

それは折角大切にしまっていた秘密の小箱を、汚れた手であけられたような憎さだったかもしれない。

それなのに、益代は苑子の気持を知っているのか知らないのか、荒い息を吐きながら更に言葉をそえた。

「私の中学の友達で小浜和彦の研究の助手をしている学生がいるんやわ。小浜和彦がお習字で一緒になる女性に、時々ものをもらいうて、のろけていたそうや。こっちは何とも思ってたへんのに、くれるというもの断るのも悪いから、スペイン舞踊も見にゆかんならんえらい時間つぶしやいうていたって……」

「やめて……」

苑子は叫んだ。絶叫といってもいい声だった。

「それ以上口きくなら、口へフタしてしまうわよ」

そういう苑子に

「ああ、かまへん。私はお姉様に何も悪いこと云ってへんもん。怒るなら勝手に怒ったらええのやわ。私はお姉様が可哀想や思うて……」

と云いかける益代の口へ、苑子は無理やりそこに出ていた帯揚げをおしこんだ。そして、自分のしめていた伊達締をとくと、それでしつかり猿ぐつわをしてしまった。

「私は小浜和彦なんて人知らないわよ。知らない人を愛したおぼえもないし、何かの間違ひよ。お習字の塾には習いにくる人が五十人もいるのよ。変なこと云わないで頂だい」

苑子は言った。

後手に縛られて、足首までくぐられ、おまけに赤い帯揚げのはしを口からたらしながら、伊達締めで頬がいびつに曲る程しめあげられている益代の姿を見ると、苑子は唾をはきかけたいような感じがした。

自分の大切なものを汚したと思うと我慢がならなかった。益代であらうと誰であらうと、人の口の端にのせてもらいたくない、宝石

のようなその名なのだ。まして益代は苑子を可哀想だといい、苑子の片思いをあわれんだではないか――。

「どうしてやろう」

苑子は思った。

もう異常さなんかは考えになかった。

自分の大切にしたものをごわした罰に、益代をこなごなにこわしてやりたいと思う気持ちが強かった。

そして、その心の底には、益代以上に、「時間つぶしや」と云ったという小浜への怒りがたゆたっていた。そして又、片思いと知りながら、小浜に惹かれていた自分自身に対する怒りも……。益代を責めることは、自分の手で自分に鞭打つに似ていた。

○

苑子は益代をひきずるようにして、三畳と六畳の間の敷居の上に静坐させた。足首が縛ってあったから、それを一たんとかないと、きちんと坐らせなかった。

それからその紐で益代の腿と脛を一つにくくった。

ふだん静坐したことのない益代には、それだけでも一つの責めだった。

苑子は鏡台の引出しから、髪にウェーブをつけるクリップをとり出してくると、彼女の鼻をはさんだ。それは洗濯ばさみを大きくして、いくつかの歯をつけたようなものだったから、やわらかい皮膚にその櫛の歯のような尖ったさきがくい入った。苑子は彼女の乳首も同じようにはさんだ。

あいにくクリップは三つしかなかった。

苑子は部屋の中を見まわした。

苑子の目が台所へ止った。台所道具を責め道具にしようと思ったのも、女らしい考え方かもしれない。

苑子は大根おろしのはがねの板を、益代の脚の下へはさんだ。こまかい歯が益代の脛を傷つけた。

益代は顔をしかめてこらえた。

苑子は彼女の体をゆすった。益代は切なそうに咽喉をならした。しかし苑子はその上彼女の膝の上へ組板をのせ、その上へ沢庵石をおいたのだった。

三角の木の上へ坐らせられ、大きな石を重ねられる石責めからくらべれば、子供だましのようなものかもしれないが、静坐しているだけでも足がメリ／＼いいように痛くなっているのに、その上、お



ろし金の歯に傷つけられ、石の重みが加っては、益代も自然に前かがみに、痛さをこらえる姿勢になった。

「ちゃんと真正面をむいているのよ」

苑子は益代の鼻をつまんだクリップをもって、その顔をひきおこした。

猿ぐつわをはめてあるので、苑子は益代の鼻をはさむ時、鼻柱をはさんで、息は出来るようにしてあったが、益代の目頭がせばまって、奇妙な目付きになっていた。

「おかしい顔……。もっとおかしくしてあげるわ」

苑子は益代の頭へすり鉢をかぶせた。

益代は何をされてもだまって耐えていた。もっとも、口の中へ帯あげをおしまれているのだから、黙っているより仕方がない。声は出なかった。

「もう二度と今日のようなことは口にしないと誓う？」

苑子はきいた。

益代は首を横に振った。

「もっと痛いめにあいたいの？」

益代はだまっていた。

苑子はベルトで彼女の背中をピシッと

打った。

それはラジオの音よりも高くきこえた。

苑子は無意識に表の方を見た。

夜の住宅地はしいんとして、何の物音もしなかった。

苑子はベルトを再びふりおろすのをためらった。しかし、益代を許す気持はなかった。

苑子はハタキをとってきた。

そしてハタキの細い竹のさきで、益代のやわらかい肌をグリ／＼と突いた。

「ううっ！」

益代は咽喉をならしてうめいた。

益代の背にも胸にも、丸い痕がついた。

脇の下 突かれると益代は身をよじって痛がった。頭にかぶせたすり鉢が奇妙にゆれて、おかしい恰好だった。

苑子はその人間の女とは思えぬおかしい動物が、体をくねらせて、うめくの不思議な刺戟を覚えた。苑子自身は、はたきのさきを突立てるだけだから、力のいることでもなかった。涼しい顔で突っついてゐるのに、突かれる方は油汗をしばらくするようにして痛苦に耐えているのだ。

「いい気味よ」

苑子はただそう思った。

しかし苑子の興奮はいつまで続くものでもなかった。奇妙な悲しさが苑子の胸一杯にひろがった。

手を休めて益代を見たが、もう一度自分でしたことを逆に、石をとりのぞき、組板をはずし、彼女を縛った紐をとくのは気が重かつ

た。

苑子は彼女の頭からすり鉢をとり、クリップと猿ぐつわだけはずしてやった。

「あとは自分でゆっくりとるといいわ。どうせ私の結んだ紐なんか、そうきついこともないでしょう。とれなければ一晩中そうしていらっしやい」

そういうと苑子は簡単なスーツに着かえた。

「どこへ行くの？」

益代が言ったが、苑子は自分のヒステリーの残骸に目をそむけるように、外へ出て行った。

苑子のハンドバッグには、もし小浜和彦にその気があったら、スペイン舞踊の帰りにどこかで一晩あかしても、小浜のふところにたよらないですむだけの金が入っていたのだ。

苑子は小浜と二人でたのしい時が持てるのなら、自分の一ト月分の月給を、一ト晩で使ってもいいと思っていた。

月給二万円で、業界新聞の広告とりと編集をかねている苑子の職業は、男におごるほどの派手さはなかったが、東京育ちの血の中に男に達引する江戸芸者の気風が流れていたのかもしれない。自分から惚れた小浜和彦に、金銭的負担はかけたくないと苑子は思っていた。それに、苑子には、勝手に好きになって、勝手にお金を使うのだというわりきり方で小浜に向う方が、中年の恋に傷つかないですむというあきらめをもっていた。

大学教授ときき知っているが、年も自分とたいして変らない小浜和彦には、すでに妻子がいるだろう。たと思いがかなっても、結婚に及ぶべくもない恋だと、苑子は承知していたのだ。

それにしても、「時間つぶしや」と小浜の口から云われる程、小浜が自分の好意を迷惑がっていると思っていなかった。少くとも小浜の瞳の中に、自分を嫌っていない色があると思ったのに……。

苑子は夜気に当りながら、目あてもなく歩いて行った。このあたりへ客を送った大阪のタクシーの帰りの車を拾えたら、女ひとり泊めてくれる旅館を探して一ト晩あかせばいいと思っていた。

縛ったまゝおいて出てきた益代のことよりも、好男がふともらした小浜和彦の言葉が彼女の頭を一杯にみだしていた。

○

隣に益代が住んでいる我が家へ帰えるのは厭だったが、益代を残して、鍵をかけずに出て来た以上、もし益代が縄をといて帰えってしまったら、空巢ねらいに入られるおそれがある。

どうせとられるものといったら外出着が少しあるぐらいだったが、苑子はものをとられるより、新聞ダネになることが厭だった。

もし空巢に入られて警察沙汰になったら、争いとはいえないその夜のいきさつから、小浜の名まで益代の口から出ないものでもない。苑子はそれをおそれた。

帰えり車で大阪まで出て、駅近くの旅館に泊ったが、郊外電車の朝の始発に乗って帰宅した。

一ト晩がかりで紐をといたのか益代の姿はなかった。そればかりか、部屋の中もちゃんとかたづいて、おろし金も組板も、かけるべき所へちゃんとかけ、ぬぎ放したままだった着物まで、きちんとたたんであった。

苑子は急に益代の愛情があわれに思われた。

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せっかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円

全手高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 儀 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

片思いの苦しさは苑子自身よく知っていた。

益代が前夜、獣のように扱われながら、きちんと部屋をかたづけてくれた心使いが不憫だった。

友達がみんな高校へ進んだのに、両親もなく、伯母の家も貧しかったばかりに益代は早くから自活しなければならなかったのだ。その境遇も聞き知っていた。

苑子に対して、母親とも姉とも思っていてくれたのに、その愛情に背を向けて小浜和彦に心を燃し、期待したことが、期待通りにはこぼなかった鬱憤を益代に向って発散したのは、大人気なかったと苑子は反省した。

苑子は家の戸締りをして会社へ出勤したが、会社の帰えりにおすしの折を買って帰えってきた。

「益代さん、いる？」

苑子は自分の家へ入らずに、先ず益代の家の前で声をかけた。

この日頃、益代はビル街の喫茶店につとめて、夜は家でブラ／＼していたから、灯のもれているのは家にいる証拠だった。

案の上、その声を待っていたように、ガラッと中から戸があいた。

「昨夜はごめんね」

苑子は益代の顔が見られなかった。

「おすし買って来たから食べない？」

そういうと、益代は顔を輝かして、

「今、行くわ」

と云った。苑子の家で御馳走になるものと頭からきめていた。

苑子はどうせ益代の家には皿小鉢も揃っていないかったしお茶も安い番茶があるかなしかなのを知っていたから、自分の家へ上って、お湯をわかした。

昨夜のことには、もうそれっきりふれまいと思ったが。土瓶をとるのに手をのばした益代の二の腕に、赤い痕があるのが目にふれた。

「どうしたの？」

ときこうとして、はっとして声をのんだ。苑子自身がつけた痕かもしれないなかった。

その気配を見た益代は

「ほら」

というと、半袖のセーターの腕をまくってみせた。まるでベタベタと印判をおしたように、小さい丸い痕が残っていた。赤いのもあれば紫色のものもある。益代の肌が白いので、よけい目立った。それで益代は衿のつまったセーターを着ているらしかった。

苑子は昨夜の狂態をありありと見せられるようで、思わず顔が赤くなった。

「ごめんなさい。はたきのさきで突いただけで、そんなにひどくなるのかしら」

弁解がましく苑子がいうと、

「うん、かまへん。もっとひどくされてもいいのやわ。私はお姉さまに責められることとしているんやもの」

益代は言った。

「何にもしてないじゃないの」

「ううん、間接的にお姉さまの恋愛の邪魔してるかもしれへん」

「そんなことないわ。あなたに云われなくても、どうせ片思いだと思っっているんですもの。あの人が迷惑がっていること位よく知ってるわ」

苑子はわざとそう言った。それは益代にいうよりは、自分にいう言葉だった。

「私はあの人を愛してくれようがくれまいが、一たん好きになったら、その気持を変えられないんですもの」

「だから私が邪魔してるような氣イして悪いんよ。小浜和彦の心に水さしてるようなもんやもん。けど、私、お姉様を誰にもとられたくないんやもの」

「どうしてその名を口にするの。厭ッ！ 又怒るわよ」

鼻

虐

略号(はい)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

美貌の絹川さんの鼻を思いきりいじめぬいた写真。火のついた煙草を鼻の穴に挿し込み、或は浣腸器の嘴管で鼻の穴をこじあけたり果ては金属製のクリップで鼻を挟んで悦虐の涙をハラハラと流させる逸品。

鼻

責

略号(はき)

モデル 絹川 文代

大手札型印画紙焼付

三枚一組 二五〇円

身動きならず縛しめられて逃げもならず顔の中心である鼻をいたぶられるのは誠にサド的である。足の指で鼻を挟まれバンドの猿ぐつわで鼻をこじられ、観念の眼を閉じた髪を驚づかみに愈々鼻の料理にかゝるのだ。

苑子はどうしても益代に小浜の名をいわれなくなかった。それなのに益代はそれにかまわずつづけた。

「お姉さまは、この小屋のような家にいること、かくしているらしいけど、私が友達に話したさかい、どうせ小浜和彦の耳に入ってるやろ思うわ。お姉さまをブルジョア・マダムやと思ってたらしいのに……」

「そんなこと云ったの？」

苑子は泣きたい気がした。

いつも身なりをくずさない小浜和彦と、同等の生活をしている位には思われたかった。

だからこそ、スペイン舞踊の三千円も、ほんの小遣いで買ったという顔をしたのではないか。苑子の悲しい見得だった。

それなのに、益代は更に言葉をついだ。

「私、この痕を友達に見せたった。すごいなあ云うてたわよ」

「あんた！」

苑子は絶叫した。

又もやお腹の底から怒りがこみあげてきた。

「どうすればいいの、どうすればいいの」

苑子は益代にいうというよりは、自分の前の空気に向ってわめきたい気持だった。

(ああ、何もかも滅茶く。もう小浜和彦に顔をあわせることは出来なないじゃないか。あの貴公子の様な小浜が、この益代の言葉を友達から耳にしたら、何と思うだろう。もう時間つぶしやなんて皮肉をいうどころか、つきあってもくれないだろう。そして私は、そのいきさつを説明することさえ出来ないんだ。私は本当に益代を縛り、益代の肌に竹のさきをつき立てたのだから……。ああ、どうしたらいいの。ひどい……ひどい人……)

「あんたという人は……」

苑子は益代のセーターの襟に思わず手をかけた。

そして、益代の頬をピシャツ、ピシャツと自分の手が痛くなるほどひっぱっていた。

(終)

《編集部より》 各方面にて大活躍中の松井籟子女史は、寸暇をさいて特に本誌のために「悦虐小説シリーズ」を十月号より寄稿下さって好評を博しておりますが、毎月何か新しい趣向を盛りあげたいという意欲を示され、次号新年号では『妖花』と題して幻想的な美しくも哀れな佳人を主人公とした素晴らしい小説を寄せて下さいました。何卒御期待の上御愛読頂くようお願い致します。

〔読者投稿〕

『あけぼの会事件』に思う

古田 純夫

まえがき

『あけぼの会事件』といえば、読者の中には、あああのことかと既に御存知の方も多いと思うが、或いは未だ御存知ない方も可成りおられるだろうし、また、既に御存知の方にとっても、無関心では過ごせないいろいろの問題を含んでいるので、原忠正氏には一寸悪いとは思ったが（この点については後で述べ

る）、私は以下に先ず事件の概要を書き、それからそれに関連ある二、三のことに触れ、最後に我々として注意しなければならぬいくつかの点について述べることにする。

あけぼの会事件

八月二十八日付の『週刊現代』は「暴かれた上流階級の変態クラブ——映画『甘い生活』の日本版——」と題して、三頁に亘って

原忠正氏の『あけぼの会事件』のことを報じている。その記事は、イタリー映画『甘い生活』のあらましを紹介し、この映画がイタリーの一部の者どもから散々非難を浴び、今年の二月にローマでその映画が封切られた時、挨拶に向いた監督のフェリーニが暴漢に襲われて殴打されたり、唾を吐きかけられたりしたという事件もあったが、興行的には、一カ月の間に二十億リラ（十二億円）というイ

タリ―映画史に空前の興行収入をあげたのみならず、更にカンヌ映画祭ではグランプリまで獲得し、日本でもこの作品の公開が今から多大の期待が寄せられて、前景気は上々である次第を述べ、さて次に、この「甘い生活」を地で行くような事件が日本にもあって、それが「あけぼの会事件」というものであるとしている。

昭和三十四年秋に会社社長の某が愚連隊から三十万円出せとゆすられた事件に端を發して、警察が手を入れて捜査してみると、次のようなことが明るみに出た。すなわち、東京代々木の某ホテルで秘密の撮影会があり、数人のモデルを使って鞭打ち、吊るし、強姦ごっこ、輪姦ごっこなど、エロ・グロの極致をゆく実演が行われて、その時たまたま参加した前記社長某の顔が写真にとられて、その写真をタネに、会長格のM（筆者注、原忠正氏の本名。週刊現代では麗々しく写真入りで本名を出しているが、ここでは原氏への礼儀上から特にイニシャルのみにする）が中心になって社長氏から三十万円をおどしとろうとし、社長の駆け込み訴えから、警察の手が入り、M外が売春法違反、恐喝、同未遂、公然

わいせつ等の容疑で逮捕されたという事件である。

Mは慶大仏文科出身のインテリで、原忠正のペンネームで種々の性風俗雑誌で活躍し………ついに、変態行為をタネに一もうけしようとして企み、三十三年九月奇譚クラブの執筆時代同好の志を全国に募集した。その募集が意外な反響を呼び、北は北海道、南は九州からM（マゾヒズム）・S（サディズム）愛好者が責めの実演や研究会を開いてほしいと申し込んできた。これに意を強くしたMは、秘密会員組織による「あけぼの会」を設立し、主として三流紙に「M・S趣味の会、希望者は世田ヶ谷局内私書函第十三号へ」という広告を出して会員を募集した。………そして、他方では売春婦や店員、ウェイトレス、ミス・トルコなど十三名の女を集め、前記新聞広告で集ってきた男性達と乱痴気さわぎをやらせたり、客の好みに応じて変態行為をとまなう売春をさせたりし………百万円位の稼ぎをしていたという。

かくて、取締りに当った係官をして「甘い生活」の日本版だとあきれさせ、また、これは警視庁史にも残る程の事件とさえいわれて

いる。しかし、これもいわば氷山の一角、日本の甘い生活は、つづけばいくらでもでくると係官という。その他にも、たとえば、次のような例もあったという。

某トルコ温泉ではなし、どうも怪しいという情報で内偵に行った係官の入浴している隣の部屋で変な鈍い音がする。それとなくききただしてみたところ、トルコ娘に体を縛らせた中年の男が自分の革帯で全身をピシピシ打たせていたものであることが分った。

また、東京都内には公認のヌード・スタジオが十八カ所あるが、そのうちの二カ所は、「縛り専門」だ。その………ヌード・スタジオでは、出張撮影という名目でモデルを客と共に温泉マークなどに行かせ、普通料金の五割増しで縛りをやらせているといわれる。

変わったところでは、東京神田の某会社の社長の場合がある。彼は猛烈なサディストで、自分の奥さんだけでは間に合わないらしく、会社の女事務員にまで手を出して、自分のサディズムの対象とし、彼と歩調を合わせるようににだんだん仕込んで、彼女を立派なマゾヒストに仕立てあげた。しかも、それだけでは満足できなくなって、その女事務員を責めさ

いなむ現場を数人に公開したり、写真に撮らせたりしていた。……これが警察に見付かると社長氏は「変態も民主主義で行かにならん。人にめいわくさえかけねば何をしてもいいではないか。」と、大見得を切ったとのこと。

さて、そこで係官氏は最後にこういう、「夫婦の生活に変化をもたらすための多少のコツた技巧はプレーとして認めてもいいだろうが、これが度を越すと不健康この上もないものになる。そのみか、あけぼの会事件でも明らかにしたように、そのカゲにはつねに悪徳のアダ花が咲き、犯罪のにおいがつきまとい、時には生命の危険さえ招くことになりかねない……甘い生活を求めて苦い汁をなめるようなことにならないように……」と。

以上が『あけぼの会事件』を中心にした『週刊現代』の記事のあらましである。

二つの疑問点

さて、この記事内容の一つ一つが果してどこまで本当かどうかは、局外者の私には全く見当もつかない。何れ公判の結果が明らかにする性質のものだろう。

ただ、右の記事を一読して、第三者の私に少々理解しにくい点が二つある。一つは三十年九月、奇クのレギュラー執筆者時代の同好の志を全国から募集し、その結果が盛況なので意を強くして、あけぼの会を組織し、新聞広告により会員を募集し云々（注、筆者傍点）とあるその前段の傍点の箇所。原忠正氏が奇クの執筆者であったことは私も承知しているが、その執筆者時代の同好の志を全国から募集したというのは、どういうことだろうか。

もし全国募集が行われたとするならば、いかなる手続、方法で行かれたものだろうか。そして、その結果に気をよくして今度は新聞広告したと、二つの段階があったようになっているが、私の想像では、もちろん単なる推察にすぎないが、そのような前の段階はなく、ただ、新聞広告を通じてあけぼの会員を募集したという後の段階があっただけではないのだろうか。そして、もしそうならば、その場合、単に私書函十三号で会員の募集を行ったのだから、申し込む方も原忠正氏と知って申し込んだわけではないのだろうか、もちろん中にはたまたま奇クの愛読者もいたかも

分らないが、特に奇ク執筆時代の同好の志を募集云々というのは当らず、奇クはヌレ衣を着せられたことになると思われるが、この点どんなものだろうか。

私がなぜ、こんなことをこと更らいうかという、世間では何か事が起きるとすぐ奇クに結びつけたがる傾向があることは、一方において奇クの宣伝にはなるかもしれないが、他方において、この種のヌレ衣や誤解が積み重なって行くと、見当違いのことを考える輩がでるかもしれず、また、その徒輩が「力」をもっているような場合には、危険なことが起らないとは保証できないので、このヌレ衣のバランスシートは必ずしも樂觀を許さないマイナスを生むおそれがあると思うからであり、さらに、第一誤解やヌレ衣というものはちゃんと正しておく方が公正であると思うからである。

次ぎに理解しにくい点は、原氏が事実主催者であるならば、その主催者が果して恐喝などするものだろうか。同席した他の会員が、故意か偶然か社長氏の顔も入れて写真に撮って、その写真をタネにゆする位のこととは十分考えられるが、いやしくも主催者がそんなこ

とをすることは常識的には考えられない。仮りに奇クが主催で撮影会をやつて、その時の参加者の写真を撮つて、その写真をタネに奇クが参加者をおどしたりゆすったりするなどということがあり得ようか。

医者や弁護士については、職業上知り得た相手方の秘密を他に洩すことは法律で禁じられている。一夜のあやまちから性病にかかった人が医者の門をたたいた時、その医者にはペラペラとそのことをいい触らされては、病人たるもの医者にもおちおちかかれないうことになる。奇クが新聞記者として、新聞記者がニュース・ソース（記事をどこから得たかということ）の秘密をこの上なく大切にしていることも人々のよく知るところである。これらは何れも、法律で禁止しているとかいないとかにかかわらず、徳義上の常識的にも当然のことであり、結局そうすることによって患者なり依頼者なりニュースの提供者なりを保護するとともに、他方もしこの掟を守らなかったら、その医者、弁護士、新聞記者が一ぺんに信用を失ってしまうという関係に立っている。秘密を守るということが相互の利益に合致する次第でもある。

従つて、もし原氏が『あけぼの会』に参加したことから生じた相手方の秘密をタネにゆすりなどしたら、自分の首をしめる自殺行為である。この前『週刊スリラー』から奇クに對して、執筆者の住所や姓名を知らせてくれとの申入れがあつた時、奇ク側が即座に断つたのであるが、きわめて当然のことだろう。その場合もし奇ク側が軽々に洩らしたりしたら、執筆者も、ひいては読者も奇クを信用しなくなり、ことに執筆者などはおそらく奇クを離れてしまうことは必定だろう。このことを裏返していうと、奇クが十年にわたる信用を保持していることは、これらの点についても遺憾がなかった証拠だともいえる。そんなわけで、主催者の原氏がゆするなどは理解しにくいのである。

事件の意味するもの

『あけぼの会事件』から私は二つのことを読みとることができる。

第一に、原氏の『あけぼの会』の盛況からみて、また、識者のいうとおり、あけぼの会事件は氷山の一角だとするならば、世の中にはこの種の同好者の数は随分多いのだらうと

いうこと、第二に、奇クを読んで一人で楽しむとか、一対一のプレーに止めている中は問題ないとして、これが多数になり、不特定の人が加わったり、いわゆる公然性を帯びてくるときわめて危いということである。いま、この後の点について少し考えてみよう。

まず、奇クを読んで、一人で共鳴したり楽しんだり、気持ちを発散させたりすることは、差し支えないどころか、大いに結構だろう。一人で苦しんだり、悩んだり、内攻したり、あるいは、危険な方向につっぱしたり、さらに爆発したりする危険を未然に防止するだけでも、奇クを読むことは結構だと思う。江戸川乱歩氏は、中山伊知郎氏との対談で、探偵小説を読むことは、人々の心にうつつ積する気持ちを適当に発散させることになって戦争防止に役立つといいますよといい、これには中山氏も「戦争防止か（笑）」ということになつて、一寸話が大きくなり過ぎたようだが、気持の発散に役立つという効用はたしかにあると思われる。もっとも、一方が安全弁になるという、必らず他方に、殺伐的な気風や犯罪を誘発、助長するといふ出ず人が出てくるものだ。このことは、探偵小説に限らず、映

画でも漫画でも、いわゆる風俗法についても、常に論議される点だろう。

この場合、実をいうと一般論や抽象的論議は余り意味がないのだ。人間の手は、人の頭を愛撫することもあれば、ゴツンとやることもある。それを、人間の手というものは、愛撫するものとか、殴るものとか、概念的に決めてしまうわけには行かない。愛撫すべき（当為）ものと、愛撫する（存在）ものとを混同してはいけない。それで結局のところ、奇クについても、毎月々の現実にも則して、具体的に効用を論ずるほかないので、その場合、私としては、また、他の方々も大方御賛成のことと思うが、奇クについては前記のような効用が多いと論定し、奇クに親しむことが結構であると断定、主張してはばからない。

それから、奇クを読んで一人で楽しむだけでなく、一対一のプレーの場合。これも相手と納得ずくである限り、問題になることはほとんどあるまい。従って、前の例のトルコ温泉の場合も、ヌード・モデルを出張に連れ出して縛った場合も、問題はないと考える。一対一の場合は、せいぜい個人倫理の範囲であ

ろう。

気を付けなくてはならないこと

それで、何んといっても問題を起こし易いのは多人数の場合だ。それもわいせつ関係に一番気を付けなくてはならない。

刑法第一七四条をみると「公然わいせつの行為をした者は半年以下の懲役もしくは五百円以下の罰金に処する」と書いてある。このことを少し考えてみよう。この条文をみると、すべてのわいせつ行為がとがめられるのではなく、そのわいせつ行為が公然となされることによって罰せられるのだ。

それでは「公然」とは何か。公然といっても別に公衆の面前でということばかりではない。公然とは普通「不特定」又は「多数人」が知りうる状態のことをいう。不特定とは読んで字のとおりだが、ヌード・スタジオ全盛の時代に、業者の人達が、初回のお客さんから入会金を百円か二百円とって会員ということにし、従って会員という特定人に見せたり写させたりするのがドコが悪いか、と主張したというが、これを特定だというのは一寸ムリだろう。

多数の方についていうと、そこに集る者が特定の範囲の者でも、多数ならば公然であるとされる。もっとも、その人数や集会の性質上、秘密がよく保たれ、他に伝播するおそれがないときは公然とはいえない。従って、よく気心の知れた友人、知己ばかりの集りの席上、裸踊りをさせたり、その他のことがあっても、公然とはいえない。皇居前のように、普段は人がたくさんいるが、全く人通りの絶えた時刻に、そこでヌード撮影などすることはどうか。これは、明け方に桜田門かどこかで、ヌード撮影をやった著名な写真家もあるが、争いのあるところだろう。まあ、止めといた方が無難だ。

さきにあげた神田の社長氏の場合は、おそらく知人だろうし、また、多数ともいえず、従って公然とはいえないのではないか。

次に、わいせつとは何にか。たとえば、性交やこれに類する行為、性器を露出することはわいせつ行為とされる。しかし、乳房や背中や手足などをむき出しにしたり、男女のせつぷんなどは、それと同時に性的行為を連想させる動作が伴わない限りわいせつとは認められない。（もっとも、自体の露出が度を越

すと軽犯罪法に触れようが)わいせつの定義としては、最高裁判所のいうところによると、「わいせつとは、いたずらに性欲を興奮または刺戟せしめ、且つ普通人の正常なる性的羞恥心を害し、善良なる性的道德觀念に反するものをいう」とのことだ(傍点は筆者)なるほど、その意図するところはよく分るが、さて、實際問題として、何がいたずらに、普通人の正常なる、善良なるかという段になるとなかなか判定が難しいものだろう。この前、東京の浅草でノゾキメガネというのがあるって、十円入れるとハダカ写真が出るというのがわいせつ容疑で問題にされたことがあるが、いろいろ参考人などを呼んで意見を求めたりした結果、無罪ということに決ったようだ。

神田の社長氏の場合に話を戻して考えてみると、女事務員を責めてマゾヒストに仕立てあげたとある。その点、想像を加えて推理してみると、女事務員を温泉マークに連れて行って、最初は軽く手足を縛る程度に止め、その次ぎの時は、裸にして全身を縛り上げ、次ぎはいろいろな姿態をさせて縛るなど、そして、その間に、或いは軽く或いは厳しく責め

上げて行くという風にして根気よく馴らして行ったものか、或いは社長氏のことだから手間暇かけずに有無をいわず強引に縛り上げ、直ちに責め上げて行ったものか分らない。ただ、何れにしても、人に見せた時肝心のわいせつに該当する行為があったかどうかは、資料もないので全く不明である。又自分一人で楽しむだけでは我慢出来なくなつて、社長氏の言い分によると博愛・民主的に人を集めて責め場を鑑賞させたというが、この点は少数の知人だから問題ないと思われることは前述した。

トルコ風呂とヌード・モデルの緊縛も格別問題ないと思われることも前に触れた。あけぼの会事件については、公然になるか、またわいせつに当るかどうかは、資料もないのでよく分らない。

以上いろいろ述べたが、具体的には抽象論で片付けることができないのはいうまでもないが、私のいいたいことは、要は「公然わいせつ」にならないようによく気を付けましょうということである。

むすび

私は原忠正氏とは何んの面識もない。ただ誌上でその尊名を承知しているに過ぎない。しかし、原氏のが博な知識には尊敬しているし、今ここにあけぼの会のことを取り上げるのは、同氏としても余り愉快なことではなからうし、私としても遠慮した方がよいのではないかと、少なからずためらった。

しかし、最初にも述べたとおり、この事件は奇クの読者にいろいろ関係深い問題を含んでいるし、また、すでに新聞や週刊誌を通じて周知のことでもあり、ここで触れても必ずしも失礼ではないかと思ひ直して、敢えて取り上げた次第である。その点、原氏に悪しからずお許しを乞う次第である。

かつて、わが国の刑法学の泰斗牧野英一教授はいった。人類の歴史は失敗の歴史であると。失敗しては前より少し賢くなり、又縮尻っては前より少し利口になる、又々失敗して又立直る——これが人類の歴史であると。個人についても同様であろう。原氏も今はいろいろ困難に直面しておられるわけであるが、どうか、このつまずきに屈することなく、さらにこれ乗り越えて、強く進まれることを心から祈りたい。

朱^{ちゆう}
金^{ちん}
昭^{ちよう}

(上)



男 責 小 説

菅 良 太

鷹見中尉失踪

昭和十四年夏。日本軍占領下にある漢口の憲兵司令本部の影山少佐の元に太刀川軍曹が顔色を変えて駆け込んで来た。彼ははずむ声をやや低めて、「影山少佐殿、内密の事ではありますが、妙な事件が起りました。鷹見中尉どのが三日前から姿が見えません。宿舎にもこの二三日は全く帰らないとのこと。平素から諜報探索の場合でも自分にだけは行先を知らせてくれるのでありますが、今度は全く不明で、自分は一昨日あたりから鷹見中尉の出入りしていられる処や、関係のある個所を虱つぶしにさがしていますが、未だに判明いたしません」

太刀川軍曹はやや昂奮の様子で頬も上気している。影山少佐は端正な顔を引緊めてうなづきながら聞いていたが、

「うむ、しかし、これは困った事件だな。鷹見中尉といえば、司令部でも深慮遠謀の男で決して軽挙盲動する奴ではない。しかし奴も未だ若いから功名をあせて深入りでもして、抗日分子の術中にでも陥らねばよいが。」

太刀川軍曹、貴様も知っているだろうが今中国には政府の抗日政策の軟弱な態度に不満を

もっている輩がいくつかの秘密結社をつくり地下運動をしている。彼らにとつては日本憲兵の将校などを拉致すれば相当な軍の機密を得られる。ひよっとすると鷹見中尉、そうした抗日分子の結社にでも捕えられたのではあるまいか」

影山少佐の白哲な顔にすでに沈鬱な表情が流れていた。

太刀川軍曹は、かねてから影山少佐と鷹見中尉とのある種の親交のあることを知っていた。二人は大尉と少尉の時代に深い結びつきをもつようになった。お互いの血を啜り合つて義兄弟の誓いをしたとも言われたが、真偽の程は分らなかった。唯二人とも三十をすぎているにもかかわらず、妻帯をしていないことが噂を裏書きさせた。やや狼狽した影山少佐は直ちに憲兵司令部の主脳部を呼集し鷹見中尉の失踪について談合した。何分とも将校の事で軍の威厳も慮って秘密の中に行方を探索することになった。鷹見中尉の秘書のような役をしていた太刀川軍曹も、その命を受けた一人だった。彼は凛々しい鷹見中尉の風貌を頭の中に描きながら自分の命にかえてもさがし出そうと自ら誓った。

捕われ人

朝霧が次第にうすれて行くように、鷹見中尉は朦朧とした意識の中に不覚にも敵の術中に陥ちたことを知った。体を起そうとしても五体が硬直して自由がきかない。頑丈な麻縄で両手両足を緊縛されて鉄の寝台の上に転がされていた。湿った空気ではここが地下の一室であることも分った。

狭い部屋で窓もなく、僅かに一角が鉄格子になっていて、その上方からかすかな光が洩れてくるばかりである。

「無念、はかられたかッ」

鷹見中尉は切歯して悶えた。口に残っている酒の匂いに混って不快な残滓のように昨夜の出来事をよみがえった。

漢口で指折の酒樓常蛾飯店の特別室で彼は画商の張徳源という男と会談し、すすめられるままに酒をすごしたのが不覚だったのだ。

鷹見中尉は軍人に似合わぬ教養と趣味をもった男で、中国の画や陶器に一方ならぬ見識をもっていた。張徳源という男は常蛾飯店に出入している男で偶然の事から鷹見中尉と口をきくようになり、美術クラブや書画の売立に連れて行かれた事があり油断をしたのが不

覚だったのだ。

それにしても自分を術中に陥れて捕えようとしているものは何であるか、そして張徳源の背後にあるものは何者であるか知りたいと思うと、剛胆な彼は却って度胸を据えてしまった。

それから約二時間も経った頃、乱れた靴音とともに四五人の中国人の男がやって来た。監房の鍵をあけると、どやどや入って来て、彼の寝台の周囲をとりかこんだ。

「起きろ、取調べがある」

その中で頭立った陳という男が言った。鷹見中尉はきつと顔を上げて、

「貴様はたち何だ。何のために俺に縄目の恥を与えるんだ。その上、一体何の取調べか、言え」

がなり立てたが、陳は薄い口髭のある唇に冷笑をうかべるだけだった。

「文句は後でゆっくりうかがおう。とにかく朱金昭様がお前にききたい事があるそうだ。素直に答えればよいのだ」

「よし俺も男だ、帝国軍人だ。恐れるものは何もない。朱金昭だろうが、何だろうが連れてゆきたい所へ連れて行け」

剛然として言った。陳は命令して足首を縛

っている縄だけ解かせると彼を引立てた。他の者も手に拳銃を擬していることか知らして、この一人の捕虜に対してすでに物々しいものがあつた。

朱 金 昭

武漢攻略後、日本の治安下にあるこの一帯に、抗日分子によるひそかな秘密結社が地下活動をしている事を、憲兵隊の探知するところとなり、必死の探索を行っている処で、鷹見中尉もその活動体の重要な一人であつた。彼が常蛾飯店のような場所に出入をするのも、そうしたものの動きの緒を掴みたかったからである。今不覚にも敵の術中に陥って捕えられたが、この機会に何とかして、この結社の秘密をつかみ脱出の機を得たいと思うと却って彼の心は高鳴るのであつた。

地階の部屋を出ると、そこは中国風に出来ているが鉄筋のかなり高い建物であることが分つた。豪華な彫刻のある柱や絨毯、刺繍の衝立や螺鈿細工の調度など趣味といい好みといい決して常人の家のものではない。若しかすると政界要人の一人の邸宅ではあるまいか。彼の脳裡にひらめいた要人の誰彼の顔と名前、一体自分を捕えさせた男は何者である

う。朱金昭というアラビヤナイトを思わせる仮名の人物の面皮を引剥りてやりたいと思つた。

やがて彼は豪華な一室の椅子の上に座らせられた。彼は毫も悪びれず胸を張り、股を大きく開いてまわりを睥睨していた。暫らくすると、正面の孔雀の模様の帳がひらいて、黒い支那服を着た男が七人入って来た。皆同じ服装なので区別がつかない。しかし皆同じように三角形の黒頭巾をかぶり、目と口のあたりだけ空けてあつた。一樣に右胸の処に朱色で『昭』という字のマークをつけていた。そして縁に金で枠がとつてあつた。『朱金昭』というのはこの結社の頭目の名であり、同時に結社の名でもあるらしい。

黒衣覆面の男達は鷹見中尉の周囲を取巻くようにして椅子につくとおもむろに、

「貴公は憲兵司令部の鷹見中尉だな」

自分の名をズバリと言われて、さすがの中尉も驚いた。しかし彼も剛然として言つた。

「そうだ。その鷹見にお前達は何の用があつて、こんな縄目にかけるのか」

中の一人が前へ進み出た。

「もう承知だろうが、吾々は抗日のために戦つてゐる結社『朱金昭』のものだ。貴公が中

心となつて吾々結社に探索の手が伸びているとき、党の内情をお目に掛けるためにお招きしたのだ。後程党の首領にも引合せる」

「折角御招きに預つた上は、こちらからもうかがいたい事がある。素直に答えられい」

どこまでも不逞々しい中にも、おだやかに言うのであつた。覆面の男の一人は、どっかりとテーブルの上に彼の軍用靴をおいた。

「あッ、それは俺のものだ。返せッ」

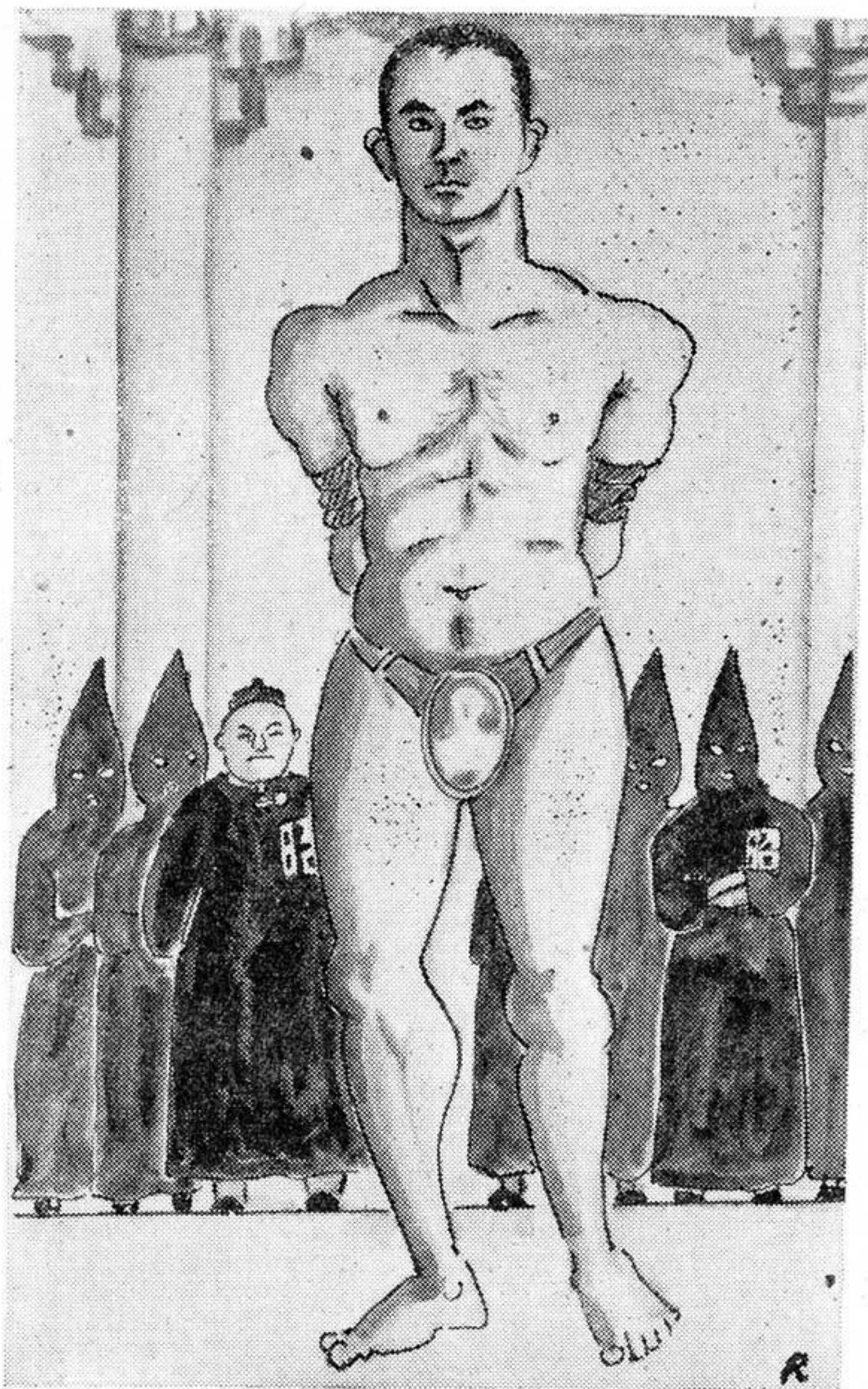
思わず立上つた。常蛾飯店で昏睡状態になつた時に、奪われたものだ。彼はその中に軍の重要な地図や書類がギッシリ詰つてゐることに気付いて身悶えしたが忽ち左右から取押えられてしまった。

「貴公の手帳によると、最近、上海に大量の武器が送られてくるそうだな、期日、時間をおしえてもらいたい」

「馬鹿、たとえ捕えられても、日本帝国軍人だ。どんな拷問にあつても口を割るような男と思うか」

「ほうこの男は拷問を恐れぬとみえる。しかし鷹見中尉よ。この朱金昭での拷問はちと他と異うぞ、日本憲兵隊などで行うものとは、比べものにならないが、それでもよいかな」

「俺はどんな酷い責に遭おうとも一切口を割



らんからそう心得ろ」

言い放つと中尉はかたく口をつぐんだ。

「最初に着衣の一切を脱がせて、嚴重な身体検査を行え」

覚悟したとはいえ、名誉ある帝国軍人が赤裸の姿にされるかと思うと中尉は思わずかつ

とした。黒頭巾達は中尉の縄を解くと、五人がかりで手取足取りして軍服、股下、長靴まで剥ぎとり禪一貫の姿にした。

浅黒くよく発達した彼の体軀は、健康そうな輝きにあふれていた。それは人々が暫く吾を忘れて見とれる程の男性美に充ちていた。

がっちり張った胸板の間から黒々と密生した胸毛が露出した。人々はその裸身の上に又嚴重な縄をかけた。覆面の男たちは彼の軍服のポケットや長靴の中まで嚴重にしらべた。

そして遂に下穿きの越中禪に手を掛けるとひきちぎるように地面へ落した。

捕虜になったとはいえ全裸を多くの人目に晒しているかと思うと強気の鷹見中尉の頬にも血が走った。

「うーむ、仲々美事な体じゃ。これでは責甲斐があるというものだ」

つぶやくような声が言った。

鷹見中尉はふり返って見ると緋色の長い支那服を着てでっぶり

肥った男が立っていた。他の人々がうやうやしく礼をしているのを見ると、首領の朱金昭らしい。胸に金糸で『昭』と刺繍をしたマークをつけているが覆面をしていない。

「鷹見中尉か、俺が党の首領朱金昭というものだ。よく見知って置け」

そう言って顔をさし出した。年のころは六十に近いが、まるまると太って艶々した皮膚をもった男で、顔に比較して目鼻が小さく一見好々爺然とした人物であった。

拷問資料室

「こ奴、仲々強情で一才一筋縄では行かぬ奴です。どんな責めに掛けましょうか」

覆面の一人が言った。すると朱金昭は、

「この男は拷問を恐れぬ男らしいから、責める前に拷問資料室に案内して、ここの拷問の怖ろしさを見せてやろう」

男たちは鷹見中尉を引立てると長い廊下の果にある一室に案内した。扉をあけると見るから陰惨な気が漂ってくるようだ。その部屋は地方の小博物館程の大きさでガラスのケースの中に東西古今のさまざまな拷問具がならべられてあった。

フランス革命の時に使用されたというギロチンや大斧があるかと思えば、ドイツで用いられた鉄の処女、ハンブルグで用いられた引伸し責の梯子と綱巻きの車、水槽の中に浸す水責の鉄籠、『鉄牛』という鉄製の牛の体中に火を入れて跨がらせる拷具、人間を吊るクレーン。その一つ一つには英文で書かれた精

しい証明書と、拷問の使用の画図がはりつけられてある。

「どうじゃ、この中のどれがお好みかな。日本人はやはり日本の責道具の方がよろしいかな」

そう言って更に次に案内する。陳列に西洋東洋国別になっていて、この一帯は日本の拷問を陳列したものらしい。そこには吊責、木馬責、駿河責、海老責、石抱き、火焙の柱、磔柱などがずらりと並んでいた。

「気に入ったものがあるかな、ハッハッハッハ」

支那の陳列棚には炆焙刑、銅柱、鼎鏝の刑の大釜から足枷手枷首枷の類があった。思わず彼が目をつぶったのは宮刑の方法を詳細に示した図で中国古代より伝わり武帝の時の司馬遷達が処せられたというそれは、苛責の恐ろしさがまざまざと身に迫った。

「どうじゃ、気に入ったか、貴公のような剛気の者の精を抜くのも一興じゃ、ハッハッハ」

朱金昭という男は、おそらく政界の黒幕的人物の仮名であろうが、これ程の大邸宅の中に巨大な資財を投じての拷問具のコレクションを行う位だから、相当な代物だと知ると、

さすがの鷹見中尉も自分の陥ちて行く陥穽の深さに戦慄を感じた。

拷問資料室の地下は執行室になっていた。その階段を下りる時に血なまぐさい臭が鼻をうった。拷問狂の彼は無罪の者を捕えて、ここで無残な拷問を加えたに違いない。鬼哭啾々たる気がただよっていた。

朱金昭は鷹見中尉の体をしげしげと眺めて改めて感じ入ったかのように、

「今迄はどんな捕虜も、この拷問資料室を見せると大ていちぢみ上って恐れ入ってしまうのだが、この男は仲々しっかりしておる。いい加減な責めでは音を上げまい。先ず日本風に海老責でゆこう」

朱金昭の命令で床の上に荒筵が引かれ日本製の手桶に水をはったり、青々とした割竹が用意され、見るからに江戸時代の白洲の責を思わせた。

憲兵である彼は江戸時代に行われた海老責という責を刑罰資料の本でよんで知っている。その苦痛も相当なものであるらしいが、何よりも耐え難いのはあの恥辱に充ちた姿勢であった。衿ある軍人として全裸での海老責には流石の剛気な鷹見中尉も色を失った。「一つだけ頼みがある。きいてくれ。どんな

苦痛でも耐え忍んでみせるが、男の情として
 禪だけは緊めることを許してくれ」

哀願するように言った。それは必死の願いの
 ように切実だったので人々は思わず朱金昭
 の顔を眺めるのであった。

拷問帯

朱金昭は肥満した体をゆすぶって笑った。

「捕虜となった以上は、いさぎよくすべてを
 白状して命を乞うのが定法だ。貴様が口を割
 らない以上は、生かすも殺すも、俺の胸三寸
 にある。中国の警察では白状しないものは、
 皆この拷問室に送り込まれてくる。ここにく
 ればどいつもこいつも皆一晩で音を上げる。
 貴様もそんな強気な事をいうが今に泣き声を
 上げるぞ。日本軍人の泣き声というのは、久
 しく聞かなかったから楽しんじゃ」

すると傍で陳が、口を挟んだ。

「朱金昭様、こいつが禪を許してくれとたの
 んでおりますが」

「うんそうか、しかし、あんな禪のようなも
 のは、とても海老責には耐えられん。緊め上
 げた時、下ッ腹に力が入ると、あんな細紐は
 一遍で切れてしまう。代りによいものを借し
 てやろう。陳、あのガラス棚の中に拷問帯が

あるからあれをもって来い」

拷問帯ときいて人々は思わず顔を見合せ
 た。拷問具マニヤの朱金昭が考案した拷問具で、
 フランスの貞操帯からヒントを得て作られ鉄
 と皮革から出来た禪といったものであった。

やがて陳は一見スポーツマンが使用するサ
 ポーター大の皮革製のバンドをもって来た。前
 袋のあたりにアポロの顔が刻まれていて、そ
 の周囲は黒光りのする皮で掩われていた。背
 部の方はサポーターと同じように自由になっ
 ていて、右の腰のあたりに鉄製の小さい錠が
 ついていた。

「どうだ。これを禪の代りにやろう。貴様は
 体がよいから、仲わりっぱに見えるだろう。
 最近作ったが、まだ一度も使ったことがな
 い。一つ緊めさせてみよう」

朱金昭は陳をうながすと鷹見中尉をつれて
 別室に入った。人々はその後姿を興味深げに
 見送った。

十分も経たぬうち、隣室から、呻めき声が
 した。

「うーむッ、ううう、うーむッああうーむ」
 それは悲鳴とも唸り声ともつかなかった。

「陳、思いの外ききめがある道具じゃのう。
 どうだ、この禪は日本製のものより一層緊め

心地がよいだろう」

「うーむッ、ううう、何ッこれしき日本軍人
 だ。耐えてみせるぞ、うーむッ ああうー
 むッ」

「陳、よし、もうスイッチを止めろ」

やがて室の声は静かになった。人々はさす
 がに顔を見合せて彼の発明した拷問具の威力に
 慄えおののいた。

やがて扉がひらかれると全身脂汗まみれに
 なった鷹見中尉が、よろめくようにして出て
 来た。

単に腰にはめたにすぎないその皮具も、内
 部には細密な仕掛が出来ているらしい。中央
 部に電流を通じるソケットがついているので
 も、それが伺えた。

「背部は自由になっているから排便の時は自
 由だが、排尿の時は鍵がある。この鍵はたっ
 た一つしかないから俺が保管しておく。陳、
 用事の時は面倒だが俺の処へ来てくれ。俺が
 開いてやる」

人々はこの『鉄の処女』と思わせる拷問具の
 惨虐さに慄然とした。

異状な拷問具の考案者朱金昭の手にかかった
 美丈夫鷹見中尉の運命は、次回に展開する珍
 奇な責の数々を御期待下さい。

連載第三次元小説

影の国

雪俊 遙

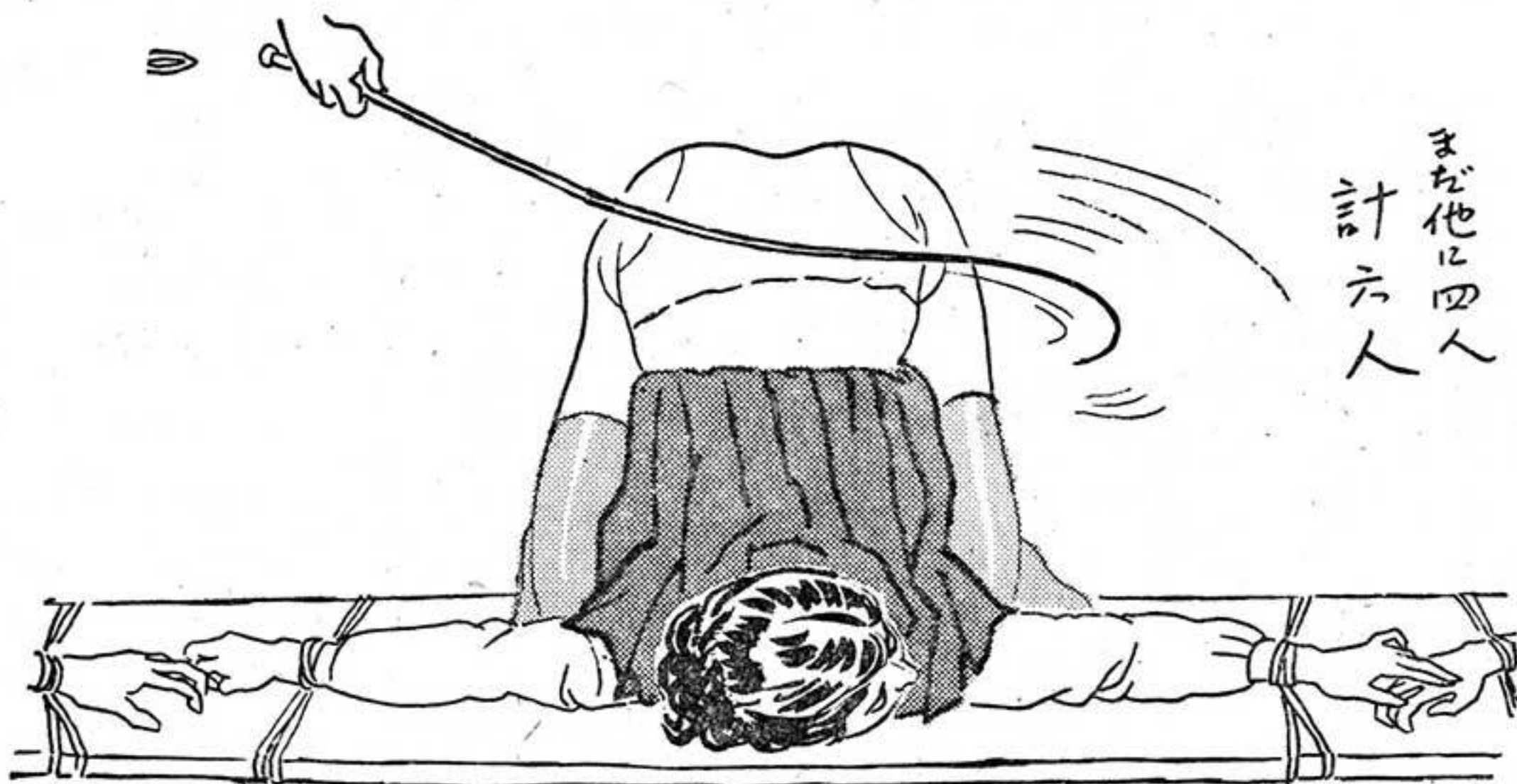
鶯の谷渡り

恐怖の夜が明けた。焼打ちの火も納まり、保守派の主だった人物は大部分は殺害され、一部は逃亡して、新町区一帯には新しい政治がその朝から始まった。今まで保守党の手で迫害され、追求され、投獄され、拷問されていた人達が続々と家へ帰って来た。

坂田活子も、その一人だった。活子は芳江の家の檻の中から救い出され、裸のまま家で帰って来た。

朝が来ると活子は、もう元気で学校へ姿を見せていた。

彼女が一番先にやったことは、かねてから気脈を通じていた校内の活動分子と力を合わせて、校内の保守勢力を一掃することだった。小さな身体で彼女は精力的に走り廻って、午前九時にはもう雨天体操場で全学大会を主宰していた。大会場で芳江を会



長に多与子を副会長にして運営されていた従来の生徒会は廃止され、新たに「公正な」選挙によって学生自治会が組織され、活子はその委員長に選出された。それから芳江、多与子を含む旧生徒会の指導者十三人の学籍剝奪、校内裁判への起訴が、新幹部提案により満場一致で採択され、その内、現に大会に出席していた六人の女生徒はその場で前に曳出され、制服のスカートを捲かれて尻打台にかけられた。彼女達を裁く法務委員は各クラスから一人宛選ばれ、活子自身が法務委員長に選任された。

次は教職員中の右翼分子の追放だが、これは職員組合と学生自治会が協同して当ることになり、弾劾投票の結果、校長以下十三人の教職員を、やはり校内裁判に付することになった。

制服のスカートを捲られ、純白のズロースがピッタリした大きな丸い尻を並べて、尻打台に括りつけられている六人の前委員は、一人ずつズロースの上から尻を笞打された。彼女達は大きな板の台の上に両手を拡げてうっ伏し、尻を高々と持上げさせられたぶざまな姿勢のまま、ヒイヒイと悲鳴を上げた。

活子も笞を執って、傍の尻打台の上で薄いトリコットのパンティを丸出しにしている、井上弘子の臀を叩いた。弘子は一米六三厘の長身をくねらせて、しきりに泣きもがいた。

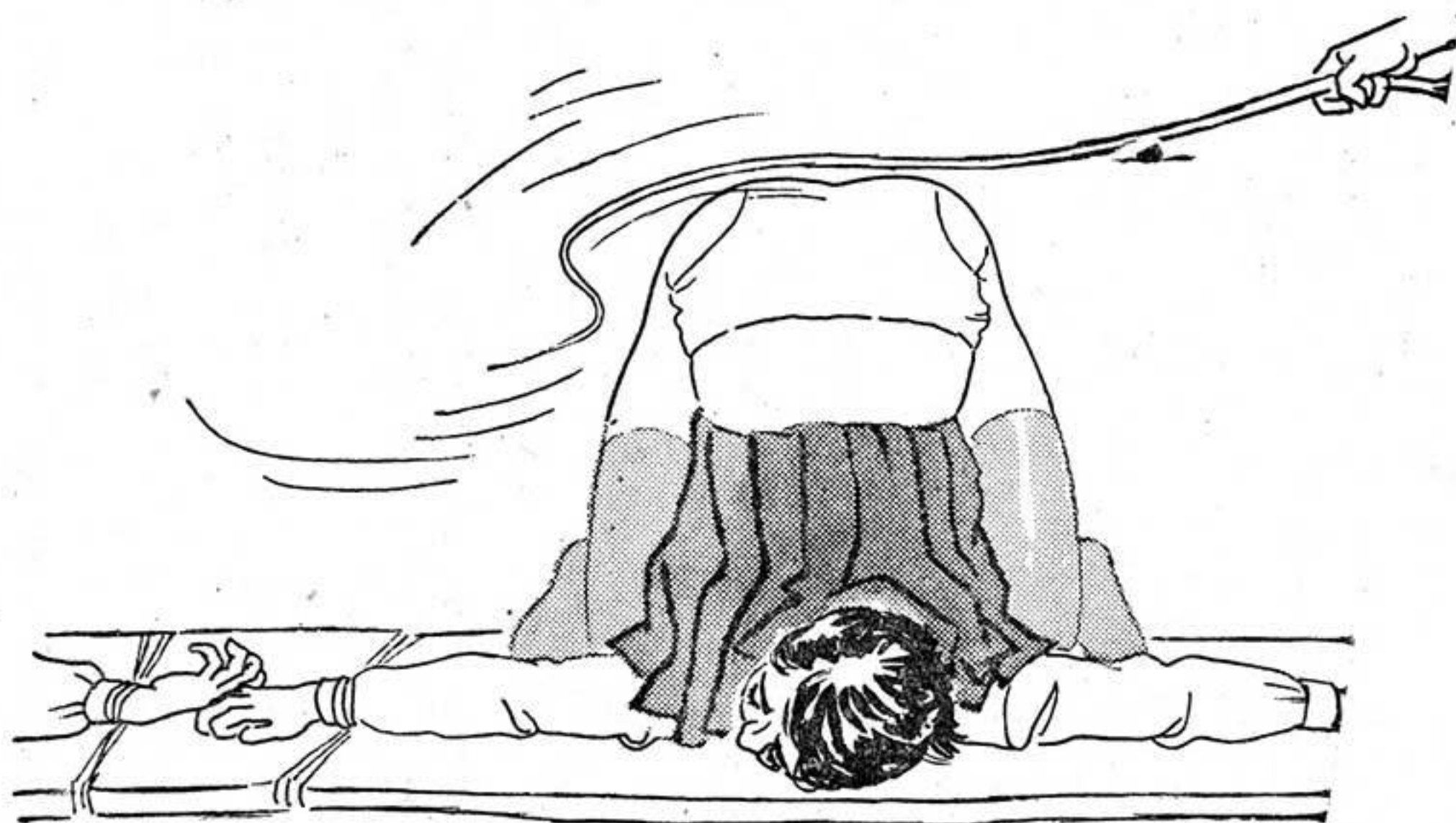
数日前、活子が学校当局の政策の犠牲にされて、重いF字型の鉄枷を細い身体にはめられて、全く自由を奪われていた頃、此の弘子は可愛い小さな顔に残酷な好奇の微笑を浮べて、いつも活子の鼻を撮み上げに来たものだった。その弘子が今は活子の打下す笞の下で、しきりに泣きもがいている。活子は耐らなくいい気持だった。

「井上さん。あなたが一番、私を虐めたのよ。覚えていてでしょうね」

ピシリッ。ピシリッ。ピシリッ。

「ウッ、ウーン、ウーン。ムウッ、ツウッ。許して下さい」

「今頃、何を言ってるのよ。私は以前は、人間が人間を折檻するなんて本当に野蛮な



ことだと思っていたのよ。だけど、あの時あなた方にあんまり虐められたので、どうしてもされた通りのことをし返してやりたくなつてしまったわ。私をこんな女にするなんて、本当に憎い人だわ。あなたって人は」

ピシーリ、ピシーリ。

「ヒイッ、ヒイッ、ヒイッ」

一鞭当る度に弘子の細いスナリした長身の背が、尻打台の上で鞭の様にしなうて反った。一寸、男の子の様な感じのする可愛い顔が蒼ざめ歪んで、ひきつっていた。そんな弘子の姿や表情が、活子の心に意外な程残忍な焰を燃やした。弘子の臀に鞭を振下す征服感。自分の手で一人の女を思いきり虐め泣かせ得た可能性と悦びの発見。弾みをつけて鞭を打下していると理性も失われて行つた。

「活子さん、お止しなさい。何ということをするのです。あなたらしくもない」

鋭い声で後からたしなめられ、ハッとして振向くと、級主任の田村和子が女優の様に美しい顔に目を怒らせて活子を睨んでいた。活子は狼狽して一瞬、鞭を持つ手を引込めた。

しかしよく見ると、田村先生は両手を腰の後に廻し、胸から後手の両腕を細い革紐でキッチリ縛り上げられていた。色白で肩幅の広い、胸肉の厚い、田村先生の縄目姿は、弘子への鞭の復讐で心が狂いかけていた活子には強い刺戟だった。

活子はすぐ、反動教員として糾弾された十三人の中に、田村先生の名もあったことを思い出した。ひるんだ心はすぐに立直った。成熟きった女の身体の魅力がムンムン立ちこめている。昨日までの担任教師の肉体に、活子は一種の闘志と欲望とを覚えていた。

田村先生は決して反動分子ではなかったが、ややきつい性格から時々スパルタ教育を行ったことと、最上級生のクラスを受持つて、その中から芳江や多与子の様な保守派の幹部の娘を重用したことが仇になって、此の様に、豊醇な胸をくつきりくびらせて、革紐の縛しめを受ける結果になってしまったのだった。

「私、先生には言いたいことがあります。後で、機会があったら充分、言わせて頂きますわ」

活子はヒステリックな口調で反抗的に言つた。田村先生は驚いた様に、美しい大きな目を見張つて活子を見下していたが、何も言わずに、逞ましい胸を張り、エキゾチックで派手な顔を起して、悪びれずに地下牢の方へ歩いて行つた。スカートを丸く持上げた逞ましい臀の上、二、三回、革紐の縄尻が、パシッ、パシッと鳴つて、活子の昂つた心をピクリと震わせた。

校内裁判は、その日の午後から始められた。裁判は全校生徒の目の前で公開で行われたが、尋問や判決は一切、法務委員しか手も口も出せないことになっていた。活子は正面中央の裁判長席に座つた。その両側に四名の判事格の生徒委員が座り、前の床に弘子達六人の前委員が、後手の縄目も厳しく跪いていた。

その横には、もう五人の生徒委員が檢察官格として座を占め、残りの下級生の委員は、刑吏役として、六人の被告の縄尻を掴んで立っていた。ほっそりした長身が一際目立つ井上弘子は、ボーイッシュで固い感じのする小さな可愛い顔を下に向け、崩折れる様に座っている所を愛子が身代りになってやった、美しい下級生の山本美登里だった。

弁護士はつけない筈だったが、委員の一人朝霞雙葉の発案で、地下牢で裁判に曳出される日を待っている追放教員を当ててみることにした。活子は裁判長の職権で、その弁護士として、田村和子と教頭の若杉美容子を選んだ。美人教員の双壁と言われる此の二人の選出は、傍聴の生徒達に拍手を以て迎えられた。

すぐに二人の女教師は地下牢から連れて来られた。二人とも革紐でギリギリ後手に縛り上げられた上から、例の重いπ字型の鉄枷をはめられていた。革紐で縛られ、胸と腕に大きな枷をかけられて、鞭打たれながら出廷する弁護人などというものは余り聞いたことがないが、仲々良いものであるに違いない。その証拠に、二人が曳出されて、よろよろしながら弁護人台に上らされて行くと、傍聴席がワッと沸き立って拍手と歓声が止まなかった。

「あなたですね、こんなおかしい見世物を思いついた人でなしは」田村先生は蒼白になって活子を睨んだ。活子が目で合図すると、弁護人席の後に控えた法務委員が、田村先生をその場に跪かせ、一人が髪を掴んで美しい顔を仰向けに反らせ、別の一人が、理科実験室の自動式スポイトで、鼻の穴に水を注ぎ込んで沈黙させた。

裁判が始まった。始めの総括訊問の内は全く田村先生と活子の論争に終止した。鉄枷で締められた美女の弁護人は、ともすれば激した口調になって活子を罵倒した。その度に活子は弁護人の弁論を中断させ、その豊熟した体に法廷侮辱の体刑を加えさせた。

田村先生は腰部をもちあげさせられて、爪先を立て、膝を開いて跪かされた。命ぜられた通りの姿勢を取らないと、太腿や二の腕に焼烙を当てられて、それだけの姿勢を強制された。そうして、跪い

たま尻を突出す様にして上体を前屈みにされ、口から井一杯の濃い石鹼液を飲まされ、次には一リットル余りのヒマシ油を灌腸された。石鹼水とヒマシ油は刑の度に交互に、口から入れられたり、灌腸されたりした。

忽ち田村先生の真白いすべすべしたお腹はブククラとふくれ上り濃い石鹼水やヒマシ油を無理に飲まされる気持悪さと全校生徒の見ている前で腰を浮かせて座ったまま灌腸される苦しさ、切なさで、田村先生の整った美しい顔は歪み喘いだ。そんないい様のない複雑な苦しみ方をしてもらえぬ田村先生の姿は生徒達を堪能させた。

体刑が終ると、又、スカートをさせられて、重い鉄枷を背負わされて立たされた。蒼ざめた顔には、じっとり脂汗がにじんでいた。「あなた方は酷い人達ですね。先生をこんなに羞しめて。坂田さん、これが貴方の理想とする社会ですか。革命以前の社会とどれだけ違いがあるかしら」

胃袋一杯の石鹼水とヒマシ油の混合液が食道を溯って来て、ともすると咽喉から押出そうとするので、田村先生はこれだけ言う間に何回も嘔吐しそうになって辛うじてこらえた。浣腸された同じ混合液が噴出しそうで、詰問の厳しさにも拘わらず、ひっきりなしに腰や腹を動かしている滑稽な不様さ。水責めに濡れた口も拭いて貰えないので、口の周りや頬、顎は光って濡れている。活子はそんな女教師を見やうと憐れむ様な顔つきで、

「大いに違いがありますわ。旧社会では私達は何の罪咎もなく、只、権力者の恣意の欲望を満す為にだけでも責められました。私達は拷問制度そのものを根本から否定するものではありません。どんなに人類が進歩したって、此の世のあらゆる片隅から、拷問を受け

る女と、拷問を加える権力者の存在を抹消することは出来ないと思うからです。只、私達は人間心理の本質に僭む拷問への欲望を、少しでも合理的な形に制度化したいと思っていますのです」

「オヤオヤそうでしたの。私は又、女権党の天下になったら奴隷制度は廃止されて、すべての奴隷は解放され、公開拷問制度や、今私を受けている様な拷問裁判制度、——なかんずく、国家主権以外の私権による残忍なお仕置や折檻の公認は、一切廃止されるのかと思っていました。私だって、心の底の方では、早くそういう社会が来ることを待望していました。いつも此の世に多過ぎる男女のサディストの犠牲に供されて、泣かされてばかり居るか弱い女の一人ですもの」

「では先生は今迄二つの誤りを犯していらっしやったわけですね。一つは、私達革新党の主張を女権党のそれと混同して、革新党の者が謂われもなく迫害されることを黙認し、肯定していらっしやったということ。もう一つは、先生御自身が心の奥では寧ろ女権党的ユートピアをお持ちになって居られるにも拘らず、一朝、生徒の肉体を目の前にお置きになった時は、屢々淫虐を極めた折檻さえなさって、いわば実践活動の上では、御自分の理想に対して反動的な役割しか果たされなかったこと」

「一寸待って下さい。教師が罪科のあった女生徒に体刑を加えることは、憲法でも教育基本法でも校則でも認められている法律上の権利なのです。それは同時に義務でもあります。罪相応の罰を加えなかったら、今度は私自身が、校長先生や視学官や教育委員、時にはP・T・A会員の目の前で折檻されなければならないのです。いいえ、現に何回も私はそういう折檻を受けて来ました。自惚かもしれ

ませんが、私は外の女の先生方よりも、生徒に対する体罰をサボタージュした罪項で責められた回数が多かった方だと、自分では思っています。先刻から度々灌腸された時も、私の腰に鞭の赤い傷が幾つもついているのを貴女も見ただでしょう。あれだって、貴女方をかばってつい一昨日、P・T・A幹事会の席で折檻された跡なのよ。それを……、それを……、あんまり酷いじゃありませんか。追放だの、反動だのなんて……」

激した田村先生の白い頬に大粒の涙がポロポロこぼれた。

生徒達はシーンと静まり返ってしまった。井上弘子は後手縛りの長身を起して活子を睨みつけた。しかし活子は水の様に冷静だった。

「先生のなさった体刑があくまでも合理的であったか否かは、後日の裁判が決定します。それらが総て法や規則の要求の範囲を決して逸脱して居なかったのなら、先生は無罪の判決を受けるでしょう。革新党は腐敗した保守党の様に、憎悪だけで罪を課する様なことは決してしません。今はとにかく、井上弘子外五人の弁護士として出廷なさったのですから、自己弁護の必要はありません。先刻、傍聴席全員に渡して記入させた告発メモの整理がもう終わった様ですから、その告発に応じて一人宛、今から罪状調査に掛ります。先ず井上弘子。前へ出なさい」

長い両手を背中で高々と折り曲げて縛った縄目の下へ、山本美登里が細い竹笞をこじ入れて、ぐいぐいとこじった。弘子は痛がって身を屈ませながら、跪いたまま前へにじり出た。朝霞雙葉が、全校生徒の投票に基く彼女の罪状の箇条書を読んで聞かせた。一項目毎に美登里が笞をこじって後手縄を締上げる。すかさず活子が認否を

環パイプ
緊

求めた。弘子は可愛い少年の様な顔を蒼白にし、苦痛に悶えながらも、健気に全罪条を否認した。

「こんな裁判は無効です。貴女方は革命に勝った勢いで、只、闇雲に、旧社会で役付きだった人間をすべて罰しようとしているのです。これこそ只の復讐の為の処刑、権力者の恣意に奉仕させる為の折檻の典型ですわ。貴女方に保守党を非難する理由はありません」

細い腕に骨も砕ける程縄を喰込まされて、顔で床を覆い、苦痛に身をくねらせながら弘子は絶叫した。その抗弁は一切の着衣を剝奪

されることによって酬いられた。

衣服をはがれた弘子は改めて跪かされた。その目の前で雙葉が炭火を熾し、小さな鉄鑊を火中に入れた。か細い身体が恐怖で震えた。

「弘子さん。私は罪状の認否だけを求めたのよ。それなのに貴女は余計なことまで口走って私達の法廷を侮辱しました。貴女の今の非難が正当かどうかは、最後までお裁きを受けてみなければ解らないことでしょう。今度、今の様な失言があったら、その鉄鑊が貴女の身体に加えられますわよ。貴女が今そんなみじめな姿で座らせられているのは、陳述が脱線したらすぐ焼鑊で身体を焼いて、裁判進行を迅速にする為の準備なのですからお忘れなく」

弘子は哀れな恰好に対する羞恥で頬を染め、恨めしげに活子を見上げた。

「私には坂田さんなどより芳江さんの方がずっと革新主義者らしい所があった様に思えるわ。芳江さんは人を責めたり、辱かしめたりすることに、心の底から嫌悪感を持っていらっしやったけれど、貴女達はそういうことに悦びしか感じて居ない癖に、尤もらしい理論を振廻して、まるで聖女みたいな顔をしていらっしやる。活子さん、貴女の心は卑しいわ。芳江さんの方がリファインされていて、ずっと偉かったわ。大勢の女の汗と涙と膏血の上に胡座をかいて、超然と生活していた保守党の大ボスの娘の方が、革新党左派の娘より、ずっとサディズムから遠い心の持主だなんて皮肉ねえ。貴女の理論はどう説明するの……」

そこまで放言して、井上弘子のボーイッシュな固い顔がキュッとひきつって、僅かにけいれんした。恐怖に見開かれた両眼に、雙葉

が焼鑊を手に近寄って来る姿が、二つ並んで映っている。次の瞬間、弘子は狂気のように、その焼鑊の下に、ほっそりした白い自らの全身を投出していた。

「何よ。そんな物で私の口が防げると思っているの。さあ焼いて頂戴。お臀でも太腿でも、お乳でも、貴女方の一番好きな所からジリジリ焼いて、女学生の黒焼一匹幾らで漢方薬屋のウィンドーに並べてみたらいいでしょう」

美登里が喚いている弘子の口に丸めたハンカチを押込んで猿轡した。雙葉の片手がほっそりした腰を抑えつけた。肉の薄い背中中の皮膚が、ピクッ、ピクッと動いていた。

肌を灼かれる少女の悲痛な悲鳴が、広くもない拷問室の硝子戸をびりびり震わせた。

ジ、ジ、ジ、ジ、ジッ。という素肌の焼焦げる音。脂の煮える悪臭。濃く立昇る一陣の煙。真白な後姿を見せた、俯伏せの被拷問者のたおやかな肌が苦しげに、くねり悶える。

ヒィーッ、ヒィーッ、ウ、ウウッ。

ヒィーッ、ウッ、ウッ、ウーン。

交互に湧上る悲鳴と呻き声。いけにえの苦しみぶりを見るに忍びず、芳江は目をつぶって下を向こうとした。すると柔かな顎の裏の肉に、鋭い痛みが走る。彼女は慌てて顔を上げた。

愛子の寝かされた拷問台の向うの壁に大きな鏡がはめ込んである。芳江の方に足を向け、俯伏せに縛られている愛子の顔がのけぞって、責苦にひきつり、目を半眼に閉じ、死人の様に蒼ざめ硬張って此方を見ている。その後、後で両手を組み、上半身素膚にさ

れ、膝を組んで座っている女は芳江自身だ。細い鉄のパイプが、芳江の乳房の下と腹部とを横に締めつけている。その二本の横環パイプに夫々二本の縦に丸いパイプが附いていて、これは、上の二本は乳房の内側から肉付きのいい肩に喰込んで、肉の横環パイプと連結して、後手に背負い上げられた両腕の自由を奪っている。下の二本は豊かなウエストを細くくびり上げた横環パイプに、これ又、πの字型に連結して、海老責めの形に両足を横に開いて二つに重ね合わせた彼女の足をしっかりと締めつけていた。その上、腰の下から後に伸びた支えのパイプが、二本緩く曲って斜後から二の腕を緊めたパイプを支えていた。縄一筋掛けられず、全身を冷たい鋼鉄のパイプだけで締め上げられ、それでも結構、芳江の身体は殆んど完全に身動き出来なかった。身動き出来ぬ身体は心持、後方に反り返って、瑞々しい双の乳頭が斜めに上を向いていたが、二本のパイプが、パイプ椅子の脚の様に斜めに後を支えて、仰向けに引繰返らぬ様になっていた。芳江の細い首筋にはもう一つ別に丸いパイプの環がはめてあった。これは前半分に二列の細い孔があって、そこに極微細な針が並んで植えられていた。うなだれた芳江は此の首パイプの針にふくよかな顎の裏を突刺されて、慌てて顔を上げたわけである。

鏡の中の愛子は半開きの口から、だらしなく涎を流し、顔を斜めにのけぞらせ、哀れに顎を突出して、ヒィヒィ泣いていた。彼女の拷問は明らかに不当だった。しかし芳江にはそれに抗議する言葉が出せなかった。芳江は口にも長さ二十糎ばかりのパイプの棒をくわえさせられていた。棒は二本で、その間に舌を挟まれていた。後頭部にも別に一本当てがわれ、三本のパイプは頬の横で両端をゴムテ

パイプで結びつけてある。唇はすっかり捲かれ、唇端に二本のパイプが強く喰入って、口が裂けてしまいうような痛さだった。

それでも芳江は、焼鰻で足の裏を焼かれている愛子の苦痛を思っ
て、口と首と全身をパイプで強く拘束されている辛さに耐えてい
た。

裕福な家庭に育って、学校でもずっと優等生を続けていた彼女は、今迄一度も他人の手で、こんなひどい姿にされ、苦しい責めを受けたことはなかったのだが――。

愛子の小さな、白い足の裏は、もう両足とも真赤に焼爛れてい
た。俯伏せの拷問台から下されて、愛子は爛れ上った足で無理に立
たされ、焼鰻を尻に当てられて歩かされた。

別の拷問官は芳江の傍に来て、頬の横のゴムテープをほどいた。
力を失った口中から二本のパイプがほろりとこぼれ、のけぞった胸
に喰込むパイプの拘束具と触れ合って、カラカラと鳴った。

パイプを嵌め込まれていた間中、口中に溜っていた唾液がたらた
らと顎から流れ落ちた。我にもあらぬその浅ましい所業に芳江は真
赤になってしまった。いかにも良家の娘らしいそんな初々しさを、
男達は好ましそうにみつめていた。愛子がヒューッ、と泣きなが
ら、その前を横切って歩かされて行く。

「どうだ。愛子の責姿を見てると楽しかろう」

芳江は無言で首を振った。

「お前の家で逮捕されたのは、お前達二人だけだったなんて、全く
信じられん話だ。外の者はどこから逃げてしまったのだ。抜道があ
ったに違いないな」

「……………」

「もう一度聞くけど、お前は本当に、抜道も家族達のかくれ場所も
知らないのか」

「存じません。本当に」

此の男の言うことは本当だろうか。家族中で捕まったのは私達二
人だけで、後は皆どこへともなく姿をくらましてしまっていたなん
て、信じられないことだった。しかし本当だとしたら……。いやい
やそんな筈はない。此の人達は私達を責める口実にそんな出鱈目を
言っているのだ。絶対に言い逃れの利かない状況を仮説して訊問す
る。女を責めるにはこれ以上、便利で安直な方法はないことを、此
の国の男達は誰でもよく知っているのだ。

「そうか。本当に知らないのだな」

男はニヤリニヤリと笑いながら芳江の顔をのぞき込んだ。

「いい身体じゃねえか。此の身体はまだ一度も痛い目を見たこと
のない身体だそうだな。そう言えば針で突かれた程の傷もない。綺麗
な肌をしてらあな」

そう言って、足を組んだまま拘束具にかかっている芳江の前に座
り込んだ。肉付きのいいミルク色の二の腕を平手で叩いたり、豊か
な乳房を掌に載せて、重味を測ったりした。

芳江は屈辱に表情を歪め、真赤になった。

生れて始めて男に露き出しの乳房を触られるのだ。

男への烈しい怒りが湧いたが、それを露骨に表へ現わせる性質の
女ではなかった。只、顔だけでなく、上半身の肌全体を赧らめて内
心の怒りを表わしていた。

男の顔は、とろけそうな淫らな表情を浮べていた。その中、次第
にその淫らな表情のまま、男の顔は暗い光を帯び、冷たく引緊って

来た。眼が残忍な欲求で異様に輝いて、食い入る様な視線になった。鋭い視線はなめ廻す様に、パイプの拘束具の中で身動き出来ない芳江を眺めていた。

歩けなくなった愛子は死んだ様に床につつ伏して、泣き止んだ咽喉を竹の様に鳴らしていた。先刻までその愛子が寝かされていた拷問台の上へ、今度は芳江が縛りつけられた。愛子のか細い身体からしみ出た膏汗が、じっとり冷たく浮いている鉄のベッドの肌触りのおぞましさ。すえた様な愛子の責肌の残り香。縛られながら芳江は思わず続け様に身震いした。愛子は俯伏せだったが芳江は仰向けだった。男が右手で芳江の肩を掴んだまま、左手で顔を掴んで可愛い顎を起させた。ふっくらと丸い真白な頬に節くれ立った五本の太い指が、ガッシリ埋り込んだ。爪が頬の肌を喰込んで痛かった。

別の男が赤熱した鍔を芳江の凝脂のような脇腹に当てた。可愛い口が半開きになって魂の消えて行く様な悲鳴を上げた。悲鳴は間歇泉の様に正確な間を置いて四回上った。

拷問が終わった後。芳江はぐったりと台の上に仰臥していた。少し前まで艶のいいミルク色に輝いていた丸い顔が、蒼白に変じて、しっとりとした滲み出た膏汗が光っていた。張りのある大きな目は閉じられ、唇は血の氣を失って苦痛に歪んでいた。細縄で締め上げられた肉付きのいい胸が大きく喘いでいた。

最後の悲鳴の時、愛子は辛うじて顔を上げ、力のない目で、肌を灼かれてわなわな震えている台上の芳江を認めた。此の世で一番尊敬し、崇拜さえしていた愛する従姉の無惨な責姿を目撃しても、彼女は、限界点にまで達していた自分の苦痛の為に全く心を動かされなかった。

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり 略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

二人の犠牲者は立たされて、両腕を背後に組み上げられ、再びあのパイプの拷問を繰り返された。上半身を締め上げられると、大きな手押車の上に並んで座らされ、両脚を海老責の様に開いて組まされ、臀から脚にもパイプの枷がはめられた。芳江は腹と腿とに菱形を描いて四回、鍔を当てられただけだったが、愛子は足が腫れ上る

まで焼かれていたので、どうしても足を組めなかった。男達は鉄線の鞭をピシピシ鳴らして、愛子の全身を打ち続けたが、どうしても駄目なので、火腫れした愛子の足を押えつけ、強引にパイプで締めてしまった。愛子は全身にたらたらと冷たい汗を流して苦しみながらパイプの枷を受けていた。

見るに見かねて芳江は横から哀願した。

「私は仕方ありませんけど、愛子さんを虐めるのは、どうぞ勘忍して上げて下さい。私でさえ知らない抜道とやらを、愛子さんが御存知の筈はありませんわ。どうか、お願いします」

哀訴された男は面白そうにニヤニヤしているだけだった。そしてまだ余熱のある鍔を少女の敏感な乳首に押しつけた。芳江は思わず飛上った。飛上った積りだったが、頑丈なパイプの拷具に拘束された身体は全然身動きが出来なかった。

「此奴は保守党の為に学拵連をスパイしていた反動だそうじゃないか。場合によっては責殺してもいいと三田委員長から指令が来ているんだ。しかしお前も同級生からSだと陰口を言われる程仲の良い従妹の苦しみぶりを見ているのは辛いだろうな」

「ハイ。ですからお願いします」

「許してやってもいいが、条件があるぜ」

芳江は思わず目を閉じた。どうせ碌でもない条件であることは、聞かなくとも解る。

「どういう条件でございましょう」

「だからお前の家族は、どこに潜んでいるか白状しろと言っているのだ」

「それは先刻から申上げて居ります通り……」

「では仕方がない。お前達二人共、許してやる訳には行かん。お前の家族をおびき寄せる為の大切な囹だからな」

四。辞書を引くと此の字は、「他の鳥を誘い寄せる為に繋いでおく鳥」と註されている。それは元来、人間ではなくて鳥なのだ。鳥。繋がれた二羽の小鳥。他の鳥を誘い寄せる為に、声を限りに鳴かなければ囹の意義はない。

繋がれて、吊されて、芳江と愛子は声を限りに泣いていた。

そこは、かつて坂田活子が水責め竿の先に吊下げられた、あの新町川の上流であった。二つの台地の間を細くなった急流が、岩を噛み、烈しく白い牙をむいて、音高く流れていた。じっと見ていると目も眩む様な激流である。

両側の台地と台地を結んで、溪の上には鉄の吊橋が架かっていた。芳江と愛子は二十米程間を置いて橋桁から垂直に吊り下されていた。長い長い鋼鉄のロープ。その長さだけで五十米もあるだろう。その先端にミルク色の肌をすっかりあらわして、芳江は俯伏せの豊かな胸をのけぞって吊られていた。彼女の手足は後に曲げて一つに纏めて縛られている。背中には三貫近い重石をのせられ、遅ましくせり出した太腹に荒縄で括りつけられていた。四肢もちぎれる様な苦痛。優しい山猫さん々とクラスメートからニックネームを奉られていた、可憐美と野性美の過不足なく調和した白い顔をのけぞらせ、ふくよかな頬に乱れかかる長髪の末を噛みしめて、鈴を張った様な両眼から、清冽な透明の涙を泉の様にこんこんと湧き上らせて、咽び泣いていた。

ウッ、ウッ、ウッ、ウッ。

泣声は無論、轟々と崖岸に反響する流れの音に消されて、背中

上、遙かな観客の耳には届かない。並んで吊されている愛子の耳にさえも――。

芳江の胸は豊穡な両の乳房をありたけ、ぐんと突出して斜めにのけぞっていた。背の石の重味で腹の皮も伸びきって、はち切れそうに薄くなっている。その腹部の皮膚に、時々氷を溶かした様に冷たい谷川の水が、巨岩にぶつかった勢いではね返って当たった。が、恐怖と苦痛に意識もくらみそうな小鳥には、その冷たさも感じられなかった。芳江は両足の膝頭だけは懸命に合わせて、はかない、そして、いじらしい努力を続けていたが、水面の両側は切立つ様な崖で、芳江のその切ない苦勞を見ているのは苔と羊歯ばかりだった。

それでも重石の圧力で背骨と腰骨の接目が開いて自然に彼女の太腿は末広がりになって行く。こんな姿にされても彼女の乙女らしい優しい心根だけは鋭敏だった。群集は皆、背の上、五十米から見下しているのに、開いた腿を閉ざそうと、芳江は全身に膏汗を流して空しい努力を続けていた。

「御覧に入れておりますは、新町溪谷名物は鶯の谷渡り。親にはぐれた可愛らしい肉体美の娘鶯が、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、と親を求めて声を限りに泣叫ぶ泣声が、首尾よく皆様のお耳に達しましたら何卒、拍手御喝采の程を。ハイッ、ようおく御覧うじろ。ハイ――」

珍妙な口上がマイクから流れ、両側の崖上の谷に沿って続く細道に鈴なりになった見物人の耳に届いた。群集が固唾を飲んで首差延べ、深い谷底を覗き込むと同時に、橋上の二人の刑事が長い竹棹を伸ばす。ワイヤロープの先に手足を後で一つに括られた少女がブラコンコのように揺れ始めた。ロープの先の扇型の白い物体が緩りと上流

から下流へ渡り、下流から又、上流へ戻る。その速度が次第に早くなって行く。

芳江は呻き喘ぐばかりだった。ぜいぜいと咽喉が鳴っていた。拷問慣れしている愛子の方が身体は小さくても気は確かで、一人鋭くヒイヒイ泣いていた。その泣声が轟々という谷川の流れや、兩岸の森の梢を渡る風の音に紛れ、或いは消されて、かすかに、かすかに、流れのずっと上の群集にも聞き取れた。

「これだけ派手な見世物を演せば、噂が拡がって、逃亡した島村の家の連中も、心配して斥候位はよこすだろう。それを捕えて芋蔓式に手繰って行けば、いつかは手掛りも得られるだろうさ」

愛子吊りのロープを竹棹で突つきながら、刑事の一人が別の一人に話掛けた。その口ぶりには芳江の家族の逃亡が決して嘘でないことを察知させるものがあつた。しかし芳江は何も知らず、手足をピンと伸ばして後四手に結かれ、今はぐったり首を垂らし、十八歳の乙女盛りの身体から、総身の膏を絞り取られる様な苦しい汗を流していた。白い肌が妖しい冷たさで光り、顔や太腿や脇腹の上を膏汗は流れ、腹部のピークや乳頭の髪の毛の先から冷たい汗がポタポタ滴って、谷川の早い流れの中に溶けて行った。広い背中も、豊満な肩先も、全身に細かく密生した淡い黄金色の産毛も、まるで水に浸されて今吊上げられた様に、ビッシヨリとにじみ出る膏汗で濡れていた。

兩岸にひしめいている見物人は、この奇妙な見世物を、まるでサイカスでも見物するように、いつまでも眺めているのだった。愛子と芳江の苦しみも知らぬげに――。

(未完)

女装の楽しみ

比良野裕

(告白)

△この告白記は、人名等多少変えた点もありますが、略々完全なノンフィクションであることを申添えます。V

新婚第一夜

お風呂から部屋に戻ると卓の上に宿帳が置いてありました。

良人はためらうことなく

「武田屋太郎

妻 裕美子

とスラスラと書いて私に見せました。私の



名が、恵美子さんの名とを合わせて作った女名前になっているのを見ると、ニッコリ笑ってうなずきました。湯上りの体を廊下の椅子にくつろがせ、涙流のせせらぎに耳を傾けていますと、女中がお膳を運んで来ました。新婚夫婦ですから、女中も遠慮して、お給仕を致しません。差し向いの夕食をとりました。一本傾けて、良い気持そうな夫は、少しおしやべりになりました。そして、私に注意を与えて下さいました。

「歩き方が大またすぎる」「肩の落とし方が足

りない」「衿もとが不自然だ」というのでした。私は、注意されると、それがとても頼もしく感じられるのです。女というものは少々いじめられることを喜ぶ、マゾ的性質をもっているのでしょうか。私のあらさがしの度に私の気持が良人に惹きつけられて行くのですから不思議でなりません。

食事が終って真暗になった庭先を散歩しましたが、少し冷えるので、玄関脇の土産物売場をひやかしました。部屋に帰って見ると、寢床の準備ができていました。型通りに一つの蒲団に二つの枕でした。新婚旅行という触れ込みでしたので、宿の方も気を利かしたのでしょうか。矢張り現実に、こうした立場に直面すると、女性としての恥ずかしさや恐ろしさ、そして私の身体が、良人の行動を迎え得られるものかという疑問やらで、身体が震えました。

良人は私にやさしくして下さいました。私達はしばらく向い合って話し合いました。話して行く中に良人は浅草や上野の男娼と遊んだことがあると言いました。けれども、商売人はどうしても面白くなかったとのことでした。

私も少し心が安まったので、肌襦袢と真赤

なお腰、長襦袢に伊達巻をぎゅーとしめたあ
でやかな姿で床へそっと入って行きました。

私はただ夢見る心地でした。

「アア、この人によって私は女の身体にかえ
られるのだワ」というよろこびが心から泌々
と感じました。

翌日、私達は昼近く宿を出て、自動車で鳩
の巢の良人の別荘へ参りました。その家は二
十坪ばかりで、間取りは八畳、六畳、四畳半
の三間で、お風呂場もあり大変明るく、庭も
広く、芝生になっており、南向きの台地にあ
るため眺望が良く、材も商売柄総檜作りで、
私は一目ですっかり好きになってしまいました
た。六畳のお部屋には奥さんが使った鏡台や
タンスが置いてあって、何もかも在世中のま
まのようでした。

「どうだい、ここに住む気はないか」

「……………」

「いやなら、無理とはいわないが……、毎週
土曜日にここで泊ろうじゃないか。鍵は二つ
あるから一つあずけておこう。僕が夕方ここ
に来る前に来ていて、すっかり女になり、一
晩泊って、僕が帰ってから、お前が後をしめ
て東京へ帰る」
「ええいいわ」

「それじゃ次の土曜日から……。食物はどう
しようかな」

「私に委せておいて頂戴。私お料理を作って
あげるわ」

「そりゃ有りがたい。そうだ、僕の妻だも
のな」

と言って、大笑いしました。

私は晴れて夫婦になったような気持でし
た。二人で縁側に立って、遠く多摩川の方を
眺むと、青空も緑の山も、私達を祝福してい
るように思われ思わず、

「山のかなたに空遠く」

幸住むと人の言う……」

というカール・ブッセの詩が口をついて出
て来ました。

その日は、昨日の御夫婦の家へ行って着物
をきかえ、一人で東京へ帰りました。

別荘の生活

待ちに待った次の土曜日。私は料理の材料
をたずさえ、良人からあずかった大切な鍵を
もって出かけました。何かしら、この一個の
鍵が「幸福の扉を開く鍵」のような気がいた
します。玄関の鍵をあけて中へ入り、雨戸や
障子を開け放し、一週間振りで新鮮な山の空

気を思う存分吸って今日、これから良人が来
てから楽しい計画などに胸をふくらませまし
た。

着て来た男物の着物は押入れにしまい、日
当りの良い南側の縁側に鏡台を持ち出しまし
た。鏡と向き合い、一時間近くもかかって念
入りにお化粧をすませ、さて何を着ればよい
かとタンスの方を見ると、その前に乱れ函が
おいあって、中には紫の地に菊の柄の綿紗お
召と羽織が重ねて置いてあり、その上に濃い
嚙脂の帯止帯締も添えてあり、またその脇に
は赤い長襦袢から伊達巻まで一切おいてあり
ました。これは良人が一番好きな着物で、
「これを着ろ」という意味なのでしよう。屹
度、良人が先日あれからここへ戻ってタンス
から出して行ったものと思われず。

時計は四時近くなりました。私はお着物を
よごしてはいけなそうと思いカッポを着かけ
て、夕方の御飯の仕度にとりかかりました。
御飯をたいて丁度火を引いた時に、玄関前の
石だたみに靴の音がしました。新妻の私は、
胸をはずませて、玄関のガラス戸をあけ、カ
ッポを着をはずし乍ら「お帰りなさいませ」
とカバンを受取りますと、良人は「只今！
恵美子じゃなかった裕美子！」

と、言いました。

私は亡くなった奥さんの名で呼ばれたのがかえって嬉しく感じました。私がお料理を作っている間に、良人はお風呂に水を入れ、わかつて下さいました。お風呂の炊口が台所の隅にあるので、お互に楽しく話し合いましたが、良人は私の手許を見ているのです。

「お前、どんな料理を作るか、今日はみものだナ」

「あら、妾、お料理には自信あるのよ、召上ってから批評して頂戴」

「そうかい。それなら安心だけどサ。実は味の素を忍ばせて来たんだヨ」

「マア、憎らしい」

「ハハハハ」

こんな楽しい会話をしている中、お風呂もわたので、一風呂浴び、夕食も終り、後片付けもすっかりすんだので、雨戸をしめていますと、良人は私の後から言いました。

「そうして後姿を見るとよく似ているよ」

「あら、恵美子さんにですか？」

「うん」

「あら嬉しいわ」

私が良人の方を見てニコリ笑いますと、良人は私の顔を見つめて、

「後姿ばかりか、顔も似ている。本当によく似ているから不思議だね、そうやって口に手をやって笑う様子などソックリだ」

戸棚からアルバムを取出して来ました。幾枚かの恵美子さんが健康だった頃の写真を見せてくれましたが、一枚大寫しの微笑んだ写真がありました。

「僕はこの写真が一番好きだった」

夫が示したのを見ると、その着物は、今私が着ていると同じ菊の柄の錦紗でした。これで、この着物が乱れ函に入れてあった理由がハッキリわかりました。その大寫しの写真を見ていると、自分でも矢張り似ているように感じられました。

「一寸まってね」

私は写真をもつて鏡台の前に行き、恵美子さんと同じように眉をひき直し、唇の紅をぬり直しました。鏡の中の私の顔を見乍ら「似ている、似ている」と喜ぶ良人を見ると、良人のその喜びがいにじらしいような、またうれしような気がして、胸が一ぱいになり涙が出て来ました。

思えば小学校へ入る前から、可愛がってくれたよい小父さん、その小父さんの初恋の恵美子さん。私は恵美子さんの身代りとして裕

美子という名前を貰い、二人分の愛情を一身にあつめたわけです。私も妻として、恵美子さんの愛と私の愛を合わせて捧げました。これ程、愛情の厚い夫婦は他にはないのでないのでしょうか。

それ以来、土曜日の来るのが待ち遠しくなりません。日曜日の夕方、良人をおくり出してから、男の姿に戻り、良人の次の電車で東京へ帰ります。

私は、昼間は独身のサラリーマンとして生活し、夜の女装や土曜から日曜にかけての女性生活と切離しており、昼休みには会社の屋上で女子職員たちと一緒にコースをしたりしておりますから、良人以外には誰もこの私の秘密を知っているものはありません。私はこの不思議な生活こそ、人生の楽しみを二倍にするものと考え、大切に心の底に秘めております。

(おしまい)

〔後記〕

ここ数ヵ月に互り連載しました「女装の楽しみ」は十二月号を以て完結しました。真実味溢れるこの告白は女装ファンの方々には、どのように映じましたでしょうか。比良野氏の続篇を期待すると共に、ファンの通信をお待ちします。



「菊」に寄せる 我が幻想

北川 春夫

こんな題名をつけたものの「菊」とは「奇ク」のことである。本誌に対する讃辞はこれまでに、数多くの人々によって、言い尽されてるので、いまさら私が下手な表現でくどくど言う必要はないことと思う。だが創刊時代から現在に至るまで、百数十冊、一冊も欠かしたことなく愛読者と言え、それが奇クに対する何よりの讃美であるに違いない。

そこではかねてから奇クについて、こうして呉れたら……と思ってたことを述べて見たいと思う。それは決して批判するつもりではなく、私の遙なる願いにほかならない。それを述べるまえに、私の趣味について、簡単に述べよう。一言にして述べれば、エネマ・レスボス・フェチズム（ブルマー）です。しかし、私は奇クの文章よりも、絵や写真を通じて前述のものに接して、自らを慰めています。当然のこととして奇クの写真や絵にいろいろの希望があります。それで長年の間、蓄積された奇クへの私の希望を述べさせて戴

きますと共に、同趣味の方と誌上を通じて交歓致したいと存じます。

まず四馬孝氏の絵です。彼の絵の為に毎月買い求めているようなものですが、若干の不満があるのは、主観と趣味の相違で仕方ないものであるでしょうか？ (1)ヒロインのバストに比してヒップが細すぎます。(2)私はズロース・ブルマーに興味がありますが、四馬氏のヒロインはズロースかパンティーだか判らない中間的なもので、もし、ズロースのおつもりなら、もう少しふっくらと書いて戴きたいと存じます。それでなければ判っきりとパンティ型になさったらいかが？ (3)その下着が少しズリ落ちかかって、おへそを出しています。が、私はおへそには興味はございません。あくまで端正に着用し、ブラジャーもつけてる方が、グット上品である許りでなく、公刊誌としての性質から言っても、その方が望ましい。少なくともホンの一部ならともかく、どれもこれも「おへそマニア」のために義理立てする必要はございません。このことは、写真についても同じことが言えます。

(4)構図としては責絵の中に、サジストの男を画くのは、私個人としては止めてほしい。

つまり、責める人が男か女か？ 美男かヤクザか、美人か醜女か？ 読者の空想に任せる方が良いと思つてます。この点、最新号のものは大体そうなつて来つつあるので、大変嬉しく存じます。以前のものです、責める女が、別の絵のヤクザと同じ醜悪な人相をして、しかも、肩幅、腕の形、ウエストまでが男みたいなのは、どうしても戴けません。私の希望は責める方は、虫も殺さぬような優しい美女が、同性を責めるのに、妖しい胸のときめきを感じます。勿論、憎悪ではなく、合意のもとに行われてるものが好きです。その点、嘗てグラビヤ・口絵にのつた三木恵子さんと浜本喜美の「狂花の戯れ」は実に素晴らしく、もし私が女だったら、ああいう風なプレイを楽しむのにと残念に思う程です。

四馬氏にお願いしたいのは、二人の美少女が裸にされて正面から抱き合った姿勢で縛られ、腰の方もふんどし状の股間縛りに連縛され、二人一緒に木馬責めを受けてます。責める人はまだセーラ服の女学生です。Sの嫉妬……？ いや実は二人から頼まれて、そのようなお手伝いしたに過ぎません。ですから、責めてる子も、決して意地悪な人相はしてません。いや、可愛い綺麗な子で、純情な感じ

で、自分だってあんな目にされて見たいような表情さえ浮べてます。そんなアイデアの絵を是非お願いします。

それから、旧刊号の男装の美少女による振袖小姓などを画かれた畔亭数久さんはどうしていらっしゃいますか？ もし、四馬孝さんと同一人物でないのなら、近況をお寄せ下さい。美女が前髪の若衆になった姿が好きです。映画でもテレビでも、そんなのは出来る限り眺めてます。ただ映画では、最近東映の千原しのぶが出ないので行きませんが、彼女の十二単位の姫姿はもとよりお小姓姿に憧れたものです。畔亭氏の華麗な豪華絵巻は今でも私の心に焼きつけられたふうに、まざまざと憶えてます。殊に戦国絵巻の前髪姿の美少女が、鎧はもとより衣服を脱がされ、ふんどし一つの裸にされて縛られてる絵や、高貴な女性が裸のまま髪を盛装し、豪華な帯だけをして、金の金具のついた立派なはりつけ台にゼいたくな紐で括られてる姿等はまさに世にも得難き傑作です。これに敵し得るものと言え、甲乙のつけるふうは有りませんが、四馬氏の革製のホルセット(頭部から足先まで)位なものです。もっと範囲を拡げて見ても、F紙(現在廃刊)の中川彩子氏位なものでし

よう。(現代物ですが、女性特有のデリケートな、そしてリアルスティックなタッチで女性の心理と体臭が感じられます)しかし、それに反して、四馬氏や畔亭氏のは流石男だけあって、ロマンチストですね。男の女性に対する永遠の夢、女性を美化した幻想的な美しいイメージが感じられます。

次に、写真に対する注文を述べましょう。

(1) モデル嬢に新人が現れた際は、サイズと共に、許せる限りの紹介をお願いしたい。年令、職業、住所(県又は市)等――。

(2) 私の趣味から言えば、ブラジャーは必ずつけて置くこと(ロープ・ブラジャーなら良い)、おへそを出さないこと。

(3) バレリーナの舞袴とタイツのものををお願いしたいし、セーラ服やシャツと運動用の黒いブルマー姿のもの(ブルマーは余りダブダブしないもの)をお願いします。

(4) 前述の女性連縛ものと、三木・浜村嬢コンピの「狂花の戯れ」式のもの。

(5) スカートやペチコート或ひはスリッパが白の時、下着になるパンティーやズロースは黒をはき、反対にスリッパが黒の時はパンティーは白をはく方が黒白写真の撮影効果は満点です。

記事について言えば、「奇ク」は男性中心

の記事が多く、殆んど男許りでソドミイとフンドシにはうんざりします。もっと女性体験創作が出て良いと思います。私の望みは、女性同志のエネマの体験や告白と、レスボスに興味があります。レスボスについては、春本のように肉体的に書くことなく、詩情性のあるロマンチックなものを求めます。私がレスボスに憧れるのは、私が男だからです。つまり、私自身絶対に不可能だからこそ、未知の世界への想いが募るのです。もし私が女に生れ変わったら、男など相手にせず、専らレスボスの為に生きることでしょう。Sの元祖のサフォーが詩人アルカイオス(男)を恋したことは、サフォの一時的イカモノ喰的浮気と見做します。そのような意味で、夫を持つことは生活手段で、女の子を可愛がるのは本当の愛——そのような人妻が多いと聞いてますが、そのような告白はないものではないでしょうか。

それから尊敬する沼正三氏はじめ愛読者諸氏にお聞きしますが、アラビヤの女奴隷がハレムに入る前に、奴隷訓練所に入れられて、訓練を受けるそうですが、どんな拷問台を用いるのか、笞打以外の折檻について御存じの

方は発表して下さい。

最後に私のフェチシズムについて申し上げましょう。私は女装マニアではありませんが、常に女性の下着を身につけてます。それはいつも堂々と買いに行きます。本誌の多くの下着マニアの告白によると辱しいものだらうですが、私は女性客の多い時だって平気で。自分の金を出して買うのに何の遠慮する必要が有りましょう。買うのにビクビクするのは本当のマニアとは言えないような気がしてなりません。そんな告白を読む度に、不甲斐ない奴だと軽蔑します。

時に、総ゴム製ズロース型メンス・バンドを買うつもりで真昼間十軒位廻ったこともありますが、逆に薬屋の方が恥かしそうな調子(男主人、女店員共)で、反って楽しい位でした。しかし、之は残念にも入手出来ませんでした。今東京では黒いナイロンのパンティ型が流行しています。

女装への憧れはありますが体験はございません。せめて、バストとヒップが大きくなればと願っていますが、どうにもなりません。でも女性ホルモン剤を飲んでまで、女性化する意志はありません。従って、私は来世で女性

に生れ変わるつもりです。その点、仏教は便利な宗教だと思えますが全面的に信仰する訳には参りません。

最後に私の「黒いブルマーへの讃歌」を謳わせて頂きたいと存じます。

私がブルマーに魅せられたのは、小学校四年生でした。丁度、運動会の予行練習の時に、自分より背の高い足のスラッとしたキレイな上級生に淡い恋心を抱きました。彼女については、未だに名前を知らないほど、何にも知らないのです。

私の郷里九州ではブルマーと言えば、戦前では紺か黒で、いずれもズロースを一廻り大きくした程度のもので、現在の東京のように決してダブダブして居りませんので、反ってふっくらして美的な感じと、更にその下に履いている純白なズロースを連想させます。

何しろ東京のは、股下はヒザまで届かん許りに長く、ヒップの所は妊婦はもとより大関横綱だって入れそうな位、タップリしてます。あれでは美的効果がないことは勿論、セクシーな魅力も湧いて来ません。黒いのは単純なズロース型ですが、紺のものは、ヒダになって、そのヒダは前が五七本、後は一本(東京のは後も何本もついています)に

なつて、左右の両側は一〇センチ程切れてるので、動くとき運動シャツのすそがズロースの一部が見えます。それで男袴のように梯形の腰当てこそ有りませんが、丁度括り袴の股下を短くしたみたいです。後のヒダが一本ということと、左右が切れてることは、日本の袴を連想します。

ウエストは三〇四センチ幅の带状になつて、ボタン・ホールかスナップがついてて、運動シャツについてるボタンかスナップによつてブルマーを吊してます。ですから運動中シャツが乱れてはみ出すことは有りません。東京のは左横にボタン又はボタンとホックによつて、ウエストを締めるようになって居り、シャツとの関連はございません。もちろん、この型のもので黒いのもあります。

その後、中学に入りますと、(当時の中学は男女共学ではない)剣道の袴をはいて正座した時の後姿が、ヒダのついたブルマーに良く似てるのに気付きました。それに、立っている時は、セーラー服のスカートみたいです。いや当時の女の先生の制服は女袴でしたので、それらのものが渾然と一体になって好きでした。つまり、女袴とセーラー服のスカートとヒダのついたブルマーは、私にとっては

単に形色(紺)布地(大体はサージ)だけでなく、性的に三位一体だったので。

そして、時代劇の前髪的美少年の袴、お姫様の十二単衣のときの緋袴、お小姓姿の男装の美女、行燈袴といわれる普通の女袴、最もブルマーに似てる時代劇の中の括り袴、セーラー服のスカート、ヒダのついたフレアー・スカートの全てにフェチシズムを感じるようになります。その外、外国の映画やバレエの中の王子様や騎士のタイツ姿のときは、今のようにパンティーではなく、ズロース型のブルマーか、ヒダ付きブルマーであることは遙なるフェチシズムの郷愁を感じたものです。

それで、私はアコーディオン・ブリーツは嫌いです。余りヒダが細か過ぎるのは、ブルマーへの連想が及ばないからでしょう。

それから女の方で非常に瘠せた方はパンティーよりズロースかブルマーの方が良いのです。骨ポク尖ったヒップなんて、とても見られたものではありません。そんな方はタイトスカートは禁物です。もし、タイトをお好みなら必ずヒップ・パットをお用い下さい。

しかし、東京の女学生みたいに、ダブダブなのは、誰だって嫌いになってしまいます。もっと体に合った、形の良い、ズロースや

ブルマーを売つてると良いのにと思います。

外国では実に形の良いのがあって、欧米では現在でも、同一人がパンティーからズロースに履き換えて出演したりするようです。それでタイト及びストラックス以外(フレアー)の時は、ズロースになつて、体の美しい線が崩れる心配はありませんから、フレアーの時ぐらひはズロースをなさったら如何です。

ストラックスやタイト・スカートの時の下着は、フレアー・スカートの時のに比べると、他人にみられる恐れがないためか、一般にお粗末で、しかも、時として不潔なのをはいてるように思われます。フレアーの時はパンティーはもとより、スリッパ・シュミズ・ペティコート・コルセット等、実に清潔で、しかも豪華なものを育てる点で、好感を抱きます。

その反対に、夏でもストラックスの方は安物で不潔というだけでなく、M的な非魅力と、大根足を隠してゐることを連想させます。私には例え大根足であっても、チャント、スカートををはいてる方が魅力されます。或る女子学生のインテリ娘がいつも哲学的論争して威張つてくるくせに、外見の装いに反して、下着が十日位も洗つたことのないような不潔なシュミーズだったことを知った時、何とも形容し

麻生保氏の生活と意見

麻 生 保

(一) 鰐淵晴子さんは、かの厳格で有名なお母さんのベルタ夫人から、割に最近まで、お尻をぶたれていた由。ベルタ夫人の手が晴子さんの白桃のようなお尻にピシャリ、ピシャリと鳴ると、晴子さんはあつぶらな瞳から涙をポロポロ落して、「ママ、ごめんなさい、もうしません」と言います。ベルタ夫人は、きまって「ハルコ、ママにあやまることはありません、神様にあやまりなさい」と答えて、容赦なく打ち続けたものだそうです。

(二) 麻生が実際に外人家庭で見聞した尻打ちの中で、一番印象的だったものを書いておきましょう。折檻された坊やはその時、六つ。パパは陽気なイタリー人で、ママは、典型的な賢夫人型のイギリス人。三十二三でなかなか美人ですが、一寸ヒステリックなところも感じられました。彼女は、このトニオ坊やを胸に抱いて、お尻を平手で打ちました。彼女は腰かけていましたから、かなりの大きい坊やの頭は、彼女の肩にのり

ました。ズボンはぬがせられませんでした。が、うすい夏のパジャマ一枚でしたから、むき出しのお尻を打つと同じような小気味よい音がひびき、坊やは痛そうにプリン、プリンと発育のよいお尻をゆすり、そこはイタリー人の血を受けていますから、オーバーに泣きます。「ママン・ママン、ごめんなさい、もうしません。……もう……しま……せーん」然し、ママは、トニオ坊やの声におつかぶせるように、ピシャリッピシャリッと容赦もなくぶつのですが、坊やは、ぶたれれば、ぶたれる程「ママン、ママン、ボクのママン」と言って、泣きじゃくり乍らも、ますますママの豊かな胸にすがりつき、涙でクチャクチャになった顔をママの髪へ押しつけるのです。二十回位も打たれたでしょうか。坊やは泣き乍ら哀れなお尻を押えて寝室へ追われて行きました。夫人は、いささか呆氣にとられている客である麻生の方へ、しなやかな鞭のような右手を、おどけて振って（こっちが痛く

がたいものを感じました。

さて、話をブルマーに戻して、その魅力を自己流に分析して見ましょう。

まずブルマーの黒又は紺は肌の色を白く見せます。特に白いシャツと対照的な黒は、時として派手な場合もある許りでなく、非常に神秘的な魅力を感じしめるのです。

ブルマーのふつくらした形はヒップの大きさを誇張するばかりでなく、足を細長く見せ、ウエストを実物以上に細く見せますので、尚更、ヒップが大きく感じられ、同時に細く感じられるウエストの為に、バストも魅力的に感ぜられます。女の性的魅力について隠蔽と誇張と露出の方法が考えられますが、ブルマーは誇張であり、パンティは露出（運動用パンツはチラリズム的に白い下着を見かける露出）と考えて居ります。

形のよい誇張の場会は、実に素晴らしい。子供の頃、ブルマーをはいたお尻を見ると、浣腸してやりたくります。また、沢山浣腸したら、お尻があんな風に大きく膨満したならば（お腹は膨まずにお尻だけが）どんなに素晴らしいことだろうと思つたものです。

それからブルマーやズボースの魅力の一つは、裾がゴムでつづまってることです。之は

てしようがないといった風で)みせ、「一寸失礼」と言って中坐し、数分後身じまいをして再び現れ、夫のイタリー人と、三人で何事もなかった様に談笑しましたが、明らかに夫人の頬は高潮していました。これは、全くの実話なのですが、森本氏の「残酷なる女性達」の中で、これに似た問題を何度も紹介しておられます。特に一九五五年二月号一〇ページの訳者註とそれに先立つ部分は、興味深いものです。又、子供に折檻を与えた日は、必ず夫に強く要求するという報告もなされている由です。

週刊コウロン八月三十日号

ヒップフェチの仙人といわれる稲垣足穂氏のことが出ているが、麻生は不勉強にも同氏に関して予備知識がなかったもので、もの足りない。「A感覚とV感覚」などという同氏の代表的エッセイも知らないから御高教得たいものである。

土曜漫画八月十二日号

清水正二郎氏の「東京の秘密地図」に金髪のコールガールの話がのっている。彼女は、枕の下から鞭をとり出して「ユーが使用するのか、それともミイが使うか?」と

きく由。それから……。

週刊女性九月第二週号

グラビヤで鰐淵晴子さんが軽井沢で白馬に乗っているが、姿勢は感心しないし、ご軽装だし……どうも、いただけません。

週刊スリラー八月十九日号

リングサイドの女性ファンという記事は面白かった。SM両面から一読の価あり。

「女性の残酷趣味」とも、「敗者への母性本能」とも言うが、ある意味で、「残酷趣味」と「母性本能」はうろはらである。(一九五七年二月号・生活と意見参照)又、ペレスは、小男で無教養な田舎者だが、夫人は、大柄な美人で、彼は大へんな劣等感を持っているという。ママ・コンプレックスにつきまといわれる小さな英雄をいとしく思ったのも、サディズムから来るものだったろうか、と推論している。このあたりは少しお粗末な論理の飛躍もあるが当たっている。そして、ペレス夫人は、夫に極めて辛くあたって励ますことがあるという。

ヒップを大きく見せ足を細長く見せる許りでなく、伸びたり縮んだり柔軟で弾力のあるゴムに喰いつかれることは、極めて女性的なシンボルのように思われます、出来るだけ沢山のゴムを用いて、体中の各所を締めつけてすることは、極めてセクシーな魅力です。ことに強いゴムがキュツと皮膚に喰い込んだのは、緊縛を連想しますし、皮膚に残った跡も同様です。そのことも私には耐らない魅力です。それに、ゴムでしっかりと裾を締めた下穿きは、何か大切なものを秘めてるように思われてなりません。

つまり、処女を守る本能の現われのような気が致します。ブルマーについての私の気持ちを充分に表現出来なくて残念ですが、これで筆を置きます。読者の皆様の中で私と同感の方があれば是非本誌を通じて発表して下さい。

尚、形の良いブローズというのは股下がく、横にふっくらとしたものです。

胴と股がゴムできっちり締めつけられ、そしてダブダブせず横にふっくらと膨らんでいるものがよいのです。ダブダブでしまりのないものは駄目です。

時代サド小説

醜奇地獄小屋

矢 桐 重 八

湯 治 宿

すててん、てんすけ、すってんてん……
てれつく、てれつく、すってんてん……

軽妙な太鼓の音である。おもしろおかしい拍子だった。太鼓といつても、粗末な手造りの、檜の胴に獣の皮を張っただけのものであったが、不思議によくひびいた。

だが、べん太の芸はその首から吊るした太鼓を、ただ鳴らすだけでなかった。

太鼓を叩きながら、その身体をくるりと宙に回転させるのだ。

じつに身軽な男である。いや——男とよぶよりも、まだ少年の面影を残している、べん太だった。

粗末な木綿の布子を身にまとい、そこからまだ成熟しきらない手足が、すすくすくとのびている。陽にやけて、まっ黒になったその若々しい四肢が、太鼓に合わせて跳躍するのは、みごとだった。

「オホホホ……」

と、べん太の芸を見ているお小夜は、いつものことながら、声をあげて笑ってしまう。

そして、長い療養暮らしのうっとうしい心が、いつも晴ればれとしてくるのだった。

「ほんとうに、おもしろい子なこと……」

お小夜は、たべ残しの菓子を紙に包むと、座敷から縁側にでて、べん太を呼ぶ。

「おいで、べん太さん、お菓子をあげましょう」

呼ばれると、べん太はペコリと頭をさげ、おそろおそろお小夜の立つ縁側に歩み寄ってくる。

「ア、ア、ア……」

べん太は素直に手をだして、菓子を受けとる。この少年は口がきけないのだ。しかし、お小夜にはべん太の眼の色で、その心がわかる。そのとき、

「いけません、お嬢さま。またそんな汚ない乞食の子に近づいて！」

お小夜の背後に、とがった声がした。

この宿の帳場へ用たしにいていたお杉が部屋にもどってきたのだ。

「だってお杉、べん太さんはいつもあたしを慰めてきてくれたんじゃないの。この位のお礼をしたっていいと思うわ」

お小夜は不服顔だ。

「いけません。シラミでもうつされたら、どうなされます。明日はこの宿を出立して、いよいよ江戸のお家へお帰りになれるというのに……」

お杉の語気は強硬だった。

お小夜はブンとふくれて、かえって意地になったように、帯の間から可愛い金欄の巾着をだすと、その巾着ごと、べん太の手に渡した。

「べん太さん、長い間あたしのお友達になってくれたお礼、といっではなんだけど、これをあなたにあげます。中身はすくなくて、悪いのだけれど……」

お小夜にすれば、それは心底からの感謝のしるしだったのだ。お杉はあきれた顔で、突っ立ったまま、お小夜とべん太を見くらべて

いる、

「ア、ア、ア……」

菓子と一緒に巾着もおし頂くと、べん太の黒い顔に、さびしい陰影がうかんだ。不自由な口をうごかして、じきりに何かをきくような表情をする。

「お嬢さん、明日はほんとうに江戸へたってしまうのかね？」

という、べん太の質問なのだ。

「ええ……」

うなずいて、お小夜はニコリと笑った。まる一年ぶりに我が家へ帰れるのだ。うれしいことにちがいない。

お小夜の明かるい笑顔をみて、べん太は、

「ア、ア、ア……」

という泣き笑いの顔をみせた。

お小夜との別れがづらいという、べん太の表現だった。

「べん太さんも、お達者でね」

お小夜は無邪気にいった。

しかし、べん太の姿はもうこの庭になかった。一転すると猿のような身軽さで、いずこへかと去っていったのであった。

ただ、太鼓の音だけが、てけてん、てけてんときこえ、それも次第に遠ざかっていく。

「さあさああ、お嬢さま。江戸までは二日半ばかりの旅でございますが、やはり仕度だけはきちんとしておかなくてはね」

女中のお杉は、お小夜に附添とて一年間逗留した、この馴染みぶかい部屋の中を、いそいそと片付けはじめるのである。お杉も、いかにもうれしげであった。

附添いの女中といっても、まだ三十五になったばかりの年増で、いわば女ざかり。お杉にとっては、その健康な女ざかりの身を、こんな山の湯治宿で一年を送ったことが、なんともつらかったのである。

むかえ番頭

ここは箱根七湯の一つ、芦の湯の温泉宿だった。あまり客のたてこまない別棟の離れの一室に、お小夜とお杉は寝泊りしていた。

お小夜は、江戸日本橋堀留の材木問屋、木曾屋徳兵衛の一人娘である。

一年前、お小夜は軽い癆咳に冒された。医者に診せると、いまのうちならば必ず早く癒るから、すぐ転地療養させたほうがよい、という。

そこで徳兵衛は、お小夜にお杉を介抱役としてつけ、この芦の湯にこさせたのである。

さいわい、地元にもよい医者がいて、この一年間熱心にお小夜の身体を診つづけてくれた。そして、つい半月ほど前、無事に全快、江戸へ帰ってもよろしいという、待ちこがれた許可がおりたのである。

お小夜とお杉が、手を取りあってよろこんだのも無理はなかった。すぐにそのことを、親の徳兵衛のもとに手紙で知らせた。その返事が、それから五日目の昨日、やっときたのだ。

「番頭の要助と丁稚の吉松を迎えにやる。その者たちと一緒に、気をつけて帰ってくるように……」

という、父親からの書状であった。

「まあ、お父っあんが迎えにくれるとばかり思っていたのに、要助なんかいいつけるなんて！」

と、お小夜は不満だった。

「でも旦那さまはお店の仕事がお忙しいから、とてもこんな箱根くんだりまでは、おいでになれないのでございますよ」

と、お杉は泣き顔のお小夜をなだめるのにひと苦労した。

「だって、よりによって要助なんか……」

お小夜は、番頭の要助がきらいだった。

父親にもお杉にもまだ言っていないが、一年半ほど前、お小夜が病氣にならず、堀留の家にいた頃だった。ある夜、要助は誰もいない隙を見計らって奥のお小夜の部屋に忍びこみ、いやらしい振舞いをしかけた。

要助は豆腐のようになまっちょろい、のっぺりした顔で、いかにもおれは色男でござい、というようなそぶりがみえるので、お小夜ははじめから嫌いだだった。まだ住込み番頭のくせに、芸者買いやら女郎買いもはげしいときいている。

だから、忍んできた要助を、お小夜は手きびしくはねつけた。大声をあげなかったのがお小夜のなさけだった。

しかし、要助ちゆう男も雇人のくせに、ひどくずうずうしかった。自分の色男ぶりに、よほどの自信があるらしく、二度、三度と隙をみては、その後もお小夜の手を握ろうとするのだ。

要助はかげひなたの多い男だから、主人の前では要領よく、勤勉な顔で働いて、信任もらうのだが、裏へまわったら、何をしているかわからない、と利口なお小夜は思っていた。

しかし、木曾屋は番頭だけでも十人近くもいて、雇人の総数は四

十人にもなるという大世帯なので、徳兵衛も番頭一人の素行までに眼が届かなかったのだ。

「あたし、ほんとうに要助なんかきらいなのよ。あんな人と一緒に

旅をするなんて、思っただけでも、ゾッとするわ」

と、しきりに首を横にふっていたお小夜だったが、お杉の哀願に、やっと今朝方になって、しぶしぶ承知したのである。

要助が丁稚の吉松を供に、お小夜を迎えにこの湯治宿の離れへ到着したのは、その日の夕刻だった。

「お嬢さま、おひさしぶりでございます。要助めがお迎えに参上致しました。これはまたお嬢さま、血色もおよろしう、いちだんとお美しくなられて、お肩のあたりから、まるで後光がさすようでございますよ、えへへへ」

お小夜の前に猫のように両手をつき、要助はべらべらとしゃべって卑しい笑いをつけたした。

お杉は愛想よく要助と吉松の苦勞をねぎらったが、お小夜はプイと横をむいた。

その夜、お小夜は自分の夜具をびったりとお杉の布団に眼をつけて眠った。

迷い道

翌朝、お小夜にお杉、それに要助と吉松の四人は、旅仕度をととのえ、芦の湯の宿を出立した。丁稚の吉松は肩いっぱいに三人分の荷物を背負わされている。



四人の後方遠くに、いつまでも、軽妙な太鼓の音が、てけてん、てけてん、ときこえていた。

姿は見せないが、鳴らしているのは、べん太であろう。かげながら、お小夜の出立を、そっと見送っているのだ。

お小夜は、べん太の心根にいらしいものを感じた。

「あの太鼓はなんでございましょうな。いつまでも私たちの後を追って、ちとうるそうございますな」

耳についたらしく、要助がいった。

「乞食の子が鳴らしているんですよ、番頭さん。いえね、毎日のように宿の庭へきて、山猿のような芸当をする子なんですけど、お嬢さまがあまやかしたもんだから、すっかり馴れ馴れしくなっ……あたしはあの乞食の子が、いつか本性をあらわして、お嬢さまにわるさをするんじゃないかと、ずいぶん心配したもんでございますよ」

お杉が、よくまわる舌で説明した。女中の立場としてみれば、この心配も当然なのかもしれない。

「お杉、もうそんな言い方をするのはやめておくれ。あの子は何にも悪いことはしなかったじゃないか。乞食の子にはちがいないだろうが、あのさびしい湯治宿で、あたしのたった一人のお友達だったんだから……」

お小夜は、やや強い声をだしていった。その権幕におどろいて、お杉は沈黙した。

四人は樹間の山道をくだり、それからまたわかれ道を左に折れて、上り坂にかかった。

太鼓の音は、まだ遠くで鳴っている。

樹の葉越しに見える箱根の山々が、まだ朝もやに煙っていて、さわやかな眺望だった。間道なので、このあたり旅人の姿もない。

「番頭さん、息がきれてしかたがない。またのぼり坂かい。道がちがうんじゃないかね」

と、年増ぶとりのお杉が、汗をふきながらいった。

「この間道は、街道筋へ出て、それから問屋場へいく近道なんです。そこから、お嬢さまとお杉さんには、駕籠が用意してございすから……」

と、要助は道を指でさしながらいった。

「私はともかく、お嬢さまは病みあがりだから、あまりお歩かせしては……」

というものの、お小夜よりは、自分のほうがもう参っているお杉だった。

「もうすぐでございます。もう、ひと息……なんなら、私がお嬢さまを背負ってさしあげましょうか」

ニヤリとして、要助がいった。

「いいよ。一人で歩くよ」

お小夜は、ツンとふくれていった。要助の背にのって、お尻を要助の手でささえられるなんて、思っただけでも、背すじが寒い。

お小夜は、ムキになって足を早めた。

しかし、要助のいった街道筋は、一行のゆく手になかなかあらわれなかった。

それどころか、山道はいよいよわけわしく、深くなっていくようである。山の冷気がひえびえと肌に迫ってきた。

「番頭さん、私はどうもこの道はおかしいように思うんだがねえ」

お杉が、不安な眼を要助にむけた。

「さようでございますなあ……これは道に迷ったかな？」

要助は、いまさらのように、キョロキョロとあたりを見まわした。

「じょうだんじゃないよ、番頭さん」

お杉は立ちどまり、眉をつりあげた。

「まあ、あわてなさんな、お杉さん。おそこに辻堂がある。あの辻堂でひと息いれながら考えると致しましょう」

要助は、落着きはらっていった。

辻堂といっても、すでにその形をとどめないほどに荒れ果て、朽ちた破れ堂である。それは、このあたり、いかに人間の往来がないかという証拠であった。

「さあ、お坐りなさい。まずは一服」

といって、要助は一番さきにその堂の縁に腰をおろした。朽ちた縁は、みしみしという音がした。

要助は、帯のうしろからゆっくりと煙草入れをだし、煙管をひきぬくと、うまそうに紫煙をくゆらせはじめた。どこかふてぶてしい要助の態度に、お小夜もお杉もうす気味悪いものを感じた。

「要助、あたしをこんな所に坐らせて、これからどうしてくれるの。早く駕籠を呼んできておくれ。あたしはもう歩くのはいやよ！」

たまりかねて、お小夜がさげんだ。

「お嬢さま、もうお嬢さまはお歩きにならなくとも、ようございませう。男たちがちゃんとかついでいってくださるさあ……」

せせら笑いながら、要助をいった。

そして、煙管の雁首を縁の端で、ポンと叩いた。すると、それが

合図のように、十人近い半裸の男が、周囲の樹蔭や草むらから、ざわざわと音たてて現われたのだ。

髪はぼうぼう、顔はひげだらけ、素肌に木綿の袖なしを着て、縄の帯をしめただけの、熊のような男である。

この箱根山本を根城にして、獣のように生きている山乞食の一堂だった。旅人をゆすったり、湯治客にたかったりして喰っている仕末におえない無頼の一群である。

その荒くれ男たちが、ニヤニヤとうす笑いをうかべながら、四人を取りかこんだ。

「ひええッ！」

悲鳴をあげて、お小夜とお松はたがい抱き合った。

「わああッ！」

と、声をあげて山乞食の一群は襲いかかった。まるで黒い嵐だった。

山乞食の小屋

山乞食の頭目は、野州生まれのずぶ六という男である。

そしてここは、山乞食たちが雨露をしのぐための丸太小屋の中だった。

生木を丸太のまま組んで、粗雑だが頑丈にできているこの小屋は、前には熊笹の生い茂った崖がふさがり、背後には水かさの豊かな溪流があった。

水の便がよく、しかも人目につかない所に巧みに建てられた小屋である。

「てへへへ……なるほど、こいつア、めっばういい娘だ。おれは

いままでに、こんなに色が白くて綺麗な娘を見たことがねえや。この頬ッぺたから襟ッ首のところ、まるで透きとおるような白さだぜ。えへへへ……ねえ、旦那。あっしや、旦那のきもち、よくわかりやしたぜ」

野州のずぶ六は、唇の端からながれでる涎を、手の甲で拭きながらいった。ずぶ六の左右には、手下どもが十四、五人も肩をくっつけあって坐っている。

旦那と呼ばれたのは、要助である。

ずぶ六の言葉に、要助はにが笑ひした。

芦の湯の宿へお小夜を迎えにいく途中の山中で、要助は始めて、このずぶ六に逢ったのだ。

旦那、哀れな乞食でござえます、どうか一文、めぐんでやってくだせえまし……と、たかられたのである。

そのとき、要助の脳裏に、この奸計がひらめいたのだ。

江戸の店を発つときから、要助は（こんどこそ、お小夜をおれのものに……）と心にきめていた。

主人の徳兵衛に箱根いきを命じられた時、要助は内心で思わず（しめた！）と手をうった。

じつは要助は、半年ほど前から、店の金を使いこんでしまっていた。女好きの要助が、身分もかえりみず深川の芸者にいれあげ、そのためにずるずると手をつけてしまった八十両という帳場の金だ。

住込み番頭の給金では、とてもその穴は埋めきれない。

——露見しないうちに、この店から逃げだしたほうが、利口というものだな……

と、要助はひそかにその機会をうかがっていた。

だから、こんどの箱根いきは渡りに舟というわけだ。要助はさらに店の金を三百両も盗みだした。そして何喰わぬ顔で、店を出立したのである。

むろん、お小夜の身体をそのまま木曾屋へ送り届ける気は、さらにはない要助だ。

山道でぶつかっただずぶ六が、要助にとっては悪事の片腕だった。丁稚の吉松をひと足さきに歩かせ、要助はこっそりとずぶ六に頼んだ。お小夜誘拐の手筈をきめたのである。

「——そら、約束の金だ。わたしだぞ」

要助は、ずぶ六の前に、五両の包みを投げだした。

「ちょっと待ってくださいえ、旦那。礼金はたしか、十両ときめたはずでござんしたよ」

ずぶ六の眼がギョロリと要助をにらむ。

「頼んだ仕事を、ぜんぶやってくれたら、残りの五両を払ってやる」

要助は、鋭い目でいった。

お小夜、お杉、それに吉松の三人は、荒縄でうしろ手にキリキリと縛りあげられ、小屋の片隅に身体を寄せあっておののいている。

要助がずぶ六に頼んだ仕事の残りというのは、邪魔になるお杉と吉松の二人を、なんとか始末してくれ、というのである。いくら悪党の要助でも、人殺しはちょっとできなかった。

「へへへ……ここまで仕事が進べば、あとは雑作もねえことよ。こんな女と餓鬼の二人ぐらい、いますぐにでも片付けてみせますぜ」

こともなげに、ずぶ六がいった。

「た、たのむよ」

要助の声音が、さすがにふるえた。

「ふるえていなさるのかね、旦那。悪党らしくもござんせんよ、いひひひ……まあ、そこで見ておいでなせえ。鶏の首をひねるよりもっと手際よくやってごらんにいますよ」

ずぶ六は、その手つきをしてみせた。

「ま、まってくれ。やるのなら、外でやってくれ」

要助はあわてて片手を横にふった。

「うふふふ……旦那、地酒だここにすこし残っている。こんな汚ねえ茶碗でもよかったら、いっぱい飲んでごらんさえ。気が強くなりませう」

ずぶ六は、うしろに置いた徳利から、濁り酒をどくどくと欠け茶碗につき、要助の前にさしだした。

要助は夢中でそれを手にとると、咽喉を鳴らして飲みほした。

「ああ！……」

ため息をして、ふうッと肩を落とした。意外は強い酒だった。胃の腑に熱くしみわたった。きゅうに酔いがまわって、ずぶ六の言葉どおり、気が大きくなった。

矢でも鉄砲でももってこい、という気になった。この三年間、恋いこがれたお小夜が、いま自分のものになろうとしている。純真無垢な白肌は、もう腕のなかに抱いたと同じことなのだ。

要助の視線が、ねっとりとお小夜の顔にむいた。

むざんにも、うしろ手に縛りあげられた壁を背に、横坐りのお小夜。そのほそい身体が、荒縄に容赦なくしめあげられて、よけいに細く、痛々しい。

襟がくずれて、咽喉から胸もとにかけての柔肌が、要助の眼のな

かにとびこむのだ。喰らいついて、菌型をつけたいほどの白肌だった。それが、ちよっぴりのぞいているだけに、よけいにたまらないのだ。

要助は両手を床につき、犬のように這ってお小夜の膝もとにじり寄った。

「うふふふ……お小夜、おれはなァ、もう三年越しに、お前のことを思いつづけてきたんだよ。その塵一つほどの汚れもないきれいな身体を、一度でいいからおれの腕に抱きしめてみたいと、それだけが望みで、いままで沐曾屋に奉公してきたようなものだ、お前が箱根へ湯治にいつているこの一年間、おれはどんなにさびしかったか……。だが、うふふ、その願いも、いまはこうしてかなえられたんだ。こんなうれしいことってあるもんか……。こんなうれしいことって……」

要助の頭のなかで、妙に重くなってきた。鉛のようなねむけが襲ってきた。それでも要助は、お小夜の前に這いつくばったまま、かきどくように、つぶやきつづける。

「なァ、お小夜……お前はこれからおれと一緒に上方へ行って、夫婦になって仲良く暮らすんだ。可愛がってやるぞ……うふふふ……毎晩、うふふふ……」

要助の口から、灰色の涎が垂れはじめた。そして、頭をがっくりと床に落した。

完全に、ねむってしまったのである。

「えへへ……野郎、ねたらしいな」

ずぶ六が笑った。そして、坐ったまま、足をのばして、要助の顎を蹴った。

「む、む、む……」

と、うめいて要助は眼をあけない。

要助に飲ませた酒のなかには、ねむり薬が仕込んであったのだ。

ずぶ六の左右に、十四、五人あぐらをかいている手下どもが、だらしない恰好で眠りこけた要助をみて、いかにも愉快そうに、げらげらと笑いこぼした。

醜怪の群れ

「——えへへへ……小僧をしめ殺す前に、まずてめえの首からしめてやらア……」

というと、ずぶ六は二尺ばかりの荒縄を握って立ちあがった。

おそろしい男である。

ニヤニヤと笑いながら、その縄を眠っている要助の首に巻き、力をこめてぎりぎりとしきしほった。

要助は一言のうめきも洩らさずに、くびり殺されてしまったのである。因果応報というには、あまりにも無惨な死にさまたった。

ずぶ六は、息の絶えた要助の懷中から、ゆっくりと財布をひっぱりだした。店から盗みだした三百両が、ほとんどそっくり入っているのだ。

「えへへへ……」

ずぶ六は、財布の重さをたしかめて、満足げに笑った。

「ひいーッ！」

と息をのんでのけぞつたのは、お小夜とお杉だった。いくら悪い奴でも、要助は眼の前で殺されたのだ。

「いひひひ……まるで笛みてえな悲鳴をあげやがる。まったく可愛

い娘だぜ。てへへへ、たまらねえや！……」

要助が死骸になったとみるや、十四、五人の獣のような男たちの眼が、こんどはいっせいに、お小夜にむいた。

野卑、惨忍、そして、ぎたぎたと濡れ光る好色の眼だ。

なかには、お小夜よりもお杉の腰のあたりを狙っている奴もいる。娘よりも、年増ごのみの老乞食だった。

丁稚の吉松は、もう片隅に倒れたまま気絶している。乞食たちの眼中にはない。

「か、か、かんにんして！……」

お小夜の唇から、恐怖にかすれた哀願がでる。白い顔が、脅えてよけいに白い。背を、うしろの丸太壁にひたと寄せて、醜怪な乞食たちから、一寸なりとも遠去かろうという、むなしい努力をしている。

眉も鼻も梅毒のために欠けくずれた一人の老乞食が、たまりかねたように、お杉の前に顔をつきだしていった。

「ひっひっひっ、わしはもうがまんができねえ。わしは生娘なんかよりも、こっちの年増でええから、おかしら、早くたのむぜえ」
せわしげに吐く息が、はっはっとお杉に顔にかかる。そのもの凄いい臭気。

「あれッ、くさいッ！」

と、お杉は思わず悲鳴をあげて、顔を横にねじまげた。

「なんだと、くせえだと？……ひひひ……ぬかしやがったな。おい、野郎ども、この女はおれたちのことを。くせえだとよ！」

ずぶ六がききとがめ、惨忍な口調で手下どもをふりかえった。
十数名の乞食どもが、がやがやとざわめいた。くさいといわれ

て、侮辱を受け憤怒の面つきである。手をふりあげ、足をばたばたさせて騒いだ。



「ねえ、おかしら。おれたちの吐く息が、くせかくさくないか、この女二人に、ぞんぶんにかいでもらっちゃどうすい？」

手下の一人が、ずぶ六に提案した。

「なに、おれたちの息をがいでもらう？ ふふふ……そいつはおもしろえぞ」

ずぶ六は、手下のいった言葉の意味をさと、すぐに同意した。

女二人に、男は十四、五人——じつのところ、ずぶ六は弱っていたのである。へたをすれば、仲間同志の喧嘩になる。なにしろ、飢えていた奴ばかりだ。なんとかしなければ、血の雨も降りかねない。

ずぶ六は、一計を案じた。

「おい、いいか、野郎ども。これから、この女二人をこの一座のまんなか引っぱってくる。動けねえように寝かせておいて、おれたちがまわりから、女の顔に息を吹きかけるんだ。おれたちの吐く息が、とてつもなく、いい匂いだということとは、おれたちも知っていたらな。そこで、女は悲鳴をあげる。その悲鳴を、一番大きくあげさせた奴が、まっさきに……ということにしちやあ」

男たちの顔を見渡しながら、ずぶ六がいった。

「ケケケケケ、そいつア、いいや」

「おもしろえ趣向だな、おかしら」

「ちくしょうめ、こんなときには、瘡ッかきに分があらあ」

乞食たちは、口々にわめいて賛成する。

「ただし、言っておくがな。息を吐きかける間、女には指

一本触れちゃならねえぞ。手でさわって悲鳴をあげさせるのは、誰にでもできることだからな」

ずぶ六が言葉をたした。

「わかったよ、おかしら。早く女をまんなかにつれてこいよ」

「よし」

ずぶ六は立ちあがり、壁に背を寄せているお小夜とお杉の縄尻をつかんだ。それを上から、ぐいと引ッ張る。

「あれッ、か、かんにん！」

お小夜は顔をゆがめ、もう生きた心地ではなかった。悪夢ならば早くさめてくれればいい……だが、縄尻を乱暴に引かれたために、胸に腕に、ギリギリと喰いこんだ縄の痛みは夢ではなかった。

うしろ手の手首に、荒縄のザラザラした縄目が喰いこみ、ちぎれるかと思うばかりの苦痛だった。

「う、う、う……」

お小夜は、小さな唇を噛みしめる。

恐怖と屈辱に、十九才の小さな胸は狂いそうだった。

縄尻をぐいぐいと引かれ、お小夜とお杉の身体は横倒しになったまま、乞食たちの輪の中に据えられた。

「あ、あ、あれッ」

髪が乱れ裾はめくれて脛がこぼれる。縄がしめつける胸もとに、あらわになった白い脚に、濁った眼がそそがれる。食いつくよう眼、眼、眼だ。

歯をむきだす奴もいる。咽喉を鳴らす奴がいる。自分の膝を両手でしっかりつかんでいる奴がいる。熱っぽい視線が二人の哀れな犠牲に集中されているのだ。

「いいか、女の身体には、指一本触れちゃならねえンだぞ。吐く息だけで勝負するんだ。このいいつけにそむいた者は、おれがぶち殺すぞ」

ずぶ六が、強い声でもう一度注意した。

「おう」

乞食たちは、生唾をのみこんでうなづく。

それから——この、世にも醜怪な、汚辱に満ちた責めがはじまったのだ。

「臭気責め」「悪臭責め」とでもいうのであろうか。

縛られて身動きもならず横たわる二人の女の顔に、乞食どもは、かわるがわる、そのおぞましい息を吐きかけるのだ。

「はあッ、はあッ、はあッ。それ、もう一つおまけに、はあッ、はあッ！」

腐れた口から吐きだされる悪臭に、小夜はのたうちまわった。鼻がつまり、息がつまった。

「ひいッ、うううッ！」

首を動かすことだけが、わずかに自由だった。その顔を、右にまげれば右に、左にまわせば左に、悪臭は執拗に追いかけてくる。

「はあッ、はあッ、はあッ」

乞食どもはおもしろがり、いまはもう夢中だった。

「む、む、むむむッ……」

お小夜の白い顔が、苦しげにゆがんだ。大店の一人娘として、自由気ままに育ったこのお小夜には、あまりにも強烈な恐怖だった。そのお小夜の苦悶の表情が、また乞食どもにはたまらないのだ。「むむむッ、ううッ、もうやめてッ、ああ、やめてッ！——」

お小夜の身体は、悪臭を避けて反転し、のたうちまわってまた反転する。縛られた身体は、這っても逃げることもできないのだ。

それを見て乞食どもは、げらげらと笑いころげる。手を叩き、足を鳴らしてこの残酷な遊戯を楽しむのだ。

最後に残った一人の男は、世にも奇怪な形相だった。その顔をみたお小夜は、思わず眼をとじた。はじめのひと息だけでお小夜は狂乱し、ついに一言、

「ひいーッ！」

という、鋭い絶叫をあげたのである。その悲痛なさけびは、この小屋いっぱいひびきわたった。

「いひひひ……おえだ、おえだ、おえのあえはへたひえいが、いひはんだあッ！」

唇もないほどに腫みくずれた、その梅毒病みの男は、躍りあがってさけんだ。

鼻が欠け落ちているために、そうきこえるのだが、この男は、

「おれだ、おれのあげさせた悲鳴が、一番だあッ！」

と、さけんだのである。つぎの瞬間、その鼻欠け男は、両腕をひろげて、お小夜の胸にきちがいのようにむしゃぶりついたのであった。

危急の太鼓

お小夜の身に最悪の危機が迫ったとき――

この丸太小屋の外に、ふいにけたたましい太鼓の音が鳴った。

すててん、てれつく、てん、てん、てん、てれつく、てれつく、てんてんてん……

乱調子である。

乞食どもは、ギョッとして耳を澄ませた。

「べん太の太鼓だ。だが、へんだぞ」

一人が首をひねってつぶやいた。

「役人だ！」

一人が立ちあがってさけんだ。

「そうだ、役人がやってくるという知らせの太鼓だ！」

またべつの一人が、脅えた声でいった。

その急調子の太鼓の音は、ずぶ六が命令して、山裾の人里に放つてある、べん太が知らせているものなのだ。

「いけねえ、あれは役人がすぐ小屋のそばまできている合図だ！」

こうしちやいらねえぞ！」

ずぶ六が、うわずった顔でいった。

手下どもは不安な表情で浮き足だった。

「野郎ども、逃げるんだ！ 裏の丸木橋を渡って山奥へ逃げこめ！」

ずぶ六は、あわてて命令した。

わあッと、乞食たちは立ちあがり、われさきに、小屋の戸口からとびだした。

もうお小夜やお杉にかまっている余裕はなかった。要助を殺して奪った三百両が大きな収獲である。その財希は、ずぶ六の腹掛けにおさまっている。

「それ、逃げおくれ役人に捕まるな！」

ずぶ六がわめいた。

小屋の裏手に溪流がある。幅三間ばかりのかなり深さもある谷川だ。そこに、乞食たちがかけ渡した丸太の橋がある。

「あわてて落ちるんじゃねえぞ！」

丸木橋を一番さきに渡ったのはずぶ六だ。あとからあとから、前の奴を突きとばしながら、乞食たちは渡る。

いままでにさんざん悪事を働いている山乞食どもだ。役人に捕まったら、死罪か軽くとも遠島はまぬかれない。必死になって逃げるのも当然だった。

最後の一人が渡りきったとき、不思議なことがおきた。

丸木橋がひとにでにするすると動き出し、やがて、溪流の中へ、どぶんと落ちてしまったのである。

いや、よく見れば、それは不思議なことではなかった。その丸太の端には一本の綱が巻きつけてあり、綱は岸辺の草むらの中にのびている。その綱を何物かが引ッ張ったために丸木橋は岸からはずれて、水流の中に落ちたのである。

「へへッ、へへッ！」

突然、奇妙な笑い声があがった。

丸太の端に綱をむすびつけ、水の中へ落した帳本人は、べん太であった。

「へへへへへッ！」

笑いながら、べん太は太鼓を叩いて踊りまわった。ずぶ六をはじめ乞食たちは、もう樹間深く逃げこんでしまっている。役人に追われるのは馴れているので、逃げ足は早い。



もし、ずぶ六たちが、べん太の計略に気がついてひき返してきても、溪流の岸辺からこっちへはもう渡れない。役人急襲を知らせるべん太の太鼓は偽りであったのだ。

べん太は、丸太小屋にとびこんだ。

「ア、ア、ア……」

お小夜とお杉、それに隅で気絶している丁稚の吉松の縄を山刀で切り解く。

「あ、お前は、べん太さん！」

気を失ったようにぐったりしていたお小夜が、眼をひらいてさげんだ。

「ア、ア、ア……」

べん太は、早く逃げろという手まねで、戸口を指さす。

「ありがとう、べん太さん、お前が助けてくれたんだね。恩に着ますよ。さあ、お杉、吉松、いまのうちに逃げましょう！」

身心ともに、はげしい疲労にうちのめされていたお小夜だったが、この恐怖の山小屋から脱けだすために、最後の力をふるいおこした。

「お嬢さま！」

お杉は、だらしない声で、わあわあと泣きだした。

「ア、ア、ア……」

べん太は、自分からさきに小屋の外へとびだし、しきりに手まねで、早く早くとせかすのだ。

お小夜とお杉は、手を取りあって、よろよろと立ちあがった。

半刻後――

もう眼をつぶっていても、街道筋へ出られるという間道までくる

と、べん太はそこで立ちどまった。

お小夜とお杉にむかい、白い歯をみせて笑うと、べん太はペコリと頭をさげ、自分だけ、いまきた道をひき返していく。

「べん太さん！」

お小夜はあわててその背中へ声をかけ、二、三步追った。

しかし、べん太の姿はもう見えない。

「べん太さん、ありがとう！」

お小夜は大声で礼をいった。その返事のように、太鼓の音が、すててん、てんつく、と鳴りはじめた。

「あの乞食の子が助けにきてくれなかったら今頃私たちは……」

お杉はそういうと、ぶるると背すじをふるわせた。

すってん、てれつく、すってんてん……と太鼓は高く低く鳴りつづけている。

お小夜の見えないところで、太鼓を叩いているのはべん太だ。

べん太の心は、好きな人の危機を救えたよろこびに、太鼓よりも高い音で鳴っていた。

口はきけなくとも、心で思うのだ。

「おれの好きなお嬢さま、こんどこそ、さようなら。もう……、二度とは逢えないお嬢さま……。いつまでもお達者で……。江戸へ帰っても、たまにはおれのことを思いだしてくれるかしら……。いや、そいつは無理だろうなあ……。こんな汚ない乞食のおれなんか、あんなきれいなお嬢さんが、そういつまでもおぼえていてくれるはずはない……。この思い出は、おれの胸だけに、そっとしまっておくだけさ……」

太鼓を鳴らしながら、べん太の頬には涙がながれていた。



新稿

或る夢想家の手帖から

沼 正 三

〈作者から〉 中絶していた「手帖」を今月号から、また書かせて貰います。KK文庫用にまとめておいたものに、今夏、多少の余暇を得て加筆しましたが、元来の起稿が大分前になるので、少し古臭くなっているところは、ご容赦下さい。参照番号は新稿は「章」旧稿は「項」として利用してあります。

第一八章 ある植民地風景

左手に赤土のどてが、ひかえていた。
どてのうえに
日本人入るべからず
と、立札があった。

丹羽文雄「恋文」

敗戦後の妄想は遂に妄想に止まり、家畜化は愚か、混血児数の増加に役に立つ比較的、完全な植民地も結局、実現しなかった。然し、基地のある土地では、私達のマゾヒズムを刺戟する様な出来事は必ずしも少なくなかった。大事件である必要はない。例えば、次の様な一寸したことでも――
「去年の夏休のことでした。私は栗田さんといっしょに、山手へ絵を書きにいきました。教会のすこし前のしばふのあるとてもきれいな場所を見つけて、そこでむこう側を写生しているとアメリカの男

の子がハウスキーパーの人につれられてこっちへ来ました。男の子は小さな、顔のまっしろい、とてもかわいいお人形さんのような子でした。(中略)

私は「ねえ、アメリカの子と遊びたいんだけど、遊ばしてくれるかしら」と思わずいってしまいました。私は、アメリカの子がみんなでたのしそりに遊んでいるので、いっしょに遊んでみたかったのです。すると「むこうで遊んでるからいつてらっしゃい」といったので、おおいそぎでどうぐをかたづけました。心がわくわくしてきました。むこう側の外人ハウスの方へ行きました。(中略)

「遊びましょう」と栗田さんが呼びかけると、みんなおくへいってしまいました。私も栗田さんも、後をおうようにしていき、ごきげんをとるように「いっしょに遊ぼう」といいながら、ぶらんこにのったりしました。すると、男の子が栗田さんの足へおしっこをひっかけました。だが、ハウスキーパーの人たちは、わらってみていました。みんなもわらっているのです、なぜおこらないんだろうと思っていました。が、はずかしいのとくやしきで、泣きなくなっていました。栗田さんの顔も泣きたいような色でした。だまって出てしまいました。(後略)

これは横浜市南区の小学校五年生の「子供のしたこと」と題する作文である。(日教組が集めた『基地の子』という作文集にあるもので、朝日新聞にも昭和二十八年三月六日附で紹介されたし、これについての投書まで出たから、御記憶の方もあろう)諸君はこれを一読されて、どんな印象を持たれたであろうか。日本人として同胞の子供が、アメリカの子供から、このような取扱いを受けたことに對して痛憤を覚えるというのが大多数であらう。よろしい。諸君は

ノーマルである。右の痛憤と同時に、何か別な快感を感じるといふ人はいないか。本読者の中には、きつという筈である。その人は白人崇拜症の患者である。少くとも、その素質があるといえる人である。

ノーマルな人は「一体この文章から、どんな快感を感じるといふのか」と疑問に思われるかも知れない。これに答えるため白人崇拜症者の一人として、私自身の心理を分析して見よう。

この二人の子供は、平生から「アメリカ人」に対して、あこがれを感じている。勿論、生活程度の差からであらう。(この際、二人を貧乏人の子と考える必要はない。相当な中産階級であつても在日米人の生活程度とは格段の相異があるから、子供は当然、落差を感じる筈だ)。だから「アメリカの子と遊んでみたい」のであり、頼んで許されると「心がわくわくして」くる。ここまでは普通の人にも理解できよう。

所が、いつてみて、「遊びましょう」と呼びかけても向うは相手にしてくれないのである。健全な自尊心のある者なら、ここで大きな恥を感じて帰ってしまうのが当然である。所が、この二人はそうでない。皆が二人を相手にしないで、むしろ相手にするのをいやがつて遊び場所を奥に代えようと、自分達も「あとを追うようにして」ついてゆく。こうなると、もう普通でない。映画ファンがスターの家に押掛けたいに、どうしても帰りたくないものである。だが自分がいなければならないと意志表示された所に止まる限り、小さくなっていなければならない。どんな反撃をも、どんな屈辱をも覚悟しなければならぬ。断られたのに後を慕った時に、二人は自ら反撃を、屈辱を招くべき種を播いたに等しいのである。「犬と支那人は

入るべからず」と立札された香港の外人租界の公園に入った支那人、黒人専用車が連結されている米国南部の列車で白人用車輛に入りこんだ黒人……、昔からあったことだ。それが日本人にも起るようになったというに過ぎない。

歓迎されていないという自覚は二人を卑屈にし、二人は子供等の「御機嫌を取るようにして」遊ぶ。それは単に彼等の歓心を買ってその場で小さくなって遊ぶことを黙認されようとしての行為でもあろう。だが又、進んで彼等を面白がらせることによって、滑稽なピエロとして彼等に認識され、この外人ハウスへの再度の入来を許されようとしての、二度目の御座敷を期待する幫間のような心理だったかも知れない、ピエロは玩まれる。幫間は弄ばれる。二人は子供等の御機嫌を取り結ぼうとすることで進んで彼等の中にピエロとして幫間としての地位を求めたことによって、侮辱せられる機会と重ねて招いたわけだ。

播いた種は刈られる。招いた者はやってくる。二人が自ら求めた侮辱は、自身にも意外な事態として二人に与えられることになる。「栗田さん」が「男の子」から「おしっこを掛けられる」のである。人間の身体が故意に他の人間の小便で濡らされるということは、受身に廻った側にとっては、実に大きな、面に唾せられるにも勝った屈辱である。さすが恥知らずな、自尊心を忘れたようなこの二人でさえ、「恥しさ、悔しさで泣きたくなる」程のひどい屈辱である。小さい男の子の行為だから、大人の行為と同様に考えることができぬというかも知れないが、苟くも一人で小便することを憶えた子供は、小便してよい所と悪い所は知っている。少くとも人間の身体に小便を掛けて良いとは決して思っていない筈である。恐らくこの子

は、白人同志の少年少女に対しては、そんなことは一度もしてないに違いない。それが「栗田さん」に対しては小便したのだから、故意になされたという点では大人の所為と変りはないのである、さて、この男の子が白人同志でせぬことを「栗田さん」に対してしたのは、それ相当の理由がなければならぬ。これに私は三つの場合を区別しようと思う。

第一は、二人を普通の人間として人格を認めている場合である、庭で私が誰かと話してる時、野良犬がやって来て物欲しそう。奥庭に席を移せば、又ついて来て、足にじゃれつく。私は「うるさい、あっちへいけ」と犬を蹴飛ばすだろう。さてアメリカの子供の目には、この二人のやることがその野良犬のようにうつらなかつたろうか。そこで御機嫌を取るようにしてブランコにのったりする二人に我慢がならず、二人を追払うのに「あっちへ行け」と足蹴にする代りに、二人を侮辱して同じ効果を得ようとしたのである。それも一寸した侮辱では感じない程卑屈な奴だから、小便を掛けてやる。これによって自分の反感を表示したのである。自尊心があるなら、この屈辱には堪えられないから、その場に居たたまれなくなってしまう。この処置は自尊心による行動を期待する点で人格を認めているといえよう。（私は男の子がその場でこういう省察をなしたというのではない。意識的には「畜生奴！」位のものだったかも知れぬ。それを分析しているのである）そして追っても去らぬ犬が足蹴されても仕方がないように、禁断の園に許しなくして入ったこの二人は悪いのだから、アメリカの子供等が二人を罰するのは当然で、小便をかけられたからといって同情するのは（日本人としての感情は離れて本来ならば）おかしいのである。「ハウスキーパーの

人たちが、笑ってみていた」というのは、一つには、召使の身分としての主人の子供達への遠慮であるが、一つは二人が奥まで入って来たのは二人が悪いと判断したからであろう。

第二に二人を幫間扱い、ピエロ扱いにしている場合である。相当に自尊心を認める点で前と同様だが、それに屈辱感を与えることによって、自分の反感を表示するよりも、むしろ自分が快感を味おうとする点で異っている。二人の退場という主体的行動を予期する前の場合とは効果の帰属する主体があべこべになるのである。「此奴等は俺達におべっかを使ってる。俺達を面白がらせようとしている。玩弄物にされても良いから此処に居させて欲しい」というのだ。よし、そんなら望み通り玩弄物にしてやる。だが一寸位からかってでも此奴等の自尊心には感じない。それじゃ面白くない。一つ恥かしさで真赤になる位なぶってやるのが面白い、よし、小便ひっかけてやれ」こんな気持である。猫が鼠をなぶるあのサディズムは、弱い者いじめする子供等のサディズムに通ずる。迷い込んで来た犬を庭から追出すより、むしろその犬を取り巻いて、皆でいじめようという子供等のリンチなのだ。欲呼する白人達の面前で黒人が罵り殺しにされるように、僭越にも白人の仲間入りをしようとした日本人二人が白人の子供達の手で罰せられるのだ。男の子の小便は二人に対する最大の屈辱として浴せられる刑の執行なのである。「みんなも笑っているの」と書かれてあるのは男の子の行為が侮辱玩弄を目的とし、周りの子供達にもそのように理解され面白がられたことを示すのではなからうか。

が、尚第三に、男の子はそれほど反感や悪意を持ってこの行為に出たのではないと考える余地もある。樹陰で立小便する時、樹の根

にひきがえるが坐っていたとすれば、私達は全く何の気なしに小便をその背中に注ぐだろう。又、もし犬がそこに蹲って午睡していたとしたら、何気なしではないにせよ面白半分それに小便をひっかけることもありそうなことである。面白半分という点では玩弄の契機を含み、この点で前の場合と同様だが二人に対する悪意がなく、屈辱の契機を含まぬ点に於て異なる。幫間には紳士としての名誉はないが、人間としての名誉心はもっている。そこで幫間に対しては、なお人間としての自尊心を否定する余地が存し、従ってこれに屈辱を与えて快とするということがありうるのだが、犬の場合は否定すべき自尊心、名誉心が、そもそも存在しない。人間と犬とは価値を異にする。犬を戯弄することはあっても、犬を侮辱することはありえない。「さあ坊ちゃん、おしっこしましょう。クロにおしっこひっかけてやりましょうね。クロこい、こい。クロ可愛いですね。シー、そらそら、クロにおしっこ、ひっかけちゃいましたね。面白いですね」この男の子は、ひとり小便できるようにするまで、メイドからこうやっておしっこさせられていたかも知れない。そうすれば彼は犬に対する悪意を全く持たぬ時にも、（むしろその犬に何か可愛さを感じるからこそ）ふざけ半分にそれに小便を引掛けるであらう。さて一方、恐らく両親とハウスキーパーとの応対から、彼は白人と有色人種とが身分上の隔たりを持つことを理解し、有色人種を一人前の人格として認める必要はないのだと思ってるであらう。この二人の有色人種の子は、だから、この男の子にとっては他の白人同志の子供達とは価値と異にするものとして認められ、彼は、二人を犬同様のものとして、別に侮辱するつもりでなく、からかい半分に小便を掛けたのであるかも知れない。この見方からすると、二

人がこの家に入ったそもその時から、子供等は二人を相手にしていなかった。皆が奥に入ったのも、たまたま奥に用があったからで、二人を避け排斥したのではなかった。二人は、そもそも排斥する丈の価値のある存在として認められてなかったというような解釈をする余地もある。「遊びましょう」と呼びかけても返事しなかったことは、右の意味に理解するのが正しいかも知れない。

さて小便を掛けられてもこの二人は反撃にも出ず、逃げ出しもしない。そして男の子の小便が終るまで、じっと呪縛されたようになつていたらしい。それは一体どんな気持ちからなのか。小便を掛けられながらどんな気持ちでいたか、掛けられ終ってから何を感じたか、皆に笑われてどんな気持ちだったか。本当に悔しさ、恥しさ丈しか感じなかったか。何故、一言の抗議もせずそこを出て来たのか。……これらについても右の男の子の心理を分析した要領でいくらでも深く検討していけるが、あまりくどくなるので、もう省略しよう。要するに、私はこの二人が米国の男の子から屈辱を受けた事態に、その時の双方の心理に、そしてその一人であるこの作文の筆者が自分達を屈辱したその男の子を叙して「顔のまっ白い、とても可愛いお人形さんのような」と礼讃している事実、甚だマゾヒスティックな昂奮を覚えずにはいられない。これが白人崇拜症者の味う快感なのである。

付記 本文は昭和二八年の記述にかかる。今日では、本文の様なことの起り得る環境は全国的見地からは、ずっと減少した。然し、まだ全部なくなつてはいない。その一例として、昭和三四年八月二五日付朝日新聞京浜版の「根岸ハイツの『島』」から引いておく。

横浜市の南区から磯子区にまたがる高台の三六万平方メートルの芝生に高級士官用百数十軒のハウスがある真中に日本人家屋十一軒の飛び地がある。ハウスはぜいたくそのもので、全戸温水暖房、遊園地も学校もあるが、『島』には下水もない。……ハウスの子供のいたずらが大変だった。……子供がアメリカの少年にナイフで切られたことがある。母親が訴えてゆくと、ハウスではお金をほおつてよこした。いたずらは子供だけではない。『島』の百本の桜が咲き揃うと、アメリカ婦人が来て勝手に折ってゆく。注意するとお金を投げて「買えばいいんでしょ」……むろん、芝生へはいたり、ハウスに近寄ることは禁物。この間までは自分の家に帰るにも、写真と指紋をとられた上で貰った通行許可証が必要だった……

第十九章 輓奴車競走

オランダ系貴婦人達は、郊外へピクニックに行くのに、いつも馬の代りに六人の奴隷をつないだ車で出掛けたものであった。

ビルリガー「残酷な女性」

白人の有色人種に対する対等人格否定の思想を象徴的に具体化するものの一つとして奴隷制下の米国南部における「輓奴」(Nagslave braft-slave)があげられよう。馬の代りに馬車に繋がれる奴隷のことである。ひと(homo sapiens)ではあるが人間(man)ではない。馬と並ぶ輓曳の動力としてのみ有用な新種の家畜、輓奴——乗用馬願望と並んで、あるいはそれ以上に、人間馬志願のマゾヒストを魅する地位である。(旧八八項「荷車犬志願」及び二九年二月号

「人耶馬耶」参照。

L・ゴッテの「鞭令嬢」(Fraulein Peitsch) は輓奴を扱って出色の小説である。そのあらすじを紹介しよう。

米国南部サウス・カロライナ州の大地主ホジスン家の一人娘ジェインは、奴隷に対し残酷で、「女ネロ」とか「鞭令嬢」^{ミス・ウィップ}とか、あだ名のある女性。然し、凄美美人である。ある日、脱走奴隷チグリスを犬を連れて追跡するが、死物狂いの反撃に犬を殺され、彼女も危いところを通り掛った旅行者、金満家のドイツ青年コンラッドに救われ、やっとチグリスを捕獲する。彼女は彼を招待し、彼は六カ月後を約束する。チグリスを殺したいと口走る彼女に、彼はいう。「いや、アフリカから来たばかりのこの男が昔の自由を求めて逃げ出すのは当然ですよ。馬だって調教の済むまでは乗手を落そうとするでしょう。落ちる方が悪いのです。この男を逃げさせた奴隷頭が罰せられるべきですよ」「そのとおりね、そうするわ。今度あなたがいらっしやる時には、チグリスは調教^{シュール・ブッフ}(済の)馬になっているでしょう」

調教馬に、というのを比喩と思って聞いたコンラッドは、六カ月後、農園を訪れた時意外な光景に出会う。出迎えに来たジェインは二人の奴隷に輓かせた馬車に乗っているのだ。一人は白人の血がうんと混っているらしく殆んど白い。一人は純黒で……チグリスである！馬具、手綱、馭者鞭……全く馬と同じ様に取り扱われているのだ(附記第一)。彼は嫌悪の情から、そこまで乗って来た馬車からその輓奴車へ乗り移ることを拒み、思わずジェインを非難する言葉を発して誇り高い彼女を怒らす。「一遍自分で輓いてごらんない、それがどんなであるかを感じ知るために」。「あなたこそ」と彼

女が言い返す。「やって見るがいいわ。あなた自身まだ感じ知っていない癖に……」これがあとでコンラッドの身の上に照応して来る。これはゴッテの常套手法らしい。第七章に紹介した「鞭つ女達」参照)

彼女が彼の非難を心外としたのも無理はない。この辺の大農園では輓奴車は当り前の乗物になっているのだ。コンラッドは彼女から愛を打ち明けられ、彼自身、彼女に魅力を感じているが、この農園の嗣いで奴隷を搾取する境遇に入ることに躊躇して、結婚を承知しようとしなない。そんなある日、ホジスン邸に集った近所の女地主ハリエット(かంగりかも知れぬが、「アングル・トムの小屋」の著者ストウ夫人と同名なのは、意識しての皮肉であろうか)、前々からジェインに求愛している青年フレデリック、それにジェインとコンラッドの四人で輓奴論議に花を咲かせる。コンラッドはそんな制度は罪深いというが、他の三人は、黒人は白人とは違う動物で、白人に仕える為に創られたのだし、輓畜たることが神の御旨である証拠には、白人より駆走^{ラシニング}の能力に恵まれている(附記第二)といった議論で、コンラッドを言い負かす。更に輓畜として見た黒人と馬との優劣論になり、遠距離を行くには馬が良いが、近い所なら、命令の理解の行き届く点でも、細かい動作のできる点でも黒人の方が優れている。両者に違う役割を与えたのも神の御旨である、ということになる。然し、輓奴の訓練法に至って、ハリエットとジェインの意見が対立する。前者は愛情に依るのが最上と説き、後者は鞭こそ最も効果ありと主張するのだ(附記第二)。フレッドがジェインに味方するのを見て、コンラッドは、ハリエットを助けて、論議に加わる。両女性は、いずれ輓奴車競走によってどちらが正しいか決し

よう、と約して、その場の論議を終るが、自分の愛を受け入れなかったコンラッドがこうしてハリエットに好意を示したのに誇りを傷つけられたジェインは、憎さ百倍、復讐を計り、コンラッドから愛の告白を受けたと偽って、フレッドを激せしめ、二人が彼女を争う恋仇同志である様に他の人に思わせることに成功する。

ジェインは、奴隷商人の手から、背恰好も顔もコンラッドによく似た混血の奴隷サムを買う。黒人の血は僅かで一見白人としか見えない肌色の青年である。サムに（事情は教えぬまま）命じて、ハリエットの眼前でフレッドを襲わせ、森で待つ自分の所に連れて来させたジェインは、自ら背後からフレッドを殺す。ハリエットは、サムの背恰好やジェインが着させた服装から、犯人はコンラッドと信じて悩む。

コンラッドは疑われて裁判に掛けられる。ジェインは二人の男が自分を愛していた、コンラッドが好きだった、といった証言をし、本当は有利な証言なのに、彼に感謝される。ハリエットは、宣誓した上なので、仕方なく、泣く泣くコンラッドが犯人だと証言し、コンラッドを驚き怒らせる。陪審は有罪を答申し、死刑と決まる。

その夜コンラッドは自分が死んだら遺産はジェインに贈るという遺言状をしたためる。その直後、手引きする男が現われ、脱獄できる。そして、その暗示のままに、自身では自由意志による行動のもりで、ジェインの農園に忍んで来る。ちょっと原文を引こう——「いいことがあるわ、コンラッド」と彼女は言った。「御存じの様に、わたしの厩には白人としか見えない奴隷が何人もいるのよ。その一人をあなたの身代りにして、あなたの服を着た姿を人に見られた上で、どこか遠い所へ行かせたらどうかしら？ 追手

が掛ってもあなたより逃げ方はうまいし、捕っても、あなたじゃないことが分るだけだわ」

「その間、ぼくはどうします？」

「彼の代りに厩に入って潜んでるの。世間の人があなただけを忘れるまで」

「仲々忘れませんよ」

「六ヵ月もして出て来たら」とジェインは、微笑みながら言った。

「誰もあなたを認めないかも知れなくてよ」

逃げ出すのより危険が少ないと思い、コンラッドは彼女に匿まって貰う決心をする。彼女は、行方不明になった時、追跡をあきらめさせるのに有効だからと称して、彼に自殺の決意と彼女への愛情を示した書置きを残させる。

コンラッドはサムと服を交換する。サムはこの時まで新入りの小屋にいたのだが、コンラッドの服を着ると、別荘行きを命ぜられる。入れ代りに新入りの小屋に案内され、厩係りの奴隷頭ハンニバルに引き渡されたコンラッドは、初めて追手から安全になったと思つて、与えられた一隅で眠り込む。ジェインは、ハンニバルによるしく指示し終ると、別荘に向う。そしてサムを縛って池に蹴り込む。浮こうとするのを足で沈めて溺らせ、縄を解くとポケットに例の遺書を入れておく。

脱獄後の騒ぎは、コンラッド実はサムの死体発見でけりになる。遺産は正式にジェインが相続する。傷心のハリエットにジェインは例の輓奴車競走の賭けを思い出させ、六ヵ月後を約束する（チグリスの場合と照応する）。

さて、奴隷頭のハンニバルは、女主人のこのからくりを承知して

いるが、先にチギリス脱走の際、コンラッドの差出口で罰せられたことから彼を恨んでいるので、彼女の命に従って、彼を本物のサムとして扱い、輓奴にしてしまう。コンラッドは、ジェインの知らぬ間にハンニバルが誤解に基いてやったことだと信じているが、薬で咽喉を灼かれて啞になってしまったので、真相を訴える術はないし、ジェインは全く姿をあらわさないで機会もない。それに、もし訴えたとしても周りの輓奴の誰が同情しよう。そして、世間の誰が信じよう。本物のコンラッドは正式に埋葬されて墓まで立っているのだ。夜毎、彼の足に繋がれる鉄鎖も、「逃がした奴隷が悪い」と、かつてジェインに教えたコンラッドとして、今更ハンニバルを怨む筋合ではなかった。六カ月後を目指しての猛訓練の数頁はここに紹介する紙幅もないが、とにかく数カ月間、ジェインに全権を託された奴隷頭ハンニバルが調教師として彼の訓練に掛り切る。彼の肉体は激しく変貌してゆく。ある日、ジェインが新しい求愛者と共に、輓奴の厩を視察に来る。あの運命の夜以来、初の対面であるが、誤解が釈けて救われると喜んだのも束の間、ジェインは平然と調教上の指図をし、彼をコンラッドと認めてくれない。そこで初めてすべてが謀略だったことに気付いた彼は、口のきけないがもどかしく、絶望のあまり逆上して暴れる。伴れの男は、こんな輓奴は危険だから殺せと勧めるが、彼女は「馬だって乗り馴らされるまでは乗手を落そうとするものよ。云々」とかつてのコンラッドの様な口を開いて、彼を「調教馬」にしようとする決意を示す（これも例の照応の手法）。コンラッドはハリエットを誤解していたことを悟り、愛情を復活させるが、鞭による調教は今の彼にとっては駆者への絶対服従こそ第一であることを彼に教える。彼は、もうジェイ

ンに対して暴れなくなる。

そして、六カ月後、約束の競走の日が来る。今は厩でも一級の「調教馬」となった彼は、黒輓奴チギリスと並ぶ白輓奴に選ばれ、晴れの勝負に女主人ジェインの馬車を輓く名誉を与えられる。

ハリエットは、敵手ジェインの馬車の白輓奴の容貌に一見かつての愛人コンラッドのそれと酷似したものを感じるが、考えて見ればあり得ぬことだし、よく見ると「短い頭髪の下の輝きを失った眼もと」も「鞭革と太陽とに長い間、陶冶された剣き出しの背中と四肢の、輓奴以外には見られぬま逞しい筋肉の盛り上り」も、青年哲人にして富豪だった愛人のアポロの様な肉体とは違ったものであり、他人の空似と思う（「誰もあなたを認めないかも知れない」と照応する）。……さて、人間馬と女駟者による繋駕競走が始まる。

彼は矛盾に襲われた。あの論争の夜の彼の思想も、その当時の彼の愛情も、この競走においてハリエットの勝つことを望んでいたのだった。彼はそれを忘れていなかった。彼女への思慕は彼の良心であり、どんな厳しい訓練の時も彼を支えて来たのだった。しかも今、鞭を揮う女主人を載せた車の前に繋がれて走るとき、彼女を勝たせたいという奇怪な情熱が湧き上って、彼の輓奴の肉体を満すのだった。矛盾は、然し、彼を遅らせはしなかった。悪名高き女駟者の仮借ない鞭がそれを許さなかった。……競走場の地面は暑熱に焼けていたが、炎天下に重ねられた半年の調教は、彼にそれに耐え得るだけの足蹠の厚さを与えていた。……今や、彼はハリエットを忘れた。彼はコンラッドではなく、輓奴サムであった。そしてジェインにとっても、彼女の車を輓く一対一の奴隷は、単なる輓奴であった（「実はコンラッドだ」ということを

彼女の方も忘れたことの意)。……

こうして、ジェインの方が勝つ。このあと、事件はまだ続いて、結局コンラッドはジェインの手から脱れ、啞薬の効力も失われることになっているが、マゾ小説としてはあらずもがなの部分であるから、この程度で切り上げよう。以上の梗概だけでも、この作品が、「輓奴」主題（奴隷願望と馬願望）において、また「生ける屍」主題（附記第四）において、注目するに足るものであることが明らかであろうと思う。

これはマゾヒストを対象として書かれているので（附記第五）、例えば、混血黒人を使つての白黒一対の輓奴などは、勿論、虚構による誇張であろう。私は輓奴車の存在自体も空想の所産ではないかと思つたことがある位だ。然し、ビルリッガーが「残酷な女性」（第二章、森本氏訳文では本誌二九号三月号）で、ジャマイカ（英領）の脱走黒奴史（K. C. Dallas, *Geschichte der Maronenneger auf Jamaika*）（附記第六）やピンカールの著書を典拠として、オランダ系貴婦人達（森本氏訳文では「オランダの婦人達」となっているが、ここでは勿論、出身地を示すのみの意で、現地女性いわゆるクレオリンであると解してよい）が輓奴車を使用した事例をあげている（題辞参照）のなどは、著者の権威から見ても、疑を容れる余地がない。ゴッテの小説の様に一地方の風俗とまで制度化していたかどうかは別として、輓奴車の公然たる使用があったこと自体は十二分に肯定してよいだろうと思われる。

附記第一に言及した輓奴車の絵をながめながら、これが絵空事ではなかったのか、と思うだけでも、楽しくなつて来るのだ。

附記第一 フックスは「女天下」中にクルト（F. Kuth）筆の

二人曳奴車の絵を紹介している。「米国南部の輓奴」と説明されているが、二人とも純黒人の様だし、「鞭令嬢」の本文では輓奴の両手は自由な筈なのに、絵では後手に縛られているから、この小説の挿絵ではないらしい（もつとも、挿絵と本文のくいちがいはあり勝ちのことだから否定し切ることもできぬ）が、右の点を除けば、二輪の軽馬車（Dogcart）に一匹の馬の代りに二人の奴隷を繋いだところ、鉄の首輪から手綱を執ったところ、貴婦人が長い馭者鞭を揮っているところ、犬が輓奴を足許から追い立てているところ……など、ジェインの輓奴車の叙述に非常によく似ている。（クルトについては、森本愛造氏に調査への協力を煩わしたが、よく分らなかった）

附記第二 黒人が白人より走るのに巧みなことは早くから認められた事実らしいが、特にオウンスが馬と競走して勝った頃、アメリカのある大学教授が、黒人の脚部の骨格に白人と違って疾走に適しているものがある。という事を証明して解説としたのを記憶する。何故そうかの説明はなかったが、もし米国の黒人についてだけ云えることなら、輓奴として淘汰されるうち、脚力の強い血統が残った、という仮説を立て得るかも知れない。

附記第三 これは、余談ながら、猛獣訓練における米国流とソ連流を想起させる。ボリショイの熊のサーカスで広く知られた様に、ソ連では鞭を使わぬ猛獣訓練法があるらしいが、米国サーカスの正統流儀では総て鞭と刺棒（先端に三又がある）によって恐怖感からの服従を強制する。三又を真赤に焼いた刺棒でヤキを入れたり、ロープで縛っておいて出血するまで舌を突いたり……恐ろしさを教えることが調教の極意だという。

最近号掲載予定作品一覧

次号新年特大号は十一月二十四日発売

- 『火あぶり女房』……緑猛比古
 誘導への過程……山野香澄
 家政婦の日記……渡辺かね
 奇クベからず集……林 寿夫
 或る女のカルテ……藤山秀緒
 夜のムード……山岸悠子
 地獄宿……伊藤晴雨
 ヲ快楽……一ノ瀬悦子
 二大連載小説
 影の国……雪俊 遙
 宇宙のどこかで……佐治麻造
 松井籟子悦虚小説シリーズ
 「妖花」……松井籟子
 麻生保氏の生活と意見……麻生 保
 ……
 懸賞告白入選作品
 奇妙な作業……島俊太郎
 連載小説
 狩 獵 者……佐度 塊
- 奇譚三十九夜……辻村 隆
 アクロバット残酷記……
 ……水田真紀子
 ある夢想家の手帖……沼 正三
 懸賞応募作品
 柔肌地獄……花巻京太郎
 中国残酷物語
 蜆洞王嗜虐録……塔婆十郎
 当代女武勇伝……諸岡堅雄
 フアンタジャマゾヒステイカ
 ……山本節夫
 あの香は私を魅了する……
 ……とやま
 告白 埋れた日記……井上正子
 女相撲と女斗美……雪崎京人
 その他菅良太、藤見郁、辻村
 隆等の作品をはじめとして、読
 者投稿の短文を多数用意してあ
 ります。

な展開を示すものに、ベリンスキーの「僻地の旧習」中の挿話があることはここで紹介しておきたい。貴族サヴェリツエフは妻の甘言に欺かれて、死んだ奴隷を自分の代りに葬らせる。翌日から妻は夫を例の奴隷として扱い、調馬索で駆り立てる。名前も衣食住も作業も完全に奴隷化する。果ては妻と情夫の宴席に道化の奉仕まで。そして死ぬと奴隷の墓に葬むられる……。実話を踏まえた作品だけに面白い。(世界古典文庫訳がある)

附記第五 正確に言えば、西欧のマゾ小説は、すべて白人のマゾ読者を予定している。そこで白人を喜ばせる為の書き方をしている点が少くない。「鞭令嬢」で言えば、コンラッドがドイツ人である点がそれで、これはドイツ人読者には、黒人が鞭奴になるのでは当然すぎて刺戟が少く、読者と同じドイツ人が黒人並みに鞭奴になることにマゾヒズムが感じられるからであろう。これは私達日本人マゾヒストが白人崇拜に特殊のマゾ心理を味うの裏の現象で、マゾヒストであっても黒人への優越心理を捨てぬ点に白人のマゾヒズムの一つの限界を感じさせるものがある。

附記第六 ゴーテの「鞭つ女達」にも鞭奴場面があることは、第七章で触れたが、レヴァンドフスキーの「近代文学芸術の性問題」によれば、ゴーテには、レッド・リバーの奴隷叛乱を扱った「脱走黒人」(Die maronier)という作品もあるらしい。同書に列挙された Bröneck の「ネロ夫人」(Madam Nero)、Robinson の「白人女魔」(Weibe Jentelinnen)「ネロ令嬢」(Fräulein Nero)等と共に、私は未見であるが、いずれも奴隷制小説というから、鞭奴も扱われていると思う。

〔告白〕

ア・クロバット残酷記

《私のつたない体験の一部です》

水田真紀子

(香川県大川郡三本枚町)



「ネ、トイレに行かせて……」

私は消え入りたい気持でした。

「なあに？ 何ンて言ったの」

B子さんは聞こえなかったのか、大きな声で聞き返すのです。

「あのネ」

「何サ、はっきりおっしゃい」

「我慢出来ないの、トイレに……」

小さい声で言うのに

「トイレ？」

大きな声でB子さんは言っちゃうのです。

「いやッ、B子さんッたら……」

「ここ、トイレないわよ」

B子さんは、又しても大きな声で意地悪く云うのです。

「だって、あたし……」

「でも、此処にはトイレの設備なんか無いんだもの」

「だから、ちょっと出して頂戴」

「此処から？」

B子さんはニヤッと笑って

「此処からは出せないわ」

「そんなのないわ、だってもう……」

「ホホ、いいわよ、此処でなさい。かまわな
いから。あたし手伝ってあげる」

B子さんは私を抱き起してスカートのホックをはずそうとするのです。

「いや、何すんの。いやよ」

私は足をバタバタさせて、そうはさせまいと腕いたのです。

「じゃあ、我慢する？」

B子さんは笑っています。先生がしのび笑いしながら寄ってきて

「じっとしてるからなのよ。この子にも少し運動させないと汗が出ないから駄目なのよ」

そう云ってB子さんに何か耳うちをしました。私は今のこの言葉にびっくりして思わず息を飲みました。どうなる事かと声を立てられず、二人の行動を見守るばかりでした。

先生とB子さんは、S子さんを台からほどいたのです。そうして、やっと縄を解かれて痛そうに腕や腰をさすっているS子さんを中央に連れてきて、今度は本格的に肘を着かせた姿勢で逆立ちをさせ、そのままS子さんの身体を逆に、つまりS子さんのついた両掌の前に両足先が床につく位曲げさせてゆきました。アクロバットでよく見る逆えびのポーズでした。そうさせて置いて、私をS子さんの前に連れてきてS子さんの顔にお尻を向けるように坐らされると、別の縄で私の上半身

とS子さんの逆さになった上半身とをグルグル縛りつけてしまったのです。

S子さんの身体はたいこ橋の様に曲げられ、たまた私の身体につけて縛りつけられ、私もS子さんの身体に、柱に縛りつけるようにされてしまったのです。私の背で合されて縛られている両手の指先にS子さんの胸のふくろみが伝わってきます。私はこれからどんな事をされるのかと思うと、生きた心地もありませんでした。そのうちにS子さんの「アアッ！」

と云う声が聞こえたかと思うと、続いて身も世も無いせつなげな声が絶え間なく私の耳に伝わってきたのです。その声は無理なポーズにされているせいか、余計せつなさそうに響いて、それと一緒にS子さんの身体が小さみに震えているのが、私にもよく分りました。けれど私は、果してS子さんがどんな事をされているのか見る事が出来ないのです。

「ああア、ああ」

と長い嘆息のような声が聞こえたかと思うと、その声とは反対に先生とB子さんのクックと、さも面白くてたまらないような忍び声まで聞こえてきたのです。それが暫く続いたでしょうか、B子さんの

「ホラ、これあげようか」

と言う声に、ふと顔を上げるとB子さんが手に何か白い物をヒラヒラさせています。

「あッ！ それは？」

「そうなのよ」

B子さんは尚もヒラヒラさせ乍ら、

「S子のブラジャーよ、脱がしちゃったわ」
そうです。何とそれはS子さんの今まで身に着けていたブラジャーではありませんか。

「ああッ、あ」

S子さんの呻く声はまだ背後で聞こえています。

「ほら、これをあんたにあげるわ」

B子さんは私の鼻の先で、まだS子さんの体温のとれてなさそうなブラジャーをヒラヒラさせ乍ら、いきなり私の鼻をつまんで思わず開いた口の中へそれを思い切り押し込んできたのです。

「ムーッ」

まだ温かみのあるS子さんの汗のにじんだブラジャーは私の口の中一ぱいに押し込められてしまったのです。思い切り大きな口を開けた恰好へ、それでも薄いシルクのブルジャ―は一ぱいに拡がって、それを噛みしめる様に、更に上から靴下で猿轡を入れられ、「ウ

「ウ」とうなったきり、私は余りの仕草に只腕くばかりでした。S子さんはその身を逆えびのポーズで私の身体に固定されているのですから、全く無防備のまま可哀そうに二人の目の前に晒け出されてしまっているのです。

「ああッ！ ウッ！」

せつなげなS子さんの悲鳴ともつかぬ声は、私の耳に妖しげに響き、こんな恰好で果してどんな事をされているのか、私には見るべき位置には無いのですが、S子さんの身を想像するだけで、もう胸が一ぱいに気もそぞろになってくるのでした。

「ああ、ああ」

S子さんの身体が不自由なポーズのまま左右にくねらせているのが、私の背に伝わって後手にされている私の掌、指先にふっくらした乳房がゆれてピクリと触れます。

私の口の中一ぱいに拡がったS子さんの体臭が、一層私を妖しい雰囲気誘い込んでゆきます。自分と違った同性の体臭が、私の嗅覚を刺激し、飲みこむ唾液に混って、神経をかきたてるのです。口をこうして塞がれてみると、ふっと忘れていた先程のたまらない生理作用を急に覚え、前より一層ひどくなって私の身をせめるのです。

「トイレに行かせて！」

叫ぼうにもさるぐつわの中でブラジャーが舌を押さえつけています。

「たままないわ、たままないわ」

身をよじって、投げ出した足でバタバタ床を蹴ったのです。

「あッ、うう」

私が身をよじると、一緒に縛られているのでS子さんの身体も揺られます。それが一層せつないのでしょうか、S子さんの声がひどくなるのです。

「あら、そうだったわ。ねえ先生」

背後でB子さんの声がしました。そして二言、三言、何か云っている小さな声がして

「あらゴメンなさい」

B子さんが私の傍にしゃがみ込んできたのです。

「あんたトイレに行きたかったのね」

ウンウン、私は声を出せないのうなずきました。

「ごめんね、あたし忘れてたわ」

B子さんはそう云い乍ら私とS子さんを縛ってあった縄をほどいて呉れたのです。

「ああ、これで助かるわ」

私は、ほっとしたものです。

「さあ、立てる？」

しかし、私はまだ胸も二の腕もくびれるほど、後手に縛られたままです。

「世話のやける子ねエ」

そう云ってBさんは私を抱き起して立たせて呉れました。

「さあ、いらっしやい」

肩をつかまれて歩かせるのです。（あら、この縄ほどいてくれないの？）と、いう表情でB子さんを振り向きしました。と私の身体は不意にうしろにたくられ、中央の柱に背をもたせたまま今度は立ったまま、その柱に縛りつけられ様とするではありませんか。（いや、いや、何すんの？）驚いて振り切ろうとしましたが、私は否応なしに又身動きも出来ない程、柱を背にグルグル巻きに縛りつけられてしまったのです。ふと足もとを見るとS子さんは何時の間にか自分の手首と足首とを別々に結かれて、先ほどの逆えびのポーズに肱について太鼓橋のように反り返えされたまま動けないようにされていました。ちょっと斜めからでしたけど、S子さんの下半身がこちら側を向いてチラリと見ただけでした。その視線と先生の視線とがパッと合いましたが、先生は何時の間に用意したのか8ミリ

のカメラを手にしています。ふと腰に触れられるのを感じ、ハッとと思って横を向くと、何とB子さんが私のスカートのホックをはずそうとしているのです。(キャッ!) さるぐつわの中で悲鳴をあげ、身を振りましたが、どうしようもありません。スカートは簡単に床に落ちてしまいました。そしてまだその上、

ペチコートも脱がされてしまったのです。もう私の下半身は黒のストッキングとパンツだけでした。(あッ! いや、いや!) 縄の中で身をもがきました。先生とB子さんのたくさんんでいる事がやっと分ったのです。いやだ、こんな事をするなんて夢にも思っていないでした。だけど、もうだけど私はこんなにされてしまったのです。もう逃れ得る道はありません。

「ねえ先生、いっそ、このズロースじゃまっけだから、とっちゃっていいかしら?」

B子さんはそんな事まで言うのです。

(いや、いやよ、それだけは許して。あたしそんな事されると……)

口がきけず、眼で哀願する様に先生に頼んだのです。しかし先生はその私の顔を見て「そうね、いっそ脱いだ方がいいって言うてるようよ」

そう云って笑うのです。(ああ、もう駄目、あたし) 眼をつむりました。涙が頬を伝わって行くのが分り、血の気がスーッと頭から消えてゆくのを覚えました。

(駄目だ、脱がされる)

だけど、だけど、こんなにされるなんて――。

(いやッ!)

思わず立ったままの足先を合わせました。

(いやだ。こんなにされて、まだこの私の恥を覗こうとするの? あ、そうだ、先生が8ミリを持ってたけど、私はこの姿を写されるんじゃないかしら。いやよいやよ、がまんするんだわ、こんなこんな)

私は顔を真ッ赧にして潮のように押し寄せてくる生理現象に抵抗しようとしたのです。

「どうしたの? 赤い顔をしてサ」

B子さんの声がして

「ほら、我慢出来るのなら、そうやって何時までも、じっとしてもいいわよ」

(いやよ、いやよ)

身をくねらせて、我慢するんだわ、我慢しなくちゃ。心に云いきかせて、尚もがんばっていましたが、

「ホラ、顔色が青くなった」

B子さんの手の体温を素膚に感じ、その手を離されたたん、血の気が失せ、ポーッと頭がかすんできました。

(駄目だわ)

と遠くで私の頭の中に呼びかけるような気がして、それっきり私は失神してしまいました。

× ×

そして気がついた時は、私はベッドに寝かされていました。だんだん意識がはっきりするにつれて部屋の様子が今までの、あの地下室と違う様です。地下室と云えば、ああそうだわ、あたしあの時……。ふっと意識がよみがえってハッとなり飛び起きようとしたのです。だけど私の身体は動けなかったのです。気がついてみると、両手を顔の両側に差し上げた様にしてベッドの両端の柱にくくられていました。足は? と動かしてみましたが、動きません。只、両足首の感覚で手と同じ様に左右に揺げられたまま、これ亦ベッドの柱に縛られているようでした。

「あら、気がついたのね」

B子さんの声がして、ふとその方を見ますと、B子さんはスリッパだけの恰好になって足を組んで椅子に腰をかけていました。

「どう？ 少しはさっぱりした？」

B子さんが立ち上ってきました。私はさき程の自分がされた事を思い出して顔をそ向けました。あんな姿を見られてしまったと思うと、何より先に恥かしさが先にたち、とてもまともにB子さんの視線を受けとめる事が出来なかったのです。

「ねえ」

B子さんの変に甘ったるい声が耳もとでして

「いい子ねえ、これからあたしのペットになってくれるわね」

そう云って私のそ向けた頬に顔を近づけてくるのです。

「ねえ、いいわね」

私は眼をつむって暫くB子さんのされるままになっていましたが

「いじわる！」

こんななされてしまった自分自身が、いとおしくてなりませんでした。

「いやよ、こんなにして。もう帰してよ」

「あら、どうして？」

「どれだけいじめたら気がすむの？ もう帰してちょうだい。いやよ、こんな」

「ホホ、ホホホホ」

B子さんはさもおかしそうに笑って

「駄目よ、もうあなたは私の云いなりになるお人形よ、いい子だからウンとおっしゃい」
また頬ずりしてくるのです。

「いやだってば」

「どうして？」

「いじわる、帰してよ」

「ホホホ、帰れないじゃない、あんたこんな縛られてんのよ」

「だから、ほめてよ」

「ほどけば帰れる？」

「帰るわよ、誰がこんな」

「そう？ だけど何着て帰るの？」

「え？」

「そうよ、ホラ」

B子さんは私の身体を掩っていた毛布をサリとめくりました。

「あっ！」

私はパンツ一つにされていたのです。パンツ一つのまま仰向けに大の字にベッドの上に縛りつけられていたのです。今までそれがちゃんと洋服を着ていた様な感触でいたが、私は何時の間にかパンツ一つにされていたのです。

「ホラ、これで帰られるの？」

B子さんは、そんな私の全身をなめ廻す様に見るのです。

「ああ」

そんな視線を逃れる事も出来ない今の私の身でした。

「いい？ これからでも私の好きな様に出来るのよ。こうして遊ぶ事も、ホラネ」

何時の間に持っていたのでしょうか。B子さんは柔かい羽毛を持って私の脇腹のあたりを撫で始めるのです。

「あっ！ イヤッ！」

その感触に思わずとび上がりました。

「あらあら、まだ続けてるの？」

その時、先生が入ってきました。

「あっ！ 先生」

B子さんはハッとした様に振り返ってきました。悪そうに笑います。

「出来たわよ」

先生が云います。

「わっ、すてき、どうだった？」

「ええ、とてもよくとれてるわ」

「凄いわ。ねえあんた、分る？ さっきのあんたの主演した映画よ」

アッ、そうだわ。それではあの時の……

「ほら、まだ乾いてないけど、見てごらん」

B子さんは先生の手から8ミリのフィルムをとりあげて

「あら、よくピントも合ってるじゃない？」

「でしよう、早速明日試写会やるつもりよ、みんな集って」

何という事でしょう。私のあんな姿の写真をみんなで……。

「B子さん、先生！ お願い、それだけはかんにんして下さい」

私、哀願するほかなかったのです。先生とB子さんは顔を見合わせて頷き合うと

「そんなにいや？」

先生が云うのです。

「ひきょうよ、そんなことするの。B子さんお願い。そんなことしないで！」

「じゃあね」

B子さんは

「それじゃ約束しましょうよ、いいこと？」

このフィルム皆に見せないかわり、このことはあなたの口からも誰にも云わないってこと。そうしてこれから私たちのペットになるってこと」

「ペットって？」

「何でもないのよ、あたし達のいい時に、あなたに遊んで貰うのよ、そしてあたしたちだ

けの秘密にして置くこと。その約束しないと

このフィルムどうするか分らないことよ、例えば学校のお友達に見せても」

「いや、いやよ。そんな」

「じゃあ約束する？」

どうしようもありません。こうして私は泣く泣く承知させられてしまったのです。縄をほどかれて下着を貰いましたが、身体の不ふしが痛んで、特に先程息も出来ないくらい縛られた二の腕にはつきりと縄の痕が残ってしびれるようでした。こうして私は、いやおうなしにこの二人の玩具になる事を強いられる立場に追い込まれてしまったのです。

私はしかし、これでとにかく帰して貰えるのだと思いました。二の腕をさすり乍ら、それでも素早く下着を着け終りました。だけどセーラー服が見当らないのです。その事をB子さんに云うと「ついていらっしやい」と云って私を又、地下室に連れて行こうとするのです。又どうかされるのではないかと瞬間ドキンしましたが、先ほど地下室で脱がされていたので、私のセーラー服は、そのままになっていたのだと思い、下着だけのみじめな姿で行ったのです。先生もあとからついてきました。B子さんが地下室のドアをあ

けて

「さあ、入ってよ」

と云ったので、何の気なしに入ってゆきましたが、中に入ってアッと驚いてしまったのです。S子さんがまだ中に残されていたのです。そればかりか後手に縛り直され、胸の上下にも二巻き、三巻き縛られたまま横坐りにうつ向いてじっとうなだれているのです。ひざをずらせて乳房をかくす様に身体を前に倒してうなだれていました。私はハッとなって顔をそらせましたが、その私にB子さんが「さあ、これでS子をぶってごらん」

と革の鞭を渡すではありませんか。私はB子さんが冗談でも云っているのではないかと思っただけです

「いいから、ぶつのよ」

私の手にその鞭を握らせて肩をつくのです。思わずよろけて二、三歩つまづいたまま私は足もとに自由を奪われたままうずくまっているS子さんの身体に眼をみはりました。さき程まであんなにみんなでいじめておいで、まだその上この可哀そうなS子さんを鞭でぶつなんて私にはとても出来ません。

「あたし、そんな……」

あとずさりするのを

「ぶてないって云うの？　なら、それでもいいわよ。さっきの約束忘れてるんじゃないでしょうネ、あたしたち何時でもあのフィルムを公開してもいいのよ」

そう云われて、ああそうだった。あのフィルムをとられていては、私は眼をつむりました。もうどんなにいやと云っても承知してくれないのです。私は只二人の云いなりになる人形でしかなかったのです。

「S子さん、ごめんなさい」

そう云って恐る恐る鞭を振り上げてS子さんの後に廻りました。背中では組み合わされた両手首に巻きついていて、縄が痛い程眼に写ります。S子さんはそれでも半ばあきらめているのか、ただじっと、これからむち打たれる



た。

「ピシッ！」

それでも思わず大きな音がして

「あっ！」

小さな悲鳴と共にS子さんの背がぐっと後に反りました。

「あ、ごめんなさい。痛かったの？」

私はそれほど力を入れたつもりは無いのにとオロオロしました。

「馬鹿ねえ、何さ、今のぶち方」

B子さんが怒る様な声で言います。

「もっと、しっかりぶつよ、いいから」

先生も横から云うのです。そう言われると私は素直に又、鞭を振り上げました。S子さんには、お気の毒だけれど、私はもう命令に逆らえないのです。

「ピシッ！」

今度は前より一層大きな音がして、S子さ

んの肌が鳴り上半身がふるえます。

「ウッ！」

「まだよッ、もっと続けて」

「ウンとぶったっていいのよ。S子はあれからレッスンに力を入れないから少し痛い目させてもいいのよ、それに油を全身に塗ってあるから鞭の痕なんかつきやしないから、うんとぶったって大丈夫よ」

先生の声がします。なるほど、そういえばS子さんの肌には鞭の痕が残りません。

「ピシッ！」

今度は、一段と力を入れて鞭を打ちおろしました。

「ウウッ！」

S子さんはあごを上に向けて、苦痛に口もとがゆがんでいるのが分りました。

「もっとぶてないの？」

B子さんはまだ気に入らぬようです。

「ピシッ！」

力をこめてぶってみました。

「アッ！」

「それだわ、もっと続けて」

B子さん声です。見るとS子さんの白い肌が、二の腕から背にかけて少し色をつけて今の鞭の痕が残りました。

「どんどん続けてぶたなきや駄目じゃない」

先生が近づいてこようとするので、

「ピシッ！ ピシッ！」

続けさまに鞭を振りました。

「あッ！ ううッ！」

悲鳴が続けさまに足もとで起り白い体のがたうって、尚もピシッ！ ピシッ！ と続けて打っているうちにS子さんは、とうとう横ざまに倒れてしまいました。

（あッ、ひどかったかしら）思わず駆け寄ろうとした時、

「チッ！」

先生が舌うちして

「駄目ね、これくらいで倒れたりして」

と云い乍ら近づき、S子さんを抱き起しました。S子さんは眼を閉じていましたが、抱きあげられた拍子に涙が一すじ、二すじ、すうっと頬に伝わってゆくのが見えました。

「B子、そのタイツとってよ」

B子さんがタイツを持ってくると、先生はB子さんに手伝わせてS子さんにタイツを穿かせました。タイツと云っても網目のタイツでしたから、素肌はすけて見えます。そうさせて置いてからS子さんの両手をほどいて今度は頭の上で再び手首を縛って、天井の環を

使って吊し上げたのです。S子さんは両手を

真ッ直ぐ頭の上に伸したまま足元が僅かに床についているだけでした。吊られた反動で身体が二、三回、左右に廻りましたが、スラリと伸びたS子さんの均整のとれた肢体はなだらかな曲線をはっきりとみせています。

「さあ、今度は太腿をぶつのよ」

まだこの上、S子さんを鞭うつというのでした。

「いいわね、分って？」

念を押されると、イヤとは云えないのです。可哀そうにと思いながら、私が再びS子さんのうしろに立ちました。

「ピシッ」

と振り下したつもりでしたが、あまり音はせずに鞭がクルクルとS子さんの太腿に巻きつきました。あわててとろうとすると、S子さんの身体がぐるっと廻ります。もう一度ぶってみました。鞭の先が又、S子さんのタイツをとりまきました。

「ぶきっちょネ、あんた」

B子さんが寄ってきて

「いいわ、あたしが代ってぶってみる」
私の手から鞭をとりあげるのです。

（未完）

地底の女奴隷市

岩 風 呂 地 獄

塔 婆 十 郎

天井の滑車

大浴場は、岩風呂の形にできていた。

むろん、人工の岩風呂だが、できるだけ自然の情趣がとりいれられてある。

大衆風呂だが、入浴料は三百円もとっている。したがって設備には金がかかっていた。

三方の壁はガラス張りの水槽になっていて淡水魚が泳いでいる。

銀鱗のひらめきが美しい。

天井や壁の上方から場内を照らす照明も、うす青い透明な光線が、まるで山中を思わせるような自然の明かるさである。

午前一時をすぎて、浴客は一人もない。

自然を摸してあるだけに、深夜の風景は不気味であった。

岩に囲まれた湯槽に、満々とたたえられた湯は、まだ流されていなかった。白い湯気がゆったりとたちのぼっている。

この大岩風呂のまんなかで、これから、世にも残忍なショウが開幕されようとしているのだ。

荒川社長の指図で、一人の男が天井裏にのぼった。

多くのライトが据えつけてある関係で、天井裏には、せまい通路ができていた。下からは装飾にかくれてわからないが、ライトのそばには穴があいてて、操作が自由にできるようになっていた。

男は、そのライトの一個を消し、照明台の頑丈な金具に、滑車を一つくりつけた。

滑車の溝には、ふといロープが通っている。長さ十メートルばかり

りの、固いロープだ。

「——よし、天井に滑車がついたら、そのロープの両端に、ミドリと美加を縛りつけるんだ」

荒川社長が、大声でいった。

高本副社長、子分たちは、その言葉に、やっと社長が指図するシヨウがわかった。

その考えの凄絶さに、さすがの荒くれ男たちも、慄然となって寸時、沈黙した。

滑車から垂れ下がったロープの両端に、二人の女をくくりつけ、それを交互に上下させようというのだ。

車井戸の仕掛けと思えばいい。

しかも、滑車の真下には、湯気のたちこめる湯槽がある。片方の女が下がった場合には、その湯の中へザンブリと浸る寸法だった。

「ああッ、やめてッ、もうゆるしてえッ」

美加が脅えた悲鳴をあげた。

素肌にまとまった布きれがむしりとられた美加に、また新しい縄が襲いかかったのだ。

「静かにしろ。おとなしく手をまわして縛られるんだ」

上から吊りおろすので、縄から身体がずり落ちないように、念入りに縛りあげる。腕から胸へはもちろんのこと、胴のくびれにも三本、四本と縄を巻きつける。

「グエエッ！」

美加は蛙のような泣き声をあげた。

しっかりとうしろ手にくくりあげ、その縄尻を、さらに滑車のロープに結びつける。

「社長、一人片づきました」

岩下が報告した。

「つぎに、べつの縄で足も縛るんだ、両足首をそろえてな」

「へい」

子分の一人が、手まわしよく数束の縄を肩からひっかけて持ってきている。一束の長さは、七、八メートルだ。

その縄の端で、美加の両足首をぐるぐる巻きに縛った。縄尻はそのまま長く残しておくのだ。

「そうしたらな、ロープを引いて、まず、美加の身体を天井にひきあげておくんだ」

荒川社長が指図を与えた。

「へい」

岩下とほかの二人の男が、滑車のロープを手握った。

「よいしょ、こらしょ」

かけ声とともに、力を合わせて引く。まるで土木の基礎工事でもしているような手つき腰つきだ。

ギリリ、と荒川社長の眼が光る。美加の身体が白い一本の柱のよ

うにのびて、荒川の前に立った。自分の力で立っているのではないのだ。縄尻を天井から引かれて立っているわけだ。両腕が肩から背中へねじあがる。

「ふふふ、ふふふふ……」

荒川の指さきが、ヒョイとのびて、美加のふくらんだ胸もとを悪戯した。

ギリギリギリギリ……

滑車がきしんだ音をたててまわった。

「あ、ああーッ！」

宙に浮きながら、美加が悲鳴をあげた。

胸をそらせ、腰をくねらせる。縛られている両足が、むなしい勢いで宙を蹴った。水中の白魚のようにピチピチと踊る。

ギリギリギリギリ……

滑車はなんの感情もなく回転する。

美加は、またたく間に天井近くまで引きあげられた。その両足首からは、縄尻が垂れ下がってタイル張りの床に余っている。

「えへへへ、えへへへへッ」

男たちの卑猥な眼が、美加を下からのぞきあげる。舌なめずりをする奴もいた。

「よし。そうしておいてな、こんどはいまお前たちが引いたそのロープに、ミドリを縛りつけるんだ」

「へい」

社長の指図がなくとも、もう男たちには、つぎの手順がわかっていた。

「もう、もう、ゆるして下さい！……」

哀願するミドリを踏みにじり、その鞭痕だらけの身体に、再度、苛酷な縄がかけられるのだ。

縄を解かれ、与えられた自由は、まさにわずか数分の間だけであつた。

縄目のアザもまだ消えないのに……。

竹鞭の痕からは、まだなまなましい血がにじんでいるというのに……。

——鬼！……けだもの！……悪魔！……

ミドリは胸の中で絶叫した。

一片の抵抗もゆるされなかった。左右の手首はうしろにねじあげられ、肩のあたりまでひきしぼられる。高手小手の縄目だった。乳房の上にかかった縄が、ガッキリとそのふくらみを割った。

「ゆるして……クルシイ……」

呼吸がしめつけられ、その声もうかすれている。

ミドリの身体は仰むけにおさえつけられ、つぎに足を縛られる。美加と同じく、両足首をそろえて巻き、その縄尻を長くのばして残しておく。

「よし、これで準備はできた。それじゃ、お客さんをお連れしてこい」

荒川社長は、この残虐なリンチを、本当に今夜の特別会員たちに公開しようというのだった。

特別シヨウ

白服のボーイに案内されて、やがてその紳士たちが、ぞろぞろとこの大浴場へ姿を現わした。

十人近くもいる。全員がくつろいだ浴衣がけだった。

会社の重役も、大商店の主人も、官庁の部課長タイプの紳士も、政治家らしい男も、同じ浴衣の柄に迷彩されて、いまはどここの誰ともわからない。

だからこそ、この破廉恥を愉しむことができるのだろうか……。

それぞれ人相も身体つきも異なるが、ありきたりの遊びに飽き、常に斬新な刺激を求める貪欲な漁色家としての、ギラギラ光る眼つきだけは、一様に似かよっていた。

「ホホウ、これは！」

岩風呂に集まった客は、啞然として眼をまるくした。

いかに残虐な刺激に馴れた紳士たちでも、いきなりこの場の情景をみて、眼をみはるのは当然であろう。

岩風呂の天井には、一人の女が吊りあがっている。その足からは、長い縄尻が垂れている。

湯槽の縁には、これまた縛られた若い女が、肌を濡らして横たわっている。

「ホホウ、これはまた、珍奇な趣向だ。岩風呂の中の美女責めとはな……」

口ひげを生やした紳士が嘆声を発した。

バックは自然を摸した広荘な岩風呂。

高い天井。

三方の壁にはめこんだガラス張りの水槽。その中に泳いでいる淡水魚の群れ。

青い透明なライトが夢想的にふりそそぐ。むしろ神秘的な、荘厳な舞台装置である。

「いや、お待ち下さい」

啞然として突っ立っている紳士たちの前に、荒川社長は一歩足をすすめていった。

ついでままでの血走った眼つきは消えて、嘘のようにニコニコと愛嬌をふりまく。

「これからが、今夜のこの特別ショウの開演なのです。あの上にいる女は、ただあして天井に蝙蝠のように貼りついていただけではございません。またここに横たわっている女も、いつまで寝ている

わけではございません。二人の女は、この壮大な岩風呂をバックにして、エレベーターのように交互に上へいったり、下へさがったりするのでございます」

「ふふん、それで女の足に縄がつかないのであるのだな」

でっぷりと腹のつきでた紳士が、顎をひいてうなずいた。

「そのとおり……では……」

荒川社長は、気どったポーズで、片手をあげて合図した。

ロープを引く男は、すでに配置についている。

美加の足から垂れている縄尻を握っているのが三人。

ミドリの足からのびている縄を握って待ちかまえる男が三人。

その六人の男は、湯槽の中に据えてある岩の上に足を踏まえて待機している。左右に分かれているのだ。

「それ、ひけ！」

美加の足の縄を握った男たちが、腰をぐッと落した。

ギリギリギリギリギリ……

滑車が鳴った。きしんで回転した。

「ウーッ！」

悲鳴はまず、美加の口からほとばしった。

足首が三人の男の腕力で下方へ引ッ張られるのだ。美加の身体が、一本の白い棒のようにのびた。

足の縄に引かれて、そのままズルズルと下へおりてくる。

「ヒューッ！」

つぎの悲鳴は、タイル張りの床に横たわっていたミドリの口からふきあがった。

美加が引き下ろされると同時に、ミドリの身体は、それだけ逆に

上へ引きあげられる仕掛けである。

二人の身体は、同じ滑車のロープの両端につながれているのだ。
「ククククッーッ！」

タイルの上に横倒しになっていたミドリは縄に引かれて起きあがり、さらに胸から宙に浮いた。腰が床からはなれた。

縄目に力がこもり、乳房が圧迫される。背中に固定された左右の腕が、ミシミシッと上方へ引きあげられる。骨まで吊られる。

「く、く、くるしいッ！」

ミドリはのけぞった。足首の縄目が、まるで奴隷のように頼りなくゆれた。

ギリギリギリギリ……

滑車はきしみながら鳴る。縄をすべらせて回転する。

ズルズル、ズルズルと引きあげられ、ミドリの身体は、湯槽の上三メートルほどの高さに浮いた。ぶらさがったつまさきから湯の表面までが三メートルだ。か



なりの高さである。そこで、天井から下がってきた美加とすれちがい、肩と肩とがぶつかった。

「よいしょ、よいしょ！」

低いかけ声とともに、男たちは美加をひきずりおろす。

ざぶりッ……

湯しぶきがあがった。勢いあまって、美加の身体は、湯槽の中へ落ちこんだ。これは、はじめから予定していた演出だった。

「ムムム！」

いったん湯の中へ沈んだ美加は、すぐに半身だけを湯の上にだした。

このとき、ミドリの方は、逆に天井に引きあげられて、そこに頭をぶつけていた。

つい三分前とは反対に、こんどは天井にミドリが、湯の中に美加があえいでいる。

「——いかがです……」

荒川社長は、自分の思ったとおりの効果に満悦し、このショウの見物客に、得意の笑顔をむけた。

悪徳の遊戯

「——ううむ、おどろいた！」

ある紳士は眼をほそめて素直に感嘆した。

「——これはすばらしい！」

べつの紳士は、思わず無邪気な拍手を送った。

「——しかし、ちと、むごいようですな」

首をひねり、眉をひそめる紳士もいた。眉をひそめながらも、その紳士の眼は、もっとも喜悦に光って、二人の女に喰いついているようだった。

「——さながら、生きた地獄絵ですな」

もう一人の紳士は、感にたえたように腕ぐみした。芸術作品でも

眺めるように、むずかしい顔をした。

この陰惨なショウに、さすがの特別会員たちも、いささかドギモをぬかれた形だった。

うごめき悲鳴をあげる地獄絵に惹きずられ酔っていた。

食欲無慈悲のこの漁色紳士たちも、屋間になれば一人前の、いや、一人前以上の働きのある社会人として活躍する。

ただ、あり余るエネルギーを費消し、または貯えるために彼らはこの秘密クラブに入会しているのだ。

屋間は常識人として通用するこれらの紳士たちが、いま完全にこの残酷なショウに見惚れている神経は、見方によっては異常ともいえよう。異常にちがいない。

だが、いま酔っているのだ。陶酔である。

錯乱しているともいえよう。

遊戯の中に没頭し、わずわらしい世間の常識も道徳も忘れ果てていた。

悪徳の遊戯——にはちがいない。

嗜虐の甘美に溺れた悪徳。

地獄絵——と紳士の一人が感嘆したが、まさしくそれに近かった。

黒い岩のかたまりが、湯の周囲にうず高く積み重なっている。岩の合間からたちのぼる白い湯煙り。

空から吊り下げられ、地から吊り上げられる二人の女。その悶えと悲鳴、びしょ濡れの髪。

地獄の光景でなくしてなんであろう。

紳士たちの酔い痴れた脳裏には、しかし、これも刺激的に演出されたショウの一場面として映るだけだ。

特別サービス——だと思っている。

みごとな演出——だと感心している。

このとき、浴場の一隅でたまりかねた声があがった。

「やめろ、キチガイども！……お前たち、それでも人間か！……ちくしょう！……ケダモノめ！……もうやめろ！」

縄尻をつかまれてひき据えられている京介だった。この男だけは、まだ正気だった。いや、かろうじて発狂を耐えているのかも知れなかった。

「うるせえッ！」

京介の顎に、すぐさま岩下の強烈なパンチが入った。京介はのけぞり、タイルの床に頭を打って、もうそのまま起きあがれない。

「お騒がせいたしました。なに、この男は酒を飲みすぎた酔っぱらいでして、どうぞお気に留めないで下さい。——さあ、ショウをづけましょう……」

荒川社長が、また片手をあげて合図した。

こんどは、ミドリの足の縄が下から引かれる。天井に吊りあげられたミド리는、また下へ引きずり下ろされるのだ。

「ウ、ウ、ウッ！」

苦痛を耐えるために曲げていた両膝が、下から引かれてのびた。

「よいしょ、よいしょ」

ミドリの足を引く三人の男。

逆に、美加を引きずりおろした男たちは手を休める。

また美加が天井へのぼる番なのだ。

「アッ、アッ、アッ！」

美加の乳房が、縄にひきずられてくびれあがった。じりじりと全

身が浮く。

湯の中に没していた下半身が、ずくを垂らして現われた。ずぶ濡れの女体。湯に濡れて光る両足のつまさきから、ポタポタと湯しずくが垂れる。

「ヒッ、ヒッ、ヒッ！」

美加は泣いているのか、笑っているのか、わからないような悲鳴をあげた。

湯に浸ったために、身を縛っている縄がいつそう固くなり、キリキリと肌に喰いこむ。肉をちぎり、骨まで責めるような縄となる。

まるで針金を編んだ縄のようだ。

ギリギリギリギリ！……

滑車が急回転する。

ざぶりッ！……

湯のはねる音。天井からかなりの速度で落下してきたミドリが、

こんどは湯の中に沈んだのだ。

湯がもうぬるくなっているから、まだ救われた。これが熱かったら、文字通りの熱湯地獄である。

この悲惨な見せ物は、二十分の間、続行された。

二人の女の髪は、海藻のように濡れて顔に襟に貼りついた。しみいには悲鳴をあげる力も失せ果て、息は絶えだえになり、縄目の乳房ももうあえぎを弱らせた。

二個の物体は、もはや死人のようにぐったりと力を抜いたまま、ギリギリと滑車に吊られ、そして交互に湯の中に落とされた。

悲鳴が途切れれば、もう人間という感じがしなくなった。二個の白い柔らかな物体が、交互に上下しているだけである。

「——もうやめたらどうかね。それ以上つづけたら、本当に死んでしまうぞ」

観客の一人が、さすがにみかねて注意の発言をした。

ミドリと美加は、やっと滑車のロープから解き放たれた。タイルの上に寝かせられる。

一人の子分が、ミドリと美加の乳房に耳をあて、心臓の鼓動をたしかめた。

濡れた胸乳の下から、かすかに速く脈はあった。

「だいじょうぶです。死にやしません」

子分は荒川に報告した。

荒川がショウの閉演を告げた。

十人近くの紳士たちは、堪能したような表情で、それぞれの部屋に戻っていく。

その部屋部屋には、おそらく、まだ縛られたままの女奴隷たちが、主人の戻りを待って、ベッドにつながれていることであろう。

新しい犠牲者

「——社長、ただいま戻りました」

健司と政の二人が、外から帰ってきた。

午前二時十五分前——。

ここは地下二階の一番どんづまりの奥に位置する社長室だ。

健司と政が、荒川の命令で銀座の現代情報社へむかってから、すでに一時間近くたっている。

「遅かったな、どうした」

荒川社長は二人の子分に、とがめるような視線をむけた。

「へい、名刺の所番地を頼りに行っただんですが、ひどい裏側で、すっかり探しちまいました。銀座は銀座でも、どぶ臭い川ッぶちにあるビルでしてね……」

健司は、ベラベラとしゃべる。

「よけいなことをいうな。その助手とかいうのは捕まえたか」

「ぬかりはありません。ちゃんと捕まえてきました。それが社長、なんと可愛い娘ッ子でしてね」

「いまどこにいる？」

「一階の事務室に押しこめてあります」

「ここへつれてこい。用があるんだ、早くッ！」

荒川は嚙みつくようにいった。

「へいッ」

健司と政は廊下へとびだしていく。

「ウフフフ……おい、トップ屋、お前の助手を、このビルの中へつれてきたそうだぞ」

荒川は背後の壁にふりむいて笑った。

その壁際には、京介が椅子に縛りつけられて坐っていた。

京介だけではない。

ミドリも美加も、うしろ手のまま、同じように椅子に縛りつけられていた。

岩風呂地獄からひきたてられて、こんどはこの社長室へ監禁されている三人だった。

「社長、入ってもいいですか」

ドアがノックされた。

健司と政が、妙子をひきずって部屋に入ってきた。

妙子はうしろ手に縛られている。

「ああ、社長！」

ひと目室内を見渡すや、妙子はさげんだ。

妙子が社長と呼んだのは、京介に対してである。

「妙子！」

京介も妙子をみてさげんだ。椅子から立ちあがって、可愛い助手のそばにかけ寄ろうとした。が、立てなかった。縛られている。

「妙子さんというのかね、フフフ……。きれいなお嬢さんだ。トップ屋なんかの助手にしておくのはもったいない。

どうかね、わたしの所で働かないかね、ええ？」

荒川は、妙子の顔から胸、腹から腰のあたりへ、なめるように視線を移しながらいった。

「あ、あなた方は、な、なんというひどいことを！」

妙子の顔色は、怒りのために蒼白になっていた。生まれてから今日まで、こんなに手荒い縛しめを受けた経験はない。縛られたことなんか、はじめてだ。

血が逆流し、全身が熱くなるほどの屈辱感だった。

妙子の怒りをみて、荒川の顔もきゅうに険悪になった。

「おい、お前、この温泉ビルのことを警察に知らせたのか！」

鋭い語気で、荒川は妙子に迫った。

「……………」

妙子は、無言のまま荒川をにらみ返した。



「午前一時までに、この利根京介から連絡がなかったら、警察へ通報しろと命令されていたんだらう? ……その命令を、お前は実行したのか!」

荒川の手が、妙子のブラウスの襟をつかんだ。ぐいぐいとゆさぶった。妙子の顎が、ガクガクと上下に鳴った。妙子はあえいだ。

荒川の手を払いのけたくとも、自分の両腕は、がちりと背中にくくられているのだ。

「警察へは知らせなかったわ! ……一時十分すぎ、うちの社長の連絡がないから、警察へ電話しようと思ったとき、あんたの子分たちが事務所の中へ暴れこんできたのよ。そして、あたしをなぐったり、縛ったり、猿ぐつわを噛ませたりして車にのせ、こんな所までつれてきたのよ!」

妙子は、くやしげにさげんだ。

「そうか!」

荒川社長が、ホッと安堵の顔になった。

妙子のくやしげな表情に嘘はないようだ。

荒川にとっては、それが最大の気がかりだった。その不安が晴れたのだ。彼はきゆうに上機嫌になった。

「よしよし、いい娘だ、いい娘だ」

荒川は、妙子の髪をなでてやりたい気持ちになった。

しかし、妙子も京介も許すわけにはいかない。この温泉ビルの外へ出すことは、絶対にできない。

——男のほうは、殺す! ……それが一番安全な道だ……。

荒川社長は決心した。

京介を殺してから、その死体を樽に詰め、空間にはセメントを流

しこんで固まらせ、深夜、東京湾の底へ沈めてしまう。

死体さえ発見されなければ、殺人事件は成立しない。完全犯罪だ。

——娘のほうは……殺すにはもったいない……。こんなビチビチした新鮮な娘を、とても殺すなんて、もったいない……

荒川は、妙子を他の女たちと同様に、この地底に監禁することを思いついた。

そして、毎夜の奴隷市にだすのだ。

——いい値で売れるぞ……ウフフフ……なにしろ、堅気の娘だ。男の手垢に汚れていないからな、ウフフフ……

荒川は、金欲と色欲の入り混った生唾を、じつとりと口の中に溜めた。

屈辱の肌

妙子を女奴隷にさせて、ステージに立たせるには、まずそのことを当人に納得させなければならぬ。

抵抗するのを縛りあげて、ステージに無理やり立たせるのも、客たちにとっては新鮮な魅力があるだろうが、徹底的に抵抗され、

暴れられては、せっかくの演出が台無しになるおそれがある。

ある程度は、納得させることが必要なのだ。しかし、話して納得するはずはない。

屈伏させるのだ。

それには、威嚇だった。容赦ない暴力が必要だった。それが女どもを屈従させる荒川社長のモットーである。

「——妙子……とかいったな。おい、おれの話をよくきけ。お前に生きていてもらっては、おれたちが困ることになった。そこで、本来なら、殺してしまうところだ……」

「……………」

妙子の眉が、ギクリとおびえた。

——きれいな眼をしている。これは処女の瞳の色だ。

荒川はふと思った。

「だが、安心しろ。殺しはしない。そのかわり、おれの命令に服従するのだ。つまり、ここで働くのだ。おもしろい商売だぞ。うまいものを喰わせてやる。むろん金もやる。どうだ……」

荒川の唇が、卑猥な色に濡れた。

「いやです！ ……帰して！」

「帰せだと？ ……フッフ……無駄なことをいうのはよせ。お前たちはこの地下のハレムの秘密を知った。いくら帰りたいとわめいたところで、おれが帰すものか。常識で考えてみる、フッフ……」

「……………」

妙子は押し黙った。いままでは怒りだけだった妙子の瞳に、はじめて恐怖の色がうかんだ。背すじにつめたいものが走った。

「さあ、痛い目をみないうちに、働かせてもらいます、と返事をするんだ。いやなら、うんというまで、おれが可愛がってやるぞ」

荒川は凄みをみせて迫った。

「いやッ、乱暴はやめてッ」

妙子は、縛られている背を、じりじりと後退させながらさげんだ。

だが、背後には健司と政が手をひろげて待っていた。

「おっと、逃げてても無駄だよ」

健司の手が、妙子の背をぐんと突きとばした。

「あッ」

妙子は突かれて前にのめり、荒川の懷にとびこむような形になった。

「やめろッ、その娘に乱暴はするな」

京介が首をのぼしてどなった。

可愛い部下の危難には、黙ってみていられない。まして妙子は、れっきとした堅気の娘なのだ。

「うるせえッ、てめえはすっこんでろ！」

健司が京介にとびかかり、横ッつらを張りとばした。さっきは額を割われ、こんどは鼻柱をなぐられて鼻血がふきでた。

「おい、健司、この娘をな、裸にむいてみる。売り物になるかもわからないか、一つ、肌のぐあいから調べてみようじゃねえか」

「へいッ」

待ってましたというところだった。

健司と政は、まるでウサギに襲いかかる狼のように、左右から妙子にとびついた。

「あれッ！」

妙子は頭から揉みくちにされた。悲鳴も抵抗も、いまはまったく無駄だった。妙子の弱腰はうしろから蹴りつけられた。

衣服を剥ぐためには、いまかけてある縄をいったんはずさなければならぬ。

面倒だが、仕方がなかった。

健司と政は、共同して妙子を肩からおさえつけ、床の上に膝まづ

かせると、縄目を解いた。

「助けてッ！」

両手の自由を得た妙子は、水にかえった魚のように手足を振りまわしてあばれた。

しかし、魚はしょせん魚だった。野獣どもにはかなわなかった。「フフフ……まったく可愛い娘だな。そんなにあばれて、逃げられると思ってるのかよ。この地下室は二重底になっていて、ここはその一番深い所なんだぜ、ウフフフ……」

手足をもちいて抵抗することは、男たちの獣心を、よけいにかきたてるだけの効果しかないのだ。

ブラウスのボタンが、ちぎれて飛んだ。
スカートのむざんな音を発して裂けた。
清潔な肌着が、ビリビリとむしられた。

「あああッ！」

さらけだされて、羞恥の血がカッと頭にのぼった。抵抗の心がひるんだ。

妙子は両腕で乳房をかかえると、床の上にうずくまった。背をまわして、男の視線から逃げた。

「それよッ、おててと背中にまわすんだよ」

健司が歌うようにいった。

乳房を隠して抱きしめた両腕は、すぐに背中にねじあげられた。腕のつき根が、ポキリと鳴った。

乳房が前に、ゆらりとゆれた。まだ男の手に汚されていない、清純なつつましいふくらみだ。

「もう縛るのはやめてッ、お願いッ、縛らなくなたっていいじゃない

のッ！」

妙子は髪をふり乱してさげんだ。

男たちは、ヘラヘラ笑いながら、妙子の手首を一つかみにして、ギリギリと縛った。

縄は手首から胸へまわった。

妙子の柔らかい肌は、縄にこすれただけで、すり傷になりそうだった。

乳房の上下に、その固い縄が数本巻きついた。もう上半身は動かせない。縛りあげられた両腕の縄尻が、背後へ力まかせに引きしぼられた。

妙子は中腰のまま、胸から腹をうしろへのけぞらせた。輝やくような無垢の白さが、男たちの前に息づいた。

「うううッ……」

妙子は歯を喰いしばった。野卑な男たちの前に、羞恥をさらした衝撃に、妙子の全身は火のように熱くなった。

めまいがした。

眼の前に、まっ赤な閃光がきらめくほどの屈辱だった。

「膝を立たせろ。もっとよく調べるのだ」

荒川が、ギラつく眼を集中させていった。

妙子は床の上に背を折り、腰を前に曲げてたとえすこしでも男たちの前から、肌を隠そうとしている。

「そら、立つんだ」

健司と政が、妙子の左右に寄り、腋の下に手を差し入れて、よいしょとばかり引き起こした。

「アアッ……」

妙子は、眼をとじた。

荒川の視線が、じろじろとそそがれた。

「きれいだな。まだ男を知らない肌だ。シコシコとかたぶとりにしまっている。色艶もいい。稼げるぞ、これなら、ウフフフ……」

荒川は唇をベロベロとなめながら、満足げに笑った。そして、さらに言葉をたした。

「もっとよく調べよう。表も裏もな。おい、健司、その辺で竹の棒を探がしてこい」

「竹の棒を？……鞭にでもするんですか？」

「ちがう。いいから持ってこい」

政が廊下へ出ていった。

まもなく彼は、この温泉ビルの従業員たちの洗濯場から、物干竿らしい長さ二メートル半ばかりの竹竿を探がしてきた。

「よし、この竹竿にな、こいつの両足を縛りつけるんだ。ひろげてな」

「へえ」

二人の子分は従順だった。社長にいわれたとおり、妙子の左右の足首を、竹竿にくくりつけた。

「な、なにをするの！」

妙子は腰をひねり、足をバタバタさせてあばれた。が、荒くれ男二人の力は、なんの造作もなく作業をやり遂げた。

気の遠くなるような屈辱のポーズだった。

うしろ手に縛られ、尻をべったりと床につけて、赤ン坊のように両足を前に投げだした恰好。その両足首は、一本の竹竿にくくりつけられている。

「そうしたらな、つぎに二人でその竹竿を肩にかつぐんだ」

荒川がニヤニヤしながらいった。

「えッ？」

健司と政には、寸時の間その命令の意味がわからなかった。

「その竹竿を肩にかつぐんだよ。昔の駕籠かきのように」

二人の子分は、やっとわかったようだ。

足首につないだ竹竿を高くさしあげれば、当然、妙子の身体は、さかさまになる。

つまり——逆さ吊りにしようというのだ。

それが荒川のアイデアだった。

逆さ吊り

屈辱の極致といえよう。

これほど羞恥に満ちたポーズがあるうか。

妙子は、両足をひらいたまま、逆さに吊られた。両足首を上にして、脚がバンザイしている恰好だ。

江戸時代の、逆さ磔の形に似ていた。

だが、身体を支える磔柱というようなものはなく、男二人の肩に、水平にかつがれた竹竿一本にくくりつけられた、ぶざまな姿だ。

ゆらゆらと宙に浮いているのだ。髪の毛がバラリと逆さに垂れて、床を掃いている。

「ウウーッ、ムムウーッ！」

妙子の顔面が、まっ赤にふくれた。またたく間に血が下がってくる。妙子の鼻さきに、床がゆれていた。

「ムムムッ、ウウッ！……」

苦しい。左右の足首だけに、全身の重みがかかっているのだ。

妙子は狂ったように肩をふつてもがいた。

竹竿がしなって、わさわたと鳴った。

「あばれるな、重いぞッ」

その竹竿を肩にかついでいる健司と政が、あわててどなった。

いくら二人がかりでも、一人前の女の身体は重い。よほど腰に力を入れてないとフラフラする。

荒川社長はソファに坐って、この白く柔らかい動物を点検する。逆さになっている太腿が、ちょうど荒川の眼の高さにあるのだ。

白い……静脈が透きとおって見えるほど白いその太腿が、苦痛のためにヒクヒクとけいれんしている。

——ふうむ。見れば見るほど、いい肌だ。こいつは、奴隷市になんかだすのは、もったいないかも知れんぞ……

そんなことを胸中でつぶやく荒川だ。

——多勢の客にしゃぶらせるよりも、いっそおれ一人のものに……。おれが飽きてから、商売にだしても遅くはない……

この男にとっては、妙子のいかにも処女らしい身体のういういしさが魅力だった。

「ハアッ、ハアッ、もうやめて、く、くるしいッ……」



逆さになっている妙子の顔が、苦悶にゆがんだ。血はますます下がって、まっ赤になっている。

「だから、おれの命令をきいて、ここで働けばゆるしてやるっていうんだ」

荒川は背広のポケットからタバコをだし、ゆっくりと火をつけた。

うまそうに一服吸ってから、煙りを妙子の腹のあたりへ吹きつける。

「どうだ、妙子。おれの下で働くのはいやなのか」

つぎにそのタバコの火を、眼の前の白い腿に、いきなり押しつけたのだ。

「ヒェッ！」

妙子の全身が、はげしくのけぞった。

竹竿がしなった。かついでいる二人の男がよろめいた。

「熱うッ——」

妙子の眼も鼻も口も、もうめちやくちやにゆがんでいた。

羞恥も怒りも、もうなかった。あるのは苦痛だけだ。恐怖だけだった。

せめて、手の縄だけでもなかったら、こんな地の底へのめりそうな恐怖感は無かっただろう。

「どうだ、いうことをきくか」

タバコの火は、三度四度と妙子の肌に近づけられた。まるで獲物を狙う蛇の舌だ。

腿から腹へ。

咽喉へ、頬へ、そして乳房へ。

「ヒィーッ、ウウーッ、キャーッ！」

そのたびに、妙子は鋭い悲鳴をあげてのけぞった。乳房をふるわ

せた。

逃げることはもちろん、身をひねって避けることもできないのだ。荒川の指さきにはさんだタバコの火は、彼が思う通りの部分へのばせられるのだ。

「ウウッ、熱ッ、熱ウーッ！」

小さな火傷が、柔肌のあちこちに、点々として焼きつけられる。これは火責めだった。

火は小さいが、肌のどんな箇所へでも狙ってくる狡猾ななぶり責めだった。

「フフフ……強情だな。それなら、もっと熱いやつを押しつけてやろうか」

荒川はタバコを口にくわえた。

そして、マッチを吸った。

シュルッ……と燃えついて、赤い炎をあげたマッチ棒を、妙子の顔の前にもってゆく。

「どうだ、これは……」

たったマッチ棒一本の炎でも、火は火である。その赤い炎は、チロチロと燃えあがって妙子の鼻の頭を焼いたのだ。

「ヒィーッ、ヒィーッ！ やめてッ、もうやめてえッ——！」

妙子は獣の吠えるような悲鳴をあげた。

荒川はかまわず、マッチの炎をこんどは乳首に近づけた。

チリチリとそこが焦げた。

「ヒェッ、やめてッ、やめてッ、いうことをきく！ ……なんでもいうことをきくから、もうやめてえッ！」

妙子の絶叫は、部屋中にキンキンと反響した。半狂乱の叫びだっ

た。

「ハハハ、アハハハ！……そうか、とうとう降参したか。よしよし、可愛い娘だ」

荒川社長は、ソファの上にふんぞりかえり、心地よげに哄笑した。妙子をついでいた健司も政も、もう汗びっしょりになって疲れている。

「やれやれ、どっこいしょと……」

投げだすように竹竿を肩からはずした。

妙子の身体は、やっと床におろされた。

解き合う縄

そのとき、はるか遠くに、サイレンの音がきこえた。

ここは地下の二階だが、深夜であるためにサイレンはよくひびき、それは次第に近づいてきた。

この温泉ビルの方向にむかって走ってくるような気配だ。はじめにそのサイレンに気がついたのは、妙子だった。

「アア……」

妙子は、床に突伏していた顔を、かすかにあげた。竹竿から足は解き放たれていたが、まだ両手は背中に縛られたままだ。

「やっときてくれたわ……遅かったわ」

妙子は、うめくようにつぶやいたのだ。

「なんだと！」

そのつぶやきを耳にいれ、荒川社長はとびあがった。

「きたとは誰がきたんだ？」

荒川は歯をむきだしていった。

「警察だ！……あのサイレンはパトカーだぞ！」

さけんだのは、いままで死んだように椅子に眼をとじていた京介だった。

「なにッ！」

健司と政が、愕然として棒立ちになった。脅えた眼で、荒川をみる。

サイレンは、次第に大きく近づいてくる。

「そうよ、警察の車よ。あたしがさっき電話したのよ」

蒼白な妙子の顔に、チラリと生気がよみがえった。

「くそッ、計りやがったな！」

荒川の靴が、妙子の腹を蹴とばした。

グウッ……と妙子はうめいたが、必死の気力で顔をあげた。

「社長——」

妙子の眼が、椅子に縛りつけられている京介にすがった。

「あたし、午前一時に社長からの連絡がなかったから、いわれたとおり警察へ電話をしたの。電話をかけ終えた時に、この男たちが事務所へ入ってきたのよ」

「そうか！」

京介の顔に喜色がうかんだ。

——助かる！……

京介は、バンザイを叫びたくなった。

「だが、それをなぜ早くいかなかったんだ。それを早くいえば、こいつらだっけきみにそんなひどい目を逢わせる余裕はなかったぜ」京介は叱りつけるようにいった。

「あたしだってトップ屋の助手よ。秘密売春組織に巢喰う野獣どもが、どんな非人的な暴力をふるうか、実際にためしてみたかったのよ。この痛い体験のおかげで、迫力のある記事が書けるわ!」

妙子に、へらず口を叩く元気がでた。

「くそッ、手入れたッ、みんなに知らせろ。ちくしょう!」

さすがの荒川社長も、唇をわなわなとふるわせて狼狽している。

いまこの地下のハレムでは、三十人の特別会員が、二十人の女を擁して遊び戯れているのだ。いま当局に踏んどまれれば、まぎれもない売春の実態がさらけだされる。

一目歴然たる証拠だ。

とにかく、どこか一室へ客と女を隠匿せねばならない。

荒川は部屋をとびだした。乱れた靴音で廊下をかけていく。そのあとを追って、健司と政がどッと飛びだしていく。

もう京介や妙子にかまっているひまはないのだ。

三人の男が出ていったあと、この部屋には京介と妙子、それに椅子に縛りつけられているミドリと美加が残った。

「おい、ミドリ、美加、もうすこしのがまん、がんばれッ、みんな助かるぞ!」

京介は、大声を張りあげて励ました。

ミドリも美加も、疲労困憊、傷だらけの身体を、ぐったりと椅子にくくりつけられ、眼をとじている。

京介の激励に、その眼がかすかにひらき、顎がうなずいた。

「妙子、もっとこっちへ寄ってこい。おれがその縄を解いてやる」
京介は元気よくどなった。

「寄れといったって、足が痛くて動けやしないよ」

妙子は、腹立たしそうにいった。両足首には、なるほど赤紫色の縄の痕が噛みついていて、這うにも両手は背中だ。

「よしッ、じゃおれからそこへ行くぞ」

京介は腹にウムと力を入れていきばり、はずみをつけて椅子ごと身体を前に倒した。

「あぶないわ、気をつけて!」

妙子が首を京介の方にねじむけて、心配の声をかけた。

「ヘッちゃらだい、それッ」

京介は、椅子を背負ったまま、カタツムリのように這いはじめた。それをみて妙子も、最後の力をふりしぼり、身をくねらせて京介のそばに一センチでも近づこうと努力する。

「それッ、それッ」

「もうすこしよ、もうすこし」

励ましの声をかけ合い、二人は不自由な四肢をくねらせて互いに這い寄った。

「よし、背中をこっちへむけろ!」

妙子のうしろ手の縄目に、やっと京介の顔が届いた。

京介の歯が、妙子の手首の縄を解きはじめた。

固い縄目だ。だが京介も必死だ。唇が切れ、歯が折れようともし……。

二人の頭上で、サイレンの音が一際大きく鳴ってとまった。警察の車が、やっとこの温泉ビル「宇宙会館」の前に到着した。
何やら大声でわめく声がきこえた。どなり合う声がした。靴音があわただしく乱れた。

そして、拳銃の発射する音がきこえた。

「やってやがるな！」

京介は天井に眼をむけていった。

荒川社長以下の暴力団が、いくらこの場になって抵抗したところで、警察にかなうはずはない。

悪虐を尽くした彼らの手に、手錠がかけられるのも、もう時間の問題だ。

「妙子、よかったなあ……」

妙子の縄を噛みほつきながら、京介の眼からは、ホロホロと涙がこぼれた。

殺される寸前に助かったのだ。やっぱり、うれしい。

縄が解きはじめた。京介はほっとして小休止した。

「トッブ屋なんてあぶない商売、もう、いやになったろう」

京介は妙子の耳にささやいた。

「こわかったけど、おもしろかったよ。スリルがあってね。フッフ……」

妙子は負け惜しみをいった。

「おれ、妙子の裸、はじめてみたぜ。きれいな身体をしてるじゃないか」

「なにいつてんのよ、こんな所で……バカねえ」

京介は、また妙子の縄に口を持っていくのだった。

——終



編集ノート

と

あとがき

○新装十月号に引続いて十一月号も好評裡に姿を消し早いもので新装第三陣として十二月号をお届けすることになりました。今月号では「悦悦女体ハイライト」と題して多数の新人モデルを加えて、その特異な悦的な表情を御覧にいたします。グラビヤ写真に限らず口絵や本文におきましても、意欲的な本誌の内容に御注目いただきたいと思ひます。形だけで心の籠っていない土偶人形との差を知って頂けることでしょう。

○新装号を発刊以来、原稿の応募並に読者通信の投稿が急激に増加して参りました。今月号は掲載予定作品の関係で読者通信欄の頁数を減少しましたが来月号の輝やかしき新年号からは断然増頁する考えです。

○地底の女奴隷市並に被虐の白い花の二つの連載小説が十二月号を以て完結しましたので新年号からは新しくベテラン緑猛比古氏はじめ片矢薫氏花巻京太郎氏など本誌全盛時代の常連寄稿家が続々と登場して下さいます。尚、魔教圏や潰滅の前夜で有名な土路草一氏も目下新構想を練つておられますので、いずれ咲く花の匂うが如き本誌をお目にかけることが出来る筈です。

○久しぶりに辻村隆氏が「鑑賞用女性」と

いうユニークな題材でその洒落なタッチの体験を豊富な資料と共に提供下さいました。が、新年号からは「奇譚三十九夜」という倒錯物語を毎月手を変え品を変え、その蘊蓄を傾けて執筆して下さいる外、話の屑籠では時評的随筆を書いて頂ける筈。

○本誌では勿論青少年を絶対に読者対象とは致しておりませんが然し書店店頭にて万一眼に触れるということ慮り、その編集に於ては悪影響を及ぼさぬように十分に注意し自粛するよう心掛けたいと思ひます。本誌では削除部分が多いという苦情を受けその為「家畜人ヤプー」その他中絶のものもあります。すべて右の主旨によるものです故何卒御諒承願います。

(Y生)



貴社御一同様には益々御清栄の段何よりと存じます。さて貴誌新装十月号を大変楽しく読ませて戴きました。口絵グラビヤ創作など素晴らしいものばかりで号を追う毎に益々よくなってゆく貴誌が楽しみです。洋装フアンの一人としてお願いします。アメリカスタイルの緊縛写真などもどしどしのせて下さい。ワンピースにナイロンストッキングに黒のパンプスのハイヒールという洋装スタイルの緊縛写真や全裸にパンプスのハイヒールだけのものなどや又レースつきのナイロンパンティにパンプスのハイヒールのスタイルなどをのせて下さい。ハイヒールはかがとの細い高いものもいいです。一枚でもいいから是非のせて下さい。お願いします。(東京 宗高男)

毎月、月末になると奇クに又新しい鼻責めの構想が出てやしないかと胸がうずきます。小生の生き

甲斐は美貌を思う儘変形して嗜虐と破壊の楽しみを堪能する事にあります。形の整った鼻を指頭で弄ぶ、潤いのある眼を引きあげたり翻転してみる。又丹花の唇をつまみあげて其の被虐に酔う美女の表情に比のしない陶酔を感じるものであります。思い出すだに胸がドキドキしてくる東風二助氏の「玩具」のような傑作の写真による再現こそ心からのあこがれであります。奇ク愛読者の中に鼻以外に眼、頬、唇等にサド又はフェチの魅力を感じる同好の士は居りませんか。鼻せめにしても読者通信をもう少し鼻せめマニヤの記事で賑やかにしたいものです。そして奇クの編集部に毎号鼻せめ写真と記事をタップリ載せて頂くようにしようではありませんか。小生資料も或る程度用意して居ります。同志の資料交換などもいかがでしょう。(東京 墨堤生)

KK新装十月号、青山山陽堂書

店にて入手しました。意外に早く店頭に出現したのでビックリ。初めはまさかと疑って見た位です。待望の新刊扱いになるまでの苦闘の道も大変だったでしょうが、増頁とグラビヤ写真の鮮明さに益々よろこびの目を見張らされました。読む雑誌から見る雑誌へと時代の移りもはげしいですが、当然の成行きでしょう。しかし入手してみても、いろいろと欲も出て参りましたので感想を述べさせてもらいます。表紙は余りはでにしない様にと気をくばっている気持は判ります。チョット物足りなかつた。私にはあの黒白時代の頃がなつかしい。やはり外国作品からの登場を願うものです。四馬孝氏の御活躍ぶりは大したもの。久方ぶり全く久方ぶりの色刷口絵はよかったです。此の緊縛スタイルは効果万点です。氏の作品集では水着スタイルが大番よかった。可れんな感の顔が何かをうったえている様です。グラビヤでは柳初子さんの初々しい感じが何ともたまりませんでした。左下のポーズが私には一番よかった。両手両足がしばらくは、ややうつむき加減のスタイルはたまりません。杉江美津子さんの後手をしばらく、さるぐ

つわをはめられている小町娘の恰好もよいです。本文に入って藤見郁氏の「夜の罟」面白く読んだものです。氏は「裏窓」誌上でも大活躍されており、しばらくKKから遠ざかっていた様ですが再登場もなつかしいもの。ストーリーはよくあるテーマですが実に上手く文章をまとめており流石です。やはりベテラン作家の一人です。雪崎京人氏の「女相撲と女闘美」は挿入の絵が効果的です。塔婆十郎氏の「地底の女奴隷市」も第一回から迫力もあり次回が待たされます。北原純子さんも時々挿絵を書かれておりますが御体の方は如何でしょうか。どうか無理されずにボチボチと書いて下さい。所で私も桜恵之介氏と同じ心境で最近投稿した作品が没になったのかはつきりしないので気になります。今年に入ってから読者通信も三四回投稿しましたが何故か全部没の浮目です。今回は一つ日の光りを当らせて下さい。(東京・東一郎)

新装の十月号を店頭で見て早速購入しました。旧刊時代とそっくり立派になったものと喜んでいます。桜井嬢の防声具と乳房責は最も優れています。乳首をはさまれ

ている嬢の表情が何とも言えませ
ん。絹川さんの「女奴隷呻吟」女
奴隷という大きな文字が思わずド
キリと私の胸につきささりその下
にある素晴らしい写真と共にすっか
り私をとりこにしていまいまし
た。なんという見事な写真でしょ
うか。今まで生を享けて何十年こ
の方、こんなショックな写真
を見たことがありません。二頁大
のため真中から切れているのが惜
しいです。次頁の四枚の写真もそ
れぞれ結構でした。絹川さんの美
しい姿態が、よく女奴隷というふ
んい気を芸術的なポーズにまで高
めています。少しもいやらしいと
いう感じを抱かせず只美しさだけ
を見る者に与えるのは、カメラも
よいと思えました。「放心」と「羞
愧」の若原明子嬢は只モデルの若
々しい肉体だけが取りえの他愛の
ないもの、それにひきかえ同じ新
人でも柳初子さんの「芳紀二十才
の表情」の方がポーズも顔も表情
が出ていてよかった。只折角手足
をしばられていたのだから手と足
の表情も出したら一層よかったの
にと思います。(群馬・高縄生)

る興味を持っているので同氏の記
事は有難い。毎月引続いて載せて
もらいたい。近頃奇クには土俵四
股平氏の女闘美に関するものが久
しく無いのは残念だ。女子プロレ
スでは矢張りダメで女相撲の全裸
の素肌に渾一本で取組む肉弾戦に
しくはない。エロとスリル百パー
セント女性の肉体の動的美的変化
をあますところなく満喫できるの
は女相撲に限る。雪崎氏の御投稿
を引続きお願いしたい。七月号の
世界裸美画報に女相撲の取組の写
真が出ていた。一応珍品だが渾の
しめ方がまずく取組のポーズもつ
くった型なので実感がともなわず
迫力に乏しかった。相撲である以
上、下りをつけ紺か黒の渾を素肌
にしつかりと締め込んでいないと
実感が出ない。奇クも是非女相撲
ファンのために女力士のすさまじ
い肉弾戦の写真をのせて下さるよ
うお願いする。(志賀 武)

を認めて頂き最後まで目を通して
もらえば幸甚です。先日はからず
も遊びに行つた他の街の本屋で奇
クのあるのを見つけ、まさかと目
を疑いましたが、それが本当であ
ることを知ると血のわきかえる思
いで買い求め勝利を得たような気
持で帰ってきました。奇クがすで
に三四年前から発刊されていたと
は、井の中の蛙をうらめしく思
いました。さっそく躍る心を押さ
えて頁をくつてみますと相変らず
四馬孝先生をはじめ他の先生方の
上手な筆と素晴らしいアイデアによ
る絵に感服しました。さて、私は
現在二十二才になる或る会社へ勤
めている女です。旧奇クを二年ば
かり読みその中に自分の「浣腸」
に対する感覚を呼びさまされまし
た。以前に浣腸に関する経験のあ
ったことをいろいろと想い出して
みればマニヤになれるほど浣腸に
は縁の多い生活でした。母や姉が
看護婦ですし終戦の時満州での経
験など、なれっこになるほど浣腸
には接してきました。いずれ体験
なども書いてみようと思っていま
す。絵が好きですので責絵を何枚
か画いてみました。が気に入ったの
がまだ出来ません。よいのが画け
た時には原稿として送らせて頂き

たく思っています。(長野・伊那
紫子)

相も変らず本誌の美しさに、皆
様の御努力を感謝しつつ、毎号拝見
して居ります。滝れい子様、四馬
様の美しい責の絵。最近益々美し
く妖艶さを増した絹川文代嬢の素
晴らしい表情。豊艶な大塚啓子嬢
の四肢と黒髪、そして初々しい柳
初子嬢の姿が我々の目を楽しませ
て呉れます。春丘嬢の新鮮さ、津
川、若原嬢の美しい眼、総て他誌
に見られない美人を集めて我々の
希望を満足させて下さる編集部
の方々の御苦勞は大変なものだろ
うと推察致して居ります。然し、一
方最近の傾向として桜井嬢のや
強烈な責め姿や時折り見せて呉れ
る絹川嬢の苦しげな表情の他、以
前の川端多奈子嬢や伊吹真佐子嬢
の様な強烈な吊り、逆吊り、海老
責に笑って耐えられる様な線の太
いモデル嬢に恵まれぬのはいさ
か淋しい。美しい肢体と、強靱な
肉体、そして如何なる責めにも耐
えられる強い忍耐力を持った新人
の出現するのを、神の再来を待つ
キリスト教徒の如く心から待ち望
んで止みません。川端さんの最近
の便り、二月号で拝見致しまし

た。本当になつかしく思います。私なんかの出る幕ではないなどと引っ込み思案になって居られますが、矢張り貴女の様なベテランの真のM女性がリーダーになって新しい人々を引き上げて行かねば本誌の発展はありません。是非、其の後の御体験等も思う存分書きまわって私共の夢を叶えて下さる様お願い致します。貴女の様は逆吊り、股間縛り、股裂き、鞭責め、と如何なる烈しい責苦にも歯を喰いしばって耐えて下さる様な素晴らしい女性とプレイが出来るチャンスに恵まれたらと思わぬ日とてございせん。是非、再度の御活動をお願い、本誌を更に一段美しいものにする為に筆をふるい、又、新進の為にプレイの烈しさを見せて下さい。貴女の完成された逆吊りの苦しさの姿を、もう一度再現せられん事を。それにしても、男性モデル陣のたより無さ、無気力はどうした事でしょう。皆様にゆるい縛り位で満足してしまつて、男の責を望む男性、女性両方に満足を与える程のものは仲々出来ませんね。顔を見せぬモデル等金があつても御断りだと云われる編集部と言葉も、もっとも乍ら、唯それだけでは仲々良い男性

モデルは出来ぬのではないでしょう。顔など無理に出さなくともさるぐつわをはめたりパンティでもかぶせたり、縄で顔面をぐるぐる巻きにしたり、うまく背後からねらうとか、顔を反らせる等、色々振り方もあるのではないでしょう。春日ルミ様も最近とんと御姿を見なくなりましたが、再度御出馬願つて男性、女性のモデル陣をなで切りに責めさいなで下さい。此の様に美しいルミ様に責められるのでしたら、私など六尺禪一本で海老責、逆吊りの刑を受け、靴で踏みこまれ、鞭を受け、事があつても喜んで御受けするのですが。女性に耐えられる逆吊りに男が耐えられぬ訳のものでないと信じますが、プレイをする相手もありませんし、独り実験も出来ないもので夢ばかり描いて居ります。本誌モデル諸嬢の御奮起と川端様、春日様の再度の御活動をお願いしつゝ本誌の発展を祈つて居ります。(名古屋 IK生)

○ 私は本誌の大版時代(?)からの長い断続読者で、女闘美の記事に限り拝見しています。長らく白表紙の本誌にも御無さたでしたが最近雪崎京人氏の登場で又々喜ん

で拝見しています。健在健筆をお願い致します。女闘美ファンも仲々数多く居られるのでたのしい限りです。こまかく分けると古典趣味、無残絵趣味の方など色々差はあると思いますが、私はやはり時代と共にある女相撲、現代娘のハッラツとした相撲がよいと思ひます。如何でしょうか。いづれにせよ健全、典雅な女相撲のファンの増加を祈るや切です。禪の締め方も色々ありますが、やはり相撲には現在国技館の力士の締めている締め方が一番美しい様です。背の三つの「結びめ」の奥ゆかしさがなくては物足りません。こゝを無雑作に挟みこんでとめた締め方など感心しないです。又、前袋も下りを長くしてうしろへ廻すのは六尺禪のやり方で、やはり前袋は一重、前下りは短かく下げるか、又は「まわし」にたゞみこむのが組中の姿も一番美しいと思ひます。やさしい女の禪姿はまことにゆかしいもので、これが女相撲の魅力の半分近くをしめるでしょう。勿論、女の闘争美そのものも大きいですが。本誌の発展を祈ります。(京都市北区・殿田正夫)

○ 九月号のマゾ、フォトですっか

り感激していたのですが、十月号で再び素晴らしい作品に接し嬉しくてたまりません。十月号のドミナの表情の中には九月号のその様に征服感は見られませんでした。が、蟲も殺さぬ様な甘ったるい表情であの様に大胆に男に跨って居られるのを見ると、前とは違った美しさで魅力を感じ、やるせない様な快よさを覚えます。散文の方はやはり不満がありますが気長に待っています。私はマゾ作品ならどの様なものでも楽しく読ませて頂いて居りますが、超現実的な作品は、テーマが広い空想の世界から選べるのでそれだけ変化があります。現実性に欠く様です。例えば男性の身体を空想的医学によって変形させて女性の乗物に変化させるという様なものなどこの種に属します。私は可能性の追求をする様なものに魅力を感じます。この代表的なものは強いS子と弱いM夫がいて組討ちとなり、S子がM夫を組伏せて胸の上に跨り、「家来になれ、奴隷になれ、馬になれ」と責めつけ、逐には相手の顔の上にお尻を据えて息もとまる程苦しめて降参させるのです。この様にして相手を馬にして散々乗り廻し、馬が疲れてつぶれると

「このボロ馬め、お前など馬の役に立たない」と言って再び仰向けに転がして、座布団がわりに腰を下ろします。更にこの男はコプロの世界に追い落とされるかも知れません。この様な事はやはり社会的或はその他種々の制約を受ける事は勿論ですが、程度によっては実現可能です。少くとも物理的に可能で、ただこの様な作品はテーマが決ってしまうので単調になり皆同じ様な作品になってしまします、然し私に関する限り決してこの種の作品にあきる事はありません。同じテーマでも自分以外の誰かが書く限りいつも魅力があります。特にS女性によって書かれた場合はそうです。どうかM系作品をどん／＼発表して下さい。

(東京・三上仰)

はじめにお便りします。僕は満三十才になるサラリーマンです。以前より本誌を愛読しているマニヤで、特に菅良太氏の大ファンです。菅氏の好みの軍人責は僕の好みにピッタリで、特に「従卒」「猩紅匪」は何回も熟読しました。最近、僕は自衛隊の将校(一尉)とふとしたことから知り合いになりましたが、年が三十五才

で、中隊長をしており、苦味走った筋骨逞しい男性的な、所謂理想的なタイプの人です。たゞ、残念なこと、この方が所謂ソドミアかどうか、まだ判らないので、僕の本心を打明けずにいるのです。その方を揮一本の裸にして大の字礫けにしたらいいかと勝手に想像しています。映画で最近ビックリしたのは、イタリア映画ローマの旗の下にという作品で、ローマの軍人が捕虜になり、大の字礫けになるシーンが出てくるので、腰の所に赤い布を少しまとっただけの裸で大の字にはりつけにあうのですが、炎天下にさらされるシーンが相当長く続き、思わずコーフンしました。菅氏には是非みせたい場面です。知り合いの自衛隊将校をその映画の場面にあてはめて連想したりしています。一度、その自衛隊の方を菅氏に紹介したいと思っています。きっと菅氏は歓喜するだろうと想像します。また、早秋特大号に出ていた鎌倉のS・A様、東京のK・M様とも交際したいと思っています。

(東京のH・T生)

○ 其の後の私の消息をお送りいたします。直接通信はしないから、

奇クへ消息をのせよとのお手紙が多いので、ブライベートなお恥しいことを書かせていただきます。秋になったので、食欲が出て、いくら持直していますが、まだ、はつきりとは致しません。傷の疼きが、切腹への情念をかきたてるせいか、毎日が、疼きと、失神の連続です。健康に毒だと知りながら、そうせずにはいられない乗馬ズボンの女囚。一軒建ての家屋なので、鞍のきしみも気にならぬせいでしょう。お恥しいことですが乗馬ズボンへのお供物も、次第に手数のかゝった精巧なものとなり、腹切りが完全に遂行できるように力を割りふってプレイします。苦しいのです。でも、つゞくかぎり、秀緒はプレイしつづけることでしょう。別冊が出ましたが、女腹切りの特集が待たれてなりません。私あての投書を見ても、差出人の方の筆蹟は、大体みなお上手で、相当教養のある方々の方です。通信販売では、住所の差支える方もあるでしょうから、やっぱり店頭売りの方が好都合だと思えます。でも、たゞ腹切りだけでも血腥いでしょうから、各国の倒錯風俗や、(ことに乗馬靴、乗馬服、スラックス、トレン

チコート、お小姓姿、女武者、手古舞芸者、ビートスタイルなどのフェチ) そのようなものを掲載している雑誌の入手方法、絵写真などで、華やかな感じにしてはと思います。切腹のフォートはヌードでさえなければ、かなり大胆なものでも、許されるということ。十月号の「夕陽を染める乙女たち」後篇のさしえは、前篇に比べて表情に苦悶の描写がたりません。男装フェチにとっても、あの着衣は迫力が乏しいようです。私の、乗馬ズボンの切腹ばかりが誌面を賑わすので、物足りない方もおありと思いますが、私は、これ一筋です。どなたか新鮮なペンフレンドの御投稿を、心からお待ちいたしております。毎号、欠かさずのせられるだけの原稿は必ず書きます。どうぞもう一種類、私と違った感じの創作をおのせ下さいませんか。そして、女腹切もせめて創作二篇と、フォート、絵などを毎号のせていただければ、絵など状態にしたいものです。又、特集は、外国むけということも考えて、絵を多くしたいものです。(乗馬ズボンに身を固めつゝ、藤山秀緒)

○

私は廿八年からの本誌のファンです。私は、S7、M3位の中年男で、女性を縛った経験もありますが、本誌の往年の秀作「淫火」松井籟子作の小百合夫人的女性に逢う事が出来ませんでした。絵も描きますが写真が大好きです。人妻をモデルにセリフを使って連続に撮り、楽しんだりしましたがそれも夢、一年前に北海道へ転住してしまいました。でもその人妻はマゾとは程遠く、少しも興味が湧きませんでした。最近の本誌のモデル嬢では大塚啓子さんが大好きです。素敵な肉体の持主です。読物は失礼乍ら私の好きなのは余り無く、「宇宙のどこかで」が大分評判がよかった様ですが私は女性を、時には男性も同時に責める読物が大好き。筋書は大同小異でも、名前が変わり、時と場所が変わっていたらそれでいいのです。私は鞭打ちは好きません。何時迄も傷痕が残るし、音が近所へ聞えるから、その他の物なら何でも応用します。電気ポットのニクロム線を取り去ったもの（これは男性用）電気アンマ（両性用）これは誰でも使用している。その他ローソク、木馬、浣腸でも何でもかでも。（名古屋・一匹狼）

○ 始めてお便り差し上げます。先日とある書店で奇クを拝見しましたから、いろいろと私の煩悶がとけた様に思います。私は小さい頃から「顔は可愛らしくて京人形みたいだけれど、気性は男の子みたいね」とよくいわれました。たけれど、女のくせに男の子を組み合わせたり、いじめたりする事がとても好きなのです。昔はよくお転婆振りを発揮して母から叱られたり笑われたりしたものですけれど、大きくなるにつれて、そんな事も出来ませず「女なのにどうしたらいいのかしら」ととてもなやむ様になりました。ハンサムな男の方を見ましても胸をときめかすより、あの人を組みしいて顔をお尻や足の下敷にしたり、足を掃除させたりお馬や犬にしたりして、女王様として君臨出来たらどんなに愉快かしら、といろんな事を空想するのです。それが空想からさめると、あゝ又余計な事を考えてしまった、私ってどうしてこうなのだろう。これではお嫁になど行けやしないわ、と思いなやむのが常なのです。ですけれど奇クを拝見しまして世間にはいくらも同じ様な方や、いじめられるのを喜ぶ男の

人もいるのだという事を知り、何だか目の前が明るくなった様な気がします。中京地区の皆様の私の様な方はいらつしやらないでしようか、若しいましたら、同じしゆみの者同志として一緒にいろいろと語りあいたいと思いますけれども如何でしょうか。私毎週金曜日の正午から一時迄名鉄百貨店屋上の展望塔の上でお待ち致しております。どなたか是非お越し下さいませ。合言葉は「今何時でしょうか」「今一時五分過ぎですわ」にしましょう。では皆様よろしく。（愛知・河野由美子）

○ 上原由紀子様、八月号で貴女の告白「由紀子の手記」を読み、以前の浣腸小説になかった題材であり、新鮮で日常生活の中にスポーツを当てた傑作でした。私はこの手記を何回も読み、貴女のような浣腸マニヤの虜虜になつてしまいました。私も浣腸については幾ら知識を広めたいと思います。又、読者通信で貴女をモデルにしての浣腸写真の撮影も可能であるそうですね。貴女のような方がモデルになるのですから、きっと美しい写真が出来るでしょう。今から本誌に載る日が待ち遠しいです。私は頭の中に貴女のイメージを描いて一人で楽しんで居ります。暗い中に貴女は後手に縛られて転がされていきます。きつと地下室なのでしよう、中が急に明るくなり、戸があけられ数人の男達が入ってきます。タバコを持った手、チエーンを持った手、素手等。みんな貴女のそばに寄ってきます。一人の男が縛り縄を解きますと、貴女逃げようと思えますが不可能です。これからの不安で頭の中はいびです。すると男が脱衣を命じてきます。手にはチエーンが握られていて、拒否でもすると何時それが飛んでくるかわからないと思ひ、観念した様な目で男を睨みながら、スカートをブラウス、スリッパを脱ぎます。そして、男達にベッドの上に連れてゆかれ、大の字に手足を固定されてしまい、水道からホースが引っぱられてこれ、口の中に水が注ぎ込まれます。盛んに首を振って許しを乞いますが、水は容赦なく口の中をいっぱいにし、咽喉を通つて中に入っていきます。腹は胎児のいるように膨らみます。貴女は気を失ってしまい、男達はこの責を諦めて貴女はこの責苦から解放されま

す。だが貴方は元気になると男達にもとの所に連れてゆかれます。あたりにはイルリガートル、グリセリン、ガラス浣腸器等の揃っている室に変わっていますので悲しく、今にも泣き出しそうな顔です。ベッドは仰向けに寝かされます。両手をベッドに固定され、そして両足も揃えて頭の上に持つていかれ、これもしつかり固定され、下にはナイロン風呂敷が敷かれます。イルリガートルが頭上に吊し下げられ、尿管が男の手によって挿入され、尿管を押さえていたクリップが取られ、次第に液面は下り、ゴム管はそよ風に吹かれて、いるようにゆるく揺れています。石鹸液がだんだん減ってゆき、約一〇〇〇CC位入ったでしょう。また液が追加され、尚も貴女が拒もうとすればする程、わめけばわめく程腹痛が一段と強くなり、許されるまで我慢をしなければなりません。男達は貴女の顔に脂汗が出て、盛んに我慢している様子を見て満足した様な顔つきで、タバコをすったり、口笛を吹いたりして貴女を見て嘲笑っています。貴女にとってこれほど侮辱された事はないでしょう。何時になったらこの責苦から許される事でしょう。

う。これが私のある夜、夢見た時のものです。まだ沢山の事について記したいのですが、表現が下手ですし、今度の時の楽しみにしたいと思えます。この次はもっともっと違った浣腸責について考えておきます。浣腸マニヤのために浣腸責めの口絵、写真の特集、休刊前の浣腸責め小説、または浣腸についての文の特集も浣腸マニヤのために作っていただきたいと思えます。(長野・山田英美)

九月号の南時夫氏の「ある強盗事件」はまことに面白く拝読しました。この種の読物は創作や作り話と違って真実味があり、記録的価値も娯楽的価値もともにすぐれたよい読み物です。但し、場所のせてありました、名前は新聞記事そのまゝ使われた由、そうすると実名ではないでしょうか。とすると、若い娘さん達だし、その当時は別として、今となつては一寸気の毒な気もしますね。仮名にしても読み物としての価値が下るわけではなかったとも思えますが。(東京・牧野生)

十月号拝見致しました。グラビヤフォトの中で「女奴隷呻吟」は

よい着想で道具立もよく美しく秀れていました。しかし折角鎖を使ったのですが犬の首輪はいただけません。それで考えたのですが、鎖を足首なり手首なりに回し、その端とちょうど一回りしてきた中途の輪を南京錠の小さいので止めた。如何でしょうか。大した手間もかからず割合に拘束感があると思えます。(大阪・水沼生)

十月号誌上で川崎氏の「毎日こんな浣腸をされている」の説を読んで毎日一万三千人もの人々が、この広い空の下の何処かで浣腸を受けているのかと思うと、あまりにも多い事にビックリすると共に、私には一種の楽しさが湧いてくる。今夏は連日三十度以上にオーバーする暑さとしてずい分多くの子供達や大人も浣腸の憂目を見た事だと思つたと一そう興味が募つて来る。今夏は私には子供並みの夏休みとなつてしまった。日頃の激務で体をすっかりこわしてしまい、丸一ヶ月休職した。寝ている程の病気でなく毎日ブラ／＼として居たのであちこちで捨てた話題をと思ひペンを執つた次第。二日置きに病院通い、病院の待合は私の様なアブマニアには楽

しい処でもある。内科、小児科とて主として子供の患者が多く、結構楽しい時間でもあった。或る日の事、ちょうど私一人で注射を終り、施薬を待つて居ると近所の奥さん達が三人ばかり、予防注射を受けに来て、待合で待期して居た。ちょうど目の前の壁に、何処の病院でも見られる寄生蟲模型と乳幼児の糞便模型が掛けてある。その内の一人の奥さんが「マア、蟲の模型ね、アラ、まあいやだね、こんなのが私の体の中にいるなんて」他の一人が「本当ね、ついこの間の事だけとおとなりの子だけ(女の子らしい)ね、急にお腹が痛い」と云つて大騒ぎして浣腸したのよ、そうしたらね、こんな大きな蟲が出てきて……」他愛のない世間話だが私には大いに興味があった。(神奈川・金杉正一)

小生、切腹という事に非常に興味を抱き文献もぼつぼつ集めつゝありますが、女性の切腹というところに例が少く、又図絵となると不幸にも一枚もお目にかゝっていないと云う状態です。本誌を拝見して女性の切腹状態の多い事に驚き、又女性自身が切腹という事に興味をもっている事に私自身

興味を抱いた次第です。特にマニヤの体験手記、山田久仁子さんの実際に腹を切られた記事には非常なショックを受けました。女性の切腹という極めて甘美でロマンチックなテーマにこれからもつめてスペースをさいて頂きたいと願います。(和歌山・富永一)

祝別冊奇クの発刊。リクエスト画廊は面白い企画と感心、ますます奇クを身近かに感ず。今後も続けて下さい。私も早速リクエストの仲間入りをして、一、縛られてもがく姿は紐や縄では中々難しいだろう。手錠足枷なら両手首と両足首に夫々間隔があるから、もがき甲斐があるのではないか、哀れないけにえが冷たい鉄の手錠足枷をはめられて、これをはずそうと必死はふんばっている姿を撮って下さい。(モデルは絹川さんが絶対。足枷は手錠式ではなく、いつかの美囚十四号の時のがよい。但し鎖はもっと短く)二、海老責——むしろの上に引据えられ、あぐらをかくされ、両足首を巾広く括られ、その紐を両肩に回して後手と繋かれ、両肩を力一ぱい前に押しつけられ、グーッと締められ一分も身動きの出来ない哀れな

姿でドンと前から突かれてゴロツとのけぞったところ(これも絹川さん、上衣なく下着のみ。その下着もパンツよりも腰巻の方がよい。或は美囚十四号のときの囚哀で。但し胸をはだけて乳房を出す)三、美しい女性が取り押えられてもがくところをムリヤリに縛り上げられて行く過程をお願いします。(これも絹川さんで。いつかの杉さんの「急襲」のような傑作を再現して下さい)。総じて従前の奇クの写真には一つ一つが床の間の飾り物のような出来上り図が多かったが、それ迄の経過をリアルに追っていたきたい。完成図を平面的に並べるより、立体的に掘り下げていく。ほんの一例ですが九月号で絹川さんのあぐら姿の何葉か。これは面白い写真ではあるが、あのようになんか出来上りの何葉も並べるより、出来上り一つでもよいから、あの姿にされるまでのプロセスを追った方が人の心に慟々と迫るのではないか。(東京・牧野正夫)

○ 勝手ながら、モデル嬢による緊縛写真につき、注文をつけさせて戴きます。小生は、美女が厳しい猿轡のため鼻孔をのびひろげ頬を

ゆがめている表情に魅力を感じている者です。このような美女の表情は、現実ではもちろん、映画でも見ることはできません。貴誌にお願いをする以外致し方ありません。幸い貴誌を知っていただき、四馬氏の挿画で大いに楽しませて頂いておりますが、モデル嬢による緊縛写真では、縛りが号を重ねる毎に優れた出来ばえを示すのに比して、猿轡の方は、声を奪われた被害者の風情のみに重点が置かれ、前記の表情の魅力についてはなおざりにされている様なので残念でなりません。言葉で鼻孔をひきのばし頬を否めると表現しますと、モデル嬢に相当の苦痛を与えねば出来ぬように思われますが、小生の体験では、ちょっとした工夫でさしたる苦痛なしに出来得るはずです。口中に含ませる布などでも、声を奪うことは二の次の目的なので少量でよく、時には含ませぬ方がよいこともあります。鼻孔をひき伸ばすには口のみを覆う猿轡が効果があり普通用いられるタオル手ぬぐい等より絹の子供帯やスカーフの方が緊りが良く、あごの下にもかからぬよう口のみをぎっちり二、三巻緊めつけます。首の後ろで結ぶとき、下にひつばるよう

にすれば鼻孔は縦に、片方のみ力を加えて結べば鼻孔は横に伸びます。髪が長いときは首の後ろに引きくるめて猿轡で押えてしまう方が表情がはっきりします。口に嚙ませる猿轡は頬をいがめるのに効果があり、口中に少量の布を含ませた上、腰でも、ネクタイロープ等を二三巻歯と歯の間にしっかりとかませます。縛りは後手高手小手以外特に変った型は求めません。首なわ、股間縛りを加えて戴ければ申し分ありません。ポーズはこれといった注文はありませんが、顔は、哀れな表情を無理強いにカメラに向けられているといった感じを出して、カメラを見つめさせて下さい。服装は、袖無しブラウスにショートパンツの様な活潑なものの方が良く、ヌードやごてごて飾ったものは好みません。モデル嬢は是非、絹川、春丘、館、田原の三嬢のうちどなたかをお願いいたします。以上好き勝手なことを書きましたが、必ずや同好の士も多いと思いますので、早急の実現を期待しつつ筆をおかせていただきます。(東京・SS生)

○ 新装なった十月号充実した内容で本当に満足しました。もっとも

相かわらず男性被虐のフォトが少いのは残念ですが、口絵写真の「肩車」「懲しめ」はモデル嬢が若くて美しいので素晴らしく奴隷もまあまあ体格でよかったと思います。ただまだまだ迫力がうすいと感じられます。田沼氏の「マゾヒズム天国」は夢想的で近來最高の出来でした。私は五尺二寸五分、十二貫、小柄ですがスタイルには自信を持つサド女性です。マゾ読者諸氏のお便りを待ちます。住所は奇巧の編集部にお問合せ下さい。(東京・坂本清子)

○ 初めて御便りいたします。小生廿四歳の青年です。今回初めて貴誌を手にしてうれしき限りです。小生は禪マニアで禪をしめはじめ丸二年になります。小生がどうして禪に魅力を持つようになったかは自分でもわかりませんが男のきりつと六尺禪や越中禪、もっこ禪等をしめた姿はそくそくする程魅力的です。初めの頃はもっぱら越中禪を愛用しましたが此の頃は六尺禪を好んでしめています。最近銭湯へ行っても誰も禪をしめる者がいなくなりました。自分はそのな中でゆうゆうと真白な晒の六尺禪をしめます。又朝目がさめ

て起きだちにぎゆうつと一番六尺をしめることは何とも言えない気持ちです。これからどんどん小生と同年の者が禪を愛用する様になる事をのぞんでいます。(長野・中野真村)

○ 初めて御便りよりさせていただきます。小生は三年位前よりKK誌を愛読しています。小生は女相撲と女闘美マニアであります。同好の方どうぞよろしく。このところずっと女相撲と女闘美の記事がのっておりましてマニアにとりましては安い本になります。往年の土俵四股平氏にかわって雪崎京人氏の文と画は大変よく書いてあります。若い女と中年の女が裸身に禪をつけて四つに取り組んで髪をふり乱し乳房をぶっつけ合い肉弾相搏つ女相撲を空想しております。見世物の女相撲もあります。うですが女闘美にとりましては、やはり禪一本の姿が魅力があります。すね。とりかく雪崎京人氏の文章は私達マニアにとりまして非常にうれしいものです。これからもしどし書いて下さい。(岐阜・服部二三夫)

○ 編集部の皆様、毎号御苦勞様で

す。私は二十五歳になる漁夫ですが、日頃から女体緊縛写真がほしくてたまりませんでした。それで常日頃から雑誌なんかを見る時は必ずそうした挿画とか写真のついでにないものかと探しておりましたが、なかなかそうしたものは見つからず満たされぬ悩みの日々を送っていました。しかし、たまたま或る書店にて何の気なしにめくって見たとたん思わず息をのみました。常日頃私が血眼になって探し求めていた女体緊縛写真が出てくるではありませんか。私は只もう夢中で胸がドキドキしてなりませんでした。後手に縛られて仰向けにころがされて鼻責めにされている絹川さんや後手に縛られた大塚さんの写真はいずれも私の満たされぬ悩みを満足させて下さいました。これからはぜひ本誌の愛読者の一員としてゆきたいと思えます。十月号は表紙から内容の全部にわたって本当によく出来ておりました。(青森・松浦勘助)

○ 朝晩めっきり涼しくなってきました。いよいよ読書の秋です。貴誌を陰ながら愛読応援している者は多いのです。どうかこれからも益々発展して下さい。心から祈

ります。11月号のレインコートを着た女の表紙は落着いた色彩で非常に良かったです。ずしりと手ごたえのある雑誌をまるで宝物にでも触れるように、あちらから眺めこちらから眺めて楽しみました。グラビヤ写真から口絵へとめくってきて巻頭の絹川文代さんの回答は面白く読ませて頂きました。貴誌ならではのこくのある記事で美人モデル絹川さんのアウトラインが興味深く出来れば更に一歩進めて写真部の特写で絹川さんの一日の生活をグラフにして下さったらどんなに素晴らしいだろうかと思います。いたずらにひどい縛りものばかりを狙わないで貴誌の独壇場であるモデル嬢の紹介記事をたっぷりとお願ひします。小説や読物でも11月号は読みごたえのあるものが多かったですね。読者の或る一部には削りすぎだとか物足りないとか言う人もあるようですが、そんな人達は進行性の極めて僅かの限られた人々ですから、そんな過激な言葉に迷わされず普遍性のある穏健な内容に願ひします。私達は今のゆき方に賛成します。どうかこの調子で御発展下さい。(福岡・八幡租夫生)

新装特大号発刊記念

三十五万円 懸賞原稿募集

賞金

一席	金五万円	一篇
二席	金二万円	五篇
三席	金一万円	十篇
佳作第一席	金五千元	十篇
佳作第二席	金三千元	十篇
佳作第三席	金二千元	十篇

規定

一、内容は躍進の本誌に掲載するのにふさわしい文献価値の高い告白、体験、随筆、小説、等特に真実味溢れるものを求めます。
 二、枚数には一切制限いたしません。
 三、必ず自作の未発表作品をお願いします。
 四、締切は特に定めませんが、出来次第どしどしお送り下さい。折り返しお返事いたします。入選作品は最近号の誌上に発表掲載します。全部の入選作の掲載を以て今回の懸賞募集を打ち切ります。
 五、賞金は入選作掲載誌発売後一ヵ月以内に送金いたします。誌上の匿名は御自由です。ふるって御応募下さるよう御待ちします。

奇譚クラブ編集部

読者原稿募集

【体験、告白、手記】

どなたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかあったものはあるものです。物いわさるは腹ふくるのたえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。

【創作、小説、物語】

一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限りです。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

【映画、雑誌通信】

映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名。雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

【レポート】

新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
 ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈する準備がございます。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通を応答、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

☆本誌お求めの葉☆

一月分（1冊）	送共	百五十円
三月分（3冊）	送共	四百五十円
半年分（6冊）	送共	九百円

新年号より増頁の上定価百五十円に改訂

本誌は全国各地の有名書店にて毎月二十四日一斉に発売いたしますが、若し入手困難でしたら最寄りの書店へ御予約下さい。確実に配本致します。直接発行所へお申込の節は、右記の予約金を御送金下さい。売と同時に厳重包装の上お送り申上げます。

奇譚クラブ 定価百四十円

十二月特大号

（第十四卷第十六号）
（通刊第四百七十七号）

昭和三十五年十一月二十日印刷
昭和三十五年十二月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

電話 大阪(66)三六〇七番
振替口座大阪五〇〇四二番

（昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可）
（国鉄大局特別扱承雑誌第一二二二号）

発行済の本誌旧号の中、昭和三十五年九月号（新装特大号以前）までの在庫一覧は別項八七頁に掲載してあります。新装号発売を記念して特に定価の半額に引き致します。御送金は現金書留、振替、書留、その他切手代用（十円又は八円）を御利用願います。
 口絵写真等の複写或は転載は固く禁じます